

目次

1	スキーム力とハートリー・フォック近似	1
1.1	スピンとアイソスピン	1
1.2	時間反転	3
1.3	スキーム力	5
1.4	エネルギー期待値	8
1.5	ハートリー・フォック方程式	15
1.6	スピン・カレント	15
1.7	Recoupling of tensors	20
2	核子の弾性散乱と偏極	22
2.1	クーロン散乱波	22
2.2	クーロン波の部分波展開	23
2.3	短距離ポテンシャルとクーロン・ポテンシャル	26
2.4	偏極	28
2.5	重心系	31
2.6	Dirac 方程式	31
3	電子散乱と原子核の電荷分布	33
3.1	クーロン散乱	33
3.2	一般のポテンシャル	38
3.3	原子核の電荷分布	41
3.4	Nucleon form factor	43
4	電子散乱と応答関数	44
4.1	遷移確率	44
4.2	微分断面積	46
4.3	縦方向と横方向の分離	47
4.4	核子の電磁的形状因子	50
4.5	重心系での微分断面積	56
4.6	非相対論的フェルミガス	59
4.7	相関関数	62
4.8	グリーン関数	64
4.9	角度積分	70
4.10	相関関数の動径積分	77
4.11	数値計算	82
4.12	クーロン波動関数	85
5	軸対称変形核における Dirac–Hartree 方程式	88
5.1	Dirac–Hartree 方程式	88
5.2	行列要素	90
5.3	Klein–Gordon 方程式	93
5.4	初期密度	99
5.5	Magnetic moment	99

5.6 付録	100
------------------	-----

1 スキルム力とハートリー・フォック近似

1.1 スピンとアイソスピン

スピンの合成 スピン $1/2$ の 2 粒子系の全スピンを考える。粒子 1 のスピンを \mathbf{s}_1 , 粒子 2 のスピンを \mathbf{s}_2 とする。個々のスピンの固有状態を $|\pm\rangle$ で表す:

$$\mathbf{s}^2 |\pm\rangle = \frac{1}{2} \left(1 + \frac{1}{2}\right) |\pm\rangle, \quad s_z |\pm\rangle = \pm \frac{1}{2} |\pm\rangle$$

粒子 1 のスピン状態が $|a\rangle$, 粒子 2 のスピン状態が $|b\rangle$ であるとき $|ab\rangle$ で表すことにする。系の全スピン $\mathbf{S} = \mathbf{s}_1 + \mathbf{s}_2$ の固有状態 $|S M_S\rangle$

$$\mathbf{S}^2 |S M_S\rangle = S(S+1) |S M_S\rangle, \quad S_z |S M_S\rangle = M_S |S M_S\rangle \quad (1.1)$$

を求めよう。 $M_S = 1$ になる状態は $|++\rangle$ だけであるから

$$|S=1 M_S=1\rangle = |++\rangle$$

である。両辺に $S_- = (s_-)_1 + (s_-)_2$ を作用させる。一般に角運動量演算子 J_\pm を角運動量の固有状態 $|j m\rangle$ に作用させると

$$J_\pm |j m\rangle = \sqrt{j(j+1) - m(m \pm 1)} |j m \pm 1\rangle$$

である。したがって

$$S_- |S=1 M_S=1\rangle = \sqrt{2} |S=1 M_S=0\rangle$$

一方, 右辺は

$$\left((s_-)_1 |+\rangle\right) |+\rangle + |+\rangle \left((s_-)_2 |+\rangle\right) = |-\rangle + |+-\rangle$$

となるから

$$|S=1 M_S=0\rangle = \frac{|+-\rangle + |-+\rangle}{\sqrt{2}}$$

$M_S = -1$ となる状態は $|--\rangle$ だけであるから

$$|S=1 M_S=-1\rangle = |--\rangle$$

となる。あるいは, $|S=1 M_S=0\rangle$ に再び S_- を作用させてもよい。まとめると

$$|S=1 M_S\rangle = \begin{cases} |++\rangle, & M_S = 1 \\ \frac{|+-\rangle + |-+\rangle}{\sqrt{2}}, & M_S = 0 \\ |--\rangle, & M_S = -1 \end{cases} \quad (1.2)$$

$M_S = 0$ となる状態には $|S=0 M_S=0\rangle$ もある。これは $|S=1 M_S=0\rangle$ と直交するから

$$|S=0 M_S=0\rangle = \frac{|+-\rangle - |-+\rangle}{\sqrt{2}} \quad (1.3)$$

である。

$S = 1$ である 3 つの状態を**スピン 3 重項**, $S = 0$ の状態を**スピン 1 重項**という。スピン 3 重項は粒子 1 と 2 の交換に関して対称 (全く変わらない) であるが, スピン 1 重項は反対称 (符号が変わる) である。ここで $\boldsymbol{\sigma} = 2\mathbf{s}$ とするとき

$$P_\sigma = \frac{1 + \boldsymbol{\sigma}_1 \cdot \boldsymbol{\sigma}_2}{2}$$

を考える。

$$\mathbf{S}^2 = (\mathbf{s}_1 + \mathbf{s}_2)^2 = \mathbf{s}_1^2 + \mathbf{s}_2^2 + 2\mathbf{s}_1 \cdot \mathbf{s}_2 = \frac{3}{2} + \frac{1}{2} \boldsymbol{\sigma}_1 \cdot \boldsymbol{\sigma}_2$$

であるから

$$P_\sigma = \mathbf{S}^2 - 1$$

したがって

$$P_\sigma |S M_S\rangle = (S(S+1) - 1) |S M_S\rangle = \pm |S M_S\rangle, \quad \begin{cases} S = 1 \text{ のとき} + \\ S = 0 \text{ のとき} - \end{cases}$$

これから P_σ は粒子 1 と 2 のスピン状態を交換する。

アイソスピン 原子核は陽子と中性子から構成されている。陽子と中性子はスピン 1/2 のフェルミオンである。陽子の質量と中性子の質量の差は約 1% しかなくほぼ等しい。陽子と中性子は主に電荷などの電磁氣的性質により区別される。もし電磁相互作用がなければ陽子と中性子は区別できないであろう。原子核では電磁相互作用よりも核子間に働く**強い相互作用** (strong interaction), つまり**核力** (nuclear force) の方が重要である。そこで、陽子と中性子を核子という粒子の 2 つの異なる状態と見なす。この 2 つの状態を識別するために、各核子に補助的な力学変数を付け加える。この力学変数は 2 つの異なる固有値だけをとればよいから、 $s = 1/2$ のスピン \mathbf{s} と同じ代数的性質を満たす演算子 \mathbf{t} を導入する。この \mathbf{t} を**荷電スピン**とか**アイソスピン** (isospin) という。もちろん、2 つの状態を区別するという理由だけではアイソスピンを導入する必然性はない。実は、アイソスピンはスピンと同様に素粒子の基本的性質であり、アイソスピン導入により核力の重要な性質を簡単に表現できる。

さて、 t_3 の 2 つの固有値 $m_t = \pm 1/2$ により陽子と中性子を区別する。 \mathbf{t}^2, t_3 の同時固有状態を $|m_t\rangle$ で表す:

$$\mathbf{t}^2 |m_t\rangle = \frac{1}{2} \left(\frac{1}{2} + 1 \right) |m_t\rangle, \quad t_3 |m_t\rangle = m_t |m_t\rangle$$

以下では $|m_t = 1/2\rangle$ を陽子状態, $|m_t = -1/2\rangle$ を中性子状態に割り当て

$$|p\rangle = |m_t = 1/2\rangle, \quad |n\rangle = |m_t = -1/2\rangle$$

と略記する。スピンと同様に

$$P_\tau = \frac{1 + \boldsymbol{\tau}_1 \cdot \boldsymbol{\tau}_2}{2}, \quad \boldsymbol{\tau} = 2\mathbf{t}$$

は粒子 1 と 2 のアイソスピン状態を交換する。

$$\tau_p = \frac{1 + \tau_z}{2}, \quad \tau_n = \frac{1 - \tau_z}{2}$$

とすると

$$\tau_p |p\rangle = |p\rangle, \quad \tau_p |n\rangle = 0, \quad \tau_n |p\rangle = 0, \quad \tau_n |n\rangle = |n\rangle$$

あるいは、まとめて

$$\tau_q |q'\rangle = \delta_{qq'} |q\rangle$$

である。 τ_q は荷電状態 $|q\rangle$ に状態を射影する。

核子の状態は軌道運動, スピン, アイソスピンの状態という 3 つの部分からなる。例えば, 運動量 \mathbf{k} , スピン上向きの陽子の状態は $|\mathbf{k}\rangle|+\rangle|p\rangle$ である。核子の状態を指定するのに必要な全ての量子数をまとめて単に $|\alpha\rangle$ と記す。上の例では $\alpha = \{\mathbf{k}, +, p\}$ である。

核子1の状態が $|\alpha\rangle$, 核子2の状態が $|\beta\rangle$ である2核子系の状態を $|\alpha\beta\rangle$ で表す。核子1と2の軌道部分の状態を交換する演算子を P_r とすると

$$P_r P_\sigma P_\tau |\alpha\beta\rangle = |\beta\alpha\rangle$$

になるから、反対称化された2核子系の状態は

$$|\alpha\beta\rangle - |\beta\alpha\rangle = (1 - P_r P_\sigma P_\tau) |\alpha\beta\rangle$$

と表せる。

1.2 時間反転

ニュートン方程式

$$\frac{d\mathbf{p}(t)}{dt} = \mathbf{F}(\mathbf{r}(t)), \quad \mathbf{p}(t) = m \frac{d\mathbf{r}(t)}{dt}$$

を考える。

$$\bar{\mathbf{r}}(t) = \mathbf{r}(-t) \tag{1.4}$$

とすると ($s = -t$)

$$\bar{\mathbf{p}}(t) = m \frac{d\bar{\mathbf{r}}(t)}{dt} = m \frac{ds}{dt} \frac{d\mathbf{r}(s)}{ds} = -\mathbf{p}(s) = -\mathbf{p}(-t) \tag{1.5}$$

$$\frac{d\bar{\mathbf{p}}(t)}{dt} = -\frac{d\mathbf{p}(s)}{dt} = \frac{d\mathbf{p}(s)}{ds} = \mathbf{F}(\mathbf{r}(s)) = \mathbf{F}(\bar{\mathbf{r}}(t))$$

したがって、保存力が作用する場合、時間を反転した運動 $\bar{\mathbf{r}}(t)$ もニュートン方程式の解である。これがニュートン力学での時間反転対称性である。

波動関数の時間変化はシュレディンガー方程式

$$i\hbar \frac{\partial \psi(\mathbf{r}, t)}{\partial t} = \left(-\frac{\hbar^2}{2m} \nabla^2 + V(\mathbf{r}) \right) \psi(\mathbf{r}, t)$$

で決まる。ここで

$$\bar{\psi}(\mathbf{r}, t) \equiv \psi^*(\mathbf{r}, -t)$$

とすると

$$i\hbar \frac{\partial \bar{\psi}(\mathbf{r}, t)}{\partial t} = i\hbar \frac{ds}{dt} \frac{\partial \psi^*(\mathbf{r}, s)}{\partial s} = -i\hbar \frac{\partial \psi^*(\mathbf{r}, s)}{\partial s} = \left[i\hbar \frac{\partial \psi(\mathbf{r}, s)}{\partial s} \right]^*$$

であるから

$$i\hbar \frac{\partial \bar{\psi}(\mathbf{r}, t)}{\partial t} = \left[\left(-\frac{\hbar^2}{2m} \nabla^2 + V(\mathbf{r}) \right) \psi(\mathbf{r}, s) \right]^* = \left(-\frac{\hbar^2}{2m} \nabla^2 + V(\mathbf{r}) \right) \bar{\psi}(\mathbf{r}, t)$$

となる。したがって $V(\mathbf{r})$ が実数ならば $\bar{\psi}(\mathbf{r}, t) = \psi^*(\mathbf{r}, -t)$ もシュレディンガー方程式の解になる。位置と運動量に期待値を考える。

$$\mathbf{r}_{\text{av}}(t) = \int d^3r \mathbf{r} \psi^*(\mathbf{r}, t) \psi(\mathbf{r}, t), \quad \bar{\mathbf{r}}_{\text{av}}(t) = \int d^3r \mathbf{r} \bar{\psi}^*(\mathbf{r}, t) \bar{\psi}(\mathbf{r}, t)$$

$$\mathbf{p}_{\text{av}}(t) = -i\hbar \int d^3r \psi^*(\mathbf{r}, t) \nabla \psi(\mathbf{r}, t), \quad \bar{\mathbf{p}}_{\text{av}}(t) = -i\hbar \int d^3r \bar{\psi}^*(\mathbf{r}, t) \nabla \bar{\psi}(\mathbf{r}, t)$$

とすると $\bar{\psi}(\mathbf{r}, t)$ の定義から

$$\bar{\mathbf{r}}_{\text{av}}(t) = \mathbf{r}_{\text{av}}(-t) \tag{1.6}$$

である。また、部分積分を使うと

$$\bar{\mathbf{p}}_{\text{av}}(t) = i\hbar \int d^3r \psi^*(\mathbf{r}, -t) \nabla \psi(\mathbf{r}, -t) = -\mathbf{p}_{\text{av}}(-t) \quad (1.7)$$

である。(1.6) と (1.7) はそれぞれニュートン力学における (1.4) と (1.5) に対応する。したがって、波動関数 $\psi(\mathbf{r}, t)$ の時間反転した状態は $\psi^*(\mathbf{r}, -t)$ で記述される。

波動関数を複素共役に変換するユニタリー演算子 K

$$K\psi(\mathbf{r}, t) = \psi^*(\mathbf{r}, t)$$

を考える。 c_1, c_2 を定数として $\psi = c_1\psi_1 + c_2\psi_2$ のとき

$$K(c_1\psi_1 + c_2\psi_2) = c_1^*\psi_1^* + c_2^*\psi_2^* \neq c_1K\psi_1 + c_2K\psi_2$$

であるから、量子力学で現れる通常の演算子とは異なり、 K は線形演算子ではない。ただし $K^2 = 1$ は線形演算子である。

通常の量子力学の表現では、運動量 \mathbf{p} は位置 \mathbf{r} の微分

$$\hat{\mathbf{p}} = -i\hbar\nabla$$

に置き換わる。これは虚数 i を含むから $K\hat{\mathbf{p}} = -\hat{\mathbf{p}}K$ である。あるいは $KK^\dagger = K^\dagger K = 1$ で K^\dagger を定義すると ($K^2 = 1$ であるから $K^\dagger = K$)

$$K\hat{\mathbf{p}}K^\dagger = -\hat{\mathbf{p}}$$

軌道角運動量 $\hat{\ell} = \mathbf{r} \times \hat{\mathbf{p}}$ も

$$K\hat{\ell}K^\dagger = -\hat{\ell}$$

になる。

スピン 1/2 粒子の時間反転演算子 T を考える。スピン演算子 $\hbar\mathbf{s} = \hbar\boldsymbol{\sigma}/2$ はパウリ行列

$$\sigma_x = \begin{pmatrix} 0 & 1 \\ 1 & 0 \end{pmatrix}, \quad \sigma_y = \begin{pmatrix} 0 & -i \\ i & 0 \end{pmatrix}, \quad \sigma_z = \begin{pmatrix} 1 & 0 \\ 0 & -1 \end{pmatrix}$$

で表せる。 σ_y の行列要素だけが純虚数であるから

$$K\sigma_xK^\dagger = \sigma_x, \quad K\sigma_yK^\dagger = -\sigma_y, \quad K\sigma_zK^\dagger = \sigma_z$$

である。 \mathbf{s} も角運動量であるから

$$T\boldsymbol{\sigma}T^\dagger = -\boldsymbol{\sigma}$$

を満たす必要がある。したがって、 T は単なる複素共役演算子 K ではない。そこで $T = UK$ として、 U が σ_x, σ_z だけ符号を変え $\mathbf{r}, \hat{\mathbf{p}}, \sigma_y$ を不変に保つなら

$$T\mathbf{r}T^\dagger = \mathbf{r}, \quad T\hat{\mathbf{p}}T^\dagger = -\hat{\mathbf{p}}, \quad T\boldsymbol{\sigma}T^\dagger = -\boldsymbol{\sigma}$$

になるから、 U としてスピンだけを y 軸のまわりに π 回転させる演算子 $\exp(-i\pi s_y)$ を採用すればよい。 $\sigma_y^2 = 1$ を使うと

$$\exp(-i\pi s_y) = \exp(-i\pi\sigma_y/2) = \cos(\pi\sigma_y/2) - i\sin(\pi\sigma_y/2) = \cos(\pi/2) - i\sigma_y\sin(\pi/2) = -i\sigma_y$$

であるから

$$T = -i\sigma_y K$$

になる。一般に $T = e^{i\theta}\sigma_y K$ (θ は実数) でもよいが, 位相因子 $e^{i\theta}$ には物理的意味がないから, 通常 $T = -i\sigma_y K$ を用いる。なお

$$T^2 = i\sigma_y K i\sigma_y K = i\sigma_y (i\sigma_y)^* K^2 = (i\sigma_y)^2 = -1$$

であるから $T^\dagger = -T$ である。また, $|\bar{\alpha}\rangle = T|\alpha\rangle$ とすると

$$|\bar{\bar{\alpha}}\rangle = T^2|\alpha\rangle = -|\alpha\rangle$$

演算子 F の行列要素

$$\langle\bar{\psi}_1|F|\bar{\psi}_2\rangle, \quad \bar{\psi}_1(\mathbf{r}) = T\psi_1(\mathbf{r}) = -i\sigma_y\psi_1^*(\mathbf{r}), \quad \bar{\psi}_2(\mathbf{r}) = T\psi_2(\mathbf{r}) = -i\sigma_y\psi_2^*(\mathbf{r})$$

を考える。ここで ψ は 2 成分のスピンオールである。

$$\langle\bar{\psi}_1|F|\bar{\psi}_2\rangle^* = \int d^3r \left(\bar{\psi}_1^\dagger(\mathbf{r})F\bar{\psi}_2(\mathbf{r})\right)^* = \int d^3r \left(\psi_1^\dagger\sigma_y F\sigma_y\psi_2^*\right)^* = \int d^3r \psi_1^\dagger\sigma_y F^*\sigma_y\psi_2$$

ここで t は転置を表す。

$$TFT^\dagger = -i\sigma_y K F K^\dagger i\sigma_y = \sigma_y F^* \sigma_y$$

したがって

$$\langle\bar{\psi}_1|F|\bar{\psi}_2\rangle^* = \langle\psi_1|(TFT^\dagger)|\psi_2\rangle$$

あるいは

$$\langle\bar{\psi}_1|F|\bar{\psi}_2\rangle = \langle\psi_1|(TFT^\dagger)|\psi_2\rangle^* = \langle\psi_2|(TFT^\dagger)^\dagger|\psi_1\rangle$$

である。この関係式はよく使う。例えば, 時間反転不変の状態 ($\bar{\psi} = \psi$) における期待値は

$$(TFT^\dagger)^\dagger = -F \text{ ならば } \langle\psi|F|\psi\rangle = 0$$

である。 \hat{p}, ℓ, σ は $(TFT^\dagger)^\dagger = -F$ を満たす。

A 粒子系の場合, 粒子 i の s_y を $(s_y)_i$ とすると

$$T = \exp\left(-i\pi \sum_{i=1}^A (s_y)_i\right) K$$

ここで K は全ての粒子の波動関数を複素共役にする演算子である。

複素共役演算子 K を厳密に定義すると, ここで使った K は

$$K|\mathbf{r}, m_s\rangle = |\mathbf{r}, m_s\rangle$$

である反線形演算子である。ただし $|\mathbf{r}, m_s\rangle$ は位置とスピンの固有状態を表す。

1.3 スキルム力

核子 1 と 2 の間で質量 μ の中間子を交換すると, 核子間には (核子間の相対位置を $\mathbf{r}_{12} = \mathbf{r}_1 - \mathbf{r}_2$ で表す)

$$v(\mathbf{r}_{12}) = v_0 \frac{e^{-\lambda r_{12}}}{r_{12}} \times \left(1 + \text{スピン} \cdot \text{アイソスピン依存項}\right), \quad \lambda = \frac{\mu c^2}{\hbar c}$$

が生じる。交換される中間子には π 中間子 ($\mu c^2 \approx 140 \text{ MeV}$), σ 中間子 ($\mu c^2 \approx 500 \text{ MeV}$), ω 中間子 ($\mu c^2 \approx 780 \text{ MeV}$) などあり, 中間子の性質により v_0 の値やスピン・アイソスピン依存項が決まる。共通する点は r 依存性が湯川型 $e^{-\lambda r}/r$ になるため r の増大とともに急激に小さくなることである。 v が作用する範囲は $e^{-\lambda r} = e^{-1}$, つまり $r = \lambda^{-1}$ 程度である。したがって, 交換する中間子の質量が大きいほど作用範囲は短い。最も軽い π 中間子でも

$$\frac{1}{\lambda} = \frac{\hbar c}{\mu c^2} \approx \frac{200 \times 10^{-15} \text{ MeV m}}{140 \text{ MeV}} = 1.43 \times 10^{-15} \text{ m}$$

と非常に短い。

ハートリー・フォック方程式を実際に数値計算する上で, フォック項の扱いが問題になる。これを避けるために核力が短距離力である点を生かす。中間子の質量 μ が非常に大きい場合, v は $r_{12} \neq 0$ では 0 になるから $v(\mathbf{r}_{12}) \sim \delta(\mathbf{r}_{12})$ となるだろう。これをもう少しきちんと扱ってみる。そのために

$$f(r_{12}) = \frac{e^{-\lambda r_{12}}}{r_{12}}$$

を運動量空間に変換する (フーリエ変換)。核子 1, 2 が運動量 $\hbar \mathbf{k}_1, \hbar \mathbf{k}_2$ の状態にあるとき, 波動関数は (反対称化は無視)

$$\frac{1}{(2\pi)^3} \exp(i\mathbf{k}_1 \cdot \mathbf{r}_1 + i\mathbf{k}_2 \cdot \mathbf{r}_2)$$

である。これを重心 $\mathbf{R} = (\mathbf{r}_1 + \mathbf{r}_2)/2$ と相対位置 $\mathbf{r}_{12} = \mathbf{r}_1 - \mathbf{r}_2$ で表すと

$$\exp(i(\mathbf{k}_1 + \mathbf{k}_2) \cdot \mathbf{R} + i\mathbf{k}_{12} \cdot \mathbf{r}_{12}), \quad \mathbf{k}_{12} = \frac{\mathbf{k}_1 - \mathbf{k}_2}{2}$$

になる。重心は全運動量 $\hbar(\mathbf{k}_1 + \mathbf{k}_2)$ で運動し, 2 から見た 1 の相対運動は運動量 $\hbar \mathbf{k}_{12}$ で運動する。これから分かるように, 相対位置 \mathbf{r}_{12} に対応する運動量演算子 $\hat{\mathbf{k}}_{12}$ は

$$-\frac{i}{2} \left(\frac{\partial}{\partial \mathbf{r}_1} - \frac{\partial}{\partial \mathbf{r}_2} \right) = -i \frac{\partial}{\partial \mathbf{r}_{12}}$$

で置き換えればよい。以下では, 位置と運動量については固有値と演算子を区別するため演算子には $\hat{}$ を付ける。

重心運動は相対位置だけによる $v(\mathbf{r}_{12})$ では影響されないから相対運動のみ考える。簡単のため添え字 12 は省略する。

$$\begin{aligned} \langle \mathbf{k} | f(\hat{r}) | \mathbf{k}' \rangle &= \int \frac{d^3 r}{(2\pi)^3} f(r) \exp(i(\mathbf{k}' - \mathbf{k}) \cdot \mathbf{r}) \\ &= \int \frac{d^3 r}{(2\pi)^3} f(r) \exp(i\mathbf{q} \cdot \mathbf{r}), \quad \mathbf{q} = \mathbf{k}' - \mathbf{k} \\ &= \frac{1}{(2\pi)^2} \int_0^\infty dr r^2 f(r) \int_0^\pi d\theta \sin \theta \exp(iqr \cos \theta) \end{aligned}$$

$t = \cos \theta$ とすると

$$\int_0^\pi d\theta \sin \theta \exp(iqr \cos \theta) = \int_{-1}^1 dt \exp(iqrt) = \frac{e^{iqr} - e^{-iqr}}{iqr}$$

であるから

$$\begin{aligned} \langle \mathbf{k} | f(\hat{r}) | \mathbf{k}' \rangle &= \frac{1}{(2\pi)^2 i q} \int_0^\infty dr r f(r) (e^{irq} - e^{-irq}) \\ &= \frac{1}{(2\pi)^2 i q} \int_0^\infty dr (e^{(iq-\lambda)r} - e^{-(iq+\lambda)r}) \\ &= \frac{2}{(2\pi)^2} \frac{1}{\lambda^2 + q^2} \end{aligned}$$

$\lambda \gg q$ だとすると

$$\langle \mathbf{k} | f(\hat{r}) | \mathbf{k}' \rangle = \frac{2}{(2\pi)^2 \lambda^2} \frac{1}{1 + q^2/\lambda^2} = \frac{2}{(2\pi)^2 \lambda^2} \left(1 - \frac{q^2}{\lambda^2} + \dots \right)$$

となるから

$$\begin{aligned} \langle \mathbf{r} | f(\hat{r}) | \mathbf{r}' \rangle &= \int d^3k d^3k' \langle \mathbf{r} | \mathbf{k} \rangle \langle \mathbf{k} | f(\hat{r}) | \mathbf{k}' \rangle \langle \mathbf{k}' | \mathbf{r}' \rangle \\ &= \frac{2}{(2\pi)^5 \lambda^2} \int d^3k d^3k' \left(1 - \frac{q^2}{\lambda^2} + \dots \right) \exp(i\mathbf{r} \cdot \mathbf{k} - i\mathbf{r}' \cdot \mathbf{k}') \\ &= \frac{2}{(2\pi)^5 \lambda^2} \int d^3k d^3k' \left(1 + \frac{1}{\lambda^2} (\nabla_{\mathbf{r}'} - \nabla_{\mathbf{r}})^2 + \dots \right) \exp(i\mathbf{r} \cdot \mathbf{k} - i\mathbf{r}' \cdot \mathbf{k}') \\ &= \frac{4\pi}{\lambda^2} \left(1 + \frac{1}{\lambda^2} (\nabla_{\mathbf{r}'} - \nabla_{\mathbf{r}})^2 + \dots \right) \int \frac{d^3k}{(2\pi)^3} \frac{d^3k'}{(2\pi)^2} \exp(i\mathbf{r} \cdot \mathbf{k} - i\mathbf{r}' \cdot \mathbf{k}') \\ &= \frac{4\pi}{\lambda^2} \left(1 + \frac{1}{\lambda^2} (\nabla_{\mathbf{r}'} - \nabla_{\mathbf{r}})^2 + \dots \right) \delta(\mathbf{r}) \delta(\mathbf{r}') \end{aligned}$$

ところで

$$\langle \mathbf{r} | \delta(\hat{r}) | \mathbf{r}' \rangle = \delta(\mathbf{r}) \langle \mathbf{r} | \mathbf{r}' \rangle = \delta(\mathbf{r}) \delta(\mathbf{r} - \mathbf{r}') = \delta(\mathbf{r}) \delta(\mathbf{r}')$$

$$\langle \mathbf{r} | \hat{\mathbf{k}}^2 \delta(\hat{r}) | \mathbf{r}' \rangle = -\nabla_{\mathbf{r}}^2 \langle \mathbf{r} | \delta(\hat{r}) | \mathbf{r}' \rangle = -\nabla_{\mathbf{r}}^2 \delta(\mathbf{r}) \delta(\mathbf{r}')$$

第2式で \mathbf{r} と \mathbf{r}' を入れ換え複素共役をとると

$$\langle \mathbf{r}' | \delta(\hat{r}) \hat{\mathbf{k}}^2 | \mathbf{r} \rangle^* = \langle \mathbf{r} | \hat{\mathbf{k}}^2 \delta(\hat{r}) | \mathbf{r}' \rangle = -\nabla_{\mathbf{r}'}^2 \delta(\mathbf{r}) \delta(\mathbf{r}')$$

$\nabla_{\mathbf{r}} \delta(\mathbf{r} - \mathbf{r}') = -\nabla_{\mathbf{r}'} \delta(\mathbf{r} - \mathbf{r}')$ であるから

$$\langle \mathbf{r} | \hat{\mathbf{k}} \cdot \delta(\hat{r}) \hat{\mathbf{k}} | \mathbf{r}' \rangle = -\nabla_{\mathbf{r}} \delta(\mathbf{r}) \cdot \nabla_{\mathbf{r}'} \delta(\mathbf{r} - \mathbf{r}') = \nabla_{\mathbf{r}} \delta(\mathbf{r}) \cdot \nabla_{\mathbf{r}'} \delta(\mathbf{r}) \delta(\mathbf{r}')$$

したがって

$$\langle \mathbf{r} | f(\hat{r}) | \mathbf{r}' \rangle = \frac{4\pi}{\lambda^2} \langle \mathbf{r} | \left(\delta(\hat{r}) - \frac{1}{\lambda^2} \left(\hat{\mathbf{k}}^2 \delta(\hat{r}) + \delta(\hat{r}) \hat{\mathbf{k}}^2 + 2\hat{\mathbf{k}} \cdot \delta(\hat{r}) \hat{\mathbf{k}} \right) \right) | \mathbf{r}' \rangle$$

つまり

$$f(\hat{r}) = \frac{4\pi}{\lambda^2} \left(\delta(\hat{r}) - \frac{1}{\lambda^2} \left(\hat{\mathbf{k}}^2 \delta(\hat{r}) + \delta(\hat{r}) \hat{\mathbf{k}}^2 + 2\hat{\mathbf{k}} \cdot \delta(\hat{r}) \hat{\mathbf{k}} \right) \right)$$

となる。

以上の結果を一般化して、原子核中の核子間に作用する相互作用として

$$\begin{aligned} v(1, 2) &= t_0 (1 + x_0 P_\sigma) \delta(\hat{\mathbf{r}}_1 - \hat{\mathbf{r}}_2) + \frac{t_1}{2} \left(\delta(\hat{\mathbf{r}}_1 - \hat{\mathbf{r}}_2) \hat{\mathbf{k}}_{12}^2 + \hat{\mathbf{k}}_{12}^2 \delta(\hat{\mathbf{r}}_1 - \hat{\mathbf{r}}_2) \right) + t_2 \hat{\mathbf{k}}_{12} \cdot \delta(\hat{\mathbf{r}}_1 - \hat{\mathbf{r}}_2) \hat{\mathbf{k}}_{12} \\ &\quad + iW_0 (\boldsymbol{\sigma}_1 + \boldsymbol{\sigma}_2) \cdot \hat{\mathbf{k}}_{12} \times \delta(\hat{\mathbf{r}}_1 - \hat{\mathbf{r}}_2) \hat{\mathbf{k}}_{12} + \frac{t_3}{6} (1 + P_\sigma) \delta(\hat{\mathbf{r}}_1 - \hat{\mathbf{r}}_2) \rho((\hat{\mathbf{r}}_1 + \hat{\mathbf{r}}_2)/2) \end{aligned}$$

ただし

$$\hat{\mathbf{k}}_{12} = \frac{\hat{\mathbf{k}}_1 - \hat{\mathbf{k}}_2}{2}, \quad P_\sigma = \frac{1 + \boldsymbol{\sigma}_1 \cdot \boldsymbol{\sigma}_2}{2}$$

を採用する。これをスキルム (Skyrme) 力という。この相互作用は $t_0, t_1, t_2, t_3, x_0, W_0$ の6つパラメータを含む。これらは原子核の結合エネルギーと大きさを再現するように決める。 W_0 の項は原子核に特徴的な強いスピン・軌道力を再現するために必要である。また、密度 ρ に依存する項は原子核中での多体効果を現象論的に取り入れたものと考えられているが、実際問題として、この項がないと $\delta(\mathbf{r})$ 型の簡単な相互作用では原子核を安定な束縛系にすることができない。

1.4 エネルギー期待値

核子間の相互作用がスキルム力であるとき、ハートリー・フォック基底状態 $|\rangle$ におけるエネルギー期待値

$$E = \langle | \sum_i \frac{\hbar^2 \hat{\mathbf{k}}_i^2}{2m} + \frac{1}{2} \sum_{ij} v(i,j) | \rangle = \frac{\hbar^2}{2m} \sum_i \langle i | \hat{\mathbf{k}}^2 | i \rangle + \frac{1}{2} \sum_{ij} \langle ij | \bar{v}(1,2) | ij \rangle$$

を求める。ここで $|ij\rangle$ は核子1が状態 $|i\rangle$, 核子2が状態 $|j\rangle$ にある状態, \bar{v} は反対称化された相互作用

$$\bar{v}(1,2) = v(1,2)(1 - P_r P_\sigma P_\tau)$$

である。スキルム力の場合, E は陽子, 中性子それぞれの核子密度 $\rho_q(\mathbf{r})$, 運動エネルギー密度 $\tau_q(\mathbf{r})$, スピンカレント $\mathbf{J}_q(\mathbf{r})$ で表せる:

$$\begin{aligned} \rho_q(\mathbf{r}) &= \sum_i \langle i | \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}}) \tau_q | i \rangle = \sum_i \sum_\sigma |\phi_i(\mathbf{r}\sigma q)|^2 \\ \tau_q(\mathbf{r}) &= \sum_i \langle i | \hat{\mathbf{k}} \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}}) \cdot \hat{\mathbf{k}} \tau_q | i \rangle = \sum_i \sum_\sigma |\nabla \phi_i(\mathbf{r}\sigma q)|^2 \\ \mathbf{J}_q(\mathbf{r}) &= \sum_i \langle i | \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}}) \hat{\mathbf{k}} \times \sigma \tau_q | i \rangle = -i \sum_i \sum_{\sigma\sigma'} \phi_i^*(\mathbf{r}\sigma q) \nabla \phi_i(\mathbf{r}\sigma' q) \times \langle \sigma | \sigma' \rangle \end{aligned}$$

ただし $\phi_i(\mathbf{r}\sigma q) = \langle \mathbf{r}\sigma q | i \rangle$ は1粒子状態 i の波動関数である。

HF 基底状態 $|\rangle$ は時間反転に対して不変であるとする。時間反転演算子を T とすると

$$T | \rangle = | \rangle$$

である。したがって, ある演算子 F の期待値は

$$\langle | F | \rangle = \langle (T | \rangle F (T^{-1} | \rangle) \rangle = \langle | (T F T^{-1}) | \rangle^* \quad (1.8)$$

を満たす。なお, 時間反転すればスピンと運動量の向きは逆転するが, 位置は不変である:

$$T \hat{\mathbf{k}} T^{-1} = -\hat{\mathbf{k}}, \quad T \boldsymbol{\sigma} T^{-1} = -\boldsymbol{\sigma}, \quad T \hat{\mathbf{r}} T^{-1} = \hat{\mathbf{r}}$$

この性質から

$$\begin{aligned} \sum_i \langle i | \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}}) \hat{\mathbf{k}} \tau_q | i \rangle &= \sum_i \langle i | (T \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}}) \hat{\mathbf{k}} \tau_q T^{-1}) | i \rangle^* \\ &= - \sum_i \langle i | \hat{\mathbf{k}} \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}}) \tau_q | i \rangle \\ &= - \sum_i \langle i | (\hat{\mathbf{k}} \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}})) \tau_q | i \rangle - \sum_i \langle i | \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}}) \hat{\mathbf{k}} \tau_q | i \rangle \\ &= -\frac{1}{2} \sum_i \langle i | (\hat{\mathbf{k}} \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}})) \tau_q | i \rangle \end{aligned}$$

ところで

$$(\hat{\mathbf{k}} \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}})) = -i \frac{\partial \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}})}{\partial \hat{\mathbf{r}}} = +i \frac{\partial \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}})}{\partial \mathbf{r}} = i \nabla \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}})$$

であるから

$$\sum_i \langle i | \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}}) \hat{\mathbf{k}} \tau_q | i \rangle = -\frac{i}{2} \sum_i \langle i | \nabla \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}}) \tau_q | i \rangle$$

∇ はヒルベルト空間の演算子ではないからブラ $\langle i |$ の前にだしてもよい。したがって

$$\sum_i \langle i | \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}}) \hat{\mathbf{k}} \tau_q | i \rangle = - \sum_i \langle i | \hat{\mathbf{k}} \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}}) \tau_q | i \rangle = -\frac{i}{2} \nabla \rho_q(\mathbf{r}) \quad (1.9)$$

次に

$$\begin{aligned} \tau_q(\mathbf{r}) &= \sum_i \langle i | \hat{\mathbf{k}} \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}}) \cdot \hat{\mathbf{k}} \tau_q | i \rangle = \sum_i \langle i | \left(\hat{\mathbf{k}} \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}}) \right) \cdot \hat{\mathbf{k}} \tau_q + \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}}) \hat{\mathbf{k}}^2 \tau_q | i \rangle \\ &= \sum_i \langle i | i \nabla \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}}) \cdot \hat{\mathbf{k}} \tau_q + \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}}) \hat{\mathbf{k}}^2 \tau_q | i \rangle \end{aligned}$$

であるから

$$\sum_i \langle i | \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}}) \hat{\mathbf{k}}^2 \tau_q | i \rangle = \tau_q(\mathbf{r}) - i \nabla \cdot \sum_i \langle i | \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}}) \hat{\mathbf{k}} \tau_q | i \rangle = \tau_q(\mathbf{r}) - \frac{1}{2} \nabla^2 \rho_q(\mathbf{r}) \quad (1.10)$$

スピン密度は

$$\sum_i \langle i | \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}}) \tau_q \boldsymbol{\sigma} | i \rangle = \sum_i \langle i | (T \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}}) \tau_q \boldsymbol{\sigma} T^{-1}) | i \rangle^* = - \sum_i \langle i | \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}}) \tau_q \boldsymbol{\sigma} | i \rangle = 0 \quad (1.11)$$

である。

アイソスピンの状態について $\langle q_i q_j | P_\tau | q_i q_j \rangle$ が必要になるが、 P_τ の定義から

$$\langle q_i q_j | P_\tau | q_i q_j \rangle = \frac{1}{2} (\langle q_i q_j | q_i q_j \rangle + \langle q_i | \boldsymbol{\tau} | q_i \rangle \cdot \langle q_j | \boldsymbol{\tau} | q_j \rangle)$$

$\langle q | \boldsymbol{\tau} | q \rangle$ はパウリのスピン行列の対角要素であるから、0でないものは τ_z だけである。したがって P_τ の内積 $\tau_1 \cdot \tau_2$ を z 成分の積 $\tau_{1z} \tau_{2z}$ で置き換えてよいから

$$P_\tau = \frac{1 + \tau_{1z} \tau_{2z}}{2} = \frac{1 + \tau_{1z}}{2} \frac{1 + \tau_{2z}}{2} + \frac{1 - \tau_{1z}}{2} \frac{1 - \tau_{2z}}{2} = \tau_{1p} \tau_{2p} + \tau_{1n} \tau_{2n} = \sum_q \tau_{1q} \tau_{2q}$$

になる。

$\tau_q(\mathbf{r})$ を積分すると

$$\int d^3 r \tau_q(\mathbf{r}) = \sum_i \langle i | \hat{\mathbf{k}} \int d^3 r \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}}) \cdot \hat{\mathbf{k}} \tau_q | i \rangle = \sum_i \langle i | \hat{\mathbf{k}}^2 \tau_q | i \rangle$$

であり $\tau_p + \tau_n = 1$ であるから

$$\sum_i \langle i | \hat{\mathbf{k}}^2 | i \rangle = \int d^3 r (\tau_p(\mathbf{r}) + \tau_n(\mathbf{r}))$$

t_0 項

$$V_0 = \frac{t_0}{2} \sum_{ij} \langle ij | (1 + x_0 P_\sigma) \delta(\hat{\mathbf{r}}_1 - \hat{\mathbf{r}}_2) (1 - P_r P_\sigma P_r) | ij \rangle$$

を求める。2粒子系の状態 $|ij\rangle$ を重心と相対運動で表したとき、相対運動の波動関数の相対軌道角運動量が L である部分

$$R(r_{12}) Y_{LM}(\theta_{12}, \varphi_{12}), \quad R(r_{12}) \propto r_{12}^L (1 + a_L r_{12}^2 + \dots)$$

は、遠心力のため $L \neq 0$ のとき $R(r_{12} = 0) = 0$ になる。したがって、 V_0 に寄与するのは $L = 0$ のみである。軌道部分の状態について粒子 1 と 2 を交換すると $\mathbf{r}_1 \rightarrow \mathbf{r}_2$, $\mathbf{r}_2 \rightarrow \mathbf{r}_1$ つまり $\mathbf{r}_{12} \rightarrow -\mathbf{r}_{12}$ であるから

$$P_r R(r_{12}) Y_{LM}(\theta_{12}, \varphi_{12}) = (-)^L R(r_{12}) Y_{LM}(\theta_{12}, \varphi_{12})$$

になる。 $L = 0$ だけを扱う場合には $P_r = 1$ としてよい。これから

$$\begin{aligned} V_0 &= \frac{t_0}{2} \sum_{ij} \langle ij | \delta(\hat{\mathbf{r}}_1 - \hat{\mathbf{r}}_2) (1 + x_0 P_\sigma) (1 - P_\tau P_\sigma) | ij \rangle \\ &= \frac{t_0}{2} \sum_{ij} \langle ij | \delta(\hat{\mathbf{r}}_1 - \hat{\mathbf{r}}_2) \left(1 + \frac{x_0}{2} - \left(x_0 + \frac{1}{2} \right) P_\tau + \frac{x_0 - P_\tau}{2} \boldsymbol{\sigma}_1 \cdot \boldsymbol{\sigma}_2 \right) | ij \rangle \end{aligned}$$

デルタ関数 $\delta(\hat{\mathbf{r}}_1 - \hat{\mathbf{r}}_2)$ は

$$\delta(\hat{\mathbf{r}}_1 - \hat{\mathbf{r}}_2) = \int d^3 r \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}}_1) \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}}_2)$$

と表せるから、例えば

$$\begin{aligned} \sum_{ij} \langle ij | \delta(\hat{\mathbf{r}}_1 - \hat{\mathbf{r}}_2) P_\tau | ij \rangle &= \int d^3 r \sum_{ij} \langle ij | \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}}_1) \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}}_2) \sum_q \tau_{1q} \tau_{2q} | ij \rangle \\ &= \sum_q \int d^3 r \sum_{ij} \langle i | \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}}) \tau_q | i \rangle \langle j | \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}}) \tau_q | j \rangle \\ &= \sum_q \int d^3 r \rho_q^2(\mathbf{r}) \\ \sum_{ij} \langle ij | \delta(\hat{\mathbf{r}}_1 - \hat{\mathbf{r}}_2) \boldsymbol{\sigma}_1 \cdot \boldsymbol{\sigma}_2 | ij \rangle &= \int d^3 r \sum_{ij} \langle ij | \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}}_1) \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}}_2) \boldsymbol{\sigma}_1 \cdot \boldsymbol{\sigma}_2 | ij \rangle \\ &= \int d^3 r \sum_{ij} \langle i | \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}}) \boldsymbol{\sigma} | i \rangle \cdot \langle j | \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}}) \boldsymbol{\sigma} | j \rangle = 0 \end{aligned}$$

である。他の項も同様にすると

$$V_0 = \frac{t_0}{2} \int d^3 r \left(\left(1 + \frac{x_0}{2} \right) \rho^2 - \left(x_0 + \frac{1}{2} \right) \sum_q \rho_q^2 \right)$$

t_1 項

$$V_1 = \frac{t_1}{16} \sum_{ij} \langle ij | \left(\delta(\hat{\mathbf{r}}_1 - \hat{\mathbf{r}}_2) \left(\hat{\mathbf{k}}_1 - \hat{\mathbf{k}}_2 \right)^2 + \left(\hat{\mathbf{k}}_1 - \hat{\mathbf{k}}_2 \right)^2 \delta(\hat{\mathbf{r}}_1 - \hat{\mathbf{r}}_2) \right) (1 - P_r P_\sigma P_\tau) | ij \rangle$$

この場合も相対軌道角運動量は $L = 0$ だけ寄与するから $P_r = 1$ としてよい。HF 基底状態 $| \rangle$ は時間反転不変であるから

$$\begin{aligned} & \sum_{ij} \langle ij | \left(\hat{\mathbf{k}}_1 - \hat{\mathbf{k}}_2 \right)^2 \delta(\hat{\mathbf{r}}_1 - \hat{\mathbf{r}}_2) (1 - P_\sigma P_\tau) | ij \rangle \\ &= \sum_{ij} \langle ij | \left(T \left(\hat{\mathbf{k}}_1 - \hat{\mathbf{k}}_2 \right)^2 \delta(\hat{\mathbf{r}}_1 - \hat{\mathbf{r}}_2) T^{-1} \right) (1 - P_\sigma P_\tau) | ij \rangle^* \\ &= \sum_{ij} \langle ij | \left(\hat{\mathbf{k}}_1 - \hat{\mathbf{k}}_2 \right)^2 \delta(\hat{\mathbf{r}}_1 - \hat{\mathbf{r}}_2) (1 - P_\sigma P_\tau) | ij \rangle^* \\ &= \sum_{ij} \langle ij | \delta(\hat{\mathbf{r}}_1 - \hat{\mathbf{r}}_2) \left(\hat{\mathbf{k}}_1 - \hat{\mathbf{k}}_2 \right)^2 (1 - P_\sigma P_\tau) | ij \rangle \end{aligned}$$

したがって

$$\begin{aligned}
V_1 &= \frac{t_1}{8} \sum_{ij} \langle ij | \delta(\hat{\mathbf{r}}_1 - \hat{\mathbf{r}}_2) (\hat{\mathbf{k}}_1 - \hat{\mathbf{k}}_2)^2 \left(1 - P_\tau \frac{1 + \boldsymbol{\sigma}_1 \cdot \boldsymbol{\sigma}_2}{2}\right) | ij \rangle \\
&= \frac{t_1}{4} \sum_{ij} \langle ij | \delta(\hat{\mathbf{r}}_1 - \hat{\mathbf{r}}_2) (\hat{\mathbf{k}}_1^2 - \hat{\mathbf{k}}_1 \cdot \hat{\mathbf{k}}_2) \left(1 - P_\tau \frac{1 + \boldsymbol{\sigma}_1 \cdot \boldsymbol{\sigma}_2}{2}\right) | ij \rangle \\
&= \frac{t_1}{4} \int d^3 r \sum_{ij} \langle ij | \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}}_1) \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}}_2) (\hat{\mathbf{k}}_1^2 - \hat{\mathbf{k}}_1 \cdot \hat{\mathbf{k}}_2) \left(1 - P_\tau \frac{1 + \boldsymbol{\sigma}_1 \cdot \boldsymbol{\sigma}_2}{2}\right) | ij \rangle \\
&= V_{11} + V_{12} + V_{13}
\end{aligned}$$

ただし

$$\begin{aligned}
V_{11} &= \frac{t_1}{4} \int d^3 r \sum_{ij} \langle ij | \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}}_1) \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}}_2) (\hat{\mathbf{k}}_1^2 - \hat{\mathbf{k}}_1 \cdot \hat{\mathbf{k}}_2) | ij \rangle \\
V_{12} &= -\frac{t_1}{8} \int d^3 r \sum_{ij} \langle ij | \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}}_1) \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}}_2) (\hat{\mathbf{k}}_1^2 - \hat{\mathbf{k}}_1 \cdot \hat{\mathbf{k}}_2) P_\tau | ij \rangle \\
V_{13} &= -\frac{t_1}{8} \int d^3 r \sum_{ij} \langle ij | \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}}_1) \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}}_2) (\hat{\mathbf{k}}_1^2 - \hat{\mathbf{k}}_1 \cdot \hat{\mathbf{k}}_2) P_\tau \boldsymbol{\sigma}_1 \cdot \boldsymbol{\sigma}_2 | ij \rangle
\end{aligned}$$

(1.9), (1.10) を使うと

$$\begin{aligned}
V_{11} &= \frac{t_1}{4} \int d^3 r \sum_{ij} \left(\langle i | \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}}) \hat{\mathbf{k}}^2 | i \rangle \langle j | \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}}) | j \rangle - \langle i | \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}}) \hat{\mathbf{k}} | i \rangle \cdot \langle j | \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}}) \hat{\mathbf{k}} | j \rangle \right) \\
&= \frac{t_1}{4} \int d^3 r \left[\left(\tau - \frac{1}{2} \nabla^2 \rho \right) \rho + \frac{1}{4} (\nabla \rho) \cdot (\nabla \rho) \right] = \frac{t_1}{4} \int d^3 r \left(\tau \rho - \frac{3}{4} \rho \nabla^2 \rho \right) \\
V_{12} &= -\frac{t_1}{8} \sum_q \int d^3 r \left(\tau_q \rho_q - \frac{3}{4} \rho_q \nabla^2 \rho_q \right)
\end{aligned}$$

である。\$V_{13}\$ で

$$\begin{aligned}
V_{13} &= -\frac{t_1}{8} \sum_q \int d^3 r \sum_{ij} \langle i | \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}}) \hat{\mathbf{k}}^2 \tau_q \boldsymbol{\sigma} | i \rangle \cdot \langle j | \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}}) \tau_q \boldsymbol{\sigma} | j \rangle \\
&\quad + \frac{t_1}{8} \sum_q \int d^3 r \sum_{ij} \langle ij | \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}}_1) \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}}_2) \hat{\mathbf{k}}_1 \cdot \hat{\mathbf{k}}_2 \boldsymbol{\sigma}_1 \cdot \boldsymbol{\sigma}_2 \tau_{1q} \tau_{2q} | ij \rangle
\end{aligned}$$

の第1項は (1.11) から 0 である。また、ハートリー・フォック基底状態 \$| \rangle\$ が回転不変ならば

$$\sum_i \langle i | \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}}) \hat{\mathbf{k}} \cdot \boldsymbol{\sigma} \tau_q | i \rangle = 0, \quad \sum_i \langle i | \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}}) (\hat{\mathbf{k}} \times \boldsymbol{\sigma})^{(2)} \tau_q | i \rangle = 0$$

である。これと

$$\hat{\mathbf{k}}_1 \cdot \hat{\mathbf{k}}_2 \boldsymbol{\sigma}_1 \cdot \boldsymbol{\sigma}_2 = \frac{1}{3} \hat{\mathbf{k}}_1 \cdot \boldsymbol{\sigma}_1 \hat{\mathbf{k}}_2 \cdot \boldsymbol{\sigma}_2 + \frac{1}{2} (\hat{\mathbf{k}}_1 \times \boldsymbol{\sigma}_1) \cdot (\hat{\mathbf{k}}_2 \times \boldsymbol{\sigma}_2) + (\hat{\mathbf{k}}_1 \times \boldsymbol{\sigma}_1)^{(2)} \cdot (\hat{\mathbf{k}}_2 \times \boldsymbol{\sigma}_2)^{(2)} \quad (1.12)$$

を使うと

$$\begin{aligned}
V_{13} &= \frac{t_1}{16} \sum_q \int d^3 r \sum_{ij} \langle ij | \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}}_1) \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}}_2) (\hat{\mathbf{k}}_1 \times \boldsymbol{\sigma}_1) \cdot (\hat{\mathbf{k}}_2 \times \boldsymbol{\sigma}_2) \tau_{1q} \tau_{2q} | ij \rangle \\
&= \frac{t_1}{16} \sum_q \int d^3 r \sum_i \langle i | \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}}) \hat{\mathbf{k}} \times \boldsymbol{\sigma} \tau_q | i \rangle \cdot \sum_j \langle j | \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}}) \hat{\mathbf{k}} \times \boldsymbol{\sigma} \tau_q | j \rangle \\
&= \frac{t_1}{16} \sum_q \int d^3 r \mathbf{J}_q^2
\end{aligned}$$

以上から

$$V_1 = \frac{t_1}{16} \int d^3r \left(4\tau\rho - 3\rho\nabla^2\rho - 2 \sum_q \tau_q \rho_q + \frac{3}{2} \sum_q \rho_q \nabla^2 \rho_q + \sum_q J_q^2 \right)$$

t_2 項

$$V_2 = \frac{t_2}{8} \sum_{ij} \langle ij | (\hat{\mathbf{k}}_1 - \hat{\mathbf{k}}_2) \delta(\hat{\mathbf{r}}_1 - \hat{\mathbf{r}}_2) \cdot (\hat{\mathbf{k}}_1 - \hat{\mathbf{k}}_2) (1 - P_r P_\sigma P_\tau) | ij \rangle$$

この場合、相対運動の波動関数で表すと $\hat{\mathbf{k}}_1 - \hat{\mathbf{k}}_2$ は相対位置 \mathbf{r}_{12} の微分で置き換えられるから、行列要素は

$$\left| \nabla_{12} R(r_{12}) Y_{LM}(\theta_{12}, \varphi_{12}) \right|^2 \text{ at } \mathbf{r}_{12} = 0$$

に比例する。したがって $L = 1$ 成分のみが寄与するから $P_r = -1$ としてよい。

$$\begin{aligned} V_2 &= \frac{t_2}{8} \sum_{ij} \langle ij | (\hat{\mathbf{k}}_1 - \hat{\mathbf{k}}_2) \delta(\hat{\mathbf{r}}_1 - \hat{\mathbf{r}}_2) \cdot (\hat{\mathbf{k}}_1 - \hat{\mathbf{k}}_2) \left(1 + P_\tau \frac{1 + \boldsymbol{\sigma}_1 \cdot \boldsymbol{\sigma}_2}{2} \right) | ij \rangle \\ &= \frac{t_2}{4} \sum_{ij} \langle ij | \hat{\mathbf{k}}_1 \delta(\hat{\mathbf{r}}_1 - \hat{\mathbf{r}}_2) \cdot (\hat{\mathbf{k}}_1 - \hat{\mathbf{k}}_2) \left(1 + P_\tau \frac{1 + \boldsymbol{\sigma}_1 \cdot \boldsymbol{\sigma}_2}{2} \right) | ij \rangle \\ &= \frac{t_2}{4} \int d^3r \sum_{ij} \langle ij | \hat{\mathbf{k}}_1 \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}}_1) \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}}_2) \cdot (\hat{\mathbf{k}}_1 - \hat{\mathbf{k}}_2) \left(1 + P_\tau \frac{1 + \boldsymbol{\sigma}_1 \cdot \boldsymbol{\sigma}_2}{2} \right) | ij \rangle \\ &= V_{21} + V_{22} + V_{23} \end{aligned}$$

ただし

$$\begin{aligned} V_{21} &= \frac{t_2}{4} \int d^3r \sum_{ij} \langle ij | \hat{\mathbf{k}}_1 \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}}_1) \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}}_2) \cdot (\hat{\mathbf{k}}_1 - \hat{\mathbf{k}}_2) | ij \rangle \\ &= \frac{t_2}{4} \int d^3r \sum_{ij} \left(\langle i | \hat{\mathbf{k}} \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}}) \cdot \hat{\mathbf{k}} | i \rangle \langle j | \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}}) | j \rangle \right. \\ &\quad \left. - \langle i | \hat{\mathbf{k}} \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}}) | i \rangle \cdot \langle j | \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}}) \hat{\mathbf{k}} | j \rangle \right) \\ &= \frac{t_2}{4} \int d^3r \left(\tau\rho - \frac{1}{4} (\nabla\rho) \cdot (\nabla\rho) \right) = \frac{t_2}{4} \int d^3r \left(\tau\rho + \frac{1}{4} \rho \nabla^2 \rho \right) \\ V_{22} &= \frac{t_2}{8} \int d^3r \sum_{ij} \langle ij | \hat{\mathbf{k}}_1 \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}}_1) \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}}_2) \cdot (\hat{\mathbf{k}}_1 - \hat{\mathbf{k}}_2) \sum_q \tau_{1q} \tau_{2q} | ij \rangle \\ &= \frac{t_2}{8} \int d^3r \sum_q \left(\tau_q \rho_q + \frac{1}{4} \rho_q \nabla^2 \rho_q \right) \\ V_{23} &= \frac{t_2}{8} \int d^3r \sum_{ij} \langle ij | \hat{\mathbf{k}}_1 \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}}_1) \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}}_2) \cdot (\hat{\mathbf{k}}_1 - \hat{\mathbf{k}}_2) P_\tau \boldsymbol{\sigma}_1 \cdot \boldsymbol{\sigma}_2 | ij \rangle \end{aligned}$$

V_{23} を求めるために

$$\begin{aligned} \hat{\mathbf{k}}_1 \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}}_1) \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}}_2) &= (\hat{\mathbf{k}}_1 \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}}_1)) \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}}_2) + \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}}_1) \hat{\mathbf{k}}_1 \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}}_2) \\ &= i(\nabla \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}}_1)) \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}}_2) + \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}}_1) \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}}_2) \hat{\mathbf{k}}_1 \end{aligned} \quad (1.13)$$

と変形する。 $\nabla \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}}_1)$ の ∇ は $\delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}}_1)$ だけに作用し $\delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}}_2)$ には作用しない。また、 $\delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}}_2)$

は $\hat{\mathbf{r}}_1$ を含まないから $\hat{\mathbf{k}}_1$ とは交換する。(1.13) を使うと

$$V_{23} = \frac{t_2}{8} \sum_q \int d^3r i \sum_{ij} \langle ij | (\nabla \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}}_1)) \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}}_2) \cdot (\hat{\mathbf{k}}_1 - \hat{\mathbf{k}}_2) \tau_{1q} \tau_{2q} \boldsymbol{\sigma}_1 \cdot \boldsymbol{\sigma}_2 | ij \rangle \\ + \frac{t_2}{8} \sum_q \int d^3r \sum_{ij} \langle ij | \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}}_1) \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}}_2) \hat{\mathbf{k}}_1 \cdot (\hat{\mathbf{k}}_1 - \hat{\mathbf{k}}_2) \tau_{1q} \tau_{2q} \boldsymbol{\sigma}_1 \cdot \boldsymbol{\sigma}_2 | ij \rangle$$

(1.11) から粒子 1 または 2 について $\boldsymbol{\sigma}$ だけを含む項は 0 になるから、残るのは 2 行目の $\hat{\mathbf{k}}_1 \cdot \hat{\mathbf{k}}_2$ を含む項だけである。したがって、 V_{13} と同様に (1.12) を使うと

$$V_{13} = -\frac{t_2}{8} \sum_q \int d^3r \sum_{ij} \langle ij | \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}}_1) \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}}_2) \hat{\mathbf{k}}_1 \cdot \hat{\mathbf{k}}_2 \tau_{1q} \tau_{2q} \boldsymbol{\sigma}_1 \cdot \boldsymbol{\sigma}_2 | ij \rangle = -\frac{t_2}{16} \sum_q \int d^3r \mathbf{J}_q^2$$

結局

$$V_2 = \frac{t_2}{16} \int d^3r \left(4\tau\rho + \rho \nabla^2 \rho + 2 \sum_q \tau_q \rho_q + \frac{1}{2} \sum_q \rho_q \nabla^2 \rho_q - \sum_q \mathbf{J}_q^2 \right)$$

t_3 項

$$V_3 = \frac{t_3}{12} \sum_{ij} \langle ij | (1 + P_\sigma) \delta(\hat{\mathbf{r}}_1 - \hat{\mathbf{r}}_2) \rho((\hat{\mathbf{r}}_1 + \hat{\mathbf{r}}_2)/2) | ij \rangle$$

これは V_0 で $x_0 = 1$ として全体に ρ を掛ければよいから

$$V_3 = \frac{t_3}{12} \int d^3r \left(\left(1 + \frac{1}{2}\right) \rho^2 - \left(1 + \frac{1}{2}\right) \sum_q \rho_q^2 \right) \rho = \frac{t_3}{4} \int d^3r \rho_p \rho_n \rho$$

W_0 項

$$V_{LS} = \frac{iW_0}{8} \sum_{ij} \langle ij | (\boldsymbol{\sigma}_1 + \boldsymbol{\sigma}_2) \cdot [(\hat{\mathbf{k}}_1 - \hat{\mathbf{k}}_2) \delta(\hat{\mathbf{r}}_1 - \hat{\mathbf{r}}_2) \times (\hat{\mathbf{k}}_1 - \hat{\mathbf{k}}_2)] (1 - P_r P_\sigma P_\tau) | ij \rangle$$

この場合も相対運動軌道角運動量 $L = 1$ だけが寄与するから $P_r = -1$ である。また、2 核子系の全スピン $\boldsymbol{\sigma}_1 + \boldsymbol{\sigma}_2$ のため $S = 0$ は寄与しないから $P_\sigma = 1$ である。したがって

$$V_{LS} = \frac{iW_0}{8} \sum_{ij} \langle ij | (\boldsymbol{\sigma}_1 + \boldsymbol{\sigma}_2) \cdot [(\hat{\mathbf{k}}_1 - \hat{\mathbf{k}}_2) \delta(\hat{\mathbf{r}}_1 - \hat{\mathbf{r}}_2) \times (\hat{\mathbf{k}}_1 - \hat{\mathbf{k}}_2)] (1 + P_\tau) | ij \rangle \\ = \frac{iW_0}{4} \sum_{ij} \langle ij | (\boldsymbol{\sigma}_1 + \boldsymbol{\sigma}_2) \cdot [\hat{\mathbf{k}}_1 \delta(\hat{\mathbf{r}}_1 - \hat{\mathbf{r}}_2) \times (\hat{\mathbf{k}}_1 - \hat{\mathbf{k}}_2)] (1 + P_\tau) | ij \rangle \\ = \frac{iW_0}{4} \sum_{ij} \int d^3r \langle ij | (\boldsymbol{\sigma}_1 + \boldsymbol{\sigma}_2) \cdot [\hat{\mathbf{k}}_1 \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}}_1) \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}}_2) \times (\hat{\mathbf{k}}_1 - \hat{\mathbf{k}}_2)] (1 + P_\tau) | ij \rangle$$

ここで

$$\hat{\mathbf{k}}_1 \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}}_1) \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}}_2) \times (\hat{\mathbf{k}}_1 - \hat{\mathbf{k}}_2) \\ = (\hat{\mathbf{k}}_1 \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}}_1)) \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}}_2) \times (\hat{\mathbf{k}}_1 - \hat{\mathbf{k}}_2) + \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}}_1) \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}}_2) \hat{\mathbf{k}}_1 \times (\hat{\mathbf{k}}_1 - \hat{\mathbf{k}}_2) \\ = i \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}}_2) (\nabla \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}}_1)) \times (\hat{\mathbf{k}}_1 - \hat{\mathbf{k}}_2) - \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}}_1) \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}}_2) \hat{\mathbf{k}}_1 \times \hat{\mathbf{k}}_2$$

であるから

$$V_{LS} = -\frac{W_0}{4} \sum_{ij} \int d^3r \langle ij | \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}}_2) (\boldsymbol{\sigma}_1 + \boldsymbol{\sigma}_2) \cdot \left[(\nabla \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}}_1)) \times (\hat{\mathbf{k}}_1 - \hat{\mathbf{k}}_2) \right] (1 + P_\tau) | ij \rangle \\ - \frac{iW_0}{4} \sum_{ij} \int d^3r \langle ij | \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}}_1) \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}}_2) (\boldsymbol{\sigma}_1 + \boldsymbol{\sigma}_2) \cdot [\hat{\mathbf{k}}_1 \times \hat{\mathbf{k}}_2] (1 + P_\tau) | ij \rangle$$

第2項で添え字 1, 2 を入れ換えると $\hat{\mathbf{k}}_2 \times \hat{\mathbf{k}}_1 = -\hat{\mathbf{k}}_1 \times \hat{\mathbf{k}}_2$ より第2項は 0 である。(1.11) を考慮すると

$$V_{LS} = -\frac{W_0}{4} \int d^3r \sum_{ij} \langle ij | \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}}_2) (\nabla \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}}_1)) \cdot [\hat{\mathbf{k}}_1 \times \boldsymbol{\sigma}_1 - \hat{\mathbf{k}}_2 \times \boldsymbol{\sigma}_2] (1 + P_\tau) | ij \rangle \\ = -\frac{W_0}{4} \int d^3r \sum_{ij} \left(\langle i | \nabla \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}}) \cdot [\hat{\mathbf{k}} \times \boldsymbol{\sigma}] | i \rangle \langle j | \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}}) | j \rangle \right. \\ \quad - \langle i | \nabla \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}}) | i \rangle \cdot \langle j | \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}}) \hat{\mathbf{k}} \times \boldsymbol{\sigma} | j \rangle \\ \quad + \sum_q \langle i | \nabla \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}}) \cdot [\hat{\mathbf{k}} \times \boldsymbol{\sigma}] \tau_q | i \rangle \langle j | \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}}) \tau_q | j \rangle \\ \quad \left. - \sum_q \langle i | \nabla \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}}) \tau_q | i \rangle \cdot \langle j | \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}}) \hat{\mathbf{k}} \times \boldsymbol{\sigma} \tau_q | j \rangle \right) \\ = -\frac{W_0}{4} \int d^3r \left(\rho \nabla \cdot \mathbf{J} - \mathbf{J} \cdot \nabla \rho + \sum_q \rho_q \nabla \cdot \mathbf{J}_q - \sum_q \mathbf{J}_q \cdot \nabla \rho_q \right) \\ = -\frac{W_0}{2} \int d^3r \left(\rho \nabla \cdot \mathbf{J} + \sum_q \rho_q \nabla \cdot \mathbf{J}_q \right)$$

Total 以上をまとめると

$$E = \int d^3r H(\mathbf{r})$$

ただし

$$H(\mathbf{r}) = \frac{t_0}{2} \left(\left(1 + \frac{x_0}{2}\right) \rho^2 - \left(x_0 + \frac{1}{2}\right) \sum_q \rho_q^2 \right) \\ + \frac{t_1}{16} \left(4\tau\rho - 3\rho \nabla^2 \rho - 2 \sum_q \tau_q \rho_q + \frac{3}{2} \sum_q \rho_q \nabla^2 \rho_q + \sum_q \mathbf{J}_q^2 \right) \\ + \frac{t_2}{16} \left(4\tau\rho + \rho \nabla^2 \rho + 2 \sum_q \tau_q \rho_q + \frac{1}{2} \sum_q \rho_q \nabla^2 \rho_q - \sum_q \mathbf{J}_q^2 \right) + \frac{t_3}{4} \rho_p \rho_n \rho \\ - \frac{W_0}{2} \left(\rho \nabla \cdot \mathbf{J} + \sum_q \rho_q \nabla \cdot \mathbf{J}_q \right) \\ = \frac{t_0}{2} \left(\left(1 + \frac{x_0}{2}\right) \rho^2 - \left(x_0 + \frac{1}{2}\right) \sum_q \rho_q^2 \right) + \frac{t_1}{4} \tau\rho + \frac{t_2 - t_1}{8} \sum_q \tau_q \rho_q \\ + \frac{t_2 - 3t_1}{16} \rho \nabla^2 \rho + \frac{3t_1 + t_2}{32} \sum_q \rho_q \nabla^2 \rho_q + \frac{t_1 - t_2}{16} \sum_q \mathbf{J}_q^2 + \frac{t_3}{4} \rho_p \rho_n \rho \\ - \frac{W_0}{2} \left(\rho \nabla \cdot \mathbf{J} + \sum_q \rho_q \nabla \cdot \mathbf{J}_q \right)$$

1.5 ハートリー・フォック方程式

波動関数 ϕ_i の変分 $\delta\phi_i$ に関して E が停留値になることを要請する。 ϕ_i と ϕ_i^* を独立に扱い、 ϕ_i^* の変分のみを考えればよい。このとき

$$\delta\rho = \delta\phi_i^* \phi_i, \quad \delta\tau = \nabla\delta\phi_i^* \cdot \nabla\phi_i, \quad \delta\mathbf{J} = -i\delta\phi_i^* \boldsymbol{\sigma} \times \nabla\phi_i$$

であるから、例えば

$$\begin{aligned} \int d^3r \delta(\rho\tau) &= \int d^3r (\delta\phi_i^* \phi_i \tau + \rho \nabla\delta\phi_i^* \cdot \nabla\phi_i) = \int d^3r \delta\phi_i^* (\tau - \nabla \cdot \rho \nabla) \phi_i \\ \int d^3r \delta(\rho \nabla^2 \rho) &= \int d^3r (\delta\phi_i^* \phi_i \nabla^2 \rho + \rho \nabla^2 \delta\phi_i^* \phi_i) = 2 \int d^3r \delta\phi_i^* \phi_i \nabla^2 \rho \end{aligned}$$

である。他の項も同様にすると

$$\delta E = \int d^3r \delta\phi_i^* \left(-\nabla \cdot \frac{\hbar^2}{2m_q^*(\mathbf{r})} \nabla + U_q(\mathbf{r}) - i\mathbf{W}_q(\mathbf{r}) \cdot (\nabla \times \boldsymbol{\sigma}) \right) \phi_i$$

ただし

$$\begin{aligned} \frac{\hbar^2}{2m_q^*(\mathbf{r})} &= \frac{\hbar^2}{2m} + \frac{t_1 + t_2}{4} \rho + \frac{t_2 - t_1}{8} \rho_q \\ U_q(\mathbf{r}) &= t_0 \left(\left(1 + \frac{x_0}{2}\right) \rho - \left(x_0 + \frac{1}{2}\right) \rho_q \right) + \frac{t_3}{4} (\rho^2 - \rho_q^2) + \frac{t_1 + t_2}{4} \tau + \frac{t_2 - t_1}{8} \tau_q \\ &\quad + \frac{t_2 - 3t_1}{8} \nabla^2 \rho + \frac{3t_1 + t_2}{16} \nabla^2 \rho_q - \frac{W_0}{2} (\nabla \cdot \mathbf{J} + \nabla \cdot \mathbf{J}_q) + \delta_{\text{qp}} V_C \\ \mathbf{W}_q(\mathbf{r}) &= \frac{t_1 - t_2}{8} \mathbf{J}_q + \frac{W_0}{2} (\nabla \rho + \nabla \rho_q) \end{aligned}$$

ϕ_i は規格化されているからラグランジュの未定乗数法により

$$\delta E - e_i \int d^3r \delta\phi_i^* \phi_i = 0$$

したがって ϕ_i が満たすべき方程式は

$$\left(-\nabla \cdot \frac{\hbar^2}{2m_q^*(\mathbf{r})} \nabla + U_q(\mathbf{r}) - i\mathbf{W}_q(\mathbf{r}) \cdot (\nabla \times \boldsymbol{\sigma}) \right) \phi_i = e_i \phi_i$$

になる。

1.6 スピン・カレント

$$\langle j_1 m_1 j_2 m_2 | j_3 m_3 \rangle = (-)^{j_1 - j_2 + m_3} \sqrt{2j_3 + 1} \begin{pmatrix} j_1 & j_2 & j_3 \\ m_1 & m_2 & -m_3 \end{pmatrix} \quad (1.14)$$

Edmonds 95 ページ

$$\begin{aligned} &\sum_{\mu_1 \mu_2 \mu_3} (-)^{\ell_1 + \ell_2 + \ell_3 + \mu_1 + \mu_2 + \mu_3} \begin{pmatrix} j_1 & \ell_2 & \ell_3 \\ m_1 & \mu_2 & -\mu_3 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} \ell_1 & j_2 & \ell_3 \\ -\mu_1 & m_2 & \mu_3 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} \ell_1 & \ell_2 & j_3 \\ \mu_1 & -\mu_2 & m_3 \end{pmatrix} \\ &= \begin{pmatrix} j_1 & j_2 & j_3 \\ m_1 & m_2 & m_3 \end{pmatrix} \begin{Bmatrix} j_1 & j_2 & j_3 \\ \ell_1 & \ell_2 & \ell_3 \end{Bmatrix} \quad (1.15) \end{aligned}$$

勾配公式 (Edmonds 84 ページ)

$$\begin{aligned}\nabla f(r)Y_{\ell m} &= -\sqrt{\frac{\ell+1}{2\ell+1}}\left(\frac{df}{dr}-\ell\frac{f}{r}\right)\sum_{m'\mu}\langle\ell+1\ m'\ 1\ \mu|\ell\ m\rangle Y_{\ell+1\ m'}\mathbf{e}_\mu \\ &\quad +\sqrt{\frac{\ell}{2\ell+1}}\left(\frac{df}{dr}+(\ell+1)\frac{f}{r}\right)\sum_{m'\mu}\langle\ell-1\ m'\ 1\ \mu|\ell\ m\rangle Y_{\ell-1\ m'}\mathbf{e}_\mu\end{aligned}$$

と $\mathbf{e}_\mu\cdot\mathbf{e}_{-\nu}=(-)^\mu\delta_{\mu\nu}$ から

$$\begin{aligned}r\nabla_\mu Y_{\ell m} &= r\mathbf{e}_\mu\cdot\nabla f(r)Y_{\ell m} \\ &= \ell\sqrt{\frac{\ell+1}{2\ell+1}}\langle\ell+1\ m'\ 1\ -\mu|\ell\ m\rangle(-)^\mu Y_{\ell+1\ m'} \\ &\quad +(\ell+1)\sqrt{\frac{\ell}{2\ell+1}}\langle\ell-1\ m'\ 1\ -\mu|\ell\ m\rangle(-)^\mu Y_{\ell-1\ m'} \\ &= -\ell\sqrt{\frac{\ell+1}{2\ell+3}}\langle\ell\ m\ 1\ \mu|\ell+1\ m'\rangle Y_{\ell+1\ m'} -(\ell+1)\sqrt{\frac{\ell}{2\ell-1}}\langle\ell\ m\ 1\ \mu|\ell-1\ m'\rangle Y_{\ell-1\ m'} \\ &= \sum_{LM}f(\ell, L)\langle\ell\ m\ 1\ \mu|L\ M\rangle Y_{LM}\end{aligned}\tag{1.16}$$

ただし

$$f(\ell, L)=\begin{cases}-\ell\sqrt{\frac{\ell+1}{2\ell+3}}, & L=\ell+1 \\ -(\ell+1)\sqrt{\frac{\ell}{2\ell-1}}, & L=\ell-1 \\ 0, & \text{その他}\end{cases}$$

$Y_{\ell m}$ の結合 (Edmonds 70 ページ)

$$\sum_{m_1 m_2}\langle\ell_1\ m_1\ \ell_2\ m_2|L\ M\rangle Y_{\ell_1 m_1} Y_{\ell_2 m_2}=\sqrt{\frac{(2\ell_1+1)(2\ell_2+1)}{4\pi(2L+1)}}\langle\ell_1\ 0\ \ell_2\ 0|L\ 0\rangle Y_{LM}\tag{1.17}$$

$$\mathcal{Y}_{\ell j m}(\Omega)=\sum_{m_\ell m_s}\langle\ell\ m_\ell\ \frac{1}{2}\ m_s|j\ m\rangle Y_{\ell m_\ell}(\Omega)|m_s\rangle$$

とする。

$$\nabla_\mu R(r)\mathcal{Y}_{\ell j m}=\frac{r_\mu}{r}\frac{dR}{dr}\mathcal{Y}_{\ell j m}+R(r)\nabla_\mu\mathcal{Y}_{\ell j m}=\sqrt{\frac{4\pi}{3}}\frac{dR}{dr}Y_{1\mu}\mathcal{Y}_{\ell j m}+R(r)\nabla_\mu\mathcal{Y}_{\ell j m}$$

であるから

$$\begin{aligned}J_{\lambda\mu} &= \sum_\alpha R_\alpha(r)\mathcal{Y}_{\ell j m}^\dagger(\nabla\sigma)_{(11)\lambda\mu}R_\alpha(r)\mathcal{Y}_{\ell j m} \\ &= \sqrt{\frac{4\pi}{3}}\sum_\alpha R_\alpha\frac{dR_\alpha}{dr}\mathcal{Y}_{\ell j m}^\dagger(Y_{1\sigma})_{(11)\lambda\mu}\mathcal{Y}_{\ell j m}+\sum_\alpha R_\alpha^2\mathcal{Y}_{\ell j m}^\dagger(\nabla\sigma)_{(11)\lambda\mu}\mathcal{Y}_{\ell j m}\end{aligned}$$

となる。そこで

$$R_{\lambda\mu}=\sum_{m=-j}^j\mathcal{Y}_{\ell j m}^\dagger(Y_{1\sigma})_{(11)\lambda\mu}\mathcal{Y}_{\ell j m},\quad S_{\lambda\mu}=\sum_{m=-j}^j\mathcal{Y}_{\ell j m}^\dagger(\nabla\sigma)_{(11)\lambda\mu}\mathcal{Y}_{\ell j m}$$

を考える。

$R_{\lambda\mu}$ は

$$R_{\lambda\mu} = \sum_m \langle \ell j m | \delta(\Omega - \hat{\Omega}) (Y_1 \sigma)_{(11)\lambda\mu} | \ell j m \rangle$$

と書ける。時間反転 T に対して

$$T | \ell j m \rangle = (-)^{j+m} | \ell j -m \rangle$$

であるから

$$\begin{aligned} R_{\lambda\mu} &= \sum_m \langle \ell j -m | \delta(\Omega - \hat{\Omega}) (Y_1 \sigma)_{(11)\lambda\mu} | \ell j -m \rangle \\ &= \sum_m \langle \ell j m | \left(T \delta(\Omega - \hat{\Omega}) (Y_1 \sigma)_{(11)\lambda\mu} T^{-1} \right) | \ell j m \rangle^* \end{aligned}$$

$(TY_{\ell m}T^{-1})^\dagger = Y_{\ell m}$, $(T\sigma_\mu T^{-1})^\dagger = -\sigma_\mu$ であるから

$$R_{\lambda\mu} = - \sum_m \langle \ell j m | \delta(\Omega - \hat{\Omega}) (Y_1 \sigma)_{(11)\lambda\mu} | \ell j m \rangle = -R_{\lambda\mu} = 0$$

になる。

$R_{\lambda\mu} = 0$ は時間反転を直接使わなくても導ける。 $R_{\lambda\mu}$ を展開すると (以下では λ, μ, ℓ, j 以外の index については和をとる)

$$R_{\lambda\mu} = \sum \langle \ell m_\ell \frac{1}{2} m_s | j m \rangle \langle \ell m'_\ell \frac{1}{2} m'_s | j m \rangle \langle 1 \mu_1 1 \mu_2 | \lambda \mu \rangle Y_{\ell m_\ell}^* Y_{1\mu_1} Y_{\ell m'_\ell} \langle m_s | \sigma_{\mu_2} | m'_s \rangle$$

σ_μ の行列要素は

$$\langle m_s | \sigma_{\mu_2} | m'_s \rangle = \sqrt{3} \langle \frac{1}{2} m'_s 1 \mu_2 | \frac{1}{2} m_s \rangle$$

であるから

$$\begin{aligned} R_{\lambda\mu} &= \sqrt{3} \sum \langle \ell m_\ell \frac{1}{2} m_s | j m \rangle \langle \ell m'_\ell \frac{1}{2} m'_s | j m \rangle \langle 1 \mu_1 1 \mu_2 | \lambda \mu \rangle \langle \frac{1}{2} m'_s 1 \mu_2 | \frac{1}{2} m_s \rangle \\ &\quad (-)^{m_\ell} Y_{\ell -m_\ell} Y_{1\mu_1} Y_{\ell m'_\ell} \end{aligned}$$

m を $-m$ に置き換え

$$\langle j_1 m_1 j_2 m_2 | j_3 m_3 \rangle = (-)^{j_1+j_2-j_3} \langle j_1 -m_1 j_2 -m_2 | j_3 -m_3 \rangle$$

を使うと

$$\begin{aligned} R_{\lambda\mu} &= \sqrt{3} \sum \langle \ell -m_\ell \frac{1}{2} -m_s | j m \rangle \langle \ell -m'_\ell \frac{1}{2} -m'_s | j m \rangle \langle 1 \mu_1 1 \mu_2 | \lambda \mu \rangle \langle \frac{1}{2} m'_s 1 \mu_2 | \frac{1}{2} m_s \rangle \\ &\quad (-)^{m_\ell} Y_{\ell -m_\ell} Y_{1\mu_1} Y_{\ell m'_\ell} \end{aligned}$$

$-m_\ell, -m'_\ell, -m_s, -m'_s$ を改めて $m_\ell, m'_\ell, m_s, m'_s$ とすると

$$\begin{aligned} R_{\lambda\mu} &= \sqrt{3} \sum \langle \ell m_\ell \frac{1}{2} m_s | j m \rangle \langle \ell m'_\ell \frac{1}{2} m'_s | j m \rangle \langle 1 \mu_1 1 \mu_2 | \lambda \mu \rangle \langle \frac{1}{2} -m'_s 1 \mu_2 | \frac{1}{2} -m_s \rangle \\ &\quad (-)^{-m_\ell} Y_{\ell m_\ell} Y_{1\mu_1} Y_{\ell -m'_\ell} \end{aligned}$$

CG 係数の性質

$$\langle j_1 m_1 j_2 m_2 | j_3 m_3 \rangle = (-)^{j_2+m_2} \sqrt{\frac{2j_3+1}{2j_1+1}} \langle j_3 - m_3 j_2 m_2 | j_1 - m_1 \rangle$$

を $\langle \frac{1}{2} - m'_s 1 \mu_2 | \frac{1}{2} - m_s \rangle$ に適用すると

$$R_{\lambda\mu} = \sqrt{3} \sum (-)^{-m_\ell+m'_\ell+\mu_2+1} \langle \ell m_\ell \frac{1}{2} m_s | j m \rangle \langle \ell m'_\ell \frac{1}{2} m'_s | j m \rangle \langle 1 \mu_1 1 \mu_2 | \lambda \mu \rangle \\ \langle \frac{1}{2} m_s 1 \mu_2 | \frac{1}{2} m'_s \rangle Y_{\ell m_\ell} Y_{1\mu_1} (-)^{m'_\ell} Y_{\ell -m'_\ell}$$

$\mu_2 = m'_s - m_s$ であるから

$$-m_\ell + m'_\ell + \mu_2 + 1 = m'_\ell + m'_s - (m_\ell + m_s) + 1 = m - m + 1 = 1$$

したがって

$$R_{\lambda\mu} = -\sqrt{3} \sum \langle \ell m_\ell \frac{1}{2} m_s | j m \rangle \langle \ell m'_\ell \frac{1}{2} m'_s | j m \rangle \langle 1 \mu_1 1 \mu_2 | \lambda \mu \rangle \langle \frac{1}{2} m_s 1 \mu_2 | \frac{1}{2} m'_s \rangle \\ Y_{\ell m'_\ell}^* Y_{1\mu_1} Y_{\ell m_\ell} \\ = -R_{\lambda\mu} = 0$$

次に $S_{\lambda\mu}$ を求める。この場合、時間反転を使うと

$$S_{\lambda\mu} = - \sum \langle \ell j m | (\nabla \sigma)_{(11)\lambda\mu} \delta(\Omega - \hat{\Omega}) | \ell j m \rangle$$

となるが、 ∇ と $\delta(\Omega - \hat{\Omega})$ は交換しないから $S_{\lambda\mu} = -S_{\lambda\mu}$ とはならない。 $R_{\lambda\mu}$ と同様にすると

$$S_{\lambda\mu} = \sqrt{3} \sum \langle 1 \mu_1 1 \mu_2 | \lambda \mu \rangle \langle \ell m_\ell \frac{1}{2} m_s | j m \rangle \langle \ell m'_\ell \frac{1}{2} m'_s | j m \rangle \langle \frac{1}{2} m'_s 1 \mu_2 | \frac{1}{2} m_s \rangle \\ Y_{\ell m_\ell}^* \nabla_{\mu_1} Y_{\ell m'_\ell} \\ = \sqrt{6} (2j+1) \sqrt{2\lambda+1} \sum (-)^{\mu+m_s-1/2} \begin{pmatrix} 1 & 1 & \lambda \\ \mu_1 & \mu_2 & -\mu \end{pmatrix} Y_{\ell m_\ell}^* \nabla_{\mu_1} Y_{\ell m'_\ell} \\ \begin{pmatrix} \ell & \frac{1}{2} & j \\ m_\ell & m_s & -m \end{pmatrix} \begin{pmatrix} \ell & \frac{1}{2} & j \\ m'_\ell & m'_s & -m \end{pmatrix} \begin{pmatrix} \frac{1}{2} & 1 & \frac{1}{2} \\ m'_s & \mu_2 & -m_s \end{pmatrix} \\ = \sqrt{6} (2j+1) \sqrt{2\lambda+1} \sum (-)^{j+1/2+\mu+m'_\ell} \begin{pmatrix} 1 & 1 & \lambda \\ \mu_1 & \mu_2 & -\mu \end{pmatrix} Y_{\ell m_\ell}^* \nabla_{\mu_1} Y_{\ell m'_\ell} \\ (-1)^{1/2+1/2+j+m'_s+m_s+m} \begin{pmatrix} \ell & \frac{1}{2} & j \\ m_\ell & m_s & -m \end{pmatrix} \begin{pmatrix} \frac{1}{2} & \ell & j \\ -m'_s & -m'_\ell & m \end{pmatrix} \begin{pmatrix} \frac{1}{2} & \frac{1}{2} & 1 \\ m'_s & -m_s & \mu_2 \end{pmatrix}$$

m_s, m'_s, m について和をとると (1.15) より

$$S_{\lambda\mu} = \sqrt{6} (2j+1) \sqrt{2\lambda+1} \sum (-)^{j+1/2+\mu+m'_\ell} \begin{pmatrix} 1 & 1 & \lambda \\ \mu_1 & \mu_2 & -\mu \end{pmatrix} Y_{\ell m_\ell}^* \nabla_{\mu_1} Y_{\ell m'_\ell} \\ \begin{pmatrix} \ell & \ell & 1 \\ m_\ell & -m'_\ell & \mu_2 \end{pmatrix} \begin{Bmatrix} \ell & \ell & 1 \\ \frac{1}{2} & \frac{1}{2} & j \end{Bmatrix}$$

(1.16) を使うと

$$\begin{aligned}
S_{\lambda\mu} &= \frac{1}{r} \sqrt{6} (2j+1) \sqrt{2\lambda+1} \sum \sqrt{2L+1} (-)^{j+\ell-1/2+\mu+m'_\ell+M} f(\ell, L) \left\{ \begin{matrix} \ell & \ell & 1 \\ \frac{1}{2} & \frac{1}{2} & j \end{matrix} \right\} Y_{\ell m_\ell}^* Y_{LM} \\
&\quad \left(\begin{matrix} 1 & 1 & \lambda \\ \mu_1 & \mu_2 & -\mu \end{matrix} \right) \left(\begin{matrix} \ell & \ell & 1 \\ m_\ell & -m'_\ell & \mu_2 \end{matrix} \right) \left(\begin{matrix} \ell & 1 & L \\ m'_\ell & \mu_1 & -M \end{matrix} \right) \\
&= \frac{1}{r} \sqrt{6} (2j+1) \sqrt{2\lambda+1} \sum \sqrt{2L+1} (-)^{j+1/2+\lambda+M} f(\ell, L) \left\{ \begin{matrix} \ell & \ell & 1 \\ \frac{1}{2} & \frac{1}{2} & j \end{matrix} \right\} Y_{\ell m_\ell}^* Y_{LM} \\
&\quad (-)^{\ell+1+1+m'_\ell-\mu_1+\mu_2} \left(\begin{matrix} \lambda & 1 & 1 \\ \mu & -\mu_1 & -\mu_2 \end{matrix} \right) \left(\begin{matrix} \ell & \ell & 1 \\ -m'_\ell & m_\ell & \mu_2 \end{matrix} \right) \left(\begin{matrix} \ell & 1 & L \\ m'_\ell & \mu_1 & -M \end{matrix} \right)
\end{aligned}$$

m'_ℓ, μ_1, μ_2 について和をとると

$$\begin{aligned}
S_{\lambda\mu} &= \frac{\sqrt{6}}{r} (2j+1) \sqrt{2\lambda+1} \sum \sqrt{2L+1} (-)^{j+1/2+\lambda+M} f(\ell, L) \left\{ \begin{matrix} \ell & \ell & 1 \\ \frac{1}{2} & \frac{1}{2} & j \end{matrix} \right\} Y_{\ell m_\ell}^* Y_{LM} \\
&\quad \left(\begin{matrix} \lambda & \ell & L \\ \mu & m_\ell & -M \end{matrix} \right) \left\{ \begin{matrix} \lambda & \ell & L \\ \ell & 1 & 1 \end{matrix} \right\} \\
&= \frac{\sqrt{6}}{r} (2j+1) \sum \sqrt{2L+1} (-)^{j+1/2} f(\ell, L) \left\{ \begin{matrix} \ell & \ell & 1 \\ \frac{1}{2} & \frac{1}{2} & j \end{matrix} \right\} \left\{ \begin{matrix} \lambda & \ell & L \\ \ell & 1 & 1 \end{matrix} \right\} \langle \ell -m_\ell L M | \lambda \mu \rangle Y_{\ell -m_\ell} Y_{LM} \\
&= \frac{\sqrt{6}}{r} (2j+1) \sqrt{\frac{2\ell+1}{4\pi}} (-)^{j+1/2+\lambda} \left\{ \begin{matrix} \ell & \ell & 1 \\ \frac{1}{2} & \frac{1}{2} & j \end{matrix} \right\} Y_{\lambda\mu} \sum_{L=\ell\pm 1} (2L+1) f(\ell, L) \left\{ \begin{matrix} \lambda & 1 & 1 \\ \ell & \ell & L \end{matrix} \right\} \left(\begin{matrix} \ell & L & \lambda \\ 0 & 0 & 0 \end{matrix} \right)
\end{aligned}$$

$\ell + L + \lambda$ が odd のとき

$$\left(\begin{matrix} \ell & L & \lambda \\ 0 & 0 & 0 \end{matrix} \right) = 0$$

であり $L = \ell \pm 1$ であるから $\lambda = 0, 2$ のとき

$$S_{\lambda\mu} = 0$$

になる。

Edmonds 130 ページの表から

$$\left\{ \begin{matrix} c & c & 1 \\ b & b & a \end{matrix} \right\} = (-)^{a+b+c-1} \frac{b(b+1) + c(c+1) - a(a+1)}{\sqrt{4b(b+1)(2b+1)c(c+1)(2c+1)}}$$

であるから

$$\begin{aligned}
\left\{ \begin{matrix} \ell & \ell & 1 \\ \frac{1}{2} & \frac{1}{2} & j \end{matrix} \right\} &= (-)^{j-1/2+\ell} \frac{\ell(\ell+1) - j(j+1) + 3/4}{\sqrt{6\ell(\ell+1)(2\ell+1)}} \\
\left\{ \begin{matrix} 1 & \ell & L \\ \ell & 1 & 1 \end{matrix} \right\} &= (-)^{\ell+L} \frac{\ell(\ell+1) - L(L+1) + 2}{\sqrt{24\ell(\ell+1)(2\ell+1)}}
\end{aligned}$$

また

$$\left(\begin{matrix} \ell & \ell - 1 & 1 \\ 0 & 0 & 0 \end{matrix} \right) = (-)^\ell \sqrt{\frac{\ell}{(2\ell-1)(2\ell+1)}}, \quad \left(\begin{matrix} \ell & \ell + 1 & 1 \\ 0 & 0 & 0 \end{matrix} \right) = (-)^{\ell-1} \sqrt{\frac{\ell+1}{(2\ell+1)(2\ell+3)}}$$

である。したがって $\lambda = 1$ のとき

$$(2L+1)f(\ell, L) \begin{Bmatrix} \lambda & 1 & 1 \\ \ell & \ell & L \end{Bmatrix} \begin{pmatrix} \ell & L & \lambda \\ 0 & 0 & 0 \end{pmatrix} = \frac{(-)^\ell \sqrt{\ell(\ell+1)}}{\sqrt{6} \cdot 2\ell+1} \begin{cases} \ell & L = \ell + 1 \\ \ell + 1 & L = \ell - 1 \end{cases}$$

これから

$$\sum_{L=\ell\pm 1} (2L+1)f(\ell, L) \begin{Bmatrix} \lambda & 1 & 1 \\ \ell & \ell & L \end{Bmatrix} \begin{pmatrix} \ell & L & \lambda \\ 0 & 0 & 0 \end{pmatrix} = \frac{(-)^\ell \sqrt{\ell(\ell+1)}}{\sqrt{6}}$$

したがって

$$S_{1\mu} = \frac{1}{\sqrt{24\pi}} \frac{2j+1}{r} (\ell(\ell+1) - j(j+1) + 3/4) Y_{1\mu}$$

$r Y_{1\mu} = \sqrt{3/4\pi} r_\mu$ であるから

$$S_{1\mu} = \frac{1}{\sqrt{2}} \frac{r_\mu}{4\pi r^2} (2j+1) (\ell(\ell+1) - j(j+1) + 3/4)$$

1.7 Recoupling of tensors

ランク λ のテンソルのスカラー積を

$$T_\lambda \cdot S_\lambda = \sum_{\mu} (-)^\mu T_{\lambda\mu} S_{\lambda-\mu} = (-)^\lambda \sqrt{2\lambda+1} (T_\lambda S_\lambda)_{00}$$

で定義する (λ は整数)。 S と U が交換する場合

$$\begin{aligned} & (R_{k_1} S_{k_2})_\lambda \cdot (U_{k_3} V_{k_4})_\lambda \\ &= \sum (-)^\mu \langle k_1 m_1 k_2 m_2 | \lambda \mu \rangle R_{k_1 m_1} S_{k_2 m_2} \langle k_3 m_3 k_4 m_4 | \lambda -\mu \rangle U_{k_3 m_3} V_{k_4 m_4} \\ &= \sum (-)^\mu \langle k_1 m_1 k_2 m_2 | \lambda \mu \rangle \langle k_3 m_3 k_4 m_4 | \lambda -\mu \rangle \langle k_1 m_1 k_3 m_3 | j m \rangle \langle k_2 m_2 k_4 m_4 | j' m' \rangle \\ & \quad (R_{k_1} U_{k_3})_{jm} (S_{k_2} V_{k_4})_{j'm'} \\ &= (2\lambda+1) \sqrt{2j+1} \sum (-)^{2k_1+k_3-k_4+2\lambda+2(m_1-k_1)} \langle k_2 m_2 k_4 m_4 | j' m' \rangle (R_{k_1} U_{k_3})_{jm} (S_{k_2} V_{k_4})_{j'm'} \\ & \quad (-)^{k_3+k_4+\lambda-m_3+m_1+\mu} \begin{pmatrix} k_2 & k_1 & \lambda \\ m_2 & m_1 & -\mu \end{pmatrix} \begin{pmatrix} k_3 & k_4 & \lambda \\ m_3 & m_4 & \mu \end{pmatrix} \begin{pmatrix} k_3 & k_1 & j \\ -m_3 & -m_1 & m \end{pmatrix} \\ &= (2\lambda+1) \sqrt{2j+1} \sum (-)^{2k_1+k_3-k_4+2\lambda} \langle k_2 m_2 k_4 m_4 | j' m' \rangle (R_{k_1} U_{k_3})_{jm} (S_{k_2} V_{k_4})_{j'm'} \\ & \quad \begin{Bmatrix} k_2 & k_4 & j \\ k_3 & k_1 & \lambda \end{Bmatrix} \begin{pmatrix} k_2 & k_4 & j \\ m_2 & m_4 & m \end{pmatrix} \\ &= (2\lambda+1) \sum (-)^{2k_1+k_2+k_3-2k_4+2\lambda-m} \begin{Bmatrix} k_2 & k_4 & j \\ k_3 & k_1 & \lambda \end{Bmatrix} (R_{k_1} U_{k_3})_{jm} (S_{k_2} V_{k_4})_{j'm'} \\ & \quad \langle k_2 m_2 k_4 m_4 | j' m' \rangle \langle k_2 m_2 k_4 m_4 | j - m \rangle \\ &= (2\lambda+1) \sum (-)^{2k_1+k_2+k_3-2k_4+2\lambda-m} \begin{Bmatrix} k_1 & k_2 & \lambda \\ k_4 & k_3 & j \end{Bmatrix} (R_{k_1} U_{k_3})_{jm} (S_{k_2} V_{k_4})_{j-m} \\ &= (2\lambda+1) (-)^{k_1+k_4+2\lambda} \sum_j W(k_1 k_2 k_3 k_4; \lambda j) (R_{k_1} U_{k_3})_j \cdot (S_{k_2} V_{k_4})_j \end{aligned}$$

$k_1 = k_2 = k_3 = k_4 = 1, \lambda = 0$ の場合

$$(A_1 B_1)_0 = -\frac{1}{\sqrt{3}} \mathbf{A} \cdot \mathbf{B}, \quad (A_1 B_1)_{1\mu} = \frac{i}{\sqrt{2}} (\mathbf{A} \times \mathbf{B})_\mu, \quad W(a a b b; 0 c) = \frac{(-)^{a+b-c}}{\sqrt{(2a+1)(2b+1)}}$$

であるから

$$\begin{aligned} \mathbf{A} \cdot \mathbf{B} \mathbf{C} \cdot \mathbf{D} &= W(1111;00) \mathbf{A} \cdot \mathbf{C} \mathbf{B} \cdot \mathbf{D} - \frac{3}{2} W(1111;01) (\mathbf{A} \times \mathbf{C}) \cdot (\mathbf{B} \times \mathbf{D}) \\ &\quad + 3W(1111;02) (A_1 C_1)_2 \cdot (B_1 D_1)_2 \\ &= \frac{1}{3} \mathbf{A} \cdot \mathbf{C} \mathbf{B} \cdot \mathbf{D} + \frac{1}{2} (\mathbf{A} \times \mathbf{C}) \cdot (\mathbf{B} \times \mathbf{D}) + (A_1 C_1)_2 \cdot (B_1 D_1)_2 \end{aligned}$$

2 核子の弾性散乱と偏極

Ivan Úlehla et al., Optical model of the atomic nucleus (1964, Academic)

2.1 クーロン散乱波

シュレディンガー方程式

$$\left(-\frac{1}{2m}\nabla^2 + \frac{Z_1 Z_2 e^2}{r}\right)\psi(\mathbf{r}) = E\psi(\mathbf{r})$$

つまり

$$\left(\nabla^2 + k^2 - \frac{2k\eta}{r}\right)\psi(\mathbf{r}) = 0, \quad E = \frac{k^2}{2m}, \quad \eta = m \frac{Z_1 Z_2 e^2}{k}$$

を考える。

$$\psi(\mathbf{r}) = e^{ikz} f(u), \quad u = r - z$$

とすると

$$\begin{aligned} \frac{\partial \psi}{\partial x} &= e^{ikz} \frac{x}{r} f', & \frac{\partial^2 \psi}{\partial x^2} &= e^{ikz} \left[\left(\frac{1}{r} - \frac{x^2}{r^3} \right) f' + \frac{x^2}{r^2} f'' \right] \\ \frac{\partial \psi}{\partial z} &= e^{ikz} \left[ikf - \frac{u}{r} f' \right], & \frac{\partial^2 \psi}{\partial z^2} &= e^{ikz} \left[-k^2 f - \frac{2iku}{r} f' + \frac{x^2 + y^2}{r^2} f' + \frac{u^2}{r^2} f'' \right] \end{aligned}$$

であるから

$$\nabla^2 \psi(\mathbf{r}) = e^{ikz} \left(\frac{2u}{r} f'' + \frac{2(1-iku)}{r} f' - k^2 f \right)$$

したがって

$$\left(u \frac{d^2}{du^2} + (1-iku) \frac{d}{du} - k\eta \right) f(u) = 0$$

ここで $\rho = iku = ik(r-z)$ とすると

$$\left(\rho \frac{d^2}{d\rho^2} + (1-\rho) \frac{d}{d\rho} + i\eta \right) f = 0$$

となる。超幾何微分方程式

$$\left(z \frac{d^2}{dz^2} + (b-z) \frac{d}{dz} - a \right) w(z) = 0$$

の原点で正則な解は

$$M(a, b, z) = \sum_{n=0}^{\infty} \frac{(a)_n z^n}{(b)_n n!}, \quad (a)_n = a(a+1)\cdots(a+n-1), \quad (a)_0 = 1$$

であるから

$$\psi_c(\mathbf{r}) = A e^{ikz} M(-i\eta, 1, ik(r-z)) \quad (2.1)$$

が求める解である。

$|z| \rightarrow \infty$ での漸近形

$$M(a, b, z) = \frac{\Gamma(b)}{\Gamma(b-a)} e^{i\epsilon\pi a} z^{-a} g(a, a-b+1, -z) + \frac{\Gamma(b)}{\Gamma(a)} e^z z^{a-b} g(1-a, b-a, z) \quad (2.2)$$

ただし

$$\varepsilon = 1 \quad (-\pi/2 < \text{Arg } z < 3\pi/2), \quad -1 \quad (-3\pi/2 < \text{Arg } z \leq -\pi/2)$$

$$g(a, b, z) = \sum_{n=0}^{\infty} \frac{(a)_n (b)_n}{n! z^n} = 1 + \frac{ab}{z} + \frac{a(a+1)b(b+1)}{2z^2} + \dots$$

を使うと

$$M(-i\eta, 1, ik(r-z)) = \frac{e^{\pi\eta/2}}{\Gamma(1+i\eta)} e^{i\eta \log ku} \left(1 + \frac{\eta^2}{iku}\right) + \frac{e^{\pi\eta/2}}{\Gamma(-i\eta)} \frac{e^{iku-i\eta \log ku}}{iku} \left(1 + \frac{(1+i\eta)^2}{iku}\right)$$

である。

$$A = \Gamma(1+i\eta) e^{-\pi\eta/2}$$

とし, $i\Gamma(-i\eta) = -\Gamma(1-i\eta)/\eta$, $u = r - z = 2r \sin^2(\theta/2)$ を使うと, $r \rightarrow \infty$ のとき

$$\psi_c(\mathbf{r}) \rightarrow \left(1 + \frac{\eta^2}{2ikr \sin^2(\theta/2)}\right) e^{ikz+i\eta \log k(r-z)} + f_c(\theta) \frac{e^{ikr-i\eta \log 2kr}}{r} \quad (2.3)$$

ただし

$$\begin{aligned} f_c(\theta) &= -\eta \frac{\Gamma(1+i\eta)}{\Gamma(1-i\eta)} \frac{e^{-i\eta \log \sin^2(\theta/2)}}{2k \sin^2(\theta/2)} \\ &= -\frac{\eta}{2k \sin^2(\theta/2)} \exp\left(-i\eta \log \sin^2(\theta/2) + 2i\sigma_0\right), \quad \sigma_0 = \text{Arg } \Gamma(1+i\eta) \end{aligned} \quad (2.4)$$

である。

2.2 クーロン波の部分波展開

$$\psi(\mathbf{r}) = \frac{u_\ell(r)}{r} Y_{\ell m}(\theta, \varphi)$$

とすると

$$\left(\frac{d^2}{dr^2} + k^2 - \frac{2k\eta}{r} - \frac{\ell(\ell+1)}{r^2}\right) u_\ell(r) = 0 \quad (2.5)$$

である。

$$u_\ell(r) = e^{ikr} (kr)^{\ell+1} v_\ell(\rho), \quad \rho = -2ikr$$

とおくと

$$\left(\rho \frac{d^2}{d\rho^2} + (2\ell+2-\rho) \frac{d}{d\rho} - (\ell+1+i\eta)\right) v_\ell = 0$$

原点で正則な解 原点で正則な解は

$$v_\ell(r) = c_\ell M(\ell+1+i\eta, 2(\ell+1), -2ikr)$$

である。 $r \rightarrow \infty$ では

$$\begin{aligned} &M(\ell+1+i\eta, 2(\ell+1), -2ikr) \\ &\rightarrow \frac{(2\ell+1)! e^{\pi\eta/2}}{2^\ell |\Gamma(\ell+1+i\eta)|} \frac{e^{-ikr}}{(kr)^{\ell+1}} \sin\left(kr - \eta \log(2kr) - \pi\ell/2 + \sigma_\ell\right) \end{aligned}$$

ただし

$$\sigma_\ell = \text{Arg } \Gamma(\ell + 1 + i\eta) \quad (2.6)$$

となるから

$$c_\ell = \frac{2^\ell e^{-\pi\eta/2} |\Gamma(\ell + 1 + i\eta)|}{(2\ell + 1)!}$$

とすれば

$$u_\ell(r) = F_\ell(\eta, kr) = e^{ikr} (kr)^{\ell+1} c_\ell M(\ell + 1 + i\eta, 2(\ell + 1), -2ikr) \quad (2.7)$$

は $r \rightarrow \infty$ のとき

$$F_\ell(\eta, kr) \rightarrow \sin\left(kr - \eta \log(2kr) - \pi\ell/2 + \sigma_\ell\right)$$

となる。 $|z| \rightarrow 0$ のとき $M(a, b, z) = 1 + bz/a + \dots$ であるから

$$F_\ell(\eta, kr) \rightarrow c_\ell kr^{\ell+1}, \quad (r \rightarrow 0)$$

原点で発散する解

$U(a, b, z)$ が解ならば $e^z U(b - a, b, -z)$ も解である。(2.5) の解として

$$\begin{aligned} G_\ell(\eta, kr) &= 2^\ell e^{\pi\eta/2} (kr)^{\ell+1} e^{ikr} \left[e^{i(\sigma_\ell - \pi\ell - \pi/2)} U(\ell + 1 + i\eta, 2\ell + 2, -2ikr) \right. \\ &\quad \left. + e^{-i(\sigma_\ell - \pi\ell - \pi/2)} e^{-2ikr} U(\ell + 1 - i\eta, 2\ell + 2, 2ikr) \right] \\ &= 2^{\ell+1} e^{\pi\eta/2} (kr)^{\ell+1} \text{Re} \left[e^{i(kr + \sigma_\ell - \pi\ell - \pi/2)} U(\ell + 1 + i\eta, 2\ell + 2, -2ikr) \right] \end{aligned}$$

がある。 $|z| \rightarrow \infty$ のとき

$$U(a, b, z) \rightarrow z^{-a} g(a, a - b + 1, -z)$$

であるから

$$G_\ell(\eta, kr) \rightarrow \cos\left(kr - \eta \log(2kr) - \pi\ell/2 + \sigma_\ell\right)$$

一方, $|z| \rightarrow 0$ では

$$U(a, b, z) \rightarrow \frac{\Gamma(b-1)}{\Gamma(a)} z^{1-b}$$

より

$$G_\ell(\eta, kr) \rightarrow \frac{2\ell + 1}{c_\ell} (kr)^{-\ell}$$

となる。

F_ℓ と G_ℓ の線形結合から

$$u_\ell^{(\pm)}(r) = e^{\mp i\sigma_\ell} \left(G_\ell(\eta, kr) \pm i F_\ell(\eta, kr) \right)$$

を作ると, $r \rightarrow \infty$ のとき

$$u_\ell^{(\pm)}(r) \rightarrow \exp\left(\pm i(kr - \eta \log(2kr) - \pi\ell/2)\right)$$

となる。

(2.1) で与えられるクーロン波 ψ_c は

$$\begin{aligned} \psi_c(\mathbf{r}) &= \frac{1}{kr} \sum_{\ell=0}^{\infty} (2\ell + 1) i^\ell e^{i\sigma_\ell} F_\ell(\eta, kr) P_\ell(\cos\theta) \\ &= \frac{1}{2ikr} \sum_{\ell=0}^{\infty} (2\ell + 1) i^\ell \left(e^{2i\sigma_\ell} u_\ell^{(+)}(r) - u_\ell^{(-)}(r) \right) P_\ell(\cos\theta) \end{aligned}$$

と展開できる。これから

$$\begin{aligned}\psi_c(\mathbf{r}) &= \frac{1}{2ikr} \sum_{\ell=0}^{\infty} (2\ell+1) i^\ell \left[u_\ell^{(+)} - u_\ell^{(-)} + (e^{2i\sigma_\ell} - 1) u_\ell^{(+)} \right] P_\ell(\cos\theta) \\ &\rightarrow \frac{1}{2ikr} \sum_{\ell=0}^{\infty} (2\ell+1) i^\ell \left(u_\ell^{(+)} - u_\ell^{(-)} \right) P_\ell(\cos\theta) \\ &\quad + \frac{e^{ikr - i\eta \log(2kr)}}{2ikr} \sum_{\ell=0}^{\infty} (2\ell+1) (e^{2i\sigma_\ell} - 1) P_\ell(\cos\theta)\end{aligned}$$

(2.3), (2.4) と比較すると

$$\frac{1}{2ikr} \sum_{\ell=0}^{\infty} (2\ell+1) i^\ell \left(u_\ell^{(+)} - u_\ell^{(-)} \right) P_\ell(\cos\theta) \rightarrow \left(1 + \frac{\eta^2}{2ikr \sin^2(\theta/2)} \right) e^{ikz + i\eta \log k(r-z)} \quad (2.8)$$

$$f_c(\theta) = \frac{1}{2ik} \sum_{\ell=0}^{\infty} (2\ell+1) (e^{2i\sigma_\ell} - 1) P_\ell(\cos\theta) \quad (2.9)$$

である。

- (2.6) で定義した σ_ℓ は次の性質を持つ。 $\Gamma(\ell+1+i\eta) = (\ell+i\eta)\Gamma(\ell+i\eta)$ より

$$\sigma_\ell = \sigma_{\ell-1} + \tan^{-1} \frac{\eta}{\ell}$$

また

$$\frac{1}{\Gamma(z)} = z e^{\gamma z} \prod_{n=1}^{\infty} \left[\left(1 + \frac{z}{n} \right) e^{-z/n} \right], \quad \gamma = \text{オイラ一定数} = 0.57721\ 56649\ 01532$$

であるから

$$\sigma_0 = \text{Arg } \Gamma(1+i\eta) = \text{Arg } i\eta \Gamma(i\eta) = -\gamma\eta + \sum_{n=1}^{\infty} \left(\frac{\eta}{n} - \tan^{-1} \frac{\eta}{n} \right)$$

- F_ℓ と G_ℓ の線形結合 $H_\ell = aF_\ell + bG_\ell$ は漸化式

$$(2\ell+1) \left(\eta + \frac{\ell(\ell+1)}{\rho} \right) H_\ell = \ell \sqrt{\eta^2 + (\ell+1)^2} H_{\ell+1} + (\ell+1) \sqrt{\eta^2 + \ell^2} H_{\ell-1}$$

を満たす。また, (2.2) から

$$F_\ell(\eta, \rho) = \text{Im} \left[e^{i(\rho - \eta \log(2\rho) + \sigma_\ell - \pi\ell/2)} g(\ell+1+i\eta, -\ell+i\eta, 2i\rho) \right]$$

$$G_\ell(\eta, \rho) = \text{Re} \left[e^{i(\rho - \eta \log(2\rho) + \sigma_\ell - \pi\ell/2)} g(\ell+1+i\eta, -\ell+i\eta, 2i\rho) \right]$$

$a = \ell+1+i\eta$, $b = -\ell+i\eta$ とすると

$$g(a, b, 2i\rho) = 1 + \frac{ab}{2i\rho} + \frac{1}{2!} \frac{a(a+1)b(b+1)}{(2i\rho)^2} + \cdots = \sum_{k=0}^{\infty} (f_k + ig_k)$$

$f_k + ig_k$ は漸化式

$$\begin{aligned}f_{k+1} + ig_{k+1} &= \frac{(a+k)(b+k)}{(k+1)2i\rho} (f_k + ig_k) \\ &= \frac{k(k+1) - \ell(\ell+1) - \eta^2 + i(2k+1)\eta}{2i(k+1)\rho} (f_k + ig_k) \\ &= (a_k + ib_k) (f_k + ig_k)\end{aligned}$$

ただし

$$a_k = \frac{(2k+1)\eta}{2(k+1)\rho}, \quad b_k = \frac{\ell(\ell+1) - k(k+1) + \eta^2}{2(k+1)\rho}$$

を満たす。つまり

$$f_{k+1} = a_k f_k - b_k g_k, \quad g_{k+1} = a_k g_k + b_k f_k, \quad f_0 = 1, \quad g_0 = 0$$

この漸化式から f_k, g_k を求め、これらの和をとれば

$$G_\ell = f \cos \theta - g \sin \theta, \quad F_\ell = g \cos \theta + f \sin \theta, \quad f = \sum_k f_k, \quad g = \sum_k g_k$$

により G_ℓ, F_ℓ が求まる。ただし

$$\theta = \rho - \eta \log(2\rho) + \sigma_\ell - \pi\ell/2$$

2.3 短距離ポテンシャルとクーロン・ポテンシャル

スピン 1/2 の粒子の弾性散乱を考える。粒子の運動は

$$\left(-\frac{1}{2m} \nabla^2 + V_0(r) + V_s(r) \boldsymbol{\ell} \cdot \boldsymbol{\sigma} + \frac{Z_1 Z_2 e^2}{r} \right) \psi(\mathbf{r}) = E \psi(\mathbf{r}), \quad E = \frac{k^2}{2m} \quad (2.10)$$

で記述されるとする。(2.10) の解 ψ を

$$\psi(\mathbf{r}) = \sum_{\ell j m} A_{\ell j m} \frac{u_{\ell j}(r)}{r} \mathcal{Y}_{\ell j m}(\theta, \varphi)$$

とすると

$$\left(\frac{d^2}{dr^2} + k^2 - \frac{\ell(\ell+1)}{r^2} - U_{\ell j}(r) - \frac{2k\eta}{r} \right) u_{\ell j}(r) = 0$$

ただし

$$\eta = \frac{m Z_1 Z_2 e^2}{k}, \quad U_{\ell j} = 2m \left(V_0(r) + \Delta_{\ell j} V_s(r) \right), \quad \Delta_{\ell j} = \begin{cases} \ell, & j = \ell + 1/2 \\ -(\ell + 1), & j = \ell - 1/2 \end{cases}$$

$r \rightarrow \infty$ では、 $u_{\ell j}$ はクーロンポテンシャルと同じ内向き波と定数倍異なる外向きの波からなるはずであるから

$$u_{\ell j} \rightarrow u_\ell^{(-)}(r) - e^{2i\sigma_\ell} e^{2i\delta_{\ell j}} u_\ell^{(+)}(r) = e^{i\sigma_\ell} \left[F_\ell + \frac{1}{2i} (e^{2i\delta_{\ell j}} - 1) (G_\ell + iF_\ell) \right] \quad (2.11)$$

である。したがって

$$\begin{aligned} \psi &\rightarrow \frac{1}{r} \sum_{\ell j m} A_{\ell j m} \left(u_\ell^{(-)} - e^{2i\sigma_\ell} e^{2i\delta_{\ell j}} u_\ell^{(+)} \right) \mathcal{Y}_{\ell j m} \\ &= \frac{1}{r} \sum_{\ell j m} A_{\ell j m} \left(u_\ell^{(-)} - u_\ell^{(+)} \right) \mathcal{Y}_{\ell j m} + \frac{1}{r} \sum_{\ell j m} A_{\ell j m} \left(1 - e^{2i\sigma_\ell} e^{2i\delta_{\ell j}} \right) u_\ell^{(+)} \mathcal{Y}_{\ell j m} \\ &= \frac{1}{r} \sum_{\ell j m} A_{\ell j m} \left(u_\ell^{(-)} - u_\ell^{(+)} \right) \mathcal{Y}_{\ell j m} \\ &\quad + \frac{e^{ikr - i\eta \log(2kr)}}{r} \sum_{\ell j m} i^{-\ell} A_{\ell j m} \left(1 - e^{2i\sigma_\ell} e^{2i\delta_{\ell j}} \right) \mathcal{Y}_{\ell j m} \end{aligned} \quad (2.12)$$

一方、散乱状態の波動関数は $r \rightarrow \infty$ では純粋なクーロン・ポテンシャル中での入射波と散乱波になるはずであるから

$$\psi \longrightarrow \left[\left(1 + \frac{\eta^2}{2ikr \sin^2(\theta/2)} \right) e^{ikz + i\eta \log k(r-z)} + f(\theta) \frac{e^{ikr - i\eta \log 2kr}}{r} \right] |\chi\rangle$$

と表せる。 $|\chi\rangle$ は入射粒子のスピン状態、 $f(\theta)$ は 2×2 の行列である。(2.8) より、この漸近形は

$$\psi = \frac{1}{2ikr} \sum_{\ell=0}^{\infty} (2\ell+1) i^\ell \left(u_\ell^{(+)} - u_\ell^{(-)} \right) P_\ell(\cos\theta) |\chi\rangle + \frac{e^{ikr - i\eta \log 2kr}}{r} f(\theta) |\chi\rangle$$

と書ける。 $P_\ell(\cos\theta) |\chi\rangle$ と $f(\theta) |\chi\rangle$ は $\mathcal{Y}_{\ell jm}$ を用いて

$$P_\ell(\cos\theta) |\chi\rangle = \sum_{jm} a_{\ell jm} \mathcal{Y}_{\ell jm}, \quad f(\theta) |\chi\rangle = \frac{1}{2ik} \sum_{\ell jm} f_{\ell jm} \mathcal{Y}_{\ell jm}$$

と展開できるから

$$\psi = \frac{1}{2ikr} \sum_{\ell jm} (2\ell+1) i^\ell \left(u_\ell^{(+)} - u_\ell^{(-)} \right) a_{\ell jm} \mathcal{Y}_{\ell jm} + \frac{e^{ikr - i\eta \log 2kr}}{2ikr} \sum_{\ell jm} f_{\ell jm} \mathcal{Y}_{\ell jm} \quad (2.13)$$

(2.12), (2.13) を比較すると

$$\begin{aligned} A_{\ell jm} &= \frac{2\ell+1}{2k} i^{\ell+1} a_{\ell jm} \\ f_{\ell jm} &= 2ki^{-(\ell+1)} A_{\ell jm} (e^{2i\sigma_\ell} e^{2i\delta_{\ell j}} - 1) = (2\ell+1) (e^{2i\sigma_\ell} e^{2i\delta_{\ell j}} - 1) a_{\ell jm} \end{aligned}$$

を得る。これを $f(\theta)$ の展開式に代入すると

$$f(\theta) |\chi\rangle = \frac{1}{2ik} \sum_{\ell jm} (2\ell+1) [(e^{2i\sigma_\ell} - 1) + e^{2i\sigma_\ell} (e^{2i\delta_{\ell j}} - 1)] a_{\ell jm} \mathcal{Y}_{\ell jm}$$

第1項目の jm についての和は $P_\ell(\cos\theta) |\chi\rangle$ になるから

$$\begin{aligned} f(\theta) |\chi\rangle &= \frac{1}{2ik} \sum_{\ell} (2\ell+1) (e^{2i\sigma_\ell} - 1) P_\ell(\cos\theta) |\chi\rangle + \frac{1}{k} \sum_{\ell jm} (2\ell+1) e^{2i\sigma_\ell} T_{\ell j} a_{\ell jm} \mathcal{Y}_{\ell jm} \\ &= f_c(\theta) |\chi\rangle + \frac{1}{k} \sum_{\ell jm} (2\ell+1) e^{2i\sigma_\ell} T_{\ell j} a_{\ell jm} \mathcal{Y}_{\ell jm} \end{aligned}$$

となる。ただし f_c はクーロン散乱の散乱振幅、 $T_{\ell j}$ は

$$T_{\ell j} = \frac{1}{2i} (e^{2i\delta_{\ell j}} - 1) = e^{i\delta_{\ell j}} \sin \delta_{\ell j}$$

である。射影演算子

$$Q_+ = \frac{\ell+1 + \ell \cdot \boldsymbol{\sigma}}{2\ell+1}, \quad Q_- = \frac{\ell - \ell \cdot \boldsymbol{\sigma}}{2\ell+1}, \quad Q_+ + Q_- = 1$$

を考えると

$$Q_+ \mathcal{Y}_{\ell jm} = \begin{cases} \mathcal{Y}_{\ell jm}, & j = \ell + 1/2 \\ 0, & j = \ell - 1/2 \end{cases} \quad Q_- \mathcal{Y}_{\ell jm} = \begin{cases} 0, & j = \ell + 1/2 \\ \mathcal{Y}_{\ell jm}, & j = \ell - 1/2 \end{cases}$$

であるから

$$Q_\pm P_\ell(\cos\theta) |\chi\rangle = \sum_m a_{\ell j=\ell\pm 1/2 m} \mathcal{Y}_{\ell j=\ell\pm 1/2 m}$$

したがって, $T_{\ell\pm} = T_{\ell j=\ell\pm 1/2}$ とおくと

$$\begin{aligned} f(\theta) &= f_c(\theta) + \frac{1}{k} \sum_{\ell} (2\ell + 1) e^{2i\sigma_{\ell}} (T_{\ell+} Q_{+} + T_{\ell-} Q_{-}) P_{\ell}(\cos \theta) \\ &= f_c(\theta) + \frac{1}{k} \sum_{\ell} e^{2i\sigma_{\ell}} \left[(\ell + 1) T_{\ell+} + \ell T_{\ell-} + (T_{\ell+} - T_{\ell-}) \boldsymbol{\ell} \cdot \boldsymbol{\sigma} \right] P_{\ell}(\cos \theta) \end{aligned}$$

ところで

$$\boldsymbol{\ell} = -i \mathbf{n}_{\theta} \frac{1}{\sin \theta} \frac{\partial}{\partial \varphi} + i \mathbf{n} \frac{\partial}{\partial \theta}$$

ただし

$$\begin{aligned} \mathbf{n} &= (-\sin \varphi, \cos \varphi, 0) = \frac{\mathbf{k}_i \times \mathbf{k}_f}{|\mathbf{k}_i \times \mathbf{k}_f|} \\ \mathbf{n}_{\theta} &= (-\cos \theta \cos \varphi, -\cos \theta \sin \varphi, \sin \theta) \end{aligned}$$

であるから

$$\boldsymbol{\ell} \cdot \boldsymbol{\sigma} P_{\ell}(\cos \theta) = -i \mathbf{n} \cdot \boldsymbol{\sigma} \frac{dP_{\ell}(\cos \theta)}{d\theta} = -i \mathbf{n} \cdot \boldsymbol{\sigma} P_{\ell}^1(\cos \theta), \quad P_{\ell}^1(x) = -\sqrt{1-x^2} \frac{dP_{\ell}}{dx}$$

となる。これから

$$f(\theta) = A(\theta) + B(\theta) \mathbf{n} \cdot \boldsymbol{\sigma} \quad (2.14)$$

ここで

$$A(\theta) = f_c(\theta) + \frac{1}{k} \sum_{\ell} e^{2i\sigma_{\ell}} \left((\ell + 1) T_{\ell+} + \ell T_{\ell-} \right) P_{\ell}(\cos \theta) \quad (2.15)$$

$$B(\theta) = -\frac{i}{k} \sum_{\ell} e^{2i\sigma_{\ell}} (T_{\ell+} - T_{\ell-}) P_{\ell}^1(\cos \theta) \quad (2.16)$$

数値的に解く場合, 十分遠方の2点 $r = r_1, r = r_2$ における数値解を

$$u_{\ell j}(1) = u_{\ell j}(r_1), \quad u_{\ell j}(2) = u_{\ell j}(r_2)$$

とすると (2.11) から

$$\frac{u_{\ell j}(1)}{u_{\ell j}(2)} = \frac{F_{\ell}(1) + T_{\ell j} (G_{\ell}(1) + iF_{\ell}(1))}{F_{\ell}(2) + T_{\ell j} (G_{\ell}(2) + iF_{\ell}(2))}$$

であるから

$$T_{\ell j} = -\frac{u_{\ell j}(1) F_{\ell}(2) - u_{\ell j}(2) F_{\ell}(1)}{u_{\ell j}(1) G_{\ell}(2) - u_{\ell j}(2) G_{\ell}(1) + i(u_{\ell j}(1) F_{\ell}(2) - u_{\ell j}(2) F_{\ell}(1))}$$

2.4 偏極

系がある特定の量子状態にあるのではなく, 状態 $|\alpha\rangle$ になる確率が w_{α} の場合を考える。この場合, 多数回の測定における F の期待値は

$$\langle F \rangle = \sum_{\alpha} w_{\alpha} \langle \alpha | F | \alpha \rangle$$

である。完全系 $\{|b\rangle\}$ を考えると

$$\langle F \rangle = \sum_{\alpha} w_{\alpha} \sum_{bb'} \langle \alpha|b\rangle \langle b|F|b'\rangle \langle b'|\alpha\rangle = \sum_{bb'} \left(\sum_{\alpha} w_{\alpha} \langle b'|\alpha\rangle \langle \alpha|b\rangle \right) \langle b|F|b'\rangle$$

と表せる。そこで密度演算子 ρ を

$$\rho = \sum_{\alpha} w_{\alpha} |\alpha\rangle \langle \alpha|$$

で定義すると

$$\langle F \rangle = \sum_{bb'} \langle b'|\rho|b\rangle \langle b|F|b'\rangle = \text{Tr}(\rho F)$$

また

$$\text{Tr}(\rho) = \sum_b \langle b|\rho|b\rangle = \sum_b \sum_{\alpha} w_{\alpha} \langle b|\alpha\rangle \langle \alpha|b\rangle = \sum_{\alpha} w_{\alpha} \langle \alpha|\alpha\rangle = \sum_{\alpha} w_{\alpha} = 1$$

スピン状態についてアンサンブル平均を行う。スピン 1/2 の場合 ρ は 2×2 行列になるから

$$\rho = a + \mathbf{b} \cdot \boldsymbol{\sigma}$$

と表せる。 $\sigma_i \sigma_j = \delta_{ij} + i \varepsilon_{ijk} \sigma_k$, $\text{Tr}(\boldsymbol{\sigma}) = 0$ であるから

$$\text{Tr}(\rho) = 2a = 1, \quad \text{Tr}(\rho \sigma_i) = 2b_i$$

したがって

$$\rho = \frac{1 + \mathbf{P} \cdot \boldsymbol{\sigma}}{2}, \quad \mathbf{P} = \text{Tr}(\rho \boldsymbol{\sigma})$$

となる。 \mathbf{P} はスピン $\boldsymbol{\sigma}$ のアンサンブル平均を表す偏極ベクトルである。

入射粒子が常にある 1 つのスピン状態 $|\chi\rangle$ にある純粋アンサンブルの場合、微分断面積は

$$\frac{d\sigma}{d\Omega} = \langle \chi | f^{\dagger} f | \chi \rangle$$

であるから、混合アンサンブルについては

$$\frac{d\sigma}{d\Omega} = \sum_i w_i \langle \chi_i | f^{\dagger} f | \chi_i \rangle = \text{Tr}(\rho_{\text{in}} f^{\dagger} f)$$

となる。ただし

$$\rho_{\text{in}} = \sum_i w_i |\chi_i\rangle \langle \chi_i| = \frac{1 + \mathbf{P}_{\text{in}} \cdot \boldsymbol{\sigma}}{2}$$

は入射状態の密度行列であり、 \mathbf{P}_{in} は入射粒子の偏極ベクトルを表す。

$$\mathbf{A} \cdot \boldsymbol{\sigma} \mathbf{B} \cdot \boldsymbol{\sigma} = \mathbf{A} \cdot \mathbf{B} + i \boldsymbol{\sigma} \cdot (\mathbf{A} \times \mathbf{B})$$

を使うと

$$\begin{aligned} \frac{d\sigma}{d\Omega} &= \frac{1}{2} \text{Tr} \left((1 + \mathbf{P}_{\text{in}} \cdot \boldsymbol{\sigma}) (A^* + B^* \mathbf{n} \cdot \boldsymbol{\sigma}) (A + B \mathbf{n} \cdot \boldsymbol{\sigma}) \right) \\ &= |A|^2 + |B|^2 + 2 \text{Re}(AB^*) \mathbf{P}_{\text{in}} \cdot \mathbf{n} \end{aligned} \quad (2.17)$$

散乱後のスピン状態は純粋状態 $|\chi\rangle$ に対して $f(\theta)|\chi\rangle$ になるから、混合状態の場合には、散乱後の密度行列 ρ_f は

$$\rho_f = \sum_i w_i f(\theta) |\chi_i\rangle \langle \chi_i| f(\theta)^{\dagger} = f \rho_{\text{in}} f^{\dagger}$$

規格化された密度行列は

$$\rho_f = \frac{f \rho_{in} f^\dagger}{\text{Tr}(\rho_{in} f^\dagger f)}$$

となる。散乱後の偏極ベクトル \mathbf{P}_f は

$$\mathbf{P}_f = \text{Tr}(\rho_f \boldsymbol{\sigma}) = \frac{\text{Tr}(f \rho_{in} f^\dagger \boldsymbol{\sigma})}{\text{Tr}(\rho_{in} f^\dagger f)}$$

である。 k 方向のスピンを $\sigma_k = \mathbf{k} \cdot \boldsymbol{\sigma}$ とすれば、 $\sigma_n^2 = 1$ であるから

$$\begin{aligned} \text{Tr}(f \rho_{in} f^\dagger \sigma_k) &= \frac{1}{2} \text{Tr}((A + B \sigma_n)(1 + \mathbf{P}_{in} \cdot \boldsymbol{\sigma})(A^* + B^* \sigma_n) \sigma_k) \\ &= \frac{1}{2} \text{Tr}\left(2\text{Re}(A^* B) \sigma_n \sigma_k + |A|^2 \mathbf{P}_{in} \cdot \boldsymbol{\sigma} \sigma_k + A^* B \sigma_n \mathbf{P}_{in} \cdot \boldsymbol{\sigma} \sigma_k \right. \\ &\quad \left. + AB^* \mathbf{P}_{in} \cdot \boldsymbol{\sigma} \sigma_n \sigma_k + |B|^2 \sigma_n \mathbf{P}_{in} \cdot \boldsymbol{\sigma} \sigma_n \sigma_k\right) \end{aligned}$$

ここで

$$\begin{aligned} \text{Tr}(\mathbf{a} \cdot \boldsymbol{\sigma} \mathbf{b} \cdot \boldsymbol{\sigma} \mathbf{c} \cdot \boldsymbol{\sigma}) &= \text{Tr}\left(\left(\mathbf{a} \cdot \mathbf{b} + i \boldsymbol{\sigma} \cdot (\mathbf{a} \times \mathbf{b})\right) \mathbf{c} \cdot \boldsymbol{\sigma}\right) = 2i(\mathbf{a} \times \mathbf{b}) \cdot \mathbf{c} \\ \text{Tr}(\mathbf{a} \cdot \boldsymbol{\sigma} \mathbf{b} \cdot \boldsymbol{\sigma} \mathbf{c} \cdot \boldsymbol{\sigma} \mathbf{d} \cdot \boldsymbol{\sigma}) &= \text{Tr}\left(\left(\mathbf{a} \cdot \mathbf{b} + i \boldsymbol{\sigma} \cdot (\mathbf{a} \times \mathbf{b})\right) \left(\mathbf{c} \cdot \mathbf{d} + i \boldsymbol{\sigma} \cdot (\mathbf{c} \times \mathbf{d})\right)\right) \\ &= 2\mathbf{a} \cdot \mathbf{b} \mathbf{c} \cdot \mathbf{d} - 2(\mathbf{a} \times \mathbf{b}) \cdot (\mathbf{c} \times \mathbf{d}) \\ &= 2\mathbf{a} \cdot \mathbf{b} \mathbf{c} \cdot \mathbf{d} - 2\mathbf{a} \cdot \mathbf{c} \mathbf{b} \cdot \mathbf{d} + 2\mathbf{a} \cdot \mathbf{d} \mathbf{b} \cdot \mathbf{c} \end{aligned}$$

を使うと

$$\begin{aligned} \text{Tr}(f \rho_{in} f^\dagger \boldsymbol{\sigma} \cdot \mathbf{k}) &= 2\text{Re}(A^* B) \mathbf{n} \cdot \mathbf{k} + (|A|^2 - |B|^2) \mathbf{P}_{in} \cdot \mathbf{k} + 2\text{Im}(AB^*) (\mathbf{n} \times \mathbf{P}_{in}) \cdot \mathbf{k} \\ &\quad + 2|B|^2 \mathbf{n} \cdot \mathbf{P}_{in} \mathbf{n} \cdot \mathbf{k} \end{aligned}$$

つまり

$$\text{Tr}(f \rho_{in} f^\dagger \boldsymbol{\sigma}) = 2(\text{Re}(A^* B) + |B|^2 (\mathbf{n} \cdot \mathbf{P}_{in})) \mathbf{n} + (|A|^2 - |B|^2) \mathbf{P}_{in} + 2\text{Im}(AB^*) \mathbf{n} \times \mathbf{P}_{in} \quad (2.18)$$

入射粒子の偏極ベクトル \mathbf{P}_{in} が入射方向を向いている場合

$$\mathbf{P}_{in} \cdot \mathbf{n} = 0$$

であるから

$$\frac{d\sigma}{d\Omega} = |A|^2 + |B|^2 \quad (2.19)$$

$$\mathbf{P}_f = \frac{2\text{Re}(A^* B) \mathbf{n} + (|A|^2 - |B|^2) \mathbf{P}_{in} + 2\text{Im}(AB^*) \mathbf{n} \times \mathbf{P}_{in}}{|A|^2 + |B|^2} \quad (2.20)$$

ここで

$$\frac{2AB^*}{|A|^2 + |B|^2} = P(\theta) + iQ(\theta)$$

とおくと

$$\mathbf{P}_f = P(\theta) \mathbf{n} + Q(\theta) \mathbf{n} \times \mathbf{P}_{in} + \frac{|A|^2 - |B|^2}{|A|^2 + |B|^2} \mathbf{P}_{in}$$

P を polarization, Q を spin rotation という。

2.5 重心系

入射粒子の質量を m , ターゲット原子核の質量を M とする。入射粒子の運動量を \mathbf{p}_0 とし

$$E_{\text{in}} = \sqrt{m^2 + \mathbf{p}_0^2}$$

とおく。実験室系での入射粒子, ターゲット原子核の 4 元運動量 p^μ, P^μ は

$$p^\mu = (E_{\text{in}}, \mathbf{p}_0), \quad P^\mu = (M, 0)$$

重心系での入射粒子, ターゲット原子核の運動量 $p_{\text{cm}}^\mu, P_{\text{cm}}^\mu$ は

$$p_{\text{cm}}^\mu = \left(\sqrt{m^2 + \mathbf{p}^2}, \mathbf{p} \right), \quad P_{\text{cm}}^\mu = \left(\sqrt{M^2 + \mathbf{p}^2}, -\mathbf{p} \right)$$

$p^2 = p_{\text{cm}}^2 = m^2, P^2 = P_{\text{cm}}^2 = M^2$ でありローレンツ変換に対して不変である。同様に $(p + P)^2 = (p_{\text{cm}} + P_{\text{cm}})^2$ より $p \cdot P = p_{\text{cm}} \cdot P_{\text{cm}}$ となるから

$$E_{\text{in}}M = \sqrt{(m^2 + \mathbf{p}^2)(M^2 + \mathbf{p}^2)} + \mathbf{p}^2$$

したがって

$$\mathbf{p}^2 = \frac{M^2(E_{\text{in}}^2 - m^2)}{m^2 + M^2 + 2ME_{\text{in}}} = \frac{\mathbf{p}_0^2}{1 + m^2/M^2 + 2E_{\text{in}}/M}$$

$|\mathbf{p}_0| \ll m$ の場合には, 分母の E_{in} を m で近似すると

$$|\mathbf{p}| \approx \frac{1}{1 + m/M} |\mathbf{p}_0|$$

となり, 非相対論の結果を再現する。

2.6 Dirac 方程式

Dirac 方程式

$$\left(-i\boldsymbol{\alpha} \cdot \boldsymbol{\nabla} + \beta(m + U_s(r)) + U_0(r) \right) \psi(\mathbf{r}) = E\psi(\mathbf{r})$$

を考える。4 成分スピノール ψ を上 2 成分と下 2 成分に分け, 下成分を消去すると, 上成分 F に対する方程式として

$$\left(-\boldsymbol{\sigma} \cdot \boldsymbol{\nabla} D^{-1} \boldsymbol{\sigma} \cdot \boldsymbol{\nabla} + m + U_s + U_0 - E \right) F(\mathbf{r}) = 0$$

ただし

$$D(r) = m + E + U_s(r) - U_0(r)$$

を得る。ここで, $\boldsymbol{\sigma}$ は 2×2 のパウリ行列である。

$$F(\mathbf{r}) = \sqrt{\frac{D}{m + E}} \tilde{F}(\mathbf{r}) = \sqrt{1 + \frac{U_s(r) - U_0(r)}{m + E}} \tilde{F}(\mathbf{r})$$

と変換すると

$$\left(-\frac{1}{2m} \boldsymbol{\nabla}^2 + V_0(r) + V_{\text{so}}(r) \boldsymbol{\sigma} \cdot \boldsymbol{\ell} \right) \tilde{F} = \frac{E^2 - m^2}{2m} \tilde{F} \quad (2.21)$$

ただし

$$V_0(r) = U_s + \frac{E}{m} U_0 + \frac{U_s^2 - U_0^2}{2m} + V_D, \quad V_{\text{so}}(r) = -\frac{1}{2mr} \frac{1}{D} \frac{dD}{dr}$$

$$V_D(r) = \frac{1}{2m} \left[\frac{3}{4} \frac{1}{D^2} \left(\frac{dD}{dr} \right)^2 - \frac{1}{rD} \frac{dD}{dr} - \frac{1}{2D} \frac{d^2 D}{dr^2} \right]$$

はダーウィン項と呼ばれる。

クーロン力を取り入れる場合は, $U_0(r)$ を $U_0(r) + V_{\text{coul}}(r)$ で置き換える。 $r \rightarrow \infty$ では

$$V_{\text{coul}}(r) \rightarrow \frac{Z_1 Z_2 e^2}{r}$$

であるから

$$\eta = E \frac{Z_1 Z_2 e^2}{k}, \quad k^2 = E^2 - m^2$$

とおくと

$$V_0 \rightarrow \frac{E}{m} \frac{Z_1 Z_2 e^2}{r} = \frac{1}{2m} \frac{2k\eta}{r},$$

となるから, (2.21) は $r \rightarrow \infty$ のとき

$$\left(\nabla^2 + k^2 - \frac{2k\eta}{r} \right) \tilde{F} = 0$$

シュレディンガー方程式の η の定義式に含まれる m を E で置き換えればよい。

3 電子散乱と原子核の電荷分布

- D. R. Yennie *et al.*, Phys. Rev. **95** (1954) 500
- T. A. Griffy *et al.*, Phys. Rev. **128** (1962) 833
- H. Feshbach, Theoretical Nuclear Physics – Nuclear Reactions – , 684
- ランダウ, リフシツツ, 相対論的量子力学 I, 152
- モット, マッセイ, 衝突の理論 上 II, 297

4成分スピノールを

$$\psi(\mathbf{r}) = \begin{pmatrix} \frac{g(r)}{r} \chi_{\kappa} \\ i \frac{f(r)}{r} \chi_{-\kappa} \end{pmatrix}, \quad \kappa = \pm(j + 1/2) = \begin{cases} \ell, & j = \ell - 1/2 \\ -(\ell + 1), & j = \ell + 1/2 \end{cases}$$

とすると

$$\frac{dg}{dr} = -\frac{\kappa}{r}g + (E + m - V(r))f, \quad \frac{df}{dr} = \frac{\kappa}{r}f - (E - m - V(r))g \quad (3.1)$$

である。

3.1 クーロン散乱

$r \rightarrow \infty$ のとき

$$\frac{dg}{dr} = (E + m)f, \quad \frac{df}{dr} = -(E - m)g$$

であるから

$$\frac{d^2g}{dr^2} = -k^2g, \quad \frac{d^2f}{dr^2} = -k^2f, \quad k = \sqrt{E^2 - m^2}$$

したがって, g, f ともに $e^{\pm ikr}$ になる。一方,

$$V(r) = -\frac{Z\alpha}{r}$$

の場合, $r \rightarrow 0$ では

$$\frac{dg}{dr} = -\frac{\kappa}{r}g + \frac{Z\alpha}{r}f, \quad \frac{df}{dr} = \frac{\kappa}{r}f - \frac{Z\alpha}{r}g$$

となるから, $g = C_g r^a, f = C_f r^a$ とすると

$$(a + \kappa)C_g = Z\alpha C_f, \quad (a - \kappa)C_f = -Z\alpha C_g$$

これから

$$a = \pm\gamma, \quad \gamma = \sqrt{\kappa^2 - Z^2\alpha^2}$$

以上から

$$g = C_g e^{-\rho/2} \rho^{\gamma} (G_1 + G_2), \quad f = C_f e^{-\rho/2} \rho^{\gamma} (G_1 - G_2), \quad \rho = -2ikr \quad (3.2)$$

とおくと, (3.1) は

$$\begin{aligned} & \rho \left(\frac{dG_1}{d\rho} + \frac{dG_2}{d\rho} \right) + (\gamma + \kappa)(G_1 + G_2) \\ & - \frac{1}{2} \left(1 - \frac{E + m}{ik} \frac{C_f}{C_g} \right) \rho G_1 - \frac{1}{2} \left(1 + \frac{E + m}{ik} \frac{C_f}{C_g} \right) \rho G_2 - Z\alpha \frac{C_f}{C_g} (G_1 - G_2) = 0 \end{aligned}$$

したがって

$$C_f = \frac{ik}{E+m} C_g = i \sqrt{\frac{E-m}{E+m}} C_g \quad (3.3)$$

すると

$$\rho \left(\frac{dG_1}{d\rho} + \frac{dG_2}{d\rho} \right) + (\gamma + \kappa) (G_1 + G_2) - \rho G_2 - i \frac{Z\alpha k}{E+m} (G_1 - G_2) = 0$$

同様にして

$$\rho \left(\frac{dG_1}{d\rho} - \frac{dG_2}{d\rho} \right) + (\gamma - \kappa) (G_1 - G_2) + \rho G_2 - i \frac{Z\alpha k}{E-m} (G_1 + G_2) = 0$$

これらの和, 差をとれば

$$\rho \frac{dG_1}{d\rho} + (\gamma - i\nu) G_1 + (\kappa - i\mu) G_2 = 0 \quad (3.4)$$

$$\rho \frac{dG_2}{d\rho} + (\gamma + i\nu - \rho) G_2 + (\kappa + i\mu) G_1 = 0 \quad (3.5)$$

ただし

$$\nu = \frac{Z\alpha E}{k}, \quad \mu = \frac{Z\alpha m}{k}$$

最初の式を ρ で微分し, $dG_2/d\rho$ に第 2 式を代入すると

$$\rho \frac{d^2 G_1}{d\rho^2} + (1 + 2\gamma - \rho) \frac{dG_1}{d\rho} - (\gamma - i\nu) G_1 = 0 \quad (3.6)$$

同様にして

$$\rho \frac{d^2 G_2}{d\rho^2} + (1 + 2\gamma - \rho) \frac{dG_2}{d\rho} - (1 + \gamma - i\nu) G_2 = 0 \quad (3.7)$$

これらは合流型超幾何微分方程式

$$\left(z \frac{d^2}{dz^2} + (b-z) \frac{d}{dz} - a \right) w(z) = 0$$

である。原点で正則な解は

$$w = M(a, b, z)$$

正則でない解は

$$w = z^{1-b} M(1+a-b, 2-b, z)$$

原点で正則な解

$$G_1(\rho) = C_1 M(\gamma - i\nu, 1 + 2\gamma, \rho), \quad G_2(\rho) = C_2 M(1 + \gamma - i\nu, 1 + 2\gamma, \rho)$$

これらを (3.4) に代入し

$$z \frac{d}{dz} M(a, b, z) = a \left(M(a+1, b, z) - M(a, b, z) \right)$$

を使うと

$$C_2 = - \frac{\gamma - i\nu}{\kappa - i\mu} C_1$$

$|\gamma - i\nu| = |\kappa - i\mu|$ であるから

$$e^{-2i\eta} = \frac{\gamma - i\nu}{\kappa - i\mu}$$

とおき, $M(a, b, z) = e^z M(b - a, b, -z)$ を使うと

$$G_2(\rho) = C_1 e^{-2i\eta + \rho} M(\gamma + i\nu, 1 + 2\gamma, -\rho)$$

となる。(3.2) に G_1, G_2 を代入すると

$$\left. \begin{array}{l} g \\ f \end{array} \right\} = C e^{-\rho/2} \rho^\gamma (M(\gamma - i\nu, 1 + 2\gamma, \rho) \mp e^{-2i\eta + \rho} M(\gamma + i\nu, 1 + 2\gamma, -\rho))$$

$$= 2C e^{-i\eta} \rho^\gamma \left\{ \begin{array}{l} i \operatorname{Im} \\ \operatorname{Re} \end{array} \right\} e^{i\eta - \rho/2} M(\gamma - i\nu, 1 + 2\gamma, \rho)$$

(3.3) を考慮すると, 原点で正則な解は ($\rho = -2ix$)

$$g_r = C_r (2x)^\gamma \operatorname{Im} e^{i(x+\eta)} M(\gamma - i\nu, 1 + 2\gamma, -2ix) \quad (3.8)$$

$$f_r = \frac{k}{E+m} C_r (2x)^\gamma \operatorname{Re} e^{i(x+\eta)} M(\gamma - i\nu, 1 + 2\gamma, -2ix) \quad (3.9)$$

原点で正則でない解

$$G_1(\rho) = C_1 \rho^{-2\gamma} M(-\gamma - i\nu, 1 - 2\gamma, \rho), \quad G_2(\rho) = C_2 \rho^{-2\gamma} M(1 - \gamma - i\nu, 1 - 2\gamma, \rho)$$

これらを (3.4) に代入すると

$$C_2 = -e^{-2i\eta'} C_1, \quad e^{-2i\eta'} = \frac{-\gamma - i\nu}{\kappa - i\mu}$$

これから

$$G_2 = -C_1 e^{-2i\eta' + \rho} \rho^{-2\gamma} M(-\gamma + i\nu, 1 - 2\gamma, -\rho)$$

(3.2) に G_1, G_2 を代入すると

$$\left. \begin{array}{l} g \\ f \end{array} \right\} = C e^{-\rho/2} \rho^{-\gamma} (M(-\gamma - i\nu, 1 - 2\gamma, \rho) \mp e^{-2i\eta' + \rho} M(-\gamma + i\nu, 1 - 2\gamma, -\rho))$$

$$= 2C e^{-i\eta'} \rho^{-\gamma} \left\{ \begin{array}{l} i \operatorname{Im} \\ \operatorname{Re} \end{array} \right\} e^{i\eta' - \rho/2} M(-\gamma - i\nu, 1 - 2\gamma, \rho)$$

原点で正則でない解は

$$g_i = \frac{C_i}{(2x)^\gamma} \operatorname{Im} e^{i(x+\eta')} M(-\gamma - i\nu, 1 - 2\gamma, -2ix) \quad (3.10)$$

$$f_i = \frac{k}{E+m} \frac{C_i}{(2x)^\gamma} \operatorname{Re} e^{i(x+\eta')} M(-\gamma - i\nu, 1 - 2\gamma, -2ix) \quad (3.11)$$

となる。これらは g_r, f_r において γ を $-\gamma$ で置き換えれば得られる。

漸近形

$-3\pi/2 < \arg z \leq -\pi/2$ で $|z| \rightarrow \infty$ のとき

$$M(a, b, z) = \frac{\Gamma(b)}{\Gamma(b-a)} e^{-i\pi a} z^{-a} g(a, a-b+1, -z) + \frac{\Gamma(b)}{\Gamma(a)} e^z z^{a-b} g(1-a, b-a, z)$$

ただし

$$g(a, b, z) = \sum_{n=0}^{\infty} \frac{(a)_n (b)_n}{n! z^n}, \quad (a)_0 = 1, \quad (a)_n = a(a+1)\cdots(a+n-1)$$

である。ところで

$$(-2ix)^{-\gamma+iv} = \exp\left((- \gamma + iv)(\log 2kr - i\pi/2)\right) = \frac{e^{\pi\nu/2}}{(2x)^\gamma} \exp\left(iv \log 2x + i\pi\gamma/2\right)$$

より

$$g_r = C_r \frac{\Gamma(2\gamma+1) e^{-\pi\nu/2}}{|\Gamma(1+\gamma+iv)|} \operatorname{Im} \left[e^{i(x+\nu \log 2x+\theta_\gamma)} g(\gamma-iv, -\gamma-iv, 2ix) \right. \\ \left. + \frac{i}{2x} (\kappa - i\mu) e^{-i(x+\nu \log 2x+\theta_\gamma)} g(1+\gamma+iv, 1-\gamma+iv, -2ix) \right]$$

ここで

$$\theta_\gamma = \eta - \frac{\pi}{2}\gamma - \arg \Gamma(1+\gamma+iv), \quad e^{-2i\eta} = \frac{\gamma-iv}{\kappa-i\mu}$$

したがって

$$C_r = \frac{|\Gamma(1+\gamma+iv)|}{\Gamma(1+2\gamma)} e^{\pi\nu/2}$$

とすれば

$$g_r = \operatorname{Im} \left[e^{i(x+\nu \log 2x+\theta_\gamma)} g(\gamma-iv, -\gamma-iv, 2ix) \right. \\ \left. + \frac{i}{2x} (\kappa - i\mu) e^{-i(x+\nu \log 2x+\theta_\gamma)} g(1+\gamma+iv, 1-\gamma+iv, -2ix) \right] \\ \rightarrow \sin\left(x + \nu \log 2x + \delta_\kappa - \pi\ell/2\right), \quad (x \rightarrow \infty)$$

ただし

$$\delta_\kappa = \theta_\gamma + \pi\ell/2 = \eta + \frac{\pi}{2}(\ell - \gamma) - \arg \Gamma(1+\gamma+iv)$$

正則でない解は、正則解で γ を $-\gamma$ で置き換えればよいから

$$g_i = \operatorname{Im} \left[e^{i(x+\nu \log 2x+\theta_{-\gamma})} g(\gamma-iv, -\gamma-iv, 2ix) \right. \\ \left. + \frac{i}{2x} (\kappa - i\mu) e^{-i(x+\nu \log 2x+\theta_{-\gamma})} g(1+\gamma+iv, 1-\gamma+iv, -2ix) \right] \\ \rightarrow \sin\left(x + \nu \log 2x + \delta'_\kappa - \pi\ell/2\right)$$

ここで

$$\delta'_\kappa = \theta_{-\gamma} + \pi\ell/2 = \eta' + \frac{\pi}{2}(\ell + \gamma) - \arg \Gamma(1-\gamma+iv), \quad e^{-2i\eta'} = \frac{-\gamma-iv}{\kappa-i\mu}$$

- D. R. Yennie *et al.*, Phys. Rev. **95** (1954) 500 との関係

$\kappa = j + 1/2$, $g = F$, $f = G$ とすると (3.1) は

$$\frac{dF}{dr} + \frac{j+1/2}{r} F - (E + m - V(r)) G = 0, \quad \frac{dG}{dr} - \frac{j+1/2}{r} G + (E - m - V(r)) F = 0$$

となり, D. R. Yennie *et al.* の (21) 式に一致する。 $\ell = j + 1/2$ であるから

$$e^{2i\delta_\kappa} = \frac{\kappa - i\mu}{\gamma - iv} \frac{\Gamma(1+\gamma-iv)}{\Gamma(1+\gamma+iv)} e^{i\pi(j+1/2-\gamma)} = \frac{\kappa - i\mu}{\gamma + iv} \frac{\Gamma(\gamma-iv)}{\Gamma(\gamma+iv)} e^{i\pi(j+1/2-\gamma)}$$

$\mu = 0$ ($m = 0$) のとき, これは D. R. Yennie *et al.* の η^c の定義式 (36) であるから $\delta_\kappa = \eta^c$ となる。したがって, $x \rightarrow \infty$ のとき

$$G_R = f_r \longrightarrow \cos\left(x + \nu \log 2x + \eta^c - \pi\ell/2\right) = \sin\left(x + \nu \log 2x + \eta^c - \frac{\pi}{2}(j - 1/2)\right)$$

で (34) 式になる。 $x \rightarrow 0$ の場合

$$e^{ix} M(\gamma - i\nu, 1 + 2\gamma, -2ix) = (1 + ix + \dots) \left(1 - 2i \frac{\gamma - i\nu}{1 + 2\gamma} x + \dots\right) = 1 - \frac{2\nu x}{1 + 2\gamma} + \frac{ix}{1 + 2\gamma}$$

より

$$e^{i(x+\eta)} M(\gamma - i\nu, 1 + 2\gamma, -2ix) = \cos \eta \left[1 - \frac{2\nu + \tan \eta}{1 + 2\gamma} x + i \left(\tan \eta + \frac{1 - 2\nu \tan \eta}{1 + 2\gamma} x\right)\right]$$

ところで

$$\cos \eta = \sqrt{\frac{1 + \cos 2\eta}{2}} = \sqrt{\frac{\kappa + \gamma}{2\kappa}}, \quad \sin \eta = \frac{\kappa}{|\kappa|} \sqrt{\frac{1 - \cos 2\eta}{2}} = \frac{\kappa}{|\kappa|} \sqrt{\frac{\kappa - \gamma}{2\kappa}}$$

であるから

$$\tan \eta = \frac{\kappa}{|\kappa|} \sqrt{\frac{\kappa - \gamma}{\kappa + \gamma}} = \frac{\nu}{\kappa + \gamma}$$

となる。これから

$$\begin{aligned} e^{i(x+\eta)} M(\gamma - i\nu, 1 + 2\gamma, -2ix) &= \sqrt{\frac{\kappa + \gamma}{2\kappa}} \left[1 - \frac{\nu}{1 + 2\gamma} \left(1 + \frac{\gamma + 1 + \kappa}{\gamma + \kappa}\right) x \right. \\ &\quad \left. + i \left(\frac{\nu}{\kappa + \gamma} + \frac{1}{1 + 2\gamma} \left(\gamma + 1 - \kappa - \frac{\nu^2}{\gamma + \kappa}\right) x\right)\right] \end{aligned}$$

D. R. Yennie *et al.* で $s_j \rightarrow \gamma$, $j + 1/2 \rightarrow \kappa$, $\gamma \rightarrow \nu$ と置き換えると

$$e^{i(x+\eta)} M(\gamma - i\nu, 1 + 2\gamma, -2ix) = \sqrt{\frac{\kappa + \gamma}{2\kappa}} (1 + a_1 x + i(b_0 + b_1 x))$$

ただし, a_i, b_i は (A17) で定義されたもの。したがって

$$\begin{aligned} &C_r(2x)^\gamma e^{i(x+\eta)} M(\gamma - i\nu, 1 + 2\gamma, -2ix) \\ &= \frac{|\Gamma(1 + \gamma + i\nu)|}{\Gamma(1 + 2\gamma)} \sqrt{\frac{\kappa + \gamma}{2\kappa}} e^{\pi\nu/2} (2x)^\gamma (1 + a_1 x + i(b_0 + b_1 x)) \\ &= \frac{|\Gamma(\gamma + i\nu)|}{\Gamma(1 + 2\gamma)} \sqrt{\frac{\kappa(\kappa + \gamma)}{2}} e^{\pi\nu/2} (2x)^\gamma (1 + a_1 x + i(b_0 + b_1 x)) \end{aligned}$$

- 位相差は

$$\delta'_\kappa - \delta_\kappa = \pi\gamma + \eta' - \eta + \arg \Gamma(1 + \gamma + i\nu) - \arg \Gamma(1 - \gamma + i\nu)$$

つまり

$$e^{i(\delta'_\kappa - \delta_\kappa)} = e^{i(\pi\gamma + \eta' - \eta)} \frac{u}{|u|}, \quad u = \frac{\Gamma(1 + \gamma + i\nu)}{\Gamma(1 - \gamma + i\nu)}$$

$\Gamma(z) \Gamma(1 - z) = \pi / \sin \pi z$ を使うと

$$u = \frac{1}{\pi} \Gamma(1 + \gamma + i\nu) \Gamma(\gamma - i\nu) \sin \pi(1 - \gamma + i\nu) = \frac{|\Gamma(\gamma - i\nu)|^2}{\pi} (\gamma + i\nu) \sin \pi(\gamma - i\nu)$$

これら

$$e^{i(\delta'_\kappa - \delta_\kappa)} = e^{i(\pi\gamma + \eta' - \eta)} \frac{\gamma + i\nu}{|\gamma + i\nu|} \frac{\sin \pi(\gamma - i\nu)}{|\sin \pi(\gamma - i\nu)|}$$

ところで

$$e^{2i(\eta' - \eta)} = -\frac{\gamma - i\nu}{\gamma + i\nu} = -\frac{(\gamma - i\nu)^2}{|\gamma - i\nu|^2}, \quad \text{i.e.} \quad e^{i(\eta' - \eta)} = i \frac{\gamma - i\nu}{|\gamma - i\nu|}$$

したがって

$$e^{i(\delta'_\kappa - \delta_\kappa)} = i e^{i\pi\gamma} \frac{\sin \pi(\gamma - i\nu)}{|\sin \pi(\gamma - i\nu)|}$$

$$\sin \pi(\gamma - i\nu) = \frac{1}{2i} e^{i\pi|\kappa|} (e^{\pi\nu} - e^{-\pi\nu}) \cos \pi(|\kappa| - \gamma) (1 - i \tan \pi(|\kappa| - \gamma) \coth \pi\nu)$$

$e^{\pi\nu} - e^{-\pi\nu} > 0$, $\cos \pi(|\kappa| - \gamma) > 0$ であるから

$$e^{i(\delta'_\kappa - \delta_\kappa)} = e^{i(\pi\gamma - |\kappa|)} \frac{1 - i \tan \pi(|\kappa| - \gamma) \coth \pi\nu}{|1 - i \tan \pi(|\kappa| - \gamma) \coth \pi\nu|}$$

これは D. R. Yennie の (36) 式である。

- 非相対論的極限では

$$\gamma = \sqrt{\kappa^2 - Z^2\alpha^2} \approx |\kappa|, \quad \nu = \frac{Z\alpha E}{k} \approx \frac{Z\alpha m}{k}$$

であるから

$$e^{-2i\eta} = \frac{-\gamma + i\nu}{\kappa - iZ\alpha m/k} \approx \frac{-|\kappa| + i\nu}{\kappa - i\nu}$$

したがって

$$\eta = \begin{cases} -\pi/2, & \kappa = \ell > 0 \\ \arg(\ell + 1 + i\nu), & \kappa = -(\ell + 1) < 0 \end{cases}$$

$\kappa > 0$ のとき $\gamma \approx \kappa = \ell$ であるから

$$\delta_\kappa \approx -\frac{\pi}{2} + \frac{\pi}{2}(\ell + 1 - \ell) - \arg \Gamma(\ell + 1 + i\nu) = -\arg \Gamma(\ell + 1 + i\nu)$$

$\kappa = -(\ell + 1)$ の場合

$$\Gamma(\gamma + 1 + i\nu) = \Gamma(\ell + 2 + i\nu) = (\ell + 1 + i\nu)\Gamma(\ell + 1 + i\nu)$$

より $\arg \Gamma(\gamma + 1 + i\nu) = \arg(\ell + 1 + i\nu) + \arg \Gamma(\ell + 1 + i\nu)$ となるから

$$\delta_\kappa \approx -\arg \Gamma(\ell + 1 + i\nu)$$

3.2 一般のポテンシャル

位相の決定

r が十分大きい場合に $V(r) = -Ze^2/r$ となる一般のポテンシャル $V(r)$ に対する (3.1) を数値的に解く。 $V(r) = -Ze^2/r$ となる領域では, (3.1) の正則解 $G(r)$ は純粋なクーロンポテンシャルの解 $g_r(r)$, $g_i(r)$ を用いて

$$G(r) = C g_r(r) + D g_i(r)$$

と書ける。 $r \rightarrow \infty$ では $u(x) = x + \nu \log 2x - \pi\ell/2$ とすると

$$\begin{aligned} G(r) &\rightarrow C \sin(u(x) + \delta_\kappa) + D \sin(u(x) + \delta'_\kappa) \\ &= (C \cos \delta_\kappa + D \cos \delta'_\kappa) \sin u(x) + (C \sin \delta_\kappa + D \sin \delta'_\kappa) \cos u(x) \end{aligned}$$

であるから

$$C \sin \delta_\kappa + D \sin \delta'_\kappa = A \sin \phi_\kappa, \quad C \cos \delta_\kappa + D \cos \delta'_\kappa = A \cos \phi_\kappa$$

とおくと

$$G(r) \rightarrow A \sin(u(x) + \phi_\kappa)$$

となるから, ϕ_κ が $V(r)$ による phase shift を表す。 ϕ_κ は

$$\tan \phi_\kappa = \frac{C/D \sin \delta_\kappa + \sin \delta'_\kappa}{C/D \cos \delta_\kappa + \cos \delta'_\kappa},$$

あるいは

$$\tan(\phi_\kappa - \delta_\kappa) = \frac{\cos \delta_\kappa \tan \phi - \sin \delta_\kappa}{\cos \delta_\kappa + \sin \delta_\kappa \tan \phi} = \frac{\sin(\delta'_\kappa - \delta_\kappa)}{C/D + \cos(\delta'_\kappa - \delta_\kappa)}$$

と表せるから, C/D が求まれば ϕ_κ が決まる。2点 $r = r_1, r = r_2$ における数値解を $G(1), G(2)$ とすると

$$G(1) = C g_r(1) + D g_i(1), \quad G(2) = C g_r(2) + D g_i(2)$$

これらの比をとれば

$$\frac{C}{D} = \frac{G(2) g_i(1) - G(1) g_i(2)}{G(1) g_r(2) - G(2) g_r(1)}$$

により C/D を決定できる。 r_1, r_2 が $V(r) = -Ze^2/r$ となる領域にあれば, C/D は r_1, r_2 に依存しない。

散乱振幅

非相対論の場合

$$f(\theta) = A(\theta) + B(\theta) \mathbf{n} \cdot \boldsymbol{\sigma}$$

ただし

$$A(\theta) = \frac{1}{2ik} \sum_{\ell=0} [(\ell+1)(e^{2i\phi_{\ell j=\ell+1/2}} - 1) + \ell(e^{2i\phi_{\ell j=\ell-1/2}} - 1)] P_\ell(\cos \theta)$$

$$B(\theta) = \frac{1}{2k} \sum_{\ell=0} (e^{2i\phi_{\ell j=\ell+1/2}} - e^{2i\phi_{\ell j=\ell-1/2}}) P_\ell^1(\cos \theta)$$

ここで

$$P_\ell^1(x) = \sqrt{1-x^2} \frac{dP}{dx}$$

である。したがって, 相対論の場合, $\phi_{\kappa=-\ell-1} = \phi_{-\ell-1}$ と書くことにすると

$$A(\theta) = \frac{1}{2ik} \sum_{\ell=0} [(\ell+1)(e^{2i\phi_{-\ell-1}} - 1) + \ell(e^{2i\phi_\ell} - 1)] P_\ell(\cos \theta)$$

$$= \frac{1}{2ik} \sum_{\ell=0} [(\ell+1)e^{2i\phi_{-\ell-1}} + \ell e^{2i\phi_\ell}] P_\ell(\cos \theta)$$

$$B(\theta) = \frac{1}{2k} \sum_{\ell=0} (e^{2i\phi_{-\ell-1}} - e^{2i\phi_\ell}) P_\ell^1(\cos \theta)$$

ここで Schiff (21.23)

$$\sum_{\ell=0} (2\ell+1) P_\ell(\cos \theta) = \delta(1 - \cos \theta)$$

を使った。

以下では $E \gg m$ であるとして $m = 0$ とする。この場合 (3.1) は

$$\frac{dg_\kappa}{dr} = -\frac{\kappa}{r} g_\kappa + (E - V(r)) f_\kappa, \quad \frac{df_\kappa}{dr} = \frac{\kappa}{r} f_\kappa - (E - V(r)) g_\kappa$$

となり

$$\kappa \rightarrow -\kappa, \quad g_\kappa \rightarrow g_{-\kappa}, \quad f_\kappa \rightarrow -f_{-\kappa}$$

の置き換えに対して不変であるから

$$\frac{f_\kappa}{g_\kappa} = -\frac{g_{-\kappa}}{f_{-\kappa}}$$

$r \rightarrow \infty$ での漸近形は

$$g_\kappa \rightarrow \sin\left(kr + 2 \log 2kr + \phi_\kappa - \pi \ell_\kappa / 2\right), \quad f_\kappa \rightarrow \cos\left(kr + 2 \log 2kr + \phi_\kappa - \pi \ell_\kappa / 2\right)$$

であるから

$$\tan\left(kr + 2 \log 2kr + \phi_\kappa - \pi \ell_\kappa / 2\right) = -\cot\left(kr + 2 \log 2kr + \phi_{-\kappa} - \pi \ell_{-\kappa} / 2\right)$$

つまり

$$\phi_\kappa - \pi \ell_\kappa / 2 = \phi_{-\kappa} - \pi \ell_{-\kappa} / 2 - \pi / 2 + n\pi, \quad \phi_\kappa = \phi_{-\kappa} + \frac{\pi}{2} (\ell_\kappa - \ell_{-\kappa} - 1) + n\pi$$

$\kappa > 0$ のとき $\ell_\kappa = \kappa$, $\ell_{-\kappa} = -\kappa - 1$ であるから

$$e^{2i\phi_\kappa} = e^{2i\phi_{-\kappa}}$$

となる。したがって

$$A(\theta) = \frac{1}{2ik} \sum_{\ell=0}^{\infty} [(\ell+1)e^{2i\phi_{\ell+1}} + \ell e^{2i\phi_\ell}] P_\ell(\cos \theta) \quad (3.12)$$

$$= \frac{1}{2ik} \sum_{\ell=1}^{\infty} \ell e^{2i\phi_\ell} (P_\ell(\cos \theta) + P_{\ell-1}(\cos \theta))$$

$$B(\theta) = \frac{1}{2k} \sum_{\ell=0}^{\infty} (e^{2i\phi_{\ell+1}} - e^{2i\phi_\ell}) P_\ell^1(\cos \theta) = \frac{1}{2k} \sum_{\ell=1}^{\infty} e^{2i\phi_\ell} (P_{\ell-1}^1(\cos \theta) - P_\ell^1(\cos \theta))$$

漸化式

$$P_{\ell-1}^1(\cos \theta) - P_\ell^1(\cos \theta) = -\ell (P_\ell(\cos \theta) + P_{\ell-1}(\cos \theta)) \tan \frac{\theta}{2}$$

より

$$B(\theta) = -i \tan \frac{\theta}{2} A(\theta)$$

となる。これから微分断面積は

$$\sigma(\theta) = |A(\theta)|^2 + |B(\theta)|^2 = \frac{|A(\theta)|^2}{\cos^2(\theta/2)}$$

で与えられる。

$\phi_\kappa = \delta_\kappa + \Delta\phi_\kappa$ とすると

$$A(\theta) = A_c(\theta) + \frac{1}{2ik} \sum_{\ell=0}^{\infty} \ell e^{2i\delta_\ell} (e^{2i\Delta\phi_\ell} - 1) (P_\ell + P_{\ell-1})$$

$$A_c(\theta) = \frac{1}{2ik} \sum_{\ell=0}^{\infty} \ell e^{2i\delta_\ell} (P_\ell + P_{\ell-1})$$

ℓ がある程度大きくなると $\Delta\phi_\ell \rightarrow 0$ になるから、第2項は有限項の和である。一方、純粋クーロン散乱の寄与は無限大の ℓ まで和をとる必要がある。非相対論の場合には、この無限級数和は

$$A_c(\theta) = \frac{\nu}{2k \sin^2(\theta/2)} \exp(i\nu \log \sin^2(\theta/2) + 2i \text{Arg} \Gamma(1 - i\nu))$$

と解析的に求められるが、相対論では求まらない。 $\nu = Z\alpha E/k = Z\alpha \rightarrow 0$ の極限では、相対論的 A_c は

$$A_c(\theta) = \frac{\nu \cos^2(\theta/2)}{2k \sin^2(\theta/2)} \exp(i\nu \log \sin^2(\theta/2) + 2i \text{Arg} \Gamma(1 - i\nu))$$

となり、断面積は Mott cross section

$$\sigma(\theta) = \frac{\nu^2 \cos^2(\theta/2)}{4k^2 \sin^4(\theta/2)}$$

になる。

3.3 原子核の電荷分布

Form factor を

$$F_1(q^2) + \frac{\mu}{2M} F_2(q^2) \mathbf{q} \cdot \boldsymbol{\gamma} = G_E(q^2) + \frac{\mu}{2M} F_2(q^2) \left(\frac{q^2}{2M} + \mathbf{q} \cdot \boldsymbol{\gamma} \right), \quad q^2 = \mathbf{q}^2$$

と分割し ($\tau = p, n$)

$$\begin{aligned} \rho_\tau(r) &= \int \frac{d^3q}{(2\pi)^3} \exp(-i\mathbf{q} \cdot \mathbf{r}) \langle 0 | \sum_k \exp(i\mathbf{q} \cdot \mathbf{r}_k) | 0 \rangle \\ &= \langle 0 | \sum_k \delta(\mathbf{r} - \mathbf{r}_k) | 0 \rangle = \sum_\alpha \frac{2j_\alpha + 1}{4\pi r^2} (G_\alpha^2 + F_\alpha^2) \\ W_\tau(r) &= \frac{\mu}{2M} \int \frac{d^3q}{(2\pi)^3} \exp(-i\mathbf{q} \cdot \mathbf{r}) \langle 0 | \sum_k \exp(i\mathbf{q} \cdot \mathbf{r}_k) \left(\frac{q^2}{2M} + \mathbf{q} \cdot \boldsymbol{\gamma}_k \right) | 0 \rangle \\ &= \frac{\mu}{2M} \left(-\frac{1}{2M} \nabla^2 \rho_B(r) + i \nabla \cdot \langle 0 | \sum_k \delta(\mathbf{r} - \mathbf{r}_k) \boldsymbol{\gamma}_k | 0 \rangle \right) \end{aligned}$$

を考える。ただし、波動関数は

$$\psi_{\alpha m} = \begin{pmatrix} i \frac{G_\alpha(r)}{r} \mathcal{Y}_{\ell j m} \\ \frac{F_\alpha(r)}{r} \frac{\boldsymbol{\sigma} \cdot \mathbf{r}}{r} \mathcal{Y}_{\ell j m} \end{pmatrix}, \quad \alpha = m \text{ 以外の量子数}$$

$$\nabla^2 \frac{G^2}{r^2} = \frac{1}{r} \frac{d^2}{dr^2} \frac{G^2}{r} = \frac{2}{r^2} \frac{d}{dr} \left(G \frac{dG}{dr} - \frac{G^2}{r} \right)$$

より

$$\nabla^2 \rho_B(r) = \sum_\alpha \frac{2j_\alpha + 1}{2\pi r^2} \frac{d}{dr} \left(G_\alpha \frac{dG_\alpha}{dr} - \frac{G_\alpha^2}{r} + F_\alpha \frac{dF_\alpha}{dr} - \frac{F_\alpha^2}{r} \right)$$

Dirac 方程式

$$\frac{dG}{dr} = -\frac{\kappa}{r} G + (\varepsilon - U_0(r) + M^*(r)) F, \quad \frac{dF}{dr} = \frac{\kappa}{r} F + (-\varepsilon + U_0(r) + M^*(r)) G$$

を使うと

$$\nabla^2 \rho_B(r) = \sum_{\alpha} \frac{2j_{\alpha} + 1}{2\pi r^2} \frac{d}{dr} \left(-\frac{\kappa_{\alpha} + 1}{r} G_{\alpha}^2 + \frac{\kappa_{\alpha} - 1}{r} F_{\alpha}^2 + 2M^* G_{\alpha} F_{\alpha} \right)$$

一方

$$\begin{aligned} i\nabla \cdot \langle 0 | \sum_k \delta(\mathbf{r} - \mathbf{r}_k) \boldsymbol{\gamma}_k | 0 \rangle &= \nabla \cdot \sum_{\alpha, m} \frac{G_{\alpha} F_{\alpha}}{r^2} \mathcal{Y}_{jm}^{\dagger} \frac{\boldsymbol{\sigma} \boldsymbol{\sigma} \cdot \mathbf{r} + \boldsymbol{\sigma} \cdot \mathbf{r} \boldsymbol{\sigma}}{r} \mathcal{Y}_{jm} \\ &= \nabla \cdot \frac{\mathbf{r}}{r} \sum_{\alpha} \frac{2j_{\alpha} + 1}{2\pi r^2} G_{\alpha} F_{\alpha} = \sum_{\alpha} \frac{2j_{\alpha} + 1}{2\pi r^2} \frac{d}{dr} G_{\alpha} F_{\alpha} \end{aligned}$$

以上から

$$W_{\tau}(r) = \frac{\mu}{M} \sum_{\alpha} \frac{2j_{\alpha} + 1}{4\pi r^2} \frac{d}{dr} \left(\frac{M - M^*}{M} G_{\alpha} F_{\alpha} + \frac{\kappa_{\alpha} + 1}{2Mr} G_{\alpha}^2 - \frac{\kappa_{\alpha} - 1}{2Mr} F_{\alpha}^2 \right)$$

$M^* = M$ とし F^2 を無視すると

$$\begin{aligned} W_{\tau}(r) &\approx \frac{\mu}{2M^2 r^2} \frac{d}{dr} r \sum_{\alpha} \frac{2j_{\alpha} + 1}{4\pi r^2} (\kappa_{\alpha} + 1) G_{\alpha}^2 \\ &\approx -\frac{1}{r^2} \frac{d}{dr} r \langle 0 | \frac{\mu}{2M^2} \sum_k \delta(\mathbf{r} - \mathbf{r}_k) \boldsymbol{\sigma}_k \cdot \boldsymbol{\ell}_k | 0 \rangle \end{aligned}$$

となり, Negele の結果になる。

$\rho_{\tau}(r)$, $W_{\tau}(r)$ を使うと

$$\begin{aligned} \langle 0 | \hat{\rho}(q) | 0 \rangle &= \langle 0 | \sum_k \exp(i\mathbf{q} \cdot \mathbf{r}_k) \left(F_1(q^2) + \frac{\mu}{2M} F_2(q^2) \mathbf{q} \cdot \boldsymbol{\gamma}_k \right) | 0 \rangle \\ &= \int d^3x \exp(i\mathbf{q} \cdot \mathbf{x}) \left(G_E(q) \rho_{\tau}(x) + F_2(q) W_{\tau}(x) \right) \\ &= \int d^3x d^3y \exp(i\mathbf{q} \cdot (\mathbf{x} + \mathbf{y})) \left(G_E(y) \rho_{\tau}(x) + F_2(y) W_{\tau}(x) \right) \end{aligned}$$

ここで

$$F(r) = \int \frac{d^3q}{(2\pi)^3} \exp(-i\mathbf{q} \cdot \mathbf{r}) F(q)$$

したがって

$$\begin{aligned} \rho_c(r) &= \int \frac{d^3q}{(2\pi)^3} \exp(-i\mathbf{q} \cdot \mathbf{r}) \langle 0 | \hat{\rho}(q) | 0 \rangle \\ &= \int d^3x d^3y \delta(\mathbf{r} - \mathbf{x} - \mathbf{y}) \left(G_E(y) \rho_{\tau}(x) + F_2(y) W_{\tau}(x) \right) \\ &= \frac{2\pi}{r} \int_0^{\infty} dx x \int_{|r-x|}^{r+x} dy y \left(G_E(y) \rho_{\tau}(x) + F_2(y) W_{\tau}(x) \right) \\ &= \frac{1}{r} \int_0^{\infty} dx x \left[\left(g(|r-x|) - g(r+x) \right) \rho_{\tau}(x) + \left(f_2(|r-x|) - f_2(r+x) \right) W_{\tau}(x) \right] \\ &= \rho_{c\tau}(r) + W_{c\tau}(r) \end{aligned}$$

ただし, g , f_2 は 1 次元のフーリエ変換

$$g(x) = \frac{1}{2\pi} \int_{-\infty}^{\infty} dq e^{iqx} G_E(q), \quad f_2(x) = \frac{1}{2\pi} \int_{-\infty}^{\infty} dq e^{iqx} F_2(q)$$

3.4 Nucleon form factor

D. H. Lu *et al.*, Phys. Rev. **C57** (1998) 2628, nucl-th/9706019 で引用の実験データから

$$G_{Ep} = G_p = \frac{1}{(1 + r_p^2 q^2/12)^2}, \quad G_{Mp} = (1 + \mu_p)G_p, \quad G_{Mn} = \mu_n G_p$$

としてよい。ただし

$$\mu_p = 1.793, \quad \mu_n = -1.913, \quad r_p = \langle r^2 \rangle^{1/2} = 0.81 \text{ fm}$$

一方

$$G_n = G_{En} = \frac{1}{(1 + r_+^2 q^2/12)^2} - \frac{1}{(1 + r_-^2 q^2/12)^2}, \quad r_{\pm}^2 = r_n^2 \mp 0.06 \text{ fm}^2$$

とすると、実験データから $0.8 \text{ fm} < r_n < 1.0 \text{ fm}$ (最後の図)

$$F_1 = \frac{G_E + q^2/4M^2 G_M}{1 + q^2/4M^2}, \quad \mu F_2 = \frac{G_M - G_E}{1 + q^2/4M^2}$$

から

$$F_{2p} = \frac{G_p}{1 + q^2/4M^2}, \quad F_{2n} = \frac{G_p - G_n/\mu_n}{1 + q^2/4M^2}$$

$x \geq 0$ のとき

$$\begin{aligned} \frac{1}{2\pi} \int_{-\infty}^{\infty} dq \frac{e^{iqx}}{(1 + q^2/\lambda^2)^2} &= \frac{1}{4} \lambda (1 + \lambda x) e^{-\lambda x} \\ \frac{1}{2\pi} \int_{-\infty}^{\infty} dq \frac{e^{iqx}}{(1 + q^2/4M^2)(1 + q^2/\lambda^2)^2} &= \frac{\lambda M^2}{4M^2 - \lambda^2} \left[\left(1 + \lambda x - \frac{2\lambda^2}{4M^2 - \lambda^2} \right) e^{-\lambda x} \right. \\ &\quad \left. + \frac{\lambda}{M} \frac{\lambda^2}{4M^2 - \lambda^2} e^{-2Mx} \right] \end{aligned}$$

4 電子散乱と応答関数

T. DeForest and J. D. Walecka, Adv. Phys. **15** (1966) 1

B. Frois and C. N. Papanicolas, Ann. Rev. Nucl. Part. Sci. **37** (1987) 133

S. Boffi, C. Giusti and F. D. Pacati, Phys. Rep. **226** (1993) 1

4.1 遷移確率

電磁相互作用は弱いので1光子交換による電子散乱を考える。入射電子のエネルギー、運動量を ϵ_1, \mathbf{p}_1 , 散乱電子のエネルギー、運動量を ϵ_2, \mathbf{p}_2 とすると

$$\text{エネルギー } q_0 = \epsilon_1 - \epsilon_2, \quad \text{運動量 } \mathbf{q} = \mathbf{p}_1 - \mathbf{p}_2$$

の仮想光子 γ が原子核と相互作用する。光子の場 $A_\mu(x)$ を量子化してもよいが、ここでは $A_\mu(x)$ を原子核が作る電磁ポテンシャルとし、このポテンシャルで電子が散乱すると考える。実光子 (real photon) の場合 $q_0 = q$ であるが、電子散乱では ($\epsilon = \sqrt{m_e^2 + p^2}$, $m_e =$ 電子の質量)

$$q_\mu^2 = (\epsilon_1 - \epsilon_2)^2 - (\mathbf{p}_1 - \mathbf{p}_2)^2 = 2(m_e^2 + \mathbf{p}_1 \cdot \mathbf{p}_2 - \epsilon_1 \epsilon_2) \leq 2(m_e^2 + p_1 p_2 - \epsilon_1 \epsilon_2)$$

ところで

$$(m_e^2 + p_1 p_2)^2 - \epsilon_1^2 \epsilon_2^2 = -m_e^2 (p_1 - p_2)^2 \leq 0$$

であるから $q_\mu^2 \leq 0$ になる。電子散乱では $q_0 \leq q$ であれば q_0 と \mathbf{q} を独立に変えることができる。これは原子核を調べる上で大きな利点である。例えば、(4.17) で示すように、弾性散乱 ($q_0 = 0$) において \mathbf{q} を変化させることで原子核の電荷分布 (のフーリエ変換) が実験的に求まる。

電子の場を $\psi(x)$, 電荷を $-e$ とすると、原子核と電子の相互作用は

$$V(x_0) = -e \int d^3x j^\mu(x) A_\mu(x), \quad j^\mu(x) = \bar{\psi}(x) \gamma^\mu \psi(x), \quad x^\mu = (x^0, \mathbf{x})$$

である。時刻 $x_0 = -\infty$ での電子の初期状態を $|\mathbf{p}_1 \sigma_1\rangle$, $x_0 = +\infty$ での終状態を $|\mathbf{p}_2 \sigma_2\rangle$ とする。 $\sigma = \pm 1$ は電子のスピン状態を表す。一方、原子核の初期状態、終状態をそれぞれ $|0\rangle, |n\rangle$ とする。 V を時間に依存する1次の摂動で扱おうと、 $|\mathbf{p}_1 \sigma_1, 0\rangle \rightarrow |\mathbf{p}_2 \sigma_2, n\rangle$ の遷移確率は $|w|^2$

$$w = \int_{-\infty}^{\infty} dx_0 \langle \mathbf{p}_2 \sigma_2, n | V(x_0) | \mathbf{p}_1 \sigma_1, 0 \rangle = -e \int d^4x \langle \mathbf{p}_2 \sigma_2 | j^\mu(x) | \mathbf{p}_1 \sigma_1 \rangle \langle n | A_\mu(x) | 0 \rangle \quad (4.1)$$

である。電子の場 $\psi(x)$ は

$$\psi(x) = \sum_{\sigma} \int \frac{d^3p}{(2\pi)^{3/2}} \sqrt{\frac{m_e}{\epsilon}} \left(a(\mathbf{p}, \sigma) u(\mathbf{p}, \sigma) e^{-ip \cdot x} + b^\dagger(\mathbf{p}, \sigma) v(\mathbf{p}, \sigma) e^{ip \cdot x} \right), \quad p \cdot x = p^\mu x_\mu \quad (4.2)$$

と展開できる。ここで a^\dagger は電子の生成演算子、 b^\dagger は陽電子 (反電子) の生成演算子である。 u と v は4成分スピノールであり、規格化は

$$\bar{u}(\mathbf{p}, \sigma) u(\mathbf{p}, \sigma') = \delta_{\sigma\sigma'}, \quad \bar{v}(\mathbf{p}, \sigma) v(\mathbf{p}, \sigma') = -\delta_{\sigma\sigma'}$$

である。 ψ の展開式を用いると ($b b^\dagger$ は無視, あるいは, 正規積 $: j^\mu(x) :$ を考える)

$$\begin{aligned} \langle \mathbf{p}_2 \sigma_2 | j^\mu(x) | \mathbf{p}_1 \sigma_1 \rangle &= \sum_{\sigma\sigma'} \int \frac{d^3p d^3p'}{(2\pi)^3} \frac{m_e}{\sqrt{\epsilon\epsilon'}} \bar{u}(\mathbf{p}, \sigma) \gamma^\mu u(\mathbf{p}', \sigma') e^{i(p-p') \cdot x} \\ &\quad \times \langle \text{vac} | a(\mathbf{p}_2, \sigma_2) a^\dagger(\mathbf{p}, \sigma) a(\mathbf{p}', \sigma') a^\dagger(\mathbf{p}_1, \sigma_1) | \text{vac} \rangle \end{aligned}$$

ただし $|\text{vac}\rangle$ は真空を表す。

$$\langle \text{vac} | a(\mathbf{p}_2, \sigma_2) a^\dagger(\mathbf{p}, \sigma) a(\mathbf{p}', \sigma') a^\dagger(\mathbf{p}_1, \sigma_1) | \text{vac} \rangle = \delta(\mathbf{p}_2 - \mathbf{p}) \delta_{\sigma_2 \sigma} \delta(\mathbf{p}_1 - \mathbf{p}') \delta_{\sigma_1 \sigma'}$$

であるから

$$\langle \mathbf{p}_2 \sigma_2 | j^\mu(x) | \mathbf{p}_1 \sigma_1 \rangle = \frac{\Gamma^\mu(1, 2)}{(2\pi)^3} e^{i(\mathbf{p}_2 - \mathbf{p}_1) \cdot x}, \quad \Gamma^\mu(1, 2) = \frac{m_e}{\sqrt{\epsilon_1 \epsilon_2}} \bar{u}(\mathbf{p}_2, \sigma_2) \gamma^\mu u(\mathbf{p}_1, \sigma_1) \quad (4.3)$$

になる。(4.3) を (4.1) に代入すると

$$w = -\frac{e}{(2\pi)^3} \Gamma^\mu(1, 2) \int d^4x e^{-iq \cdot x} \langle n | A_\mu(x) | 0 \rangle, \quad q^\mu = p_1^\mu - p_2^\mu$$

原子核の電磁カレントを $eJ^\mu(x)$ とすると Maxwell 方程式は $\square A^\mu(x) = eJ^\mu(x)$ である。この両辺に $\exp(-iq \cdot x)$ をかけ積分すると

$$\int d^4x e^{-iq \cdot x} \square A^\mu(x) = -q_\mu^2 \int d^4x e^{-iq \cdot x} A_\mu(x) = e \int d^4x e^{-iq \cdot x} J^\mu(x)$$

であるから

$$w = \frac{4\pi\alpha}{(2\pi)^3} \frac{\Gamma^\mu(1, 2)}{q_\mu^2} \int d^4x e^{-iq \cdot x} \langle n | J_\mu(x) | 0 \rangle, \quad \alpha = \frac{e^2}{4\pi} = \text{微細構造定数}$$

になる。 H を原子核のハミルトニアンとする：

$$H|0\rangle = E_0|0\rangle, \quad H|n\rangle = E_n|n\rangle$$

$J_\mu(x) = J_\mu(0, \mathbf{x})$ とすると、ハイゼンベルクの運動方程式から

$$J_\mu(x) = J_\mu(x_0, \mathbf{x}) = \exp(iHx_0) J_\mu(\mathbf{x}) \exp(-iHx_0)$$

である。したがって

$$\langle n | J_\mu(x) | 0 \rangle = e^{i\omega_n x_0} \langle n | J_\mu(\mathbf{x}) | 0 \rangle, \quad \omega_n = E_n - E_0$$

になるから

$$\begin{aligned} w &= \frac{\alpha}{2\pi^2} \frac{\Gamma^\mu(1, 2)}{q_\mu^2} \int d^4x e^{i\omega_n x_0 - iq \cdot x} \langle n | J_\mu(\mathbf{x}) | 0 \rangle \\ &= \frac{\alpha}{2\pi^2} \frac{\Gamma^\mu(1, 2)}{q_\mu^2} \int_{-\infty}^{\infty} dx_0 e^{i(\omega_n - q_0)x_0} \langle n | J_\mu(\mathbf{q}) | 0 \rangle \\ &= \frac{\alpha}{\pi} \frac{\Gamma^\mu(1, 2)}{q_\mu^2} \delta(\omega_n - q_0) \langle n | J_\mu(\mathbf{q}) | 0 \rangle, \quad \text{ただし } J_\mu(\mathbf{q}) = \int d^3x \exp(i\mathbf{q} \cdot \mathbf{x}) J_\mu(\mathbf{x}) \end{aligned}$$

$\delta(\omega_n - q_0) = \delta(E_n + \epsilon_2 - E_0 - \epsilon_1)$ はエネルギー保存則である。遷移確率は

$$|w|^2 = \frac{\alpha^2}{\pi^2 q_\mu^4} \left| \Gamma^\mu(1, 2) \langle n | J_\mu(\mathbf{q}) | 0 \rangle \right|^2 \delta^2(\omega_n - q_0)$$

デルタ関数の2乗は $T \rightarrow \infty$ として

$$\delta^2(\omega_n - q_0) = \delta(\omega_n - q_0) \delta(0) = \delta(\omega_n - q_0) \int_{-T/2}^{T/2} \frac{dx_0}{2\pi} = \delta(\omega_n - q_0) \frac{T}{2\pi}$$

と見なせるから、単位時間あたりの遷移確率は

$$\frac{|w|^2}{T} = \frac{\alpha^2}{2\pi^3 q_\mu^4} \left| \Gamma^\mu(1, 2) \langle n | J_\mu(\mathbf{q}) | 0 \rangle \right|^2 \delta(\omega_n - q_0)$$

になる。

4.2 微分断面積

入射電子が単位体積あたり N_1 個、標的に対して速さ v_1 で入射するとき、散乱電子が \mathbf{p}_2 近傍の微小領域 d^3p_2 に単位時間に散乱される個数を N_2 個とする。このとき

$$N_2 = N_1 v_1 d\sigma$$

で定義される $d\sigma$ が微分断面積である。電子の波動関数の規格化を周期的境界条件を用いて体積 V の箱で規格化する。体積 V に1つの電子が存在するから、 $N_1 = 1/V$ である。また、(4.2) で

$$\frac{1}{(2\pi)^{3/2}} \rightarrow \frac{1}{\sqrt{V}}$$

の置き換えをするから

$$\frac{|w|^2}{T} = \frac{(2\pi)^6}{V^2} \times \frac{\alpha^2}{2\pi^3 q_\mu^4} \left| \Gamma^\mu(1, 2) \langle n | J_\mu(\mathbf{q}) | 0 \rangle \right|^2 \delta(\omega_n - q_0)$$

\mathbf{p}_2 近傍の微小領域 d^3p_2 の状態数は $\frac{V}{(2\pi)^3} d^3p_2$ であるから $N_2 = \frac{|w|^2}{T} \frac{V}{(2\pi)^3} d^3p_2$ になる。したがって

$$d\sigma(\mathbf{p}_1\sigma_1, 0 \rightarrow \mathbf{p}_2\sigma_2, n) = \frac{N_2}{N_1 v_1} = \frac{4\alpha^2}{v_1 q_\mu^4} \left| \Gamma^\mu(1, 2) \langle n | J_\mu(\mathbf{q}) | 0 \rangle \right|^2 \delta(\omega_n - q_0) d^3p_2 \quad (4.4)$$

あるいは

$$d^3p_2 = dp_2 p_2^2 d\Omega = p_2 \epsilon_2 d\epsilon_2 d\Omega, \quad \epsilon_2 = \sqrt{m_e^2 + p_2^2}$$

及び $v_1 = p_1/\epsilon_1$ より二重微分断面積は

$$\frac{d^2\sigma(\mathbf{p}_1\sigma_1, 0 \rightarrow \mathbf{p}_2\sigma_2, n)}{d\epsilon_2 d\Omega} = \frac{4\alpha^2 \epsilon_1 \epsilon_2 p_2}{q_\mu^4 p_1} \left| \Gamma^\mu(1, 2) \langle n | J_\mu(\mathbf{q}) | 0 \rangle \right|^2 \delta(\omega_n - q_0)$$

である。

入射電子のスピン σ_1 はランダム (偏極していない) で散乱電子のスピン σ_2 を測定しない場合、 σ_1 について平均し σ_2 については和をとるから

$$\frac{d^2\sigma(\mathbf{p}_1, 0 \rightarrow \mathbf{p}_2, n)}{d\epsilon_2 d\Omega} = \frac{1}{2} \sum_{\sigma_1 \sigma_2} \frac{d^2\sigma(\mathbf{p}_1\sigma_1, 0 \rightarrow \mathbf{p}_2\sigma_2, n)}{d\epsilon_2 d\Omega} = \frac{2\alpha^2 p_2}{q_\mu^4 p_1} I \delta(\omega_n - q_0) \quad (4.5)$$

ただし

$$I = \epsilon_1 \epsilon_2 \sum_{\sigma_1 \sigma_2} \left| \Gamma^\mu(1, 2) \langle n | J_\mu(\mathbf{q}) | 0 \rangle \right|^2 = m_e^2 \sum_{\sigma_1 \sigma_2} \left| \bar{u}_2 \gamma^\mu u_1 K_\mu \right|^2$$

ここで、簡単のため

$$u_1 = u(\mathbf{p}_1, \sigma_1), \quad u_2 = u(\mathbf{p}_2, \sigma_2), \quad K_\mu = \langle n | J_\mu(\mathbf{q}) | 0 \rangle$$

とした。

$$(\bar{u}_2 \gamma^\mu u_1)^* = u_1^\dagger (\gamma^\mu)^\dagger \gamma^0 u_2 = \bar{u}_1 \gamma^\mu u_2, \quad \Lambda(\mathbf{p}) = \sum_\sigma u(\mathbf{p}, \sigma) \bar{u}(\mathbf{p}, \sigma) = \frac{\not{p} + m_e}{2m_e}$$

を使うと

$$\begin{aligned} I &= m_e^2 \sum_{\sigma_1 \sigma_2} \bar{u}_2 \gamma^\mu u_1 \bar{u}_1 \gamma^\nu u_2 K_\mu K_\nu^* = m_e^2 \text{Tr} \left(\gamma^\mu \Lambda(\mathbf{p}_1) \gamma^\nu \Lambda(\mathbf{p}_2) \right) K_\mu K_\nu^* \\ &= \frac{1}{4} \text{Tr} \left(\gamma^\mu (\not{p}_1 + m_e) \gamma^\nu (\not{p}_2 + m_e) \right) K_\mu K_\nu^* \\ &= \left(g^{\mu\nu} (m_e^2 - p_1 \cdot p_2) + p_1^\mu p_2^\nu + p_1^\nu p_2^\mu \right) K_\mu K_\nu^* \end{aligned} \quad (4.6)$$

更に $Q^\mu = (p_1^\mu + p_2^\mu)/2$ とすると

$$q_\mu^2 = (p_2 - p_1)_\mu^2 = p_{2\mu}^2 + p_{1\mu}^2 - 2p_1 \cdot p_2 = 2m_e^2 - 2p_1 \cdot p_2, \quad p_1^\mu p_2^\nu + p_1^\nu p_2^\mu = 2Q^\mu Q^\nu - \frac{1}{2}q^\mu q^\nu$$

であるから

$$I = \frac{q_\mu^2}{2} K \cdot K^* + 2Q \cdot K Q \cdot K^* - \frac{1}{2} q \cdot K q \cdot K^*$$

になる。カレント保存則 $\partial^\mu J_\mu(x) = 0$ は

$$\begin{aligned} \partial^\mu J_\mu(x) &= \frac{\partial}{\partial x_0} \exp(iHx_0) J_0(\mathbf{x}) \exp(-iHx_0) + \exp(iHx_0) \nabla \cdot \mathbf{J}(\mathbf{x}) \exp(-iHx_0) \\ &= \exp(iHx_0) \left(i(HJ_0(\mathbf{x}) - J_0(\mathbf{x})H) + \nabla \cdot \mathbf{J}(\mathbf{x}) \right) \exp(-iHx_0) \end{aligned}$$

より

$$HJ_0(\mathbf{x}) - J_0(\mathbf{x})H - i\nabla \cdot \mathbf{J}(\mathbf{x}) = 0$$

である。これから

$$(E_n - E_0) \langle n | J_0(\mathbf{x}) | 0 \rangle - i\nabla \cdot \langle n | \mathbf{J}(\mathbf{x}) | 0 \rangle = 0$$

$\exp(i\mathbf{q} \cdot \mathbf{x})$ をかけて積分し $E_n - E_0 = \omega_n = q_0$ を使うと

$$q^\mu \langle n | J_\mu(\mathbf{q}) | 0 \rangle = 0, \quad \text{つまり} \quad q \cdot K = 0$$

である。したがって $I = \frac{q_\mu^2}{2} K \cdot K^* + 2Q \cdot K Q \cdot K^*$ になるから、これを (4.5) に代入すれば

$$\frac{d^2 \sigma(\mathbf{p}_1, 0 \rightarrow \mathbf{p}_2, n)}{d\epsilon_2 d\Omega} = \frac{2\alpha^2 p_2}{q_\mu^4 p_1} \left(\frac{q_\mu^2}{2} K \cdot K^* + 2Q \cdot K Q \cdot K^* \right) \delta(\omega_n - q_0) \quad (4.7)$$

である。

4.3 縦方向と横方向の分離

\mathbf{q} は運動量移行 (電子から原子核に移行する運動量) である。 $\mathbf{J}(\mathbf{q})$ を \mathbf{q} の方向 (縦方向) と \mathbf{q} に垂直な方向 (横方向) に分ける。 $\mathbf{e}_q = \mathbf{q}/q$ とすると

$$\mathbf{J}(\mathbf{q}) = \mathbf{e}_q J_L(\mathbf{q}) + \mathbf{J}_T(\mathbf{q}), \quad J_L = \mathbf{e}_q \cdot \mathbf{J}, \quad \mathbf{J}_T = \mathbf{e}_q \times (\mathbf{J} \times \mathbf{e}_q)$$

これに対応して

$$\mathbf{K} = \mathbf{e}_q K_L + \mathbf{K}_T$$

である。カレント保存 $q \cdot K = q_0 K_0 - \mathbf{q} \cdot \mathbf{K} = q_0 K_0 - q K_L = 0$ より $K_L = q_0 K_0 / q$ になるから

$$K \cdot K^* = |K_0|^2 - |K_L|^2 - |\mathbf{K}_T|^2 = -\frac{q_\mu^2}{q^2} |K_0|^2 - |\mathbf{K}_T|^2$$

$$Q \cdot K = Q_0 K_0 - \mathbf{Q} \cdot \mathbf{e}_q K_L - \mathbf{Q} \cdot \mathbf{K}_T = \frac{Q_0 q^2 - q_0 \mathbf{Q} \cdot \mathbf{q}}{q^2} K_0 - \mathbf{Q} \cdot \mathbf{K}_T = -\frac{Q_0 q_\mu^2}{q^2} K_0 - \mathbf{Q} \cdot \mathbf{K}_T$$

$Q \cdot K$ の最後では

$$Q \cdot q = \frac{(p_1 + p_2) \cdot (p_1 - p_2)}{2} = \frac{p_{1\mu}^2 - p_{2\mu}^2}{2} = \frac{m_e^2 - m_e^2}{2} = 0, \quad \text{つまり} \quad \mathbf{Q} \cdot \mathbf{q} = Q_0 q_0$$

を使った。したがって

$$\begin{aligned} \frac{q_\mu^2}{2} K \cdot K^* + 2Q \cdot K Q \cdot K^* &= \frac{4Q_0^2 - q^2}{2} \left(\frac{q_\mu^2}{q^2} \right)^2 |K_0|^2 - \frac{q_\mu^2}{2} |\mathbf{K}_T|^2 + 2Q \cdot \mathbf{K}_T Q \cdot \mathbf{K}_T^* \\ &\quad + \frac{Q_0 q_\mu^2}{q^2} (K_0 Q \cdot \mathbf{K}_T^* + K_0^* Q \cdot \mathbf{K}_T) \end{aligned} \quad (4.8)$$

\mathbf{q} に直交する方向は2つある。 \mathbf{q} の方向が z 軸の場合

$$\mathbf{e}_{\pm 1} = \mp \frac{\mathbf{e}_x \pm i\mathbf{e}_y}{\sqrt{2}}, \quad \mathbf{e}_\lambda^* \cdot \mathbf{e}_{\lambda'} = \delta_{\lambda\lambda'}$$

とすると

$$\mathbf{K}_T = \mathbf{e}_x K_x + \mathbf{e}_y K_y = \sum_{\lambda=\pm 1} \mathbf{e}_\lambda^* K_\lambda, \quad K_{\pm 1} = \mathbf{e}_{\pm 1} \cdot \mathbf{K}_T$$

である。散乱前には静止していた原子核は、散乱後は運動量保存のため静止しない。しかし、原子核は電子に比べれば非常に重いので散乱後も静止しているとし、recoil の効果を無視してもよい近似である。この場合、散乱前後で、原子核の状態を角運動量の固有状態で指定できる。 $|0\rangle = |I_0 M_0\rangle$, $|n\rangle = |I_n M_n\rangle$ とする。 I は角運動量の大きさ、 M は角運動量の z 成分の固有値である。 J_λ ($\lambda = 0, \pm 1$) は \mathbf{q} 方向の角運動量成分の固有値を λ だけ変えるから、 $\lambda = \pm 1$ のとき $K_0 K_\lambda^* \neq 0$ になる遷移は存在しない。したがって (4.8) の右辺の最後の2項は0になる。また

$$\sum_{M_0 M_n} K_\lambda K_{\lambda'}^* = \delta_{\lambda\lambda'} \mathcal{K}, \quad \mathcal{K} = \sum_{M_0 M_n} |K_\lambda|^2 = \lambda \text{ に依存しない} \quad (4.9)$$

が成り立つ。これから

$$\sum_{M_0 M_n} Q \cdot \mathbf{K}_T Q \cdot \mathbf{K}_T^* = (|Q_+|^2 + |Q_-|^2) \mathcal{K} = \frac{Q^2 - Q_z^2}{2} \sum_{M_0 M_n} |\mathbf{K}_T|^2$$

したがって

$$\sum_{M_0 M_n} \left(\frac{q_\mu^2}{2} K \cdot K^* + 2Q \cdot K Q \cdot K^* \right) = V_L \sum_{M_0 M_n} |K_0|^2 + V_T \sum_{M_0 M_n} |\mathbf{K}_T|^2 \quad (4.10)$$

ただし

$$V_L = \frac{4Q_0^2 - q^2}{2} \left(\frac{q_\mu^2}{q^2} \right)^2, \quad V_T = Q^2 - \frac{(Q \cdot \mathbf{q})^2}{q^2} - \frac{q_\mu^2}{2} = Q^2 - \frac{(Q_0 q_0)^2}{q^2} - \frac{q_\mu^2}{2} \quad (4.11)$$

始状態と終状態の M が不定の場合、電子のスピンと同様に、 M_0 については平均し M_n については和をとる。(4.7) と (4.10) から

$$\begin{aligned} \frac{d^2\sigma(\mathbf{p}_1, I_0 \rightarrow \mathbf{p}_2, I_n)}{d\epsilon_2 d\Omega} &= \frac{1}{2I_0 + 1} \frac{2\alpha^2 p_2}{q_\mu^4 p_1} \sum_{M_0 M_n} \left(\frac{q_\mu^2}{2} K \cdot K^* + 2Q \cdot K Q \cdot K^* \right) \delta(\omega_n - q_0) \\ &= \frac{1}{2I_0 + 1} \frac{2\alpha^2 p_2}{q_\mu^4 p_1} \sum_{M_0 M_n} \left(V_L \left| \langle n | J_0(\mathbf{q}) | 0 \rangle \right|^2 + V_T \left| \langle n | \mathbf{J}_T(\mathbf{q}) | 0 \rangle \right|^2 \right) \delta(\omega_n - q_0) \end{aligned}$$

になる。

反応の終状態で、特定の粒子だけの状態を指定し、そのほかは何でもよいとする。このような反応を inclusive reaction という。一方、終状態の全ての粒子の状態を指定する反応を exclusive reaction

という。電子散乱で、終状態では散乱電子の運動量のみを指定する inclusive reaction を考える。原子核の始状態が $I_0 = 0$ の基底状態の場合、微分断面積は上式から

$$\frac{d^2\sigma}{d\epsilon_2 d\Omega} = \frac{2\alpha^2 p_2}{q_\mu^4 p_1} \left(V_L R_L(q_0, q) + V_T R_T(q_0, q) \right)$$

ただし

$$R_L(q_0, q) = \sum_n \left| \langle n | J_0(\mathbf{q}) | 0 \rangle \right|^2 \delta(\omega_n - q_0), \quad R_T(q_0, q) = \sum_n \left| \langle n | \mathbf{J}_T(\mathbf{q}) | 0 \rangle \right|^2 \delta(\omega_n - q_0) \quad (4.12)$$

になる。 R_L を縦方向応答関数 (longitudinal response function), R_T を横方向応答関数 (transverse response function) という。和は全ての H の固有状態 $|n\rangle$ について行う。

原子核構造を調べる場合、電子のエネルギー ϵ は数百 MeV 程度である。これは $m_e = 0.511$ MeV に比べれば非常に大きい。このとき $\epsilon = \sqrt{m_e^2 + p^2} \approx p$ であるから、以下では $m_e = 0$ とする。電子の散乱角を θ とする。 $\mathbf{p}_1 \cdot \mathbf{p}_2 = p_1 p_2 \cos \theta$ である。

$$q_\mu^2 = (p_1 - p_2)^2 - (\mathbf{p}_1 - \mathbf{p}_2)^2 = -2p_1 p_2 (1 - \cos \theta) = -4p_1 p_2 \sin^2(\theta/2) \leq 0 \quad (4.13)$$

$$4Q_0^2 - q^2 = (p_1 + p_2)^2 - (\mathbf{p}_1 - \mathbf{p}_2)^2 = 2p_1 p_2 (1 + \cos \theta) = 4p_1 p_2 \cos^2(\theta/2) \quad (4.14)$$

$4Q_\mu^2 + q_\mu^2 = (p_1 + p_2)_\mu^2 + (p_1 - p_2)_\mu^2 = 4m_e^2 = 0$ より $Q^2 = Q_0^2 + q_\mu^2/4$ になるから

$$V_T = Q_0^2 + \frac{q_\mu^2}{4} - \frac{(Q_0 q_0)^2}{q^2} - \frac{q_\mu^2}{2} = -\frac{q_\mu^2}{4q^2} (4Q_0^2 - q^2) - \frac{q_\mu^2}{2} = \frac{4Q_0^2 - q^2}{2} \left(\frac{-q_\mu^2}{2q^2} + \tan^2 \frac{\theta}{2} \right)$$

したがって

$$\frac{d^2\sigma}{d\epsilon_2 d\Omega} = \sigma_M \left[\left(\frac{q_\mu^2}{q^2} \right)^2 R_L(q_0, q) + \left(\frac{-q_\mu^2}{2q^2} + \tan^2 \frac{\theta}{2} \right) R_T(q_0, q) \right]$$

ただし

$$\sigma_M = \frac{2\alpha^2 p_2}{q_\mu^4 p_1} \frac{4Q_0^2 - q^2}{2} = \left(\frac{\alpha \cos(\theta/2)}{2\epsilon_1 \sin^2(\theta/2)} \right)^2$$

である。

微分断面積から2つの応答関数を実験的に取り出すには、次のようにする。入射電子のエネルギー $|\mathbf{p}_1|$ を変化させて微分断面積を求めるとき

$$q_0 = p_1 - p_2, \quad q^2 = p_1^2 + p_2^2 - 2p_1 p_2 \cos \theta$$

が一定になる p_2, θ の散乱電子を測定する。このとき、様々な θ に対して

$$\frac{1}{\sigma_M} \frac{d^2\sigma}{d\epsilon_2 d\Omega} = \left[\left(\frac{q_\mu^2}{q^2} \right)^2 R_L(q_0, q) + \frac{-q_\mu^2}{2q^2} R_T(q_0, q) \right] + R_T(q_0, q) \tan^2 \frac{\theta}{2} \quad (4.15)$$

を $\tan^2(\theta/2)$ の関数としてプロットすると直線になる (Rosenbluth plot)。この直線の傾きから $R_T(q_0, q)$ が実験的に求まる。また、縦軸との交点から $R_L(q_0, q)$ も決定できる。

原子核の終状態を基底状態に限定した弾性散乱の場合

$$R_L(q_0, q) = \left| \langle 0 | J_0(\mathbf{q}) | 0 \rangle \right|^2 \delta(q_0), \quad R_T(q_0, q) = \left| \langle 0 | \mathbf{J}_T(\mathbf{q}) | 0 \rangle \right|^2 \delta(q_0) \quad (4.16)$$

J_T はパリティを変えるから $R_T = 0$ である。これから

$$\frac{1}{\sigma_M} \frac{d^2\sigma}{d\epsilon_2 d\Omega} = \left| \langle 0 | J_0(\mathbf{q}) | 0 \rangle \right|^2 \delta(q_0) \quad (4.17)$$

になり, 原子核の電荷分布 $\langle 0 | J_0(\mathbf{x}) | 0 \rangle$ のフーリエ変換が得られる。点電荷の場合 $\langle 0 | J_0(\mathbf{x}) | 0 \rangle = \delta(\mathbf{x})$ であるから $\langle 0 | J_0(\mathbf{q}) | 0 \rangle = 1$ になる。 σ_M は点電荷による微分断面積 (モット断面積) である。

4.4 核子の電磁的形状因子

電子-核子散乱を考える。電子の場合, 電磁カレントの行列要素は (4.3) より

$$\langle \mathbf{p}_2 \sigma_2 | j^\mu(x) | \mathbf{p}_1 \sigma_1 \rangle_{el} = \frac{1}{(2\pi)^3} \frac{m_e}{\sqrt{\epsilon_1 \epsilon_2}} \bar{u}(\mathbf{p}_2, \sigma_2) \gamma^\mu u(\mathbf{p}_1, \sigma_1) e^{i(p_2 - p_1) \cdot x}$$

である。核子は点状の電子とは異なり電磁的な広がりを持つから, 行列要素は上式のようにはならない。核子の電磁カレントの行列要素 $\langle \mathbf{k}_2 \sigma_2 | J^\mu(x) | \mathbf{k}_1 \sigma_1 \rangle$ は k_1^μ, k_2^μ の関数で 4 元ベクトルであるから, 最も一般的には

$$\langle \mathbf{k}_2 \sigma_2 | J^\mu(x) | \mathbf{k}_1 \sigma_1 \rangle = \frac{1}{(2\pi)^3} \frac{M}{\sqrt{E_1 E_2}} \bar{u}(\mathbf{k}_2, \sigma_2) \Gamma^\mu(k_1, k_2) u(\mathbf{k}_1, \sigma_1) e^{iq \cdot x}$$

ただし

$$\Gamma^\mu(k_1, k_2) = k_1^\mu f_1(q_\mu^2) + k_2^\mu f_2(q_\mu^2) + \gamma^\mu f_3(q_\mu^2), \quad q^\mu = (k_2 - k_1)^\mu$$

とおける。ここで u は核子のスピノール, $k^0 = E = \sqrt{M^2 + \mathbf{k}^2}$ である。 k_1, k_2 に依存するスカラー量は q_μ^2 以外にも $k_\mu^2, k_1 \cdot k_2$ があるが, $k_\mu^2 = M^2 = \text{定数}$, $k_1 \cdot k_2 = M^2 - q_\mu^2/2$ であるから f_k は q_μ^2 の関数である。カレント保存則より

$$\begin{aligned} \partial_\mu \langle \mathbf{k}_2 \sigma_2 | J^\mu(x) | \mathbf{k}_1 \sigma_1 \rangle &= \frac{1}{(2\pi)^3} \frac{M}{\sqrt{E_1 E_2}} \bar{u}(\mathbf{k}_2, \sigma_2) q \cdot \Gamma u(\mathbf{k}_1, \sigma_1) e^{iq \cdot x} \\ &= \frac{1}{(2\pi)^3} \frac{M}{\sqrt{E_1 E_2}} \bar{u}(\mathbf{k}_2, \sigma_2) (q \cdot k_1 f_1 + q \cdot k_2 f_2) u(\mathbf{k}_1, \sigma_1) e^{iq \cdot x} = 0 \end{aligned}$$

でなければならないから

$$q \cdot k_1 f_1 + q \cdot k_2 f_2 = (k_1 \cdot k_2 - M^2) (f_1 - f_2) = 0$$

したがって $f_1 = f_2$ である。Gordon 分解

$$2M \bar{u}(\mathbf{k}_2, \sigma_2) \gamma^\mu u(\mathbf{k}_1, \sigma_1) = \bar{u}(\mathbf{k}_2, \sigma_2) \left((k_1 + k_2)^\mu + i\sigma^{\mu\nu} (k_2 - k_1)_\nu \right) u(\mathbf{k}_1, \sigma_1)$$

を使うと

$$\begin{aligned} \bar{u}(\mathbf{k}_2, \sigma_2) \Gamma^\mu(k_1, k_2) u(\mathbf{k}_1, \sigma_1) &= \bar{u}(\mathbf{k}_2, \sigma_2) \left((k_1 + k_2)^\mu f_1 + \gamma^\mu f_3 \right) u(\mathbf{k}_1, \sigma_1) \\ &= \bar{u}(\mathbf{k}_2, \sigma_2) \left((2M f_1 + f_3) \gamma^\mu - i f_1 \sigma^{\mu\nu} q_\nu \right) u(\mathbf{k}_1, \sigma_1) \end{aligned}$$

と表せる。 $F_1 = 2M f_1 + f_3, F_2 = -2M f_1$ と置き直すと

$$\langle \mathbf{k}_2 \sigma_2 | J^\mu(x) | \mathbf{k}_1 \sigma_1 \rangle = \frac{1}{(2\pi)^3} \frac{M}{\sqrt{E_1 E_2}} \bar{u}(\mathbf{k}_2, \sigma_2) \Gamma^\mu u(\mathbf{k}_1, \sigma_1) e^{iq \cdot x} \quad (4.18)$$

ただし

$$\Gamma^\mu = F_1(q_\mu^2) \gamma^\mu + \frac{F_2(q_\mu^2)}{2M} i \sigma^{\mu\nu} q_\nu, \quad q^\mu = (k_2 - k_1)^\mu \quad (4.19)$$

になる。自由粒子の場合、これは

$$\Gamma'^{\mu} = (F_1 + F_2) \gamma^{\mu} - \frac{F_2}{2M} (k_1 + k_2)^{\mu} \quad (4.20)$$

と同等であるが、自由粒子でない場合は Γ^{μ} と Γ'^{μ} は同じ結果にはならない。

まず

$$eF_1(0) = \text{核子の電荷}, \quad \frac{e}{2M} (F_1(0) + F_2(0)) = \text{核子の磁気能率}$$

を示す。(4.20) より

$$\langle \mathbf{k}_2 \sigma_2 | J^{\mu}(x) | \mathbf{k}_1 \sigma_1 \rangle = \frac{e^{iq \cdot x}}{(2\pi)^3} \frac{M}{\sqrt{E_1 E_2}} \bar{u}(\mathbf{k}_2, \sigma_2) \left((F_1 + F_2) \gamma^{\mu} - \frac{F_2}{2M} (k_1 + k_2)^{\mu} \right) u(\mathbf{k}_1, \sigma_1)$$

Briet 座標系 ($\mathbf{k}_2 = -\mathbf{k}_1 = \mathbf{q}/2$) では

$$E_1 = E_2 = E_q = \sqrt{M^2 + q^2/4}, \quad q_0 = E_2 - E_1 = 0$$

である。自由スピノールの具体形

$$u(\mathbf{k}, \sigma) = \sqrt{\frac{E_k + M}{2M}} \begin{pmatrix} 1 \\ \boldsymbol{\sigma} \cdot \mathbf{k} \\ E_k + M \end{pmatrix} \chi_{\sigma}$$

を使うと

$$\bar{u}(\mathbf{k}_2, \sigma_2) u(\mathbf{k}_1, \sigma_1) = \frac{E_q}{M} \chi_2^{\dagger} \chi_1, \quad \bar{u}(\mathbf{k}_2, \sigma_2) \gamma^{\mu} u(\mathbf{k}_1, \sigma_1) = \begin{cases} \chi_2^{\dagger} \chi_1, & \mu = 0 \\ \chi_2^{\dagger} \frac{i(\boldsymbol{\sigma} \times \mathbf{q})^i}{2M} \chi_1, & \mu = i \end{cases}$$

になるから

$$\begin{aligned} \langle \mathbf{k}_2 \sigma_2 | J^0(x) | \mathbf{k}_1 \sigma_1 \rangle &= \frac{e^{-iq \cdot x}}{(2\pi)^3} \frac{M}{E_q} G_E(q_{\mu}^2) \chi_2^{\dagger} \chi_1 \\ \langle \mathbf{k}_2 \sigma_2 | \mathbf{J}(x) | \mathbf{k}_1 \sigma_1 \rangle &= \frac{e^{-iq \cdot x}}{(2\pi)^3} \frac{M}{E_q} G_M(q_{\mu}^2) \chi_2^{\dagger} \frac{i \boldsymbol{\sigma} \times \mathbf{q}}{2M} \chi_1 \end{aligned}$$

ただし

$$G_E(q_{\mu}^2) = F_1(q_{\mu}^2) + \frac{q_{\mu}^2}{4M^2} F_2(q_{\mu}^2), \quad G_M(q_{\mu}^2) = F_1(q_{\mu}^2) + F_2(q_{\mu}^2) \quad (4.21)$$

ここでは $q_0 = 0$ であるから $q_{\mu}^2 = -q^2$ である。核子の電荷を Q , 磁気能率を μ とすると

$$\begin{aligned} Q &= \int d^3x \langle \mathbf{k}_2 \sigma_1 | J^0(x) | \mathbf{k}_1 \sigma_1 \rangle = eG_E(0) \delta(\mathbf{q} = 0) = eG_E(0) \frac{V}{(2\pi)^3} \\ \mu &= \frac{e}{2} \int d^3x \mathbf{x} \times \langle \mathbf{k}_2 \sigma_1 | \mathbf{J}(x) | \mathbf{k}_1 \sigma_1 \rangle = \frac{e}{4E_q} G_M(q_{\mu}^2) \chi_2^{\dagger} \int \frac{d^3x}{(2\pi)^3} \mathbf{x} \times (\boldsymbol{\sigma} \times (-\nabla)) e^{-i\mathbf{x} \cdot \mathbf{q}} \chi_1 \end{aligned}$$

部分積分すると

$$\mu = \frac{e}{2E_q} G_M(q_{\mu}^2) \chi_2^{\dagger} \boldsymbol{\sigma} \chi_1 \delta(\mathbf{q} = 0) = \frac{e}{2M} G_M(0) \chi_2^{\dagger} \boldsymbol{\sigma} \chi_1 \frac{V}{(2\pi)^3}$$

したがって

$$eG_E(0) = eF_1(0) = \text{核子の電荷}, \quad \text{つまり} \quad F_1(0) = \begin{cases} 1, & \text{陽子} \\ 0, & \text{中性子} \end{cases}$$

$$\mu_B = \frac{e}{2M} G_M(0) = \text{核子の磁気能率}$$

実験的には

$$\mu_B = \frac{e}{2M} \times \begin{cases} 2.793, & \text{陽子} \\ -1.913, & \text{中性子} \end{cases}, \quad \text{したがって } F_2(0) = \kappa, \quad \kappa = \begin{cases} 1.793, & \text{陽子} \\ -1.913, & \text{中性子} \end{cases}$$

である。 κ を異常磁気能率という。電子の場合は $\mu_B = -e/(2m_e)$, $\kappa = 0$ である。

微分断面積を求める。(4.18) から

$$\begin{aligned} \langle \mathbf{k}_2 \sigma_2 | J^\mu(\mathbf{q}) | \mathbf{k}_1 \sigma_1 \rangle &= \int d^3x \exp(i\mathbf{q} \cdot \mathbf{x}) \langle \mathbf{k}_2 \sigma_2 | J^\mu(x_0 = 0, \mathbf{x}) | \mathbf{k}_1 \sigma_1 \rangle \\ &= \frac{M}{\sqrt{E_1 E_2}} \bar{u}(\mathbf{k}_2, \sigma_2) \Gamma^\mu u(\mathbf{k}_1, \sigma_1) \delta(\mathbf{q} - \mathbf{k}_2 + \mathbf{k}_1) \end{aligned}$$

$\mathbf{q} = \mathbf{p}_1 - \mathbf{p}_2 = \mathbf{k}_2 - \mathbf{k}_1$ は運動量保存則である。電子-核子散乱の微分断面積は電子-原子核散乱の微分断面積 (4.7) において

$$K^\mu = \langle n | J^\mu(\mathbf{q}) | 0 \rangle \longrightarrow \langle \mathbf{k}_2 \sigma_2 | J^\mu(\mathbf{q}) | \mathbf{k}_1 \sigma_1 \rangle$$

の置き換えをすればよいから

$$\frac{d^2\sigma}{d\epsilon_2 d\Omega} = \frac{2\alpha^2 p_2}{q_\mu^4 p_1} \left(\frac{q_\mu^2}{2} K \cdot K^* + 2Q \cdot K Q \cdot K^* \right) \delta(E_2 - E_1 - q_0) \delta^2(\mathbf{q} - \mathbf{k}_2 + \mathbf{k}_1) \quad (4.22)$$

ただし

$$K^\mu = \frac{M}{\sqrt{E_1 E_2}} \bar{u}(\mathbf{k}_2, \sigma_2) \Gamma^\mu u(\mathbf{k}_1, \sigma_1) = \frac{M}{\sqrt{E_1 E_2}} \bar{u}(\mathbf{k}_2, \sigma_2) \left(F_1 \gamma^\mu + i \frac{F_2}{2M} \sigma^{\mu\nu} q_\nu \right) u(\mathbf{k}_1, \sigma_1)$$

核子の波動関数を体積 V で規格化し

$$\delta^2(\mathbf{q} - \mathbf{k}_2 + \mathbf{k}_1) = \frac{V}{(2\pi)^3} \delta(\mathbf{q} - \mathbf{k}_2 + \mathbf{k}_1)$$

を使うと

$$\frac{d^2\sigma}{d\epsilon_2 d\Omega} = \frac{2\alpha^2 p_2}{q_\mu^4 p_1} \left(\frac{q_\mu^2}{2} K \cdot K^* + 2Q \cdot K Q \cdot K^* \right) \delta(E_2 - E_1 - q_0) \delta(\mathbf{q} - \mathbf{k}_2 + \mathbf{k}_1) \frac{(2\pi)^3}{V}$$

更に、 \mathbf{k}_2 近傍の状態数は $V d^3k_2 / (2\pi)^3$ であるから \mathbf{k}_2 で積分すると

$$\frac{d^2\sigma}{d\epsilon_2 d\Omega} = \frac{2\alpha^2 p_2}{q_\mu^4 p_1} \left(\frac{q_\mu^2}{2} K \cdot K^* + 2Q \cdot K Q \cdot K^* \right) \delta(E_2 - E_1 - q_0), \quad \mathbf{k}_2 = \mathbf{k}_1 + \mathbf{q}$$

になる。初期状態の核子スピンについて平均をとり、終状態のスピンについて足し合わせれば

$$\frac{d^2\sigma}{d\epsilon_2 d\Omega} = \frac{2\alpha^2 p_2}{q_\mu^4 p_1} S \delta(E_2 - E_1 - q_0), \quad S = \frac{1}{2} \sum_{\sigma_1 \sigma_2} \left(\frac{q_\mu^2}{2} K \cdot K^* + 2Q \cdot K Q \cdot K^* \right) \quad (4.23)$$

(4.20) より ($\tilde{F} = F_1 + F_2$)

$$\begin{aligned} \sum_{\sigma_1 \sigma_2} K \cdot K^* &= \frac{M^2}{E_1 E_2} \text{Tr} \left[\left(\tilde{F} \gamma^\mu - \frac{F_2}{2M} (k_1 + k_2)^\mu \right) \frac{k_1 + M}{2M} \left(\tilde{F} \gamma_\mu - \frac{F_2}{2M} (k_1 + k_2)_\mu \right) \frac{k_2 + M}{2M} \right] \\ &= \frac{1}{E_1 E_2} \left((4M^2 - 2k_1 \cdot k_2) \tilde{F}^2 \right. \\ &\quad \left. + (k_1 + k_2)_\mu^2 (M^2 + k_1 \cdot k_2) \left(\frac{F_2}{2M} \right)^2 - (k_1 + k_2)_\mu^2 \tilde{F} F_2 \right) \end{aligned} \quad (4.24)$$

$$\begin{aligned} \sum_{\sigma_1 \sigma_2} Q \cdot K Q \cdot K^* &= \frac{1}{E_1 E_2} \left((2Q \cdot k_1 Q \cdot k_2 + Q_\mu^2 (M^2 - k_1 \cdot k_2)) \tilde{F}^2 \right. \\ &\quad \left. + (M^2 + k_1 \cdot k_2) \left((k_1 + k_2) \cdot Q \right)^2 \left(\frac{F_2}{2M} \right)^2 - \left((k_1 + k_2) \cdot Q \right)^2 \tilde{F} F_2 \right) \end{aligned} \quad (4.25)$$

$q^\mu = k_2^\mu - k_1^\mu$ であるから

$$2k_1 \cdot k_2 = 2M^2 - q_\mu^2, \quad (k_1 + k_2)_\mu^2 = 4M^2 - q_\mu^2 \quad (4.26)$$

以下では、実験室系、つまり、初期状態で静止した核子の散乱を考える。この場合、 $E_1 = M$ 、 $\mathbf{k}_1 = 0$ であるから

$$Q \cdot k_1 = Q_0 M, \quad Q \cdot k_2 = Q_0 E_2 - \mathbf{Q} \cdot \mathbf{k}_2 = Q_0 (M + q_0) - \mathbf{Q} \cdot \mathbf{q} = Q_0 M + q \cdot Q = Q_0 M$$

これから

$$\begin{aligned} \sum_{\sigma_1 \sigma_2} K \cdot K^* &= \frac{1}{E_1 E_2} \left((2M^2 + q_\mu^2) \tilde{F}^2 + \frac{4M^2 - q_\mu^2}{2} \left[\left(1 - \frac{q_\mu^2}{4M^2} \right) F_2^2 - 2\tilde{F} F_2 \right] \right) \\ \sum_{\sigma_1 \sigma_2} Q \cdot K Q \cdot K^* &= \frac{1}{E_1 E_2} \left((2M^2 Q_0^2 + \frac{1}{2} q_\mu^2 Q_\mu^2) \tilde{F}^2 + 2M^2 Q_0^2 \left[\left(1 - \frac{q_\mu^2}{4M^2} \right) F_2^2 - 2\tilde{F} F_2 \right] \right) \end{aligned}$$

したがって

$$S = \frac{1}{2ME_2} \left(A \tilde{F}^2 + B \left[\left(1 - \frac{q_\mu^2}{4M^2} \right) F_2^2 - 2\tilde{F} F_2 \right] \right)$$

ただし

$$A = \frac{q_\mu^2}{2} (2M^2 + q_\mu^2) + 4M^2 Q_0^2 + q_\mu^2 Q_\mu^2, \quad B = M^2 (4Q_0^2 - q^2) + M^2 q_0^2 - \frac{q_\mu^4}{4}$$

である。 $4Q_\mu^2 + q_\mu^2 = 4m_e^2 = 0$ より

$$A = M^2 q_\mu^2 + 4M^2 Q_0^2 + \frac{q_\mu^4}{4} = M^2 (4Q_0^2 - q^2) + M^2 q_0^2 + \frac{q_\mu^4}{4}$$

$\mathbf{k}_1 = 0$ の場合

$$2k_1 \cdot k_2 = 2ME_2 = 2M^2 - q_\mu^2, \quad \therefore \quad q_0 = E_2 - M = -\frac{q_\mu^2}{2M} \quad (4.27)$$

なるから

$$A = M^2 (4Q_0^2 - q^2) + \frac{q_\mu^4}{2}, \quad B = M^2 (4Q_0^2 - q^2)$$

したがって

$$\begin{aligned} S &= \frac{M}{2E_2} \left(\frac{q_\mu^4}{2M^2} \tilde{F}^2 + (4Q_0^2 - q^2) \left(\tilde{F}^2 + \left(1 - \frac{q_\mu^2}{4M^2} \right) F_2^2 - 2\tilde{F}F_2 \right) \right) \\ &= \frac{M}{2E_2} \left(\frac{q_\mu^4}{2M^2} (F_1 + F_2)^2 + (4Q_0^2 - q^2) \left(F_1^2 - \frac{q_\mu^2}{4M^2} F_2^2 \right) \right) \end{aligned}$$

(4.13), (4.14) を代入すると

$$S = \frac{2Mp_1p_2}{E_2} \cos^2 \frac{\theta}{2} \left(F_1^2 - \frac{q_\mu^2}{4M^2} F_2^2 - \frac{q_\mu^2}{2M^2} (F_1 + F_2)^2 \tan^2 \frac{\theta}{2} \right)$$

(4.21) で定義した G_E, G_M を用いると

$$F_1 = \frac{G_E - G_M q_\mu^2/4M^2}{1 - q_\mu^2/4M^2}, \quad F_2 = \frac{G_M - G_E}{1 - q_\mu^2/4M^2}$$

であるから

$$S = \frac{2Mp_1p_2}{E_2} \cos^2 \frac{\theta}{2} \left(\frac{G_E^2 - G_M^2 q_\mu^2/4M^2}{1 - q_\mu^2/4M^2} - \frac{q_\mu^2}{2M^2} G_M^2 \tan^2 \frac{\theta}{2} \right)$$

$q_0 = -q_\mu^2/2M$ を使うと

$$\frac{1}{1 - q_\mu^2/4M^2} = \frac{q_\mu^2}{q_\mu^2 - (q_\mu^2/2M)^2} = \frac{-q_\mu^2}{q^2}$$

であるから

$$\frac{d^2\sigma}{d\epsilon_2 d\Omega} = \frac{2\alpha^2 p_2}{q_\mu^4 p_1} S \delta(E_2 - M - q_0) = \sigma_M \frac{M}{E_2} \left[\left(\frac{q_\mu^2}{q^2} \right)^2 R_L + \frac{-q_\mu^2}{2q^2} R_T + R_T \tan^2 \frac{\theta}{2} \right] \quad (4.28)$$

ただし

$$R_L(q_\mu) = \frac{q^2}{-q_\mu^2} G_E^2 \delta(E_2 - M - q_0), \quad R_T(q_\mu) = \frac{-q_\mu^2}{2M^2} G_M^2 \delta(E_2 - M - q_0)$$

である。 M/E_2 を除けば(4.28)は(4.15)と同じである。(4.15)では原子核は非常に重いとして recoil を無視している。 $M \gg q$ であるとして $M/E_2 = M/\sqrt{M^2 + q^2} \approx 1$ とすれば(4.15)になる。

Rosenbluth plot を行えば実験的に G_E^2, G_M^2 を求めることができる。実験によれば(例えば, K. W. Chen et al., Phys. Rev **141** (1966) 1267, 1286, 1298)

$$\text{陽子} : G_E \approx \frac{G_M}{1 + \kappa_p} \approx G, \quad \text{中性子} : G_E \approx \frac{q_\mu^2}{4M^2} G_M, \quad \frac{G_M}{\kappa_n} \approx G$$

ここで, $\kappa_p = 1.793, \kappa_n = -1.913$ は陽子, 中性子の異常磁気能率である。また

$$G(q_\mu^2) = \frac{1}{(1 - q_\mu^2/\Lambda^2)^2}, \quad \Lambda \approx 840 \text{ MeV} \quad (4.29)$$

したがって

$$\text{陽子} \quad F_1(q_\mu^2) = \frac{1 - (1 + \kappa_p)q_\mu^2/4M^2}{1 - q_\mu^2/4M^2} G(q_\mu^2), \quad F_2(q_\mu^2) = \frac{\kappa_p G(q_\mu^2)}{1 - q_\mu^2/4M^2} \quad (4.30)$$

$$\text{中性子} \quad F_1(q_\mu^2) = 0, \quad F_2(q_\mu^2) = \kappa_n G(q_\mu^2) \quad (4.31)$$

になる。

recoil を無視すれば $R_L \approx G_E^2(-q^2) \delta(q_0)$ である。これと (4.16) を比較すれば、陽子の電荷分布 $e\rho(x)$ は

$$G_E(-q^2) = \frac{1}{(1+q^2/\Lambda^2)^2} = \int d^3x e^{i\mathbf{q}\cdot\mathbf{x}} \rho(x)$$

指数関数を展開すれば

$$\int d^3x e^{i\mathbf{q}\cdot\mathbf{x}} \rho(x) = \int d^3x \left(1 + i\mathbf{q}\cdot\mathbf{x} - \frac{(\mathbf{q}\cdot\mathbf{x})^2}{2} + \dots \right) \rho(x) = 1 - \frac{q^2}{6} \int d^3x x^2 \rho(x) + \dots$$

これから

$$\langle x^2 \rangle = \int d^3x x^2 \rho(x) = -6 \frac{d}{dq^2} \int d^3x e^{i\mathbf{q}\cdot\mathbf{x}} \rho(x) \Big|_{q=0} = -\frac{d}{dq^2} \frac{6}{(1+q^2/\Lambda^2)^2} \Big|_{q=0} = \frac{12}{\Lambda^2}$$

$\Lambda \approx 840 \text{ MeV}$ を代入し \hbar, c を元に戻すと $\sqrt{\langle x^2 \rangle} = \sqrt{12} \hbar c / \Lambda \approx 0.81 \text{ fm}$ になる。陽子は 1 fm 程度の広がりをもつ。中性子の場合

$$G_E(-q^2) = -\frac{\kappa_n q^2}{4M^2} \frac{1}{(1+q^2/\Lambda^2)^2} = -\frac{q^2}{6} \int d^3x x^2 \rho(x) + \dots, \quad \int d^3x \rho(x) = 0$$

より

$$\langle x^2 \rangle = \frac{3\kappa_n}{2M^2} = - (0.36 \text{ fm})^2$$

であり負になる。中性子の場合、 $\rho(x)$ は正の部分と負の部分があるから $\langle x^2 \rangle$ は負になりえる。中性子の G_E は $\langle x^2 \rangle$, つまり $dG_E/dq^2|_{q=0}$ は実験的に定まっているが、これ以上の q^2 依存性は実験的には誤差が大きく明確には決まっていない。

(4.13) より

$$q_\mu^2 = -4p_1 p_2 \sin^2(\theta/2) = -4p_1(p_1 - q_0) \sin^2(\theta/2) = -4p_1 \left(p_1 + \frac{q_\mu^2}{2M} \right) \sin^2(\theta/2)$$

であるから

$$q_\mu^2 = -\frac{4p_1^2 \sin^2(\theta/2)}{1 + (2p_1/M) \sin^2(\theta/2)} \quad (4.32)$$

と表せる。

$$\begin{aligned} E_2 - E_1 - q_0 &= \sqrt{M^2 + (\mathbf{p}_1 - \mathbf{p}_2)^2} - M - p_1 + p_2 \\ &= \sqrt{M^2 + p_1^2 + p_2^2 - 2p_1 p_2 \cos \theta} - M - p_1 + p_2 = f(p_2) \end{aligned}$$

とすると $f(p_2) = 0$ の点では

$$\frac{df(p_2)}{dp_2} = \frac{p_2 - p_1 \cos \theta}{\sqrt{M^2 + p_1^2 + p_2^2 - 2p_1 p_2 \cos \theta}} + 1 = \frac{M + p_1(1 - \cos \theta)}{M + p_1 - p_2} = \frac{M + 2p_1 \sin^2(\theta/2)}{E_2}$$

である。(4.28) を $\epsilon_2 = p_2$ で積分する場合、 $\delta(E_2 - E_1 - q_0) = \delta(f(p_2))$ より $(df/dp_2)^{-1}$ がかかるから

$$\frac{d\sigma}{d\Omega} = \frac{\sigma_M}{1 + (2p_1/M) \sin^2(\theta/2)} \left(F_1^2 - \frac{q_\mu^2}{4M^2} F_2^2 - \frac{q_\mu^2}{2M^2} (F_1 + F_2)^2 \tan^2 \frac{\theta}{2} \right) \quad (4.33)$$

になる。これは Bjorken & Drell の (10.90) である。(4.27), (4.32) よりエネルギー移行は

$$q_0 = p_1 - p_2 = p_1 \frac{(2p_1/M) \sin^2(\theta/2)}{1 + (2p_1/M) \sin^2(\theta/2)} \quad (4.34)$$

である。

4.5 重心系での微分断面積

重心系で (4.23) を適用して重心系での微分断面積を求める。これとは独立に、実験室系の微分断面積 (4.33) をローレンツ変換して求める。

(4.23) を適用

散乱前後での電子の運動量は p_1^μ, p_2^μ , 散乱前後での核子の運動量は k_1^μ, k_2^μ である。

$$\epsilon_i = p_i^0 = \sqrt{m_e^2 + p_i^2}, \quad E_i = k_i^0 = \sqrt{M^2 + k_i^2}, \quad \text{ただし } p_i = |\mathbf{p}_i|, \quad k_i = |\mathbf{k}_i|$$

である。重心系では $\mathbf{p}_1 + \mathbf{k}_1 = \mathbf{p}_2 + \mathbf{k}_2 = \mathbf{0}$ より $k_1 = p_1, k_2 = p_2$ である。エネルギー保存は

$$\delta(E_2 + \epsilon_2 - E_1 - \epsilon_1) = \left(\frac{\partial}{\partial \epsilon_1} (E_1 + \epsilon_1) \right)^{-1} \delta(\epsilon_2 - \epsilon_1) = \frac{E_1}{\epsilon_1 + E_1} \delta(\epsilon_2 - \epsilon_1)$$

これから $p_1 = p_2 = k_1 = k_2$ になる。実験室系では (4.34) より $q_0 \neq 0$ であるが、重心系では $q_0 = 0$ であり反跳はない。

(4.23) は標的が静止している場合である。(4.4) より $d^2\sigma/d\epsilon_2 d\Omega$ は入射粒子の速度 $v_1 = |\mathbf{v}_1|$ に逆比例する。標的が速度 \mathbf{u}_1 で移動する場合、 \mathbf{v}_1 を相対速度 $|\mathbf{v}_1 - \mathbf{u}_1|$ に置き換え

$$\frac{d^2\sigma}{d\epsilon_2 d\Omega} = \frac{v_1}{|\mathbf{v}_1 - \mathbf{u}_1|} \times (4.23)$$

である。

$$\mathbf{v}_1 = \frac{\mathbf{p}_1}{\epsilon_1}, \quad \mathbf{u}_1 = \frac{\mathbf{k}_1}{k_1^0} = -\frac{\mathbf{p}_1}{E_1} \quad \therefore \quad \frac{v_1}{|\mathbf{v}_1 - \mathbf{u}_1|} = \frac{E_1}{\epsilon_1 + E_1}$$

になり

$$\frac{d^2\sigma}{d\epsilon_2 d\Omega} = \frac{E_1}{p_1 + E_1} \frac{2\alpha^2 p_2}{q_\mu^4 p_1} S \delta(E_2 + \epsilon_2 - E_1 - \epsilon_1) = \frac{2\alpha^2}{q_\mu^4} \left(\frac{E_1}{\epsilon_1 + E_1} \right)^2 S \delta(\epsilon_2 - \epsilon_1)$$

ϵ_2 で積分すると

$$\frac{d\sigma}{d\Omega} = \frac{2\alpha^2}{q_\mu^4} \left(\frac{E_1}{\epsilon_1 + E_1} \right)^2 S, \quad S = \frac{q_\mu^2}{4} S_1 + S_2 \quad (4.35)$$

ただし S_1 は (4.24), S_2 は (4.25) である ($E_2 = E_1 = \sqrt{M^2 + p_1^2}$)。

以下では $m_e = 0$ とする。 $\epsilon_1 = p_1$ になる。

$$q_\mu^2 = (p_1 - p_2)_\mu^2 = 2m_e^2 - 2\mathbf{p}_1 \cdot \mathbf{p}_2 = -2p_1^2 + 2\mathbf{p}_1 \cdot \mathbf{p}_2 \quad (4.36)$$

$$Q_k \equiv Q \cdot k_i = \frac{p_1^0 + p_2^0}{2} k_i^0 - \frac{\mathbf{p}_1 + \mathbf{p}_2}{2} \cdot \mathbf{k}_i = p_1 E_1 + \frac{\mathbf{p}_1 + \mathbf{p}_2}{2} \cdot \mathbf{p}_i = p_1(p_1 + E_1) + \frac{q_\mu^2}{4} \quad (4.37)$$

であり $q^\mu = k_2^\mu - k_1^\mu$ より

$$2k_1 \cdot k_2 = 2M^2 - q_\mu^2, \quad (k_1 + k_2)_\mu^2 = 4M^2 - q_\mu^2$$

になる。また、 $4Q_k^2 + q_\mu^2 = 4m_e^2 = 0$ であるから

$$E_1^2 S_1 = (2M^2 + q_\mu^2) \tilde{F}^2 + \frac{4M^2 - q_\mu^2}{2} \left[\left(1 - \frac{q_\mu^2}{4M^2} \right) F_2^2 - 2\tilde{F}F_2 \right]$$

$$E_1^2 S_2 = \left(2Q_k^2 - \frac{q_\mu^4}{8} \right) \tilde{F}^2 + 2Q_k^2 \left[\left(1 - \frac{q_\mu^2}{4M^2} \right) F_2^2 - 2\tilde{F}F_2 \right]$$

したがって

$$E_1^2 S = 2 \left(Q_k^2 + \frac{M^2 q_\mu^2}{4} + \frac{q_\mu^4}{16} \right) \tilde{F}^2 + 2 \left(Q_k^2 + \frac{M^2 q_\mu^2}{4} - \frac{q_\mu^4}{16} \right) \left[\left(1 - \frac{q_\mu^2}{4M^2} \right) F_2^2 - 2\tilde{F}F_2 \right]$$

である。(4.37) 及び $2p_1(p_1 + E_1) + M^2 = (p_1 + E_1)^2$ より

$$Q_k^2 + \frac{M^2 q_\mu^2}{4} = (p_1 + E_1)^2 \left(p_1^2 + \frac{q_\mu^2}{4} \right) + \frac{q_\mu^4}{16}$$

になるから

$$\begin{aligned} \left(\frac{E_1}{p_1 + E_1} \right)^2 S &= 2 \left(p_1^2 + \frac{q_\mu^2}{4} \right) \left(\tilde{F}^2 + \left(1 - \frac{q_\mu^2}{4M^2} \right) F_2^2 - 2\tilde{F}F_2 \right) + \frac{q_\mu^4}{4(p_1 + E_1)^2} \tilde{F}^2 \\ &= 2 \left(p_1^2 + \frac{q_\mu^2}{4} \right) \left(F_1^2 - \frac{q_\mu^2}{4M^2} F_2^2 \right) + \frac{q_\mu^4}{4(p_1 + E_1)^2} (F_1 + F_2)^2 \end{aligned}$$

これと

$$q_\mu^2 = -4p_1^2 \sin^2(\theta/2), \quad p_1^2 + q_\mu^2/4 = p_1^2 \cos^2(\theta/2) \quad (4.38)$$

より (4.35) は

$$\frac{d\sigma}{d\Omega} = \sigma_M \left(F_1^2 - \frac{q_\mu^2}{4M^2} F_2^2 - \frac{q_\mu^2}{2(p_1 + E_1)^2} (F_1 + F_2)^2 \tan^2(\theta/2) \right), \quad \sigma_M = \frac{\alpha^2 \cos^2(\theta/2)}{4p_1^2 \sin^4(\theta/2)} \quad (4.39)$$

p_1, θ は重心系での値である。(4.33) の $1 + (2p_1/M) \sin^2(\theta/2)$ に対応する項はない。

ローレンツ変換

散乱後の電子の運動量を実験室系で p^μ , 重心系で p_{cm}^μ とする。実験室系から見て、重心系が z 軸方向に速さ v で移動するとき、ローレンツ変換より

$$p^1 = p_{\text{cm}}^1, \quad p^2 = p_{\text{cm}}^2, \quad p^3 = \frac{p_{\text{cm}}^3 + vp_{\text{cm}}^0}{\sqrt{1-v^2}}, \quad p_{\text{cm}}^0 = \sqrt{m_e^2 + \mathbf{p}_{\text{cm}}^2} \quad (4.40)$$

である。 $\mathbf{p}, \mathbf{p}_{\text{cm}}$ の極座標を $(\theta, \phi), (\theta_{\text{cm}}, \phi_{\text{cm}})$ で表す。ただし $\phi_{\text{cm}} = \phi$ である。(4.40) は

$$|\mathbf{p}| \sin \theta = |\mathbf{p}_{\text{cm}}| \sin \theta_{\text{cm}}, \quad |\mathbf{p}| \cos \theta = \frac{|\mathbf{p}_{\text{cm}}|}{\sqrt{1-v^2}} (\cos \theta_{\text{cm}} + u), \quad u = v \frac{\sqrt{m_e^2 + \mathbf{p}_{\text{cm}}^2}}{|\mathbf{p}_{\text{cm}}|}$$

になる。

$$\mathbf{p}^2 = \mathbf{p}_{\text{cm}}^2 F^2(\theta_{\text{cm}}), \quad F(\theta_{\text{cm}}) = \sqrt{\sin^2 \theta_{\text{cm}} + \frac{(\cos \theta_{\text{cm}} + u)^2}{1-v^2}}$$

より

$$\sin \theta = \frac{\sin \theta_{\text{cm}}}{F(\theta_{\text{cm}})}, \quad \cos \theta = \frac{\cos \theta_{\text{cm}} + u}{\sqrt{1-v^2} F(\theta_{\text{cm}})} \quad (4.41)$$

になる。

実験室系では、静止した核子に z 軸方向の運動量 p の電子が衝突する。電子 $p^\mu = (p^0, 0, 0, p)$, 核子 $k^\mu = (M, 0, 0, 0)$ である。重心系では $p_{\text{cm}}^\mu = (p_{\text{cm}}^0, 0, 0, p_{\text{cm}})$, $k_{\text{cm}}^\mu = (k_{\text{cm}}^0, 0, 0, k_{\text{cm}})$ とする。重心の速さを v とすると、ローレンツ変換より

$$p_{\text{cm}} = \frac{p - vp^0}{\sqrt{1-v^2}}, \quad k_{\text{cm}} = \frac{-vM}{\sqrt{1-v^2}}, \quad k_{\text{cm}}^0 = \frac{M}{\sqrt{1-v^2}}$$

である。重心系は $p_{\text{cm}} + k_{\text{cm}} = 0$ で定義されるから

$$v = \frac{p}{p^0 + M}, \quad p_{\text{cm}} = -k_{\text{cm}} = \frac{Mp}{\sqrt{(p^0 + M)^2 - p^2}} \quad (4.42)$$

になる。重心系での電子、核子のエネルギーを

$$\epsilon_{\text{cm}} = p_{\text{cm}}^0 = \sqrt{m_e^2 + p_{\text{cm}}^2}, \quad E_{\text{cm}} = k_{\text{cm}}^0 = \sqrt{M^2 + p_{\text{cm}}^2}$$

で表す。 $E_{\text{cm}} = M/\sqrt{1-v^2}$ より

$$v = \frac{p_{\text{cm}}}{E_{\text{cm}}}, \quad u = v \frac{\epsilon_{\text{cm}}}{p_{\text{cm}}} = \frac{\epsilon_{\text{cm}}}{E_{\text{cm}}} \quad (4.43)$$

である。実験室系での微分断面積を $d\sigma/d\Omega$, 重心系での微分断面積を $d\sigma/d\Omega_{\text{cm}}$ とする。同じ領域の散乱粒子数は座標系に依存しないから

$$\frac{d\sigma}{d\Omega} d\Omega = \frac{d\sigma}{d\Omega_{\text{cm}}} d\Omega_{\text{cm}}, \quad d\Omega = d\theta \sin\theta d\phi, \quad d\Omega_{\text{cm}} = d\theta_{\text{cm}} \sin\theta_{\text{cm}} d\phi$$

(4.41) より

$$\frac{d\sigma}{d\Omega} = \frac{d\sigma}{d\Omega_{\text{cm}}} \frac{d\cos\theta_{\text{cm}}}{d\cos\theta} = \frac{d\sigma}{d\Omega_{\text{cm}}} \frac{\sqrt{1-v^2} F^3(\theta_{\text{cm}})}{1+u\cos\theta_{\text{cm}}} \quad (4.44)$$

である。これと (4.41) に $v = p_{\text{cm}}/E_{\text{cm}}$ を代入すると

$$\frac{d\sigma}{d\Omega} = \frac{d\sigma}{d\Omega_{\text{cm}}} \frac{\left(M^2 + m_e^2 + p_{\text{cm}}^2(1 + \cos^2\theta_{\text{cm}}) + 2E_{\text{cm}}\epsilon_{\text{cm}}\cos\theta_{\text{cm}}\right)^{3/2}}{M^2(E_{\text{cm}} + \epsilon_{\text{cm}}\cos\theta_{\text{cm}})}$$

$$\tan\theta = \frac{M\sin\theta_{\text{cm}}}{\epsilon_{\text{cm}} + E_{\text{cm}}\cos\theta_{\text{cm}}}$$

これは R. G. Newton, Scattering Theory of Waves and Particles (Dover Pub.) の (5.27b), (5.29c) である。

以下では $m_e = 0$ とする。 $u = v$ より $F(\theta_{\text{cm}}) = \frac{1+v\cos\theta_{\text{cm}}}{\sqrt{1-v^2}}$ になる。(4.41) は

$$\cos\theta = \frac{\cos\theta_{\text{cm}} + v}{1 + v\cos\theta_{\text{cm}}}, \quad \therefore \begin{cases} \cos^2(\theta/2) = \frac{1 + \cos\theta}{2} = \frac{1+v}{1+v\cos\theta_{\text{cm}}} \cos^2(\theta_{\text{cm}}/2) \\ \sin^2(\theta/2) = \frac{1 - \cos\theta}{2} = \frac{1-v}{1+v\cos\theta_{\text{cm}}} \sin^2(\theta_{\text{cm}}/2) \end{cases}$$

であり (4.44) は

$$\frac{d\sigma}{d\Omega} = \frac{d\sigma}{d\Omega_{\text{cm}}} \frac{(1+v\cos\theta_{\text{cm}})^2}{1-v^2} \quad (4.45)$$

になる。実験室系の微分断面積 (4.33)

$$\frac{d\sigma}{d\Omega} = \sigma_0(\theta) \left(F_1^2(q_\mu^2) - \frac{q_\mu^2}{4M^2} F_2^2(q_\mu^2) - \frac{q_\mu^2}{2M^2} (F_1 + F_2)^2 \tan^2 \frac{\theta}{2} \right)$$

$$\sigma_0(\theta) = \frac{1}{1 + (2p/M) \sin^2(\theta/2)} \frac{\alpha^2 \cos^2(\theta/2)}{4p^2 \sin^4(\theta/2)}$$

を考える。 $p^0 = p$ であるから (4.42) より $p = Mv/(1-v)$ になり

$$1 + (2p/M) \sin^2(\theta/2) = 1 + \frac{2v}{1-v} \frac{1-v}{1+v\cos\theta_{\text{cm}}} \frac{1-\cos\theta_{\text{cm}}}{2} = \frac{1+v}{1+v\cos\theta_{\text{cm}}}$$

(4.45) より

$$\sigma_{0,\text{cm}}(\theta_{\text{cm}}) = \frac{1-v^2}{(1+v\cos\theta_{\text{cm}})^2} \sigma_0(\theta) = \frac{1-v}{1+v\cos\theta_{\text{cm}}} \frac{\alpha^2 \cos^2(\theta/2)}{4p^2 \sin^4(\theta/2)} = \frac{1+v}{1-v} \frac{\alpha^2 \cos^2(\theta_{\text{cm}}/2)}{4p^2 \sin^4(\theta_{\text{cm}}/2)}$$

である。(4.43) より

$$\frac{1+v}{1-v} \frac{1}{p^2} = \frac{1+v}{1-v} \frac{(1-v)^2}{M^2 v^2} = \frac{1-v^2}{M^2 v^2} = \frac{1}{p_{\text{cm}}^2}$$

になるから

$$\sigma_{0,\text{cm}}(\theta_{\text{cm}}) = \frac{\alpha^2 \cos^2(\theta_{\text{cm}}/2)}{4p_{\text{cm}}^2 \sin^4(\theta_{\text{cm}}/2)} = (4.39) \text{ の } \sigma_{\text{M}}$$

重心系では

$$\frac{d\sigma}{d\Omega_{\text{cm}}} = \sigma_{0,\text{cm}}(\theta_{\text{cm}}) \left(F_1^2(q_\mu^2) - \frac{q_\mu^2}{4M^2} F_2^2(q_\mu^2) - \frac{q_\mu^2}{2M^2} (F_1 + F_2)^2 \tan^2 \frac{\theta}{2} \right) \quad (4.46)$$

になる。 q_μ^2 はローレンツ・スカラーで実験室系でも重心系でも同じになる。実際

$$(4.32) \text{ の } q_\mu^2 = -\frac{4p^2 \sin^2(\theta/2)}{1+(2p/M)\sin^2(\theta/2)} = -4p^2 \frac{1-v}{1+v} \sin^2 \frac{\theta_{\text{cm}}}{2} = -4p_{\text{cm}}^2 \sin^2 \frac{\theta_{\text{cm}}}{2} = (4.38) \text{ の } q_\mu^2$$

である。

$$\tan^2 \frac{\theta}{2} = \frac{1-v}{1+v} \tan^2 \frac{\theta_{\text{cm}}}{2} = \frac{M^2}{(E_{\text{cm}} + p_{\text{cm}})^2} \tan^2 \frac{\theta_{\text{cm}}}{2}$$

(4.46) は (4.39) に一致する。

4.6 非相対論的フェルミガス

応答関数を最も簡単な原子核のモデルである非相対論的フェルミガスで求めてみる。相対論的フェルミガスでも解析的に求められるが、多少複雑になるのでここでは非相対論的に扱う。

運動量 \mathbf{p} の陽子が運動量 \mathbf{q} の仮想光子を吸収した場合、散乱後の陽子の運動量は $\mathbf{p} + \mathbf{q}$ になるから、励起エネルギーは

$$q_0 = \frac{(\mathbf{p} + \mathbf{q})^2}{2M^*} - \frac{\mathbf{p}^2}{2M^*} = \frac{q^2}{2M^*} + \frac{\mathbf{p} \cdot \mathbf{q}}{M^*}, \quad M^* = \text{核子の有効質量}$$

である。 k_p を陽子のフェルミ波数 とすると $p < k_p$ であるから

$$\frac{q^2}{2M^*} - \frac{k_p q}{M^*} < q_0 < \frac{q^2}{2M^*} + \frac{k_p q}{M^*}$$

になる。これから応答関数は $q_0 = q^2/(2M^*)$ を中心にして幅が $2k_p q/M^*$ 程度のピークになることが予想される。

(4.12) の縦方向応答関数を求める。 J_0 は電荷密度であるから、非相対論の場合

$$J_0(\mathbf{x}) = \sum_{k=1}^Z \delta(\mathbf{x} - \mathbf{x}_k)$$

和は陽子について行う。第2量子化で J_0 を陽子の生成・消滅演算子 $a_{\mathbf{p}\sigma}^\dagger, a_{\mathbf{p}\sigma}$

$$a_{\mathbf{p}\sigma}^\dagger a_{\mathbf{p}'\sigma'} + a_{\mathbf{p}'\sigma'} a_{\mathbf{p}\sigma}^\dagger = \delta_{\sigma\sigma'} \delta(\mathbf{p} - \mathbf{p}'), \quad \text{その他は反交換}$$

で表す。ただし、波動関数は $(2\pi)^{-3/2} \exp(i\mathbf{p}\cdot\mathbf{x}) \chi_\sigma$ である。

$$\begin{aligned} J_0(\mathbf{x}) &= \int d^3p d^3p' \sum_{\sigma\sigma'} \langle \mathbf{p}'\sigma' | \delta(\mathbf{x} - \hat{\mathbf{x}}) | \mathbf{p}\sigma \rangle a_{\mathbf{p}'\sigma'}^\dagger a_{\mathbf{p}\sigma} \\ &= \frac{1}{(2\pi)^3} \int d^3p d^3p' \exp(i(\mathbf{p} - \mathbf{p}')\cdot\mathbf{x}) \sum_{\sigma} a_{\mathbf{p}'\sigma}^\dagger a_{\mathbf{p}\sigma} \end{aligned}$$

これから

$$\begin{aligned} J_0(\mathbf{q}) &= \int d^3x \exp(i\mathbf{q}\cdot\mathbf{x}) \frac{1}{(2\pi)^3} \int d^3p d^3p' \exp(i(\mathbf{p} - \mathbf{p}')\cdot\mathbf{x}) \sum_{\sigma} a_{\mathbf{p}'\sigma}^\dagger a_{\mathbf{p}\sigma} \\ &= \int d^3p d^3p' \delta(\mathbf{q} + \mathbf{p} - \mathbf{p}') \sum_{\sigma} a_{\mathbf{p}'\sigma}^\dagger a_{\mathbf{p}\sigma} = \int d^3p \sum_{\sigma} a_{\mathbf{p}+\mathbf{q}\sigma}^\dagger a_{\mathbf{p}\sigma} \end{aligned}$$

になるから

$$\begin{aligned} R_L(q_0, q) &= \sum_n \langle 0 | J_0^\dagger(\mathbf{q}) | n \rangle \langle n | J_0(\mathbf{q}) | 0 \rangle \delta(\omega_n - q_0) \\ &= \sum_n \int d^3p d^3p' \sum_{\sigma\sigma'} \langle 0 | a_{\mathbf{p}'\sigma'}^\dagger a_{\mathbf{p}'+\mathbf{q}\sigma'} | n \rangle \langle n | a_{\mathbf{p}+\mathbf{q}\sigma}^\dagger a_{\mathbf{p}\sigma} | 0 \rangle \delta(\omega_n - q_0) \end{aligned}$$

$\langle n | a_{\mathbf{p}+\mathbf{q}\sigma}^\dagger a_{\mathbf{p}\sigma} | 0 \rangle \neq 0$ である $|n\rangle$ は $|n\rangle = a_{\mathbf{p}+\mathbf{q}\sigma}^\dagger a_{\mathbf{p}\sigma} | 0 \rangle$ 以外にはない。このとき

$$\omega_n = \frac{(\mathbf{p} + \mathbf{q})^2}{2M^*} - \frac{\mathbf{p}^2}{2M^*}$$

であるから

$$\begin{aligned} R_L(q_0, q) &= \int d^3p d^3p' \sum_{\sigma\sigma'} \langle 0 | a_{\mathbf{p}'\sigma'}^\dagger a_{\mathbf{p}'+\mathbf{q}\sigma'} \sum_n |n\rangle \langle n | a_{\mathbf{p}+\mathbf{q}\sigma}^\dagger a_{\mathbf{p}\sigma} | 0 \rangle \delta\left(q_0 - \frac{(\mathbf{p} + \mathbf{q})^2}{2M^*} + \frac{\mathbf{p}^2}{2M^*}\right) \\ &= \int d^3p d^3p' \sum_{\sigma\sigma'} \langle 0 | a_{\mathbf{p}'\sigma'}^\dagger a_{\mathbf{p}'+\mathbf{q}\sigma'} a_{\mathbf{p}+\mathbf{q}\sigma}^\dagger a_{\mathbf{p}\sigma} | 0 \rangle \delta\left(q_0 - \frac{(\mathbf{p} + \mathbf{q})^2}{2M^*} + \frac{\mathbf{p}^2}{2M^*}\right) \end{aligned}$$

フェルミガス模型では $|0\rangle$ は $p \leq k_p$ である状態は占有されているから、 $a_{\mathbf{p}+\mathbf{q}\sigma}^\dagger a_{\mathbf{p}\sigma} | 0 \rangle \neq 0$ であるためには $p \leq k_p$, $|\mathbf{p} + \mathbf{q}| > k_p$ である。このとき $\langle 0 | a_{\mathbf{p}+\mathbf{q}\sigma}^\dagger = 0$ になるから

$$\begin{aligned} \langle 0 | a_{\mathbf{p}'\sigma'}^\dagger a_{\mathbf{p}'+\mathbf{q}\sigma'} a_{\mathbf{p}+\mathbf{q}\sigma}^\dagger a_{\mathbf{p}\sigma} | 0 \rangle &= \delta(\mathbf{p} - \mathbf{p}') \delta_{\sigma\sigma'} \langle 0 | a_{\mathbf{p}'\sigma'}^\dagger a_{\mathbf{p}\sigma} | 0 \rangle + \langle 0 | a_{\mathbf{p}+\mathbf{q}\sigma}^\dagger a_{\mathbf{p}'\sigma'}^\dagger a_{\mathbf{p}'+\mathbf{q}\sigma'} a_{\mathbf{p}\sigma} | 0 \rangle \\ &= \delta(\mathbf{p} - \mathbf{p}') \delta_{\sigma\sigma'} \langle 0 | a_{\mathbf{p}'\sigma'}^\dagger a_{\mathbf{p}\sigma} | 0 \rangle \\ &= \delta(\mathbf{p} - \mathbf{p}') \delta(\mathbf{p} - \mathbf{p}') \delta_{\sigma\sigma'} \end{aligned}$$

デルタ関数の2乗は

$$\delta(\mathbf{p} - \mathbf{p}') \delta(\mathbf{p} - \mathbf{p}') = \delta(\mathbf{p} - \mathbf{p}') \int \frac{d^3x}{(2\pi)^3} \exp(i\mathbf{x}\cdot(\mathbf{p} - \mathbf{p}')) \Big|_{\mathbf{p}=\mathbf{p}'} = \delta(\mathbf{p} - \mathbf{p}') \frac{V}{(2\pi)^3}$$

と見なす。ただし、 $V =$ 系の体積 $= \infty$ である。陽子数を Z とすると

$$\text{陽子密度} = \frac{Z}{V} = \frac{k_p^3}{3\pi^2}$$

であるから

$$\delta(\mathbf{p} - \mathbf{p}') \delta(\mathbf{p} - \mathbf{p}') = \delta(\mathbf{p} - \mathbf{p}') \frac{3Z}{8\pi k_p^3}$$

これから

$$\begin{aligned} R_L(q_0, q) &= \frac{3Z}{4\pi k_p^3} \int d^3p \theta(k_p - |\mathbf{p}|) \theta(|\mathbf{p} + \mathbf{q}| - k_p) \delta\left(q_0 - \frac{(\mathbf{p} + \mathbf{q})^2}{2M^*} + \frac{\mathbf{p}^2}{2M^*}\right) \\ &= \frac{3Z}{4\pi k_p^3} \int_0^{k_p} d^3p \theta(|\mathbf{p} + \mathbf{q}| - k_p) \delta\left(q_0 - \frac{(\mathbf{p} + \mathbf{q})^2}{2M^*} + \frac{\mathbf{p}^2}{2M^*}\right) \end{aligned}$$

になる。

簡単のため $q > 2k_p$ の場合を考える。 $p \leq k_p$ である任意の \mathbf{p} に対して

$$(\mathbf{p} + \mathbf{q})^2 \geq (p - q)^2 \geq k_p^2$$

であるから $\theta(|\mathbf{p} + \mathbf{q}| - k_p) = 1$ になる ($q < 2k_p$ の場合 $\theta(|\mathbf{p} + \mathbf{q}| - k_p) = 1$ のため \mathbf{p} の方向に制限がつく)。したがって

$$\begin{aligned} R_L(q_0, q) &= \frac{3Z}{4\pi k_p^3} \int_0^{k_p} d^3p \delta\left(q_0 - \frac{(\mathbf{p} + \mathbf{q})^2}{2M^*} + \frac{\mathbf{p}^2}{2M^*}\right) \\ &= \frac{3Z}{2k_p^3} \int_0^{k_p} dp p^2 \int_{-1}^1 dt \delta\left(q_0 - \frac{q^2}{2M^*} - \frac{pq}{M^*}t\right) \end{aligned} \quad (4.47)$$

ここで

$$x = \frac{M^*}{pq} \left(q_0 - \frac{q^2}{2M^*} \right)$$

とおくと

$$\begin{aligned} R_L(q_0, q) &= \frac{3Z}{2k_p^3} \int_0^{k_p} dp p^2 \int_{-1}^1 dt \delta\left(\frac{pq}{M^*}(x - t)\right) = \frac{3ZM^*}{2k_p^3q} \int_0^{k_p} dp p \int_{-1}^1 dt \delta(x - t) \\ &= \frac{3ZM^*}{2k_p^3q} \int_0^{k_p} dp p \theta(1 - |x|) \end{aligned}$$

になる。 $|x| < 1$ の条件は x の定義から

$$p > p_{\min} = \frac{M^*}{q} \left| q_0 - \frac{q^2}{2M^*} \right|$$

である。したがって、 $p_{\min} < k_p$ の場合 p の積分領域は $p_{\min} \leq p \leq k_p$ になるから

$$R_L(q_0, q) = \frac{3ZM^*}{2k_p^3q} \int_{p_{\min}}^{k_p} dp p = \frac{3ZM^*}{4k_p^3q} (k_p^2 - p_{\min}^2) = \frac{3ZM^*}{4k_pq} \left[1 - \frac{M^{*2}}{k_p^2q^2} \left(q_0 - \frac{q^2}{2M^*} \right)^2 \right]$$

一方、 $p_{\min} > k_p$ の場合 $R_L(q_0, q) = 0$ である。まとめると $q > 2k_p$ のとき

$$R_L(q_0, q) = \begin{cases} \frac{3ZM^*}{4k_pq} \left[1 - \left(\frac{M^*}{k_pq} \right)^2 \left(q_0 - \frac{q^2}{2M^*} \right)^2 \right], & \left| q_0 - \frac{q^2}{2M^*} \right| < \frac{k_pq}{M^*} \\ 0, & \text{その他} \end{cases} \quad (4.48)$$

になる。励起エネルギー $q_0 = q^2/2M^*$ を中心に幅が約 k_pq/M^* で高さが M^* に比例するピークになる (R_T も同様)。

1983年にサックレーのデータが出るまでは、準弾性散乱は微分断面積だけが測定され、有効質量 M^* を適当に選ぶと非相対論的フェルミガスで説明できた (R. R. Whitney et al., Phys. Rev. **C9** (1974) 2230)。ところが、83年以降になると、実験精度の向上の結果、微分断面積から2つの応答関

数 R_L, R_T を分離できるようになり事情が変わった (P. Barreau et al., Nucl. Phys. **A402** (1983) 515)。陽子の電磁的広がりを考慮すると

$$J_0(\mathbf{q}) = G_E(q_\mu^2) \int d^3x \exp(i\mathbf{q}\cdot\mathbf{x}) J_0(\mathbf{x})$$

とすべきであるから

$$R_L(q_0, q) = G_E^2(q_\mu^2) \left(R_L(q_0, q) \right)_{\text{point}}$$

ただし $\left(R_L(q_0, q) \right)_{\text{point}}$ は (4.48) である。したがって

$$C(q) = \int dq_0 \frac{R_L(q_0, q)}{G_E^2(q_\mu^2)} = \frac{3Z}{4\pi k_p^3} \int_0^{k_p} d^3p = Z, \quad q \geq 2k_p \quad (4.49)$$

である。これをクーロン和という。 $C(q)/Z$ の実験データをまとめると、 $2k_p \approx 0.5$ GeV でも実験値は 1 よりかなり小さい (J. Morgenstern and Z. E. Meziani, Phys. Lett. **B515** (2001) 269)。まるで、原子核の電荷 Ze がどこかに消えてしまったかのようである。

4.7 相関関数

1 体演算子 $F(\mathbf{q})$ の応答関数

$$R(q_0, q) = \sum_n \left| \langle n | F(\mathbf{q}) | 0 \rangle \right|^2 \delta(\omega_n - q_0)$$

を平均場近似で求める。核子の 1 粒子ハミルトニアンを h_0 とし、 h_0 の固有状態を $\varphi_\alpha(\mathbf{x})$ とする：

$$h_0 \varphi_\alpha(\mathbf{x}) = E_\alpha \varphi_\alpha(\mathbf{x})$$

核子は相対論的に扱う。 $\varphi_\alpha(\mathbf{x})$ は Dirac 方程式の解である 4 成分スピノールである。基底状態 $|0\rangle$ で占有されている状態 (空孔状態) を $|h\rangle$ 、非占有の状態 (粒子状態) を $|p\rangle$ で表す。 $|h\rangle$ には反核子の状態も含む。 $F(\mathbf{q})$ は 1 体演算子であるから

$$R(q_0, q) = \sum_{ph} \left| \langle ph | F(\mathbf{q}) | 0 \rangle \right|^2 \delta(\omega_{ph} - q_0), \quad |ph\rangle = a_p^\dagger a_h | 0 \rangle, \quad \omega_{ph} = E_p - E_h > 0$$

になる。 $|h\rangle$ は束縛状態であるが、 $|p\rangle$ は束縛状態だけでなく連続状態もある。準弾性散乱のような高励起状態を扱う場合、連続状態を正確に取り込む必要がある。ところで、数値計算上、連続的に変化する $\langle ph | F(\mathbf{q}) | 0 \rangle$ を求め p について積分することは困難である。ここでは、以下のようにして $|p\rangle$ を直接扱うことはしないで、この困難さを回避する。

$\varepsilon \rightarrow +0$ のとき

$$\frac{1}{x \mp i\varepsilon} = P \frac{1}{x} \pm i\pi \delta(x)$$

より

$$R(q_0, q) = \frac{1}{\pi} \text{Im} \Pi(q_0, q), \quad \Pi(q_0, q) = \sum_{ph} \left(\frac{|\langle ph | F(\mathbf{q}) | 0 \rangle|^2}{\omega_{ph} - q_0 - i\varepsilon} + \frac{|\langle ph | F^\dagger(\mathbf{q}) | 0 \rangle|^2}{\omega_{ph} + q_0 + i\varepsilon} \right)$$

第 2 項の寄与は

$$- \sum_{ph} \left| \langle ph | F^\dagger(\mathbf{q}) | 0 \rangle \right|^2 \delta(\omega_{ph} + q_0)$$

であるから $q_0 > 0$ では寄与しないが, p の和を回避するため加えておく。1体演算子

$$F = \sum_{\alpha\beta} \langle \alpha | f | \beta \rangle a_{\alpha}^{\dagger} a_{\beta}$$

の場合 $\langle ph | F | 0 \rangle = \langle p | f | h \rangle$ であるから

$$\Pi(q_0, q) = \sum_{ph} \left(\frac{|\langle p | f(\mathbf{q}) | h \rangle|^2}{\omega_{ph} - q_0 - i\varepsilon} + \frac{|\langle p | f^{\dagger}(\mathbf{q}) | h \rangle|^2}{\omega_{ph} + q_0 + i\varepsilon} \right)$$

粒子状態の和 = 任意の和 - 空孔の和 より

$$\begin{aligned} \Pi(q_0, q) &= \sum_{\alpha h} \left(\frac{|\langle \alpha | f(\mathbf{q}) | h \rangle|^2}{\omega_{\alpha h} - q_0 - i\varepsilon} + \frac{|\langle \alpha | f^{\dagger}(\mathbf{q}) | h \rangle|^2}{\omega_{\alpha h} + q_0 + i\varepsilon} \right) \\ &\quad - \sum_{hh'} \left(\frac{|\langle h' | f(\mathbf{q}) | h \rangle|^2}{\omega_{h'h} - q_0 - i\varepsilon} + \frac{|\langle h' | f^{\dagger}(\mathbf{q}) | h \rangle|^2}{\omega_{h'h} + q_0 + i\varepsilon} \right) \end{aligned}$$

α は全ての状態について和をとる。2行目の第1項で h と h' を入れ替えると $\omega_{hh'} = -\omega_{h'h}$ であるから

$$2 \text{ 行目の第1項} = - \sum_{hh'} \frac{|\langle h | f(\mathbf{q}) | h' \rangle|^2}{-\omega_{h'h} - q_0 - i\varepsilon} = + \sum_{hh'} \frac{|\langle h' | f^{\dagger}(\mathbf{q}) | h \rangle|^2}{\omega_{h'h} + q_0 + i\varepsilon}$$

したがって, 2行目の第2項目と打ち消しあい

$$\Pi(q_0, q) = \sum_{\alpha h} \left(\frac{|\langle \alpha | f(\mathbf{q}) | h \rangle|^2}{\omega_{\alpha h} - q_0 - i\varepsilon} + \frac{|\langle \alpha | f^{\dagger}(\mathbf{q}) | h \rangle|^2}{\omega_{\alpha h} + q_0 + i\varepsilon} \right)$$

になる。 α は任意であるから $\omega_{\alpha h} < 0$ も存在し, $q_0 > 0$ でも第2項の虚部は0ではない。これは第1項でパウリ原理を破る遷移の寄与を打ち消すために必要である。

応答関数を求める場合, f は電荷密度あるいは電流密度であるから

$$\langle \alpha | f(\mathbf{q}) | \beta \rangle = \int d^3x \exp(i\mathbf{q} \cdot \mathbf{x}) \varphi_{\alpha}^{\dagger}(\mathbf{x}) \Gamma \varphi_{\beta}(\mathbf{x}), \quad \Gamma = 4 \times 4 \text{ 行列} \quad (4.50)$$

と表せる。したがって

$$\begin{aligned} \Pi(q_0, q) &= \sum_{\alpha h} \int d^3x d^3y \exp(-i\mathbf{q} \cdot (\mathbf{x} - \mathbf{y})) \\ &\quad \times \left(\frac{\varphi_h^{\dagger}(\mathbf{x}) \Gamma^{\dagger} \varphi_{\alpha}(\mathbf{x}) \varphi_{\alpha}^{\dagger}(\mathbf{y}) \Gamma \varphi_h(\mathbf{y})}{\omega_{\alpha h} - q_0 - i\varepsilon} + \left[\frac{\varphi_h^{\dagger}(\mathbf{x}) \Gamma \varphi_{\alpha}(\mathbf{x}) \varphi_{\alpha}^{\dagger}(\mathbf{y}) \Gamma^{\dagger} \varphi_h(\mathbf{y})}{\omega_{\alpha h} + q_0 + i\varepsilon} \right]^* \right) \\ &= \sum_h \int d^3x d^3y \exp(-i\mathbf{q} \cdot (\mathbf{x} - \mathbf{y})) \\ &\quad \times \left(\varphi_h^{\dagger}(\mathbf{x}) \Gamma^{\dagger} G(\mathbf{x}, \mathbf{y}; E_h + q_0) \Gamma \varphi_h(\mathbf{y}) + \left[\varphi_h^{\dagger}(\mathbf{x}) \Gamma G(\mathbf{x}, \mathbf{y}; E_h - q_0) \Gamma^{\dagger} \varphi_h(\mathbf{y}) \right]^* \right) \quad (4.51) \end{aligned}$$

ただし

$$G(\mathbf{x}, \mathbf{y}; E) = \sum_{\alpha} \frac{\varphi_{\alpha}(\mathbf{x}) \varphi_{\alpha}^{\dagger}(\mathbf{y})}{\omega_{\alpha} - E - i\varepsilon} \quad (4.52)$$

である。

$$\begin{aligned}
(h_0(\mathbf{x}) - E)G(\mathbf{x}, \mathbf{y}; E) &= \sum_{\alpha} \frac{(h_0(\mathbf{x}) - E)\varphi_{\alpha}(\mathbf{x})}{\omega_{\alpha} - E - i\varepsilon} \varphi_{\alpha}^{\dagger}(\mathbf{y}) \\
&= \sum_{\alpha} \frac{\omega_{\alpha} - E}{\omega_{\alpha} - E - i\varepsilon} \varphi_{\alpha}(\mathbf{x}) \varphi_{\alpha}^{\dagger}(\mathbf{y}) \\
&= \sum_{\alpha} \varphi_{\alpha}(\mathbf{x}) \varphi_{\alpha}^{\dagger}(\mathbf{y}) = \delta(\mathbf{x} - \mathbf{y})
\end{aligned} \tag{4.53}$$

であるから G は1粒子ハミルトニアン h_0 のグリーン関数である。非相対論と同様に、 G を全ての1状態状態の和(4.52)とは別の表現(4.63)ができる。この表現を使うと(4.51)から1粒子状態については空孔状態の和だけで応答関数が求まる。

4.8 グリーン関数

自由粒子 自由粒子の場合(4.52)の和(積分)を実行できる。 h_0 の規格化された固有状態は

$$\begin{aligned}
\text{正エネルギー解 } E_p \quad \varphi_{p\sigma}^{(+)}(\mathbf{x}) &= \frac{1}{(2\pi)^{3/2}} \sqrt{\frac{M}{E_p}} e^{i\mathbf{p}\cdot\mathbf{x}} u(\mathbf{p}, \sigma) \\
\text{負エネルギー解 } -E_p \quad \varphi_{p\sigma}^{(-)}(\mathbf{x}) &= \frac{1}{(2\pi)^{3/2}} \sqrt{\frac{M}{E_p}} e^{-i\mathbf{p}\cdot\mathbf{x}} v(\mathbf{p}, \sigma)
\end{aligned}$$

であるから $\mathbf{R} = \mathbf{x} - \mathbf{y}$ とすると

$$\begin{aligned}
G(\mathbf{x}, \mathbf{y}; E) &= \int d^3p \sum_{\sigma} \left(\frac{\varphi_{p\sigma}^{(+)}(\mathbf{x}) \bar{\varphi}_{p\sigma}^{(+)}(\mathbf{y})}{E_p - E - i\varepsilon} + \frac{\varphi_{p\sigma}^{(-)}(\mathbf{x}) \bar{\varphi}_{p\sigma}^{(-)}(\mathbf{y})}{-E_p - E - i\varepsilon} \right) \gamma_0 \\
&= \int \frac{d^3p}{(2\pi)^3} \frac{M}{E_p} \sum_{\sigma} \left(\frac{e^{i\mathbf{p}\cdot\mathbf{R}} u(\mathbf{p}, \sigma) \bar{u}(\mathbf{p}, \sigma)}{E_p - E - i\varepsilon} - \frac{e^{-i\mathbf{p}\cdot\mathbf{R}} v(\mathbf{p}, \sigma) \bar{v}(\mathbf{p}, \sigma)}{E_p + E + i\varepsilon} \right) \gamma_0
\end{aligned}$$

上式に

$$\sum_{\sigma} u(\mathbf{p}, \sigma) \bar{u}(\mathbf{p}, \sigma) = \frac{\not{p} + M}{2M}, \quad \sum_{\sigma} v(\mathbf{p}, \sigma) \bar{v}(\mathbf{p}, \sigma) = \frac{\not{p} - M}{2M}$$

を代入すると

$$G(\mathbf{x}, \mathbf{y}; E) = \int \frac{d^3p}{(2\pi)^3} \frac{1}{2E_p} \left(e^{i\mathbf{p}\cdot\mathbf{R}} \frac{E_p + \boldsymbol{\alpha}\cdot\mathbf{p} + M\gamma_0}{E_p - E - i\varepsilon} - e^{-i\mathbf{p}\cdot\mathbf{R}} \frac{E_p + \boldsymbol{\alpha}\cdot\mathbf{p} - M\gamma_0}{E_p + E + i\varepsilon} \right)$$

第2項で $\mathbf{p} \rightarrow -\mathbf{p}$ と置き換えれば

$$G(\mathbf{x}, \mathbf{y}; E) = \int \frac{d^3p}{(2\pi)^3} \frac{e^{i\mathbf{p}\cdot\mathbf{R}}}{2E_p} \left(\frac{E_p + \boldsymbol{\alpha}\cdot\mathbf{p} + M\gamma_0}{E_p - E - i\varepsilon} - \frac{E_p - \boldsymbol{\alpha}\cdot\mathbf{p} - M\gamma_0}{E_p + E + i\varepsilon} \right)$$

ここで

$$\frac{E_p + \boldsymbol{\alpha}\cdot\mathbf{p} + M\gamma_0}{E_p - E - i\varepsilon} = 1 + \frac{E + \boldsymbol{\alpha}\cdot\mathbf{p} + M\gamma_0}{E_p - E - i\varepsilon}, \quad \frac{E_p - \boldsymbol{\alpha}\cdot\mathbf{p} - M\gamma_0}{E_p + E + i\varepsilon} = 1 - \frac{E + \boldsymbol{\alpha}\cdot\mathbf{p} + M\gamma_0}{E_p + E + i\varepsilon}$$

であるから

$$\begin{aligned}
G(\mathbf{x}, \mathbf{y}; E) &= \int \frac{d^3p}{(2\pi)^3} \frac{E + \boldsymbol{\alpha}\cdot\mathbf{p} + M\gamma_0}{2E_p} \left(\frac{1}{E_p - E - i\varepsilon} + \frac{1}{E_p + E + i\varepsilon} \right) e^{i\mathbf{p}\cdot\mathbf{R}} \\
&= (E + h_0(\mathbf{x})) \int \frac{d^3p}{(2\pi)^3} \frac{e^{i\mathbf{p}\cdot\mathbf{R}}}{E_p^2 - (E + i\varepsilon)^2}, \quad h_0(\mathbf{x}) = -i\boldsymbol{\alpha}\cdot\nabla_x + M\gamma_0
\end{aligned}$$

になる。 ∇_x は \mathbf{x} に関する gradient である。

$$\begin{aligned} I &= \int \frac{d^3p}{(2\pi)^3} \frac{e^{i\mathbf{p}\cdot\mathbf{R}}}{E_p^2 - (E + i\varepsilon)^2} = \frac{1}{4\pi^2} \int_0^\infty dp \frac{p^2}{E_p^2 - (E + i\varepsilon)^2} \int_{-1}^1 dt e^{ipRt} \\ &= \frac{1}{4\pi^2 iR} \int_{-\infty}^\infty dp \frac{p}{E_p^2 - (E + i\varepsilon)^2} e^{ipR} \\ &= \frac{1}{4\pi^2 iR} \int_{-\infty}^\infty dp \frac{p}{p^2 - k^2 - 2iE\varepsilon} e^{ipR} \end{aligned}$$

$p = Qe^{i\theta}$ とすると

$$\text{被積分関数} \xrightarrow{Q \rightarrow \infty} \frac{e^{ipR}}{p} = \frac{\exp(iRQ \cos \theta - RQ \sin \theta)}{Qe^{i\theta}}$$

より $\sin \theta > 0$ ならば 0 に収束する。したがって、積分路に上半面の経路 $Qe^{i\theta}$, ($0 \leq \theta \leq \pi$, $Q \rightarrow \infty$) を加えてもよい。被積分関数は

$$p^2 = k^2 + 2iE\varepsilon = \begin{cases} k^2 + i\varepsilon, & E > 0 \\ k^2 - i\varepsilon, & E < 0 \end{cases}$$

に極をもつ。 $E > M$ のとき $k = \sqrt{E^2 - M^2}$ は正の実数で $p = \pm(k + i\varepsilon)$ が極になるから、上半面にある極 $k + i\varepsilon$ の留数より $I = e^{ikR}/(4\pi R)$ である。したがって

$$G(\mathbf{x}, \mathbf{y}; E) = (E + h_0(\mathbf{x})) \frac{e^{ikR}}{4\pi R} = \left(E + M\gamma_0 + \frac{\boldsymbol{\alpha}\cdot\mathbf{R}}{R} \left(k + \frac{i}{R} \right) \right) \frac{e^{ikR}}{4\pi R} \quad (4.54)$$

$E^2 < M^2$ の場合、 $k = i\sqrt{M^2 - E^2}$ は純虚数で $p = \pm k$ が極になる。上半面にある極 k の留数より上と同じになる。ただし $e^{ikR} = e^{-\sqrt{M^2 - E^2}R}$ である。 $h_0^2(\mathbf{x}) = -\nabla_x^2 + M^2$ であるから

$$(h_0(\mathbf{x}) - E)G(\mathbf{x}, \mathbf{y}; E) = (h_0(\mathbf{x}) - E) \left(E + h_0(\mathbf{x}) \right) \frac{e^{\pm ikR}}{4\pi R} = (-\nabla_x^2 - k^2) \frac{e^{\pm ikR}}{4\pi R} = \delta(\mathbf{R})$$

になり (4.53) を確かに満たす。なお、Green 関数の分母 $1/(\omega_\alpha - E - i\varepsilon)$ にある微小量 $i\varepsilon$ が無限遠での境界条件を規定する。 $1/(\omega_\alpha - E + i\varepsilon)$ ならば (4.54) は e^{ikR} の代わりに e^{-ikR} になる。

球対称ポテンシャル 1 粒子ハミルトニアン h_0 が球対称なポテンシャル $V_S(x)$, $V_0(x)$ からなる

$$h_0 = -i\boldsymbol{\alpha}\cdot\nabla + \gamma^0(M + V_S(x)) + V_0(x)$$

のとき $(h_0 - E)\varphi(\mathbf{x}) = 0$ の解は

$$\varphi(\mathbf{x}) = \frac{1}{x} \begin{pmatrix} u(x)\mathcal{Y}_{\ell jm}(\hat{\mathbf{x}}) \\ i v(x)\mathcal{Y}'_{\ell jm}(\hat{\mathbf{x}}) \end{pmatrix}, \quad \ell' = \begin{cases} \ell - 1, & j = \ell - 1/2 \text{ のとき} \\ \ell + 1, & j = \ell + 1/2 \text{ のとき} \end{cases} \quad (4.55)$$

とおけ、ディラック方程式は

$$\frac{du}{dx} = -\frac{\kappa_{\ell j}}{x}u(x) + (M + V_S - V_0 + E)v(x) \quad (4.56)$$

$$\frac{dv}{dx} = +\frac{\kappa_{\ell j}}{x}v(x) + (M + V_S + V_0 - E)u(x) \quad (4.57)$$

ただし

$$\kappa_{\ell j} = (-1)^{j+\ell+1/2} \left(j + \frac{1}{2} \right) = \begin{cases} \ell, & j = \ell - 1/2 \text{ のとき} \\ -\ell - 1, & j = \ell + 1/2 \text{ のとき} \end{cases} \quad (4.58)$$

になる。(4.56)から

$$v(x) = \frac{1}{M + V_S - V_0 + E} \left(\frac{d}{dx} + \frac{\kappa_{\ell j}}{x} \right) u(x) \quad (4.59)$$

これを(4.57)に代入すると

$$\left(\frac{d}{dx} - \frac{\kappa_{\ell j}}{x} \right) \frac{1}{M + V_S - V_0 + E} \left(\frac{d}{dx} + \frac{\kappa_{\ell j}}{x} \right) u(x) - (M + V_S + V_0 - E) u(x) = 0 \quad (4.60)$$

である。

原点近傍 $x \rightarrow 0$ のとき $u = x^a + \dots$ とすると

$$\frac{1}{M + V_S(0) - V_0(0) + E} \left(\frac{d}{dx} - \frac{\kappa_{\ell j}}{x} \right) \left(\frac{d}{dx} + \frac{\kappa_{\ell j}}{x} \right) x^a - (M + V_S(0) + V_0(0) - E) x^a + \dots = 0$$

つまり

$$\left(\frac{d^2}{dx^2} - \frac{\kappa_{\ell j}(\kappa_{\ell j} + 1)}{x^2} \right) x^a - \left((M + V_S(0))^2 - (V_0(0) - E)^2 \right) x^a + \dots = 0$$

したがって

$$a(a-1) - \kappa_{\ell j}(\kappa_{\ell j} + 1) - \left((M + V_S(0))^2 - (V_0(0) - E)^2 \right) x^2 + \dots = 0$$

$x \rightarrow 0$ のとき第2項は無視できるから

$$a(a-1) = \kappa_{\ell j}(\kappa_{\ell j} + 1) = \ell(\ell+1), \quad \therefore a = \ell+1, -\ell$$

原点で正則な解 $u(x)/x = x^\ell + \dots$ と発散する解 $u(x)/x = x^{-\ell-1} + \dots$ がある。原点で正則な解を

$$F_{\ell jm}(\mathbf{x}) = \frac{1}{x} \begin{pmatrix} f_{\ell j}(x) \mathcal{Y}_{\ell jm}(\hat{\mathbf{x}}) \\ i g_{\ell j}(x) \mathcal{Y}'_{\ell jm}(\hat{\mathbf{x}}) \end{pmatrix}, \quad f_{\ell j}(x) \xrightarrow{x \rightarrow 0} x^{\ell+1} \quad (4.61)$$

で表す。(4.59)から $\kappa_{\ell j} = \ell$ の場合

$$g_{\ell j}(x) \xrightarrow{x \rightarrow 0} \frac{\ell+1 + \kappa_{\ell j}}{M + V_S(0) - V_0(0) + E} x^\ell = \frac{2\ell+1}{M + V_S(0) - V_0(0) + E} x^\ell$$

$\kappa_{\ell j} = -\ell - 1$ の場合 $g_{\ell j} = 0$ になるから、次のオーダーまで求める必要がある。(4.57)から

$$g_{\ell j} \xrightarrow{x \rightarrow 0} \frac{M + V_S(0) + V_0(0) - E}{\ell+2 - \kappa_{\ell j}} x^{\ell+2} = \frac{M + V_S(0) + V_0(0) - E}{2\ell+3} x^{\ell+2}$$

である。 $F_{\ell jm}(\mathbf{x})$ に対しては無限遠での境界条件は設定しない。 E が束縛状態の固有値に等しい場合 $F_{\ell jm}(\mathbf{x}) \xrightarrow{x \rightarrow \infty} 0$ になるが、一般には $x \rightarrow \infty$ で有界とは限らない。 $f_{\ell j}, g_{\ell j}$ は実関数にできる。

無限遠 $x \rightarrow \infty$ のとき $V_S, V_0 \rightarrow 0$ ならば(4.60)は

$$\left(\frac{d^2}{dx^2} - \frac{\ell(\ell+1)}{x^2} + k^2 \right) u = 0, \quad k = \begin{cases} \sqrt{E^2 - M^2} & E^2 > M^2 \\ i\sqrt{M^2 - E^2} & E^2 < M^2 \end{cases}$$

になる。この微分方程式の独立な2つの解は、球ベッセル関数 j_ℓ, n_ℓ 、あるいはハンケル関数 $h_\ell^{(\pm)} = j_\ell \pm in_\ell$ を用いて

$$kxj_\ell(kx), \quad kxn_\ell(kx) \quad \text{または} \quad kxh_\ell^{(+)}(kx), \quad kxh_\ell^{(-)}(kx)$$

と表せる。

$$\rho h_\ell^{(\pm)}(\rho) = e^{\pm i(\rho - (\ell+1)\pi/2)} \sum_{k=0}^{\ell} \frac{(n+k)!}{k!(n-k)!} \left(\frac{\pm i}{2\rho}\right)^k \xrightarrow{\rho \rightarrow \infty} e^{\pm i(\rho - (\ell+1)\pi/2)}$$

であるから (メシアの付録とは位相が異なる), 外向き球面波になる解を考えて

$$U_{\ell jm}(\mathbf{x}) = \frac{1}{x} \begin{pmatrix} u_{\ell j}(x) \mathcal{Y}_{\ell jm}(\hat{\mathbf{x}}) \\ i v_{\ell j}(x) \mathcal{Y}'_{\ell jm}(\hat{\mathbf{x}}) \end{pmatrix}, \quad u_{\ell j}(x) \xrightarrow{x \rightarrow \infty} kx h_\ell^{(+)}(kx) \quad (4.62)$$

とする。\$h_\ell^{(\pm)}(\rho)\$ の性質 (\$\ell \neq 0\$)

$$(2\ell+1)h_\ell^{(\pm)} = \rho(h_{\ell-1}^{(\pm)} + h_{\ell+1}^{(\pm)}), \quad h_{\ell-1}^{(\pm)} = \left(\frac{d}{d\rho} + \frac{\ell+1}{\rho}\right)h_\ell^{(\pm)}, \quad h_\ell^{(\pm)} = \left(-\frac{d}{d\rho} + \frac{\ell-1}{\rho}\right)h_{\ell-1}^{(\pm)}$$

から \$j = \ell \pm 1/2\$ のとき

$$v_{\ell j}(x) = \frac{1}{M+E} \left(\frac{d}{dx} + \frac{\kappa_{\ell j}}{x}\right) u_{\ell j}(x) \xrightarrow{x \rightarrow \infty} \mp \frac{k}{M+E} kx h_{\ell \pm 1}^{(\pm)}(kx)$$

になる。\$U_{\ell jm}(\mathbf{x})\$ に対しては原点での境界条件は設定しない。\$x \to \infty\$ で \$e^{+ikx}\$ になるから, \$E^2 > M^2\$ の場合は外向きの球面波, \$E^2 < M^2\$ の場合は 0 に収束する解である。\$E^2 < M^2\$ で \$E\$ が束縛状態の固有値に等しい場合 \$U_{\ell jm}(\mathbf{x})\$ は原点で正則であるが, 一般には原点で正則とは限らない。\$E^2 < M^2\$ の場合, \$u_{\ell j}, v_{\ell j}\$ は実関数にできるが, \$E^2 > M^2\$ の場合は複素関数である。

原点で \$x^{-\ell}\$ である解を

$$\Phi_{\ell jm}(\mathbf{x}) = \frac{1}{x} \begin{pmatrix} a_{\ell j}(x) \mathcal{Y}_{\ell jm}(\hat{\mathbf{x}}) \\ i b_{\ell j}(x) \mathcal{Y}'_{\ell jm}(\hat{\mathbf{x}}) \end{pmatrix}, \quad a_{\ell j}(x) \xrightarrow{x \rightarrow 0} x^{-\ell}$$

とすると, \$(h_0 - E)\varphi(\mathbf{x}) = 0\$ の一般解は \$F_{\ell jm}(\mathbf{x})\$ と \$\Phi_{\ell jm}(\mathbf{x})\$ の線形結合で表せる。また

$$U_{\ell jm}^{(\pm)}(\mathbf{x}) = \frac{1}{x} \begin{pmatrix} u_{\ell j}^{(\pm)}(x) \mathcal{Y}_{\ell jm}(\hat{\mathbf{x}}) \\ i v_{\ell j}^{(\pm)}(x) \mathcal{Y}'_{\ell jm}(\hat{\mathbf{x}}) \end{pmatrix}, \quad u_{\ell j}^{(\pm)}(x) \xrightarrow{x \rightarrow \infty} kx h_\ell^{(\pm)}(kx)$$

とすると, 一般解は \$U_{\ell jm}^{(+)}(\mathbf{x})\$ と \$U_{\ell jm}^{(-)}(\mathbf{x})\$ の線形結合でも表せる。したがって

$$F_{\ell jm}(\mathbf{x}) = A U_{\ell jm}^{(+)}(\mathbf{x}) + B U_{\ell jm}^{(-)}(\mathbf{x}), \quad U_{\ell jm}(\mathbf{x}) = U_{\ell jm}^{(+)}(\mathbf{x}) = C F_{\ell jm}(\mathbf{x}) + D \Phi_{\ell jm}(\mathbf{x})$$

と表せる。\$E\$ が束縛状態の固有値に一致する場合 \$B = D = 0\$ である。

ロンスキャン

$$W_{\ell j} = u_{\ell j}(x) g_{\ell j}(x) - v_{\ell j}(x) f_{\ell j}(x)$$

とすると, (4.56), (4.57) より

$$\begin{aligned} \frac{dW_{\ell j}}{dx} &= \frac{du_{\ell j}}{dx} g_{\ell j} + u_{\ell j} \frac{dg_{\ell j}}{dx} - \frac{dv_{\ell j}}{dx} f_{\ell j} - v_{\ell j} \frac{df_{\ell j}}{dx} \\ &= \left[-\frac{\kappa_{\ell j}}{x} u_{\ell j} + (M + V_S - V_0 + E) v_{\ell j} \right] g_{\ell j} + u_{\ell j} \left[\frac{\kappa_{\ell j}}{x} g_{\ell j} + (M + V_S + V_0 - E) f_{\ell j} \right] \\ &\quad - \left[\frac{\kappa_{\ell j}}{x} v_{\ell j} + (M + V_S + V_0 - E) u_{\ell j} \right] f_{\ell j} - v_{\ell j} \left[-\frac{\kappa_{\ell j}}{x} f_{\ell j} + (M + V_S - V_0 + E) g_{\ell j} \right] \\ &= 0 \end{aligned}$$

になるから $W_{\ell j}$ は定数である。グリーン関数 (4.52) は

$$G(\mathbf{x}, \mathbf{y}; E) = \sum_{\ell j m} \frac{1}{W_{\ell j}} \left(\theta(x-y) U_{\ell j m}(\mathbf{x}) \tilde{F}_{\ell j m}(\mathbf{y}) + \theta(y-x) F_{\ell j m}(\mathbf{x}) \tilde{U}_{\ell j m}(\mathbf{y}) \right) \quad (4.63)$$

と表せる。ただし、 $\tilde{F}_{\ell j m}$, $\tilde{U}_{\ell j m}$ は4成分の行ベクトル

$$\tilde{F}_{\ell j m} = \frac{1}{x} \begin{pmatrix} f_{\ell j} \mathcal{Y}_{\ell j m}^\dagger & -ig_{\ell j} \mathcal{Y}_{\ell' j m}^\dagger \end{pmatrix}, \quad \tilde{U}_{\ell j m} = \frac{1}{x} \begin{pmatrix} u_{\ell j} \mathcal{Y}_{\ell j m}^\dagger & -iv_{\ell j} \mathcal{Y}_{\ell' j m}^\dagger \end{pmatrix}$$

である。 $f_{\ell j}, g_{\ell j}$ は実数であるから $\tilde{F}_{\ell j m} = F_{\ell j m}^\dagger$ であるが $\tilde{U}_{\ell j m} \neq U_{\ell j m}^\dagger$ である。

証明 ∇ を \mathbf{x} に関する gradient とすると

$$\begin{aligned} \boldsymbol{\alpha} \cdot \nabla \theta(x-y) U_{\ell j m}(\mathbf{x}) &= \delta(x-y) \boldsymbol{\alpha} \cdot \hat{\mathbf{x}} U_{\ell j m}(\mathbf{x}) + \theta(x-y) \boldsymbol{\alpha} \cdot \nabla U_{\ell j m}(\mathbf{x}) \\ \boldsymbol{\alpha} \cdot \nabla \theta(y-x) F_{\ell j m}(\mathbf{x}) &= -\delta(x-y) \boldsymbol{\alpha} \cdot \hat{\mathbf{x}} F_{\ell j m}(\mathbf{x}) + \theta(y-x) \boldsymbol{\alpha} \cdot \nabla F_{\ell j m}(\mathbf{x}) \end{aligned}$$

であるから

$$\begin{aligned} (h_0(\mathbf{x}) - E) \theta(x-y) U_{\ell j m}(\mathbf{x}) &= -i\delta(x-y) \boldsymbol{\alpha} \cdot \hat{\mathbf{x}} U_{\ell j m}(\mathbf{x}) + \theta(x-y) (h_0(\mathbf{x}) - E) U_{\ell j m}(\mathbf{x}) \\ &= -i\delta(x-y) \boldsymbol{\alpha} \cdot \hat{\mathbf{x}} U_{\ell j m}(\mathbf{x}) \\ (h_0(\mathbf{x}) - E) \theta(y-x) F_{\ell j m}(\mathbf{x}) &= i\delta(x-y) \boldsymbol{\alpha} \cdot \hat{\mathbf{x}} F_{\ell j m}(\mathbf{x}) \end{aligned}$$

したがって

$$(h_0(\mathbf{x}) - E) G(\mathbf{x}, \mathbf{y}; E) = -i \sum_{\ell j m} \frac{\delta(x-y)}{W_{\ell j}} \boldsymbol{\alpha} \cdot \hat{\mathbf{x}} \left(U_{\ell j m}(\mathbf{x}) \tilde{F}_{\ell j m}(\mathbf{y}) - F_{\ell j m}(\mathbf{x}) \tilde{U}_{\ell j m}(\mathbf{y}) \right)$$

ところで

$$\boldsymbol{\sigma} \cdot \hat{\mathbf{x}} \mathcal{Y}_{\ell j m} = -\mathcal{Y}_{\ell' j m}, \quad \boldsymbol{\sigma} \cdot \hat{\mathbf{x}} \mathcal{Y}_{\ell' j m} = -\mathcal{Y}_{\ell j m}$$

であるから (簡単のため動径方向の波動関数の添字は省略。また, $x = y$ のみを考えればよいから (x) も省略)

$$-i \boldsymbol{\alpha} \cdot \hat{\mathbf{x}} U_{\ell j m}(\mathbf{x}) = -\frac{i}{x} \begin{pmatrix} 0 & \boldsymbol{\sigma} \cdot \hat{\mathbf{x}} \\ \boldsymbol{\sigma} \cdot \hat{\mathbf{x}} & 0 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} u \mathcal{Y}_{\ell j m}(\hat{\mathbf{x}}) \\ iv \mathcal{Y}_{\ell' j m}(\hat{\mathbf{x}}) \end{pmatrix} = \frac{1}{x} \begin{pmatrix} -v \mathcal{Y}_{\ell j m}(\hat{\mathbf{x}}) \\ iu \mathcal{Y}_{\ell' j m}(\hat{\mathbf{x}}) \end{pmatrix}$$

これから

$$\begin{aligned} -i \boldsymbol{\alpha} \cdot \hat{\mathbf{x}} U_{\ell j m}(\mathbf{x}) \tilde{F}_{\ell j m}(\mathbf{y}) &= \frac{1}{x^2} \begin{pmatrix} -v \mathcal{Y}_{\ell j m}(\hat{\mathbf{x}}) \\ iu \mathcal{Y}_{\ell' j m}(\hat{\mathbf{x}}) \end{pmatrix} \begin{pmatrix} f \mathcal{Y}_{\ell j m}^\dagger(\hat{\mathbf{y}}) & -ig \mathcal{Y}_{\ell' j m}^\dagger(\hat{\mathbf{y}}) \end{pmatrix} \\ &= \frac{1}{x^2} \begin{pmatrix} -vf \mathcal{Y}_{\ell j m}(\hat{\mathbf{x}}) \mathcal{Y}_{\ell j m}^\dagger(\hat{\mathbf{y}}) & ivg \mathcal{Y}_{\ell j m}(\hat{\mathbf{x}}) \mathcal{Y}_{\ell' j m}^\dagger(\hat{\mathbf{y}}) \\ iuf \mathcal{Y}_{\ell' j m}(\hat{\mathbf{x}}) \mathcal{Y}_{\ell j m}^\dagger(\hat{\mathbf{y}}) & iug \mathcal{Y}_{\ell' j m}(\hat{\mathbf{x}}) \mathcal{Y}_{\ell' j m}^\dagger(\hat{\mathbf{y}}) \end{pmatrix} \end{aligned}$$

$u \leftrightarrow f, v \leftrightarrow g$ の置き換えをすれば

$$-i \boldsymbol{\alpha} \cdot \hat{\mathbf{x}} F_{\ell j m}(\mathbf{x}) \tilde{U}_{\ell j m}(\mathbf{y}) = \frac{1}{x^2} \begin{pmatrix} -gu \mathcal{Y}_{\ell j m}(\hat{\mathbf{x}}) \mathcal{Y}_{\ell j m}^\dagger(\hat{\mathbf{y}}) & igv \mathcal{Y}_{\ell j m}(\hat{\mathbf{x}}) \mathcal{Y}_{\ell' j m}^\dagger(\hat{\mathbf{y}}) \\ ifu \mathcal{Y}_{\ell' j m}(\hat{\mathbf{x}}) \mathcal{Y}_{\ell j m}^\dagger(\hat{\mathbf{y}}) & fvu \mathcal{Y}_{\ell' j m}(\hat{\mathbf{x}}) \mathcal{Y}_{\ell' j m}^\dagger(\hat{\mathbf{y}}) \end{pmatrix}$$

したがって

$$\begin{aligned}
& (h_0(\mathbf{x}) - E)G(\mathbf{x}, \mathbf{y} : E) \\
&= \frac{\delta(\mathbf{x} - \mathbf{y})}{x^2} \sum_{\ell jm} \frac{1}{W_{\ell j}} \begin{pmatrix} (ug - vf)\mathcal{Y}_{\ell jm}(\hat{\mathbf{x}})\mathcal{Y}_{\ell jm}^\dagger(\hat{\mathbf{y}}) & 0 \\ 0 & (ug - vf)\mathcal{Y}_{\ell' jm}(\hat{\mathbf{x}})\mathcal{Y}_{\ell' jm}^\dagger(\hat{\mathbf{y}}) \end{pmatrix} \\
&= \frac{\delta(\mathbf{x} - \mathbf{y})}{x^2} \sum_{\ell jm} \begin{pmatrix} \mathcal{Y}_{\ell jm}(\hat{\mathbf{x}})\mathcal{Y}_{\ell jm}^\dagger(\hat{\mathbf{y}}) & 0 \\ 0 & \mathcal{Y}_{\ell' jm}(\hat{\mathbf{x}})\mathcal{Y}_{\ell' jm}^\dagger(\hat{\mathbf{y}}) \end{pmatrix} \\
&= \frac{\delta(\mathbf{x} - \mathbf{y})}{x^2} \delta(\hat{\mathbf{x}} - \hat{\mathbf{y}}) = \delta(\mathbf{x} - \mathbf{y}) \tag{4.64}
\end{aligned}$$

になる。 $F_{\ell jm}$ の代わりに原点で発散する解 $\Phi_{\ell jm}$ を用いても (4.63) は (4.64) を満たすが、この場合

$$G(\mathbf{x} = 0, \mathbf{y} : E) = \sum_{\ell jm} \frac{1}{W_{\ell j}} \Phi_{\ell jm}(0) \tilde{U}_{\ell jm}(\mathbf{y})$$

は発散する。一方, (4.52) で $\mathbf{x} = 0$ とすると

$$G(\mathbf{x} = 0, \mathbf{y} : E) = \sum_{\alpha} \frac{\varphi_{\alpha}(0) \varphi_{\alpha}^\dagger(\mathbf{y})}{\omega_{\alpha} - E - i\varepsilon}$$

固有状態 φ_{α} は原点で有界である。したがって, 原点で正則な解 $F_{\ell jm}$ を用いなければならない。一方, $U_{\ell jm}$ として $x \rightarrow \infty$ で e^{-ikx} になる解 $U_{\ell jm}^{(-)}$ を用いてもよいわけだが, 自由粒子の $G(\mathbf{x}, \mathbf{y} : E)$ が $E > -M$ の場合

$$G(\mathbf{x}, \mathbf{y} : E) \xrightarrow{x \rightarrow \infty} (E + h_0(\mathbf{x})) \frac{e^{ikx}}{4\pi x}$$

になるのと同様に, 外向き球面波 e^{ikx} になる解を用いなければならない。 ■

$G(\mathbf{x}, \mathbf{y} : E)$ は

$$G(\mathbf{x}, \mathbf{y} : E) = \sum_{\alpha} \varphi_{\alpha}(\mathbf{x}) \varphi_{\alpha}^\dagger(\mathbf{y}) \left(\frac{P}{\omega_{\alpha} - E} + i\pi \delta(\omega_{\alpha} - E) \right)$$

であるが, デルタ関数の特異性は, ω_{α} が連続的固有値 ($\omega_{\alpha} > M$) ならば ω_{α} で積分するから G には現れない。しかし, 束縛状態である離散的固有値による特異性は G に現れる。(4.63) で E が離散的固有値 ω_{α} に一致する場合 $U_{\ell jm} = C F_{\ell jm}$ になるから $W_{\ell j} = 0$ であり (4.63) は発散する。応答関数への束縛状態の寄与は Green 関数を用いずに

$$\sum_{ph} \left| \langle p | f(\mathbf{q}) | h \rangle \right|^2 \delta(\omega_{ph} - q_0), \quad p = \text{束縛された粒子状態}$$

を直接求めればよいが, 準弾性散乱では連続状態の寄与に比べて重要ではないので無視する。

陽子の場合, $V_0(x)$ はクーロンポテンシャル $V_C(x)$ を含む。 x が十分大きいところでは

$$V_C(x) = \frac{Z\alpha}{x}, \quad \alpha = \text{微細構造定数}$$

であるが, これは x の関数として非常にゆっくり減少する。したがって, 外向き球面波の解を求めるとき, 自由粒子の波動関数 (4.62) ではなく, 純粋なクーロン波動関数を用いる必要があるかもしれない。

4.9 角度積分

縦方向応答関数の場合, (4.50) の Γ は (4.19) より

$$\Gamma_{\mathbf{q}} = \gamma^0 \Gamma^0 = F_1(q_\mu^2) + \frac{F_2(q_\mu^2)}{2M} \mathbf{q} \cdot \boldsymbol{\gamma}, \quad \Gamma_{\mathbf{q}}^\dagger = \Gamma_{-\mathbf{q}} \quad (4.65)$$

である。また, 空孔状態 $\varphi_h(\mathbf{x})$ は

$$\varphi_h(\mathbf{x}) = \frac{1}{x} \begin{pmatrix} f_h(\mathbf{x}) \mathcal{Y}_{\ell_h j_h m_h}(\hat{\mathbf{x}}) \\ i g_h(\mathbf{x}) \mathcal{Y}_{\ell_h' j_h' m_h}(\hat{\mathbf{x}}) \end{pmatrix}, \quad f_h(\mathbf{x}), g_h(\mathbf{x}) = \text{実関数}$$

とおける。(4.51) から

$$G_h(\Gamma_a, \Gamma_b : E, \mathbf{q}) = \sum_{m_h} \int d^3x d^3y \exp(-i\mathbf{q} \cdot (\mathbf{x} - \mathbf{y})) \varphi_h^\dagger(\mathbf{x}) \Gamma_a G(\mathbf{x}, \mathbf{y} : E) \Gamma_b \varphi_h(\mathbf{y}) \quad (4.66)$$

とすると, 縦方向応答関数の場合

$$\Pi(q_0, q) = \sum_h \left(G_h(\Gamma_{-\mathbf{q}}, \Gamma_{\mathbf{q}} : E_h + q_0, \mathbf{q}) + \left(G_h(\Gamma_{\mathbf{q}}, \Gamma_{-\mathbf{q}} : E_h - q_0, -\mathbf{q}) \right)^* \right) \quad (4.67)$$

である (h の和は m_h 以外の量子数について行う)。 (4.63) を使うと

$$\begin{aligned} G_h(\Gamma_a, \Gamma_b : E, \mathbf{q}) &= \sum_{m_h \ell_j m} \frac{1}{W_{\ell_j}} \int d^3x d^3y \exp(-i\mathbf{q} \cdot (\mathbf{x} - \mathbf{y})) \\ &\quad \times \left(\theta(x - y) \varphi_h^\dagger(\mathbf{x}) \Gamma_a U_{\ell_j m}(\mathbf{x}) \tilde{F}_{\ell_j m}(\mathbf{y}) \Gamma_b \varphi_h(\mathbf{y}) \right. \\ &\quad \left. + \theta(y - x) \varphi_h^\dagger(\mathbf{x}) \Gamma_a F_{\ell_j m}(\mathbf{x}) \tilde{U}_{\ell_j m}(\mathbf{y}) \Gamma_b \varphi_h(\mathbf{y}) \right) \end{aligned}$$

になる。

σ^2, σ_z の固有関数である 2 成分スピノールを χ_{m_s} とすると

$$\mathcal{Y}_{\ell_j m} = \sum_{m_\ell m_s} \langle \ell m_\ell \frac{1}{2} m_s | j m \rangle Y_{\ell m_\ell} \chi_{m_s}$$

であるから

$$\begin{aligned} i\sigma_y \mathcal{Y}_{\ell_j m}^* &= \sum \langle \ell m_\ell \frac{1}{2} m_s | j m \rangle Y_{\ell m_\ell}^* \begin{pmatrix} 0 & 1 \\ -1 & 0 \end{pmatrix} \chi_{m_s} \\ &= \sum \langle \ell m_\ell \frac{1}{2} m_s | j m \rangle (-1)^{m_\ell} Y_{\ell -m_\ell} (-1)^{m_s+1/2} \chi_{-m_s} \\ &= \sum (-1)^{m+1/2} \langle \ell -m_\ell \frac{1}{2} -m_s | j m \rangle Y_{\ell m_\ell} \chi_{m_s} \\ &= \sum (-1)^{m+1/2} (-1)^{\ell+1/2-j} \langle \ell m_\ell \frac{1}{2} m_s | j -m \rangle Y_{\ell m_\ell} \chi_{m_s} \\ &= (-1)^{j+m-\ell} \mathcal{Y}_{\ell_j -m} \end{aligned}$$

これから $U_{\ell_j -m}$ の転置 $U_{\ell_j -m}^t$ は ($\sigma_y^t = -\sigma_y$)

$$\begin{aligned} U_{\ell_j -m}^t &= \frac{1}{x} \begin{pmatrix} u_{\ell_j} \mathcal{Y}_{\ell_j -m}^t & i v_{\ell_j} \mathcal{Y}_{\ell_j' -m}^t \end{pmatrix} \\ &= \frac{i(-1)^{j+m-\ell}}{x} \begin{pmatrix} u_{\ell_j} \mathcal{Y}_{\ell_j m}^t \sigma_y^t & -i v_{\ell_j} \mathcal{Y}_{\ell_j' m}^t \sigma_y^t \end{pmatrix} = -i(-1)^{j+m-\ell} \tilde{U}_{\ell_j m} \sigma_y \end{aligned} \quad (4.68)$$

$$\tilde{U}_{\ell_j -m}^t = i(-1)^{j+m-\ell} \sigma_y U_{\ell_j m} \quad (4.69)$$

$F_{\ell jm}$, φ_h についても同じ関係式が成り立つ (φ_h の動径波動関数は実数であるから $\varphi_h^\dagger = \tilde{\varphi}_h$)。したがって、例えば

$$\varphi_h^\dagger(\mathbf{x})\Gamma_a F_{\ell jm}(\mathbf{x}) = F_{\ell jm}^t(\mathbf{x})\Gamma_a^\dagger \tilde{\varphi}_h^t = (-1)^{j-m-\ell}(-1)^{j_h-m_h-\ell_h} \tilde{F}_{\ell j-m} \sigma_y \Gamma_a^\dagger \sigma_y \varphi_{\ell_h j_h - m_h}$$

になるから

$$\sum_{m_h m} \varphi_h^\dagger(\mathbf{x})\Gamma_a F_{\ell jm}(\mathbf{x}) \tilde{U}_{\ell jm}(\mathbf{y})\Gamma_b \varphi_h(\mathbf{y}) = \sum_{m_h m} \tilde{F}_{\ell jm}(\mathbf{x}) \bar{\Gamma}_a \varphi_h(\mathbf{x}) \varphi_h^\dagger(\mathbf{y}) \bar{\Gamma}_b U_{\ell jm}(\mathbf{y})$$

ただし

$$\bar{\Gamma} = \sigma_y \Gamma^t \sigma_y = (\sigma_y \Gamma \sigma_y)^t$$

と表せる。これから

$$\begin{aligned} G_h(\Gamma_a, \Gamma_b : E, \mathbf{q}) &= \sum_{m_h \ell jm} \frac{1}{W_{\ell j}} \int d^3x d^3y \theta(x-y) \\ &\times \left(\exp(-i\mathbf{q}\cdot(\mathbf{x}-\mathbf{y})) \varphi_h^\dagger(\mathbf{x})\Gamma_a U_{\ell jm}(\mathbf{x}) \tilde{F}_{\ell jm}(\mathbf{y})\Gamma_b \varphi_h(\mathbf{y}) \right. \\ &\quad \left. + \exp(i\mathbf{q}\cdot(\mathbf{x}-\mathbf{y})) \varphi_h^\dagger(\mathbf{x})\bar{\Gamma}_b U_{\ell jm}(\mathbf{x}) \tilde{F}_{\ell jm}(\mathbf{y})\bar{\Gamma}_a \varphi_h(\mathbf{y}) \right) \end{aligned}$$

になる。指数関数の展開式

$$\exp(i\mathbf{q}\cdot\mathbf{x}) = 4\pi \sum_{\lambda\mu} i^\lambda j_\lambda(qx) Y_{\lambda\mu}(\hat{\mathbf{q}}) Y_{\lambda\mu}^*(\hat{\mathbf{x}})$$

を代入すると

$$\begin{aligned} &G_h(\Gamma_a, \Gamma_b : E, \mathbf{q}) \\ &= \sum \frac{(4\pi)^2}{W_{\ell j}} i^{\lambda'-\lambda} Y_{\lambda\mu}(\hat{\mathbf{q}}) Y_{\lambda'\mu'}(\hat{\mathbf{q}}) \int dx dy \theta(x-y) j_\lambda(qx) j_{\lambda'}(qy) \\ &\times \left(\int d\Omega_x Y_{\lambda\mu}^*(\hat{\mathbf{x}}) x \varphi_h^\dagger(\mathbf{x}) \Gamma_a x U_{\ell jm}(\mathbf{x}) \int d\Omega_y Y_{\lambda'\mu'}(\hat{\mathbf{y}}) y \tilde{F}_{\ell jm}(\mathbf{y}) \Gamma_b y \varphi_h(\mathbf{y}) \right. \\ &\quad \left. + (-1)^{\lambda'-\lambda} \int d\Omega_x Y_{\lambda\mu}^*(\hat{\mathbf{x}}) x \varphi_h^\dagger(\mathbf{x}) \bar{\Gamma}_b x U_{\ell jm}(\mathbf{x}) \int d\Omega_y Y_{\lambda'\mu'}(\hat{\mathbf{y}}) y \tilde{F}_{\ell jm}(\mathbf{y}) \bar{\Gamma}_a y \varphi_h(\mathbf{y}) \right) \quad (4.70) \end{aligned}$$

である ($d\Omega$ は角度についての積分)。

$$\Gamma_{\mathbf{q}} = F_1 - iq \frac{F_2}{2M} \Sigma_{\mathbf{q}}, \quad \Sigma_{\mathbf{q}} = i\boldsymbol{\gamma}\cdot\hat{\mathbf{q}}, \quad \Sigma_{\mathbf{q}}^\dagger = \Sigma_{\mathbf{q}}$$

であるから, $\Gamma_a = 1$, $\Gamma_a = \Sigma_{\mathbf{q}}$ について角度積分を実行する。なお, 両者の場合 $\bar{\Gamma}_a = \Gamma_a$ であるから $\Gamma_a = \Gamma_b$ のとき

$$\begin{aligned} &G_h(\Gamma_a, \Gamma_a : E, \mathbf{q}) \\ &= \sum \frac{(4\pi)^2}{W_{\ell j}} i^{\lambda'-\lambda} \left(1 + (-1)^{\lambda'-\lambda} \right) Y_{\lambda\mu}(\hat{\mathbf{q}}) Y_{\lambda'\mu'}(\hat{\mathbf{q}}) \int dx dy \theta(x-y) j_\lambda(qx) j_{\lambda'}(qy) \\ &\times \int d\Omega_x Y_{\lambda\mu}^*(\hat{\mathbf{x}}) x \varphi_h^\dagger(\mathbf{x}) \Gamma_a x U_{\ell jm}(\mathbf{x}) \int d\Omega_y Y_{\lambda'\mu'}(\hat{\mathbf{y}}) y \tilde{F}_{\ell jm}(\mathbf{y}) \Gamma_a y \varphi_h(\mathbf{y}) \quad (4.71) \end{aligned}$$

になる。

$\Gamma_a = 1$ の場合

$\mathcal{Y}'_{\ell jm} = -\boldsymbol{\sigma} \cdot \hat{\mathbf{x}} \mathcal{Y}_{\ell jm}$ であるから

$$\begin{aligned} \int d\Omega Y_{\lambda\mu}^*(\hat{\mathbf{x}}) x \varphi_h^\dagger(\mathbf{x}) x U_{\ell jm}(\mathbf{x}) &= \int d\Omega Y_{\lambda\mu}^* \left(f_h u_{\ell j} \mathcal{Y}_{\ell_h j_h m_h}^\dagger \mathcal{Y}_{\ell jm} + g_h v_{\ell j} \mathcal{Y}_{\ell_h' j_h m_h}^\dagger \mathcal{Y}'_{\ell jm} \right) \\ &= \left(f_h u_{\ell j} + g_h v_{\ell j} \right) \langle \ell_h j_h m_h | Y_{\lambda\mu}^* | \ell j m \rangle \end{aligned}$$

Bohr & Mottelson (3A-14) より

$$\begin{aligned} \langle \ell_h j_h m_h | Y_{\lambda\mu}^* | \ell j m \rangle &= \frac{(-1)^\mu}{\sqrt{2j_h + 1}} \langle j m \lambda -\mu | j_h m_h \rangle \langle \ell_h j_h || Y_\lambda || \ell j \rangle \\ &= (-1)^{j_h - m_h - \lambda} \sqrt{\frac{2j + 1}{4\pi}} \langle j m j_h - m_h | \lambda \mu \rangle \langle j \frac{1}{2} \lambda 0 | j_h \frac{1}{2} \rangle P_{\ell + \lambda - \ell_h} \quad (4.72) \end{aligned}$$

ただし

$$P_n = \frac{1 + (-1)^n}{2}$$

したがって

$$\begin{aligned} &\int d\Omega Y_{\lambda\mu}^*(\hat{\mathbf{x}}) x \varphi_h^\dagger(\mathbf{x}) x U_{\ell jm}(\mathbf{x}) \\ &= \frac{(-1)^{j_h - m_h - \lambda}}{\sqrt{4\pi(2\lambda + 1)}} \langle j m j_h - m_h | \lambda \mu \rangle P_{\ell + \lambda - \ell_h} D_{\text{out}}(h, \ell j, \lambda : x) \quad (4.73) \end{aligned}$$

ただし

$$D_{\text{out}}(h, \ell j, \lambda : x) = \sqrt{(2\lambda + 1)(2j + 1)} \langle j \frac{1}{2} \lambda 0 | j_h \frac{1}{2} \rangle \left(f_h(x) u_{\ell j}(x) + g_h(x) v_{\ell j}(x) \right) \quad (4.74)$$

(4.68), (4.69) を使うと

$$\begin{aligned} \int d\Omega Y_{\lambda\mu}^*(\hat{\mathbf{x}}) x \tilde{F}_{\ell jm}(\mathbf{x}) x \varphi_h(\mathbf{x}) &= \int d\Omega Y_{\lambda\mu}^*(\hat{\mathbf{x}}) x \varphi_h^\dagger(\mathbf{x}) x \tilde{F}_{\ell jm}^\dagger(\mathbf{x}) \\ &= (-1)^{j_h - m_h - \ell_h} (-1)^{j - m - \ell} \int d\Omega Y_{\lambda\mu}^* x \varphi_{\ell_h j_h - m_h}^\dagger x F_{\ell j - m} \end{aligned}$$

(4.73) で U を F で置き換えれば

$$\begin{aligned} &\int d\Omega Y_{\lambda\mu}^*(\hat{\mathbf{x}}) x \tilde{F}_{\ell jm}(\mathbf{x}) x \varphi_h(\mathbf{x}) \\ &= \frac{(-1)^{j_h - m_h - \lambda - \mu}}{\sqrt{4\pi(2\lambda + 1)}} \langle j m j_h - m_h | \lambda -\mu \rangle P_{\ell + \lambda - \ell_h} D_{\text{in}}(h, \ell j, \lambda : x) \quad (4.75) \end{aligned}$$

ここで

$$D_{\text{in}}(h, \ell j, \lambda : x) = \sqrt{(2\lambda + 1)(2j + 1)} \langle j \frac{1}{2} \lambda 0 | j_h \frac{1}{2} \rangle \left(f_h(x) f_{\ell j}(x) + g_h(x) g_{\ell j}(x) \right) \quad (4.76)$$

なお, (4.75) を導くとき位相は

$$\begin{aligned} &(-1)^{j_h - m_h - \ell_h} (-1)^{j - m - \ell} (-1)^{j_h + m_h - \lambda} (-1)^{j + j_h - \lambda} \\ &= (-1)^{j_h - m_h - \ell_h} (-1)^{j - m - \ell + j_h + m_h - \lambda - (j + j_h - \lambda)} = (-1)^{j_h - m_h - \ell_h} (-1)^{m_h - m - \ell} \end{aligned}$$

であるが, $m_h - m = \mu$, $\ell + \lambda - \ell_h = \text{偶数}$ より $(-1)^{j_h - m_h - \lambda - \mu}$ になる。

$\Gamma_a = \Sigma_q$ の場合

$$\Sigma_q = i\gamma \cdot \hat{\mathbf{q}} = \begin{pmatrix} 0 & i\boldsymbol{\sigma} \cdot \hat{\mathbf{q}} \\ -i\boldsymbol{\sigma} \cdot \hat{\mathbf{q}} & 0 \end{pmatrix}, \quad \mathcal{Y}_{\ell jm} = -\boldsymbol{\sigma} \cdot \hat{\mathbf{x}} \mathcal{Y}_{\ell jm}$$

であるから

$$\int d\Omega_x Y_{\lambda\mu}^*(\hat{\mathbf{x}}) x \varphi_h^\dagger(\mathbf{x}) \Sigma_q x U_{\ell jm}(\mathbf{x}) = f_h v_{\ell j} A^{(+)} + g_h u_{\ell j} A^{(-)} \quad (4.77)$$

ここで

$$\begin{aligned} A^{(\pm)} &= \langle l_h j_h m_h | Y_{\lambda\mu}^* \left\{ \begin{array}{l} \boldsymbol{\sigma} \cdot \hat{\mathbf{q}} \boldsymbol{\sigma} \cdot \hat{\mathbf{x}} \\ \boldsymbol{\sigma} \cdot \hat{\mathbf{x}} \boldsymbol{\sigma} \cdot \hat{\mathbf{q}} \end{array} \right\} | \ell j m \rangle \\ &= \sum_{LJM} \langle l_h j_h m_h | Y_{\lambda\mu}^* | LJM \rangle \langle LJM | \left\{ \begin{array}{l} \boldsymbol{\sigma} \cdot \hat{\mathbf{q}} \boldsymbol{\sigma} \cdot \hat{\mathbf{x}} \\ \boldsymbol{\sigma} \cdot \hat{\mathbf{x}} \boldsymbol{\sigma} \cdot \hat{\mathbf{q}} \end{array} \right\} | \ell j m \rangle \end{aligned}$$

である。 $\langle l_h j_h m_h | Y_{\lambda\mu}^* | LJM \rangle$ は (4.72) から求まる。ベクトル \mathbf{a} の球成分を

$$a_{\pm 1} = \mp \frac{a_x \pm i a_y}{\sqrt{2}}, \quad a_0 = a_z$$

とすると

$$a_\nu = \sqrt{4\pi/3} |\mathbf{a}| Y_{1\nu}(\mathbf{a}), \quad \mathbf{a} \cdot \mathbf{b} = \sum_\nu a_\nu^* b_\nu, \quad (\mathbf{a} \times \mathbf{b})_\nu = -i\sqrt{2} (ab)_{(11)1\nu}$$

であるから

$$\boldsymbol{\sigma} \cdot \hat{\mathbf{q}} \boldsymbol{\sigma} \cdot \hat{\mathbf{x}} = \hat{\mathbf{q}} \cdot \hat{\mathbf{x}} + i\hat{\mathbf{q}} \cdot (\hat{\mathbf{x}} \times \boldsymbol{\sigma}) = \frac{4\pi}{3} \sum_\nu Y_{1\nu}^*(\hat{\mathbf{q}}) \left(Y_{1\nu}(\hat{\mathbf{x}}) + \sqrt{2} (Y_1(\hat{\mathbf{x}}) \boldsymbol{\sigma})_{(11)1\nu} \right)$$

になる。Bohr & Mottelson (3A-14), (3A-22) を使うと

$$\begin{aligned} &\langle LJM | \left\{ \begin{array}{l} \boldsymbol{\sigma} \cdot \hat{\mathbf{q}} \boldsymbol{\sigma} \cdot \hat{\mathbf{x}} \\ \boldsymbol{\sigma} \cdot \hat{\mathbf{x}} \boldsymbol{\sigma} \cdot \hat{\mathbf{q}} \end{array} \right\} | \ell j m \rangle \\ &= \frac{4\pi}{3} \sum_\nu Y_{1\nu}^*(\hat{\mathbf{q}}) \frac{\langle j m 1 \nu | JM \rangle}{\sqrt{2J+1}} \left(\langle LJ || Y_1 || \ell j \rangle \pm \sqrt{2} \langle LJ || (Y_1 \boldsymbol{\sigma})_{(11)1} || \ell j \rangle \right) \\ &= \sqrt{\frac{4\pi}{3} \frac{2j+1}{2J+1}} P_{\ell+1-L} B_{\ell j J}^{(\pm)} \sum_\nu \langle 1 \nu j m | JM \rangle Y_{1\nu}^*(\hat{\mathbf{q}}) \end{aligned}$$

ただし

$$B_{\ell j J}^{(\pm)} = \langle j \frac{1}{2} 1 0 | J \frac{1}{2} \rangle \pm (-1)^{j+\ell-1/2} \sqrt{2} \langle j -\frac{1}{2} 1 1 | J \frac{1}{2} \rangle$$

これから

$$\begin{aligned} A^{(\pm)} &= \sum_{JM\nu} \sqrt{\frac{2j+1}{3}} (-1)^{j_h - m_h - \lambda} P_{\ell+\ell_h+\lambda+1} \langle J \frac{1}{2} \lambda 0 | j_h \frac{1}{2} \rangle B_{\ell j J}^{(\pm)} \\ &\quad \times \langle 1 \nu j m | JM \rangle \langle JM j_h - m_h | \lambda \mu \rangle Y_{1\nu}^*(\hat{\mathbf{q}}) \end{aligned}$$

CG 係数を組み替えて $\langle j m j_h - m_h | \dots \rangle$ になるようにする。そこで

$$\begin{aligned} &\sum_{m_e} \langle a m_a b m_b | e m_e \rangle \langle e m_e d m_d | c m_c \rangle \\ &= \sum_{f m_f} \sqrt{(2e+1)(2f+1)} \langle b m_b d m_d | f m_f \rangle \langle a m_a f m_f | c m_c \rangle W(abcd; ef) \quad (4.78) \end{aligned}$$

であるラカー係数 W を使うと (Rose (6.4b), あるいは Edmonds (6.2.6))

$$\begin{aligned} & \sum_M \langle 1\nu j m | J M \rangle \langle J M j_h - m_h | \lambda \mu \rangle \\ &= \sum_{IM_I} \sqrt{(2J+1)(2I+1)} \langle j m j_h - m_h | I M_I \rangle \langle 1\nu I M_I | \lambda \mu \rangle W(1j\lambda j_h; JI) \end{aligned}$$

になるから

$$A^{(\pm)} = \sum_{IM_I\nu} \frac{(-1)^{j_h - m_h - \lambda}}{\sqrt{3(2\lambda+1)}} P_{\ell+\ell_h+\lambda+1} C_{h\ell j \lambda I}^{(\pm)} \langle j m j_h - m_h | I M_I \rangle \langle 1\nu I M_I | \lambda \mu \rangle Y_{1\nu}^*(\hat{\mathbf{q}}) \quad (4.79)$$

ただし

$$\begin{aligned} C_{h\ell j \lambda I}^{(\pm)} &= \sum_J \sqrt{(2\lambda+1)(2j+1)(2J+1)(2I+1)} \langle J \frac{1}{2} \lambda 0 | j_h \frac{1}{2} \rangle B_{\ell j J}^{(+)} W(1j\lambda j_h; JI) \\ &= \sum_J \sqrt{(2\lambda+1)(2j+1)(2J+1)(2I+1)} \\ & \quad W(1j\lambda j_h; JI) \langle J \frac{1}{2} \lambda 0 | j_h \frac{1}{2} \rangle \left(\langle j \frac{1}{2} 1 0 | J \frac{1}{2} \rangle \pm (-1)^{j+\ell-1/2} \sqrt{2} \langle j - \frac{1}{2} 1 1 | J \frac{1}{2} \rangle \right) \quad (4.80) \end{aligned}$$

である。(4.79) を (4.77) に代入すると

$$\begin{aligned} & \int d\Omega Y_{\lambda\mu}^*(\hat{\mathbf{x}}) x \varphi_h^\dagger(\mathbf{x}) \Sigma_{\mathbf{q}} x U_{\ell j m}(\mathbf{x}) \\ &= \sum_{IM_I\nu} \frac{(-1)^{j_h - m_h - \lambda}}{\sqrt{3(2\lambda+1)}} \langle j m j_h - m_h | I M_I \rangle \langle 1\nu I M_I | \lambda \mu \rangle Y_{1\nu}^*(\hat{\mathbf{q}}) S_{\text{out}}(h, \ell j, \lambda, I : x) \quad (4.81) \end{aligned}$$

ただし

$$S_{\text{out}}(h, \ell j, \lambda, I : x) = C_{h\ell j \lambda I}^{(+)} f_h(x) v_{\ell j}(x) + C_{h\ell j \lambda I}^{(-)} g_h(x) u_{\ell j}(x) \quad (4.82)$$

$$S_{\text{in}}(h, \ell j, \lambda, I : x) = C_{h\ell j \lambda I}^{(+)} f_h(x) g_{\ell j}(x) + C_{h\ell j \lambda I}^{(-)} g_h(x) f_{\ell j}(x) \quad (4.83)$$

である。一方

$$\begin{aligned} & \int d\Omega Y_{\lambda\mu}^*(\hat{\mathbf{x}}) x \tilde{F}_{\ell j m}(\mathbf{x}) \Sigma_{\mathbf{q}} x \varphi_h(\mathbf{x}) \\ &= (-1)^{j_h - m_h - \ell_h} (-1)^{j - m - \ell} \int d\Omega Y_{\lambda\mu}^*(\hat{\mathbf{x}}) x \varphi_{\ell_h j_h - m_h}^\dagger(\mathbf{x}) \bar{\Sigma}_{\mathbf{q}} x F_{\ell j - m}(\mathbf{x}) \\ &= - \sum_{IM_I\nu} \frac{(-1)^{j_h - m_h + I + M}}{\sqrt{3(2\lambda+1)}} \langle j m j_h - m_h | I - M \rangle \langle 1\nu I M_I | \lambda \mu \rangle Y_{1\nu}^*(\hat{\mathbf{q}}) \\ & \quad P_{\ell+\ell_h+\lambda+1} S_{\text{in}}(h, \ell j, \lambda, I : x) \quad (4.84) \end{aligned}$$

$$\mathbf{G}_h^{11}(\mathbf{E}, \mathbf{q}) = \mathbf{G}_h(\mathbf{1}, \mathbf{1} : \mathbf{E}, \mathbf{q})$$

(4.71), (4.73), (4.75) より

$$\begin{aligned} G_h^{11}(E, \mathbf{q}) &= \sum_{\ell j} \frac{(4\pi)^2}{W_{\ell j}} i^{\lambda' - \lambda} \left(1 + (-1)^{\lambda' - \lambda} \right) Y_{\lambda\mu}(\hat{\mathbf{q}}) Y_{\lambda'\mu'}(\hat{\mathbf{q}}) \int dx dy \theta(x - y) j_\lambda(qx) j_{\lambda'}(qy) \\ & \quad \times \frac{(-1)^{j_h - m_h - \lambda}}{\sqrt{4\pi(2\lambda+1)}} \langle j m j_h - m_h | \lambda \mu \rangle P_{\ell+\lambda-\ell_h} D_{\text{out}}(h, \ell j, \lambda : x) \\ & \quad \times \frac{(-1)^{j_h - m_h - \lambda' - \mu'}}{\sqrt{4\pi(2\lambda'+1)}} \langle j m j_h - m_h | \lambda' - \mu' \rangle P_{\ell+\lambda'-\ell_h} D_{\text{in}}(h, \ell j, \lambda' : y) \end{aligned}$$

である。

$$\sum_{mm_h} \langle j m j_h - m_h | \lambda \mu \rangle \langle j m j_h - m_h | \lambda' - \mu' \rangle = \delta_{\lambda\lambda'} \delta_{\mu-\mu'}$$

であるから

$$G_h^{11}(E, \mathbf{q}) = 2 \sum \frac{P_{\ell+\lambda-\ell_h}}{W_{\ell j}} \frac{4\pi}{2\lambda+1} (-1)^\mu Y_{\lambda\mu}(\hat{\mathbf{q}}) Y_{\lambda-\mu}(\hat{\mathbf{q}}) \\ \times \int dx dy \theta(x-y) j_\lambda(qx) j_\lambda(qy) D_{\text{out}}(h, \ell j, \lambda : x) D_{\text{in}}(h, \ell j, \lambda : y)$$

更に

$$\sum_{\mu} (-1)^\mu Y_{\lambda\mu}(\hat{\mathbf{q}}) Y_{\lambda-\mu}(\hat{\mathbf{q}}) = \frac{2\lambda+1}{4\pi}$$

より

$$G_h^{11}(E, \mathbf{q}) = 2 \sum_{\ell j \lambda} \frac{P_{\ell+\lambda-\ell_h}}{W_{\ell j}} \int dx dy \theta(x-y) j_\lambda(qx) j_\lambda(qy) D_{\text{out}}(h, \ell j, \lambda : x) D_{\text{in}}(h, \ell j, \lambda : y)$$

$$G_h^{\sigma\sigma}(E, \mathbf{q}) = G_h(\Sigma_q, \Sigma_q : E, \mathbf{q})$$

$$G_h^{\sigma\sigma}(E, \mathbf{q}) = - \sum \frac{(4\pi)^2}{W_{\ell j}} i^{\lambda'-\lambda} \frac{1 + (-1)^{\lambda'-\lambda}}{3\sqrt{(2\lambda+1)(2\lambda'+1)}} P_{\ell+\ell_h+\lambda+1} P_{\ell+\ell_h+\lambda'+1} \\ \times (-1)^{I'+M'-\lambda} \langle j m j_h - m_h | I M \rangle \langle j m j_h - m_h | I' - M' \rangle \\ \times \langle 1 \nu I M | \lambda \mu \rangle \langle 1 \nu' I' M' | \lambda' \mu' \rangle Y_{\lambda\mu} Y_{\lambda'\mu'} Y_{1\nu}^* Y_{1\nu'}^* \\ \times \int dx dy \theta(x-y) j_\lambda(qx) j_{\lambda'}(qy) S_{\text{out}}(h, \ell j, \lambda, I : x) S_{\text{in}}(h, \ell j, \lambda', I' : y)$$

m, m_h について和をとれば $I' = I, M' = -M$ になるから

$$G_h^{\sigma\sigma}(E, \mathbf{q}) = - \sum \frac{(4\pi)^2}{W_{\ell j}} i^{\lambda'-\lambda} \frac{1 + (-1)^{\lambda'-\lambda}}{3\sqrt{(2\lambda+1)(2\lambda'+1)}} P_{\ell+\ell_h+\lambda+1} P_{\ell+\ell_h+\lambda'+1} \\ \times (-1)^{I-M-\lambda} \langle 1 \nu I M | \lambda \mu \rangle \langle 1 \nu' I - M | \lambda' \mu' \rangle Y_{1\nu}^* Y_{\lambda\mu} Y_{1\nu'}^* Y_{\lambda'\mu'} \\ \times \int dx dy \theta(x-y) j_\lambda(qx) j_{\lambda'}(qy) S_{\text{out}}(h, \ell j, \lambda, I : x) S_{\text{in}}(h, \ell j, \lambda', I : y)$$

ここで

$$\sum_{m_1 m_2} \langle \ell_1 m_1 \ell_2 m_2 | \ell m \rangle Y_{\ell_1 m_1}(\hat{\mathbf{q}}) Y_{\ell_2 m_2}(\hat{\mathbf{q}}) = \sqrt{\frac{(2\ell_1+1)(2\ell_2+1)}{4\pi(2\ell+1)}} \langle \ell_1 0 \ell_2 0 | \ell 0 \rangle Y_{\ell m}(\hat{\mathbf{q}})$$

を使うと

$$\sum_{\mu\nu} \langle 1 \nu I M | \lambda \mu \rangle Y_{1\nu}^* Y_{\lambda\mu} = (-1)^{\lambda-I} \sqrt{\frac{2\lambda+1}{2I+1}} \sum_{\mu\nu} \langle 1 -\nu \lambda \mu | I M \rangle Y_{1-\nu} Y_{\lambda\mu} \\ = (-1)^{\lambda-I} \sqrt{\frac{3}{4\pi} \frac{2\lambda+1}{2I+1}} \langle 1 0 \lambda 0 | I 0 \rangle Y_{IM} \\ = -(-1)^{\lambda-I} \sqrt{\frac{3}{4\pi} \frac{2\lambda+1}{2I+1}} \langle I 0 1 0 | \lambda 0 \rangle Y_{IM} \\ \sum_{\mu'\nu'} \langle 1 \nu' I - M | \lambda' \mu' \rangle Y_{1\nu'}^* Y_{\lambda'\mu'} = -(-1)^{\lambda'-I} \sqrt{\frac{3}{4\pi} \frac{2\lambda'+1}{2I+1}} \langle I 0 1 0 | \lambda' 0 \rangle Y_{I-M}$$

になるから

$$G_h^{\sigma\sigma}(E, \mathbf{q}) = - \sum \frac{i^{\lambda'-\lambda}}{W_{\ell j}} \left(1 + (-1)^{\lambda'-\lambda}\right) P_{\ell+\ell_h+\lambda+1} P_{\ell+\ell_h+\lambda'+1} \langle I 0 1 0 | \lambda 0 \rangle \langle I 0 1 0 | \lambda' 0 \rangle \\ (-1)^{I-\lambda} \int dx dy \theta(x-y) j_\lambda(qx) j_{\lambda'}(qy) S_{\text{out}}(h, \ell j, \lambda, I : x) S_{\text{in}}(h, \ell j, \lambda', I : y)$$

CG 係数より $\lambda, \lambda' = I \pm 1$ になるから $\lambda' - \lambda$ は偶数である。

$$i^{I-\lambda+1} i^{I-\lambda'+1} = i^{2I+2-2\lambda+\lambda-\lambda'} = -(-1)^{I-\lambda} i^{\lambda'-\lambda}$$

であるから

$$J_\alpha(h, \ell j, I : x) = \sum_{\lambda=I\pm 1} i^{I-\lambda+1} \langle I 0 1 0 | \lambda 0 \rangle j_\lambda(qx) S_\alpha(h, \ell j, \lambda, I : x), \quad \alpha = \text{out}, \text{in} \quad (4.85)$$

とおくと

$$G_h^{\sigma\sigma}(E, \mathbf{q}) = 2 \sum \frac{P_{\ell+\ell_h+\lambda}}{W_{\ell j}} \int dx dy \theta(x-y) J_{\text{out}}(h, \ell j, \lambda : x) J_{\text{in}}(h, \ell j, \lambda : y)$$

である。

$$G_h^{1\sigma}(E, \mathbf{q}) = G_h(1, \Sigma_q : E, \mathbf{q})$$

$G_h^{\sigma\sigma}$ と同様に行えば

$$G_h^{1\sigma}(E, \mathbf{q}) = \sum \frac{(4\pi)^2}{W_{\ell j}} i^{\lambda'-\lambda} Y_{\lambda\mu}(\hat{\mathbf{q}}) Y_{\lambda'\mu'}(\hat{\mathbf{q}}) \int dx dy \theta(x-y) j_\lambda(qx) j_{\lambda'}(qy) \\ \times \left(\int d\Omega_x Y_{\lambda\mu}^*(\hat{\mathbf{x}}) x \varphi_h^\dagger(\mathbf{x}) x U_{\ell jm}(\mathbf{x}) \int d\Omega_y Y_{\lambda'\mu'}^*(\hat{\mathbf{y}}) y \tilde{F}_{\ell jm}(\mathbf{y}) \Sigma_q y \varphi_h(\mathbf{y}) \right. \\ \left. + (-1)^{\lambda'-\lambda} \int d\Omega_x Y_{\lambda\mu}^*(\hat{\mathbf{x}}) x \varphi_h^\dagger(\mathbf{x}) \Sigma_q x U_{\ell jm}(\mathbf{x}) \int d\Omega_y Y_{\lambda'\mu'}^*(\hat{\mathbf{y}}) y \tilde{F}_{\ell jm}(\mathbf{y}) y \varphi_h(\mathbf{y}) \right) \\ = \sum \frac{P_{\ell+\ell_h+\lambda}}{W_{\ell j}} \int dx dy \theta(x-y) \\ \times \left(j_\lambda(qx) D_{\text{out}}(h, \ell j, \lambda : x) i^{\lambda-\lambda'} \langle \lambda 0 1 0 | \lambda' 0 \rangle j_{\lambda'}(qy) S_{\text{in}}(h, \ell j, \lambda', \lambda : y) \right. \\ \left. + j_{\lambda'}(qy) D_{\text{in}}(h, \ell j, \lambda : y) i^{\lambda-\lambda'} \langle \lambda 0 1 0 | \lambda' 0 \rangle j_\lambda(qx) S_{\text{out}}(h, \ell j, \lambda', \lambda : x) \right) \\ = -i \sum \frac{P_{\ell+\ell_h+\lambda}}{W_{\ell j}} \int dx dy \theta(x-y) \left(j_\lambda(qx) D_{\text{out}}(h, \ell j, \lambda : x) J_{\text{in}}(h, \ell j, \lambda : y) \right. \\ \left. + j_{\lambda'}(qy) D_{\text{in}}(h, \ell j, \lambda : y) J_{\text{out}}(h, \ell j, \lambda : x) \right)$$

一方

$$G_h(\Sigma_q, 1 : E, \mathbf{q}) = \sum \frac{(4\pi)^2}{W_{\ell j}} i^{\lambda'-\lambda} Y_{\lambda\mu}(\hat{\mathbf{q}}) Y_{\lambda'\mu'}(\hat{\mathbf{q}}) \int dx dy \theta(x-y) j_\lambda(qx) j_{\lambda'}(qy) \\ \times (-1)^{\lambda'-\lambda} \left(\int d\Omega_x Y_{\lambda\mu}^*(\hat{\mathbf{x}}) x \varphi_h^\dagger(\mathbf{x}) x U_{\ell jm}(\mathbf{x}) \int d\Omega_y Y_{\lambda'\mu'}^*(\hat{\mathbf{y}}) y \tilde{F}_{\ell jm}(\mathbf{y}) \Sigma_q y \varphi_h(\mathbf{y}) \right. \\ \left. + (-1)^{\lambda'-\lambda} \int d\Omega_x Y_{\lambda\mu}^*(\hat{\mathbf{x}}) x \varphi_h^\dagger(\mathbf{x}) \Sigma_q x U_{\ell jm}(\mathbf{x}) \int d\Omega_y Y_{\lambda'\mu'}^*(\hat{\mathbf{y}}) y \tilde{F}_{\ell jm}(\mathbf{y}) y \varphi_h(\mathbf{y}) \right)$$

$\langle \lambda 0 1 0 | \lambda' 0 \rangle$ より $\lambda' - \lambda = \pm 1$ であるから

$$G_h(\Sigma_q, 1 : E, \mathbf{q}) = -G_h(1, \Sigma_q : E, \mathbf{q})$$

になる。

4.10 相関関数の動径積分

(4.65) で定義した $\Gamma_{\mathbf{q}}$ は $\Gamma_{\mathbf{q}} = F_1(q_\mu^2) - iq \frac{F_2(q_\mu^2)}{2M} \Sigma_{\mathbf{q}}$ であるから

$$\begin{aligned}
G_h(E, \mathbf{q}) &= G_h(\Gamma_{-\mathbf{q}}, \Gamma_{\mathbf{q}} : E, \mathbf{q}) \\
&= F_1^2 G_h^{11} - 2iqF_1 \frac{F_2}{2M} G_h^{1\sigma} + q^2 \left(\frac{F_2}{2M} \right)^2 G_h^{\sigma\sigma} \\
&= 2 \sum \frac{P_{\ell+\ell_h+\lambda}}{W_{\ell_j}} \int dx dy \theta(x-y) \left[F_1^2 j_\lambda(qx) D_{\text{out}}(x) j_\lambda(qy) D_{\text{in}}(y) \right. \\
&\quad \left. - qF_1 \frac{F_2}{2M} \left(j_\lambda(qx) D_{\text{out}}(x) J_{\text{in}}(y) + j_\lambda(qy) D_{\text{in}}(y) J_{\text{out}}(x) \right) \right. \\
&\quad \left. + q^2 \left(\frac{F_2}{2M} \right)^2 J_{\text{out}}(x) J_{\text{in}}(y) \right] \\
&= 2 \sum \frac{P_{\ell+\ell_h+\lambda}}{W_{\ell_j}} \int dx dy \theta(x-y) K_{\text{out}}(h, \ell_j, \lambda : x) K_{\text{in}}(h, \ell_j, \lambda : y) \tag{4.86}
\end{aligned}$$

ただし

$$K_\alpha(h, \ell_j, \lambda : x) = F_1 j_\lambda(qx) D_\alpha(h, \ell_j, \lambda : x) - q \frac{F_2}{2M} J_\alpha(h, \ell_j, \lambda : x), \quad \alpha = \text{out}, \text{in} \tag{4.87}$$

である。 $G_h(\Gamma_{-\mathbf{q}}, \Gamma_{\mathbf{q}} : E, \mathbf{q})$ は \mathbf{q} の向きに依存しないから

$$G_h(\Gamma_{\mathbf{q}}, \Gamma_{-\mathbf{q}} : E, -\mathbf{q}) = G_h(\Gamma_{-\mathbf{q}}, \Gamma_{\mathbf{q}} : E, \mathbf{q}) = G_h(E, \mathbf{q})$$

である。したがって, (4.67) より

$$\Pi(q_0, q) = \sum_h \left(G_h(E_h + q_0, \mathbf{q}) + G_h^*(E_h - q_0, \mathbf{q}) \right) \tag{4.88}$$

結局, (4.86) の 2 重積分を実行することになる。

$K_\alpha(h, \ell_j, \lambda : x)$ の具体形を求める。(4.80), (4.82), (4.85) から

$$\begin{aligned}
J_{\text{out}}(h, \ell_j, \lambda : x) &= \sum_{\lambda'=\lambda\pm 1} i^{\lambda-\lambda'+1} \langle \lambda 0 1 0 | \lambda' 0 \rangle j_{\lambda'}(qx) \\
&\quad \times \left(C_{h\ell_j\lambda'\lambda}^{(+)} f_h(x) v_{\ell_j}(x) + C_{h\ell_j\lambda'\lambda}^{(-)} g_h(x) u_{\ell_j}(x) \right)
\end{aligned}$$

ただし (4.80) より

$$\begin{aligned}
C_{h\ell_j\lambda'\lambda}^{(\pm)} &= \sum_J \sqrt{(2\lambda'+1)(2\lambda+1)(2j+1)(2J+1)} W(1j\lambda'j_h; J\lambda) \langle J \frac{1}{2} \lambda' 0 | j_h \frac{1}{2} \rangle \\
&\quad \times \left(\langle j \frac{1}{2} 1 0 | J \frac{1}{2} \rangle \pm (-1)^{j+\ell-1/2} \sqrt{2} \langle j - \frac{1}{2} 1 1 | J \frac{1}{2} \rangle \right)
\end{aligned}$$

ここで

$$a = \lambda', \quad b = 1, \quad c = j_h, \quad d = j, \quad e = \lambda, \quad f = J$$

とすると

$$\begin{aligned}
C_{h\ell_j\lambda'\lambda}^{(\pm)} &= \sum_f \sqrt{(2a+1)(2d+1)(2e+1)(2f+1)} W(bdac; fe) \\
&\quad \times \langle f \frac{1}{2} a 0 | c \frac{1}{2} \rangle \left(\langle d \frac{1}{2} b 0 | f \frac{1}{2} \rangle \pm (-1)^{d+\ell-1/2} \sqrt{2} \langle d - \frac{1}{2} b 1 | f \frac{1}{2} \rangle \right) \\
&= (-1)^{a+b+d-c} \sqrt{(2a+1)(2d+1)} \sum_f \sqrt{(2e+1)(2f+1)} W(abcd; ef) \\
&\quad \times \langle a 0 f \frac{1}{2} | c \frac{1}{2} \rangle \left(\langle b 0 d \frac{1}{2} | f \frac{1}{2} \rangle \pm (-1)^{d+\ell-1/2} \sqrt{2} \langle b 1 d - \frac{1}{2} | f \frac{1}{2} \rangle \right)
\end{aligned}$$

(4.78) より

$$\begin{aligned}
C_{h\ell j\lambda'\lambda}^{(\pm)} &= (-1)^{a+b+d-c} \sqrt{(2a+1)(2d+1)} \\
&\quad \left(\langle a0\ b0 | e0 \rangle \langle e0\ d\frac{1}{2} | c\frac{1}{2} \rangle \pm (-1)^{d+\ell-1/2} \sqrt{2} \langle a0\ b1 | e1 \rangle \langle e1\ d-\frac{1}{2} | c\frac{1}{2} \rangle \right) \\
&= (-1)^{\lambda'+1+j-j_h} \sqrt{(2\lambda'+1)(2j+1)} \\
&\quad \left(\langle \lambda'0\ 10 | \lambda 0 \rangle \langle \lambda 0\ j\frac{1}{2} | j_h\frac{1}{2} \rangle \pm (-1)^{j+\ell-1/2} \sqrt{2} \langle \lambda'0\ 11 | \lambda 1 \rangle \langle \lambda 1\ j-\frac{1}{2} | j_h\frac{1}{2} \rangle \right) \\
&= (-1)^{\lambda'-\lambda+1} \sqrt{(2\lambda+1)(2j+1)} \\
&\quad \left(-\langle \lambda 0\ 10 | \lambda'0 \rangle \langle j\frac{1}{2}\ \lambda 0 | j_h\frac{1}{2} \rangle \pm (-1)^{j+\ell-1/2} \sqrt{2} \langle \lambda-1\ 11 | \lambda'0 \rangle \langle j-\frac{1}{2}\ \lambda 1 | j_h\frac{1}{2} \rangle \right)
\end{aligned}$$

$\lambda' = \lambda \pm 1$ より $(-1)^{\lambda'-\lambda+1} = 1$ である。Bohr & Mottelson (3A-23) を使くと

$$\begin{aligned}
C_{h\ell j\lambda'\lambda}^{(\pm)} &= -\sqrt{(2\lambda+1)(2j+1)} \langle j\frac{1}{2}\ \lambda 0 | j_h\frac{1}{2} \rangle \\
&\quad \left(\langle \lambda 0\ 10 | \lambda'0 \rangle \pm \sqrt{\frac{2}{\lambda(\lambda+1)}} \langle \lambda-1\ 11 | \lambda'0 \rangle \left((-1)^{\ell+\ell_h+\lambda} \kappa_h - \kappa_{\ell j} \right) \right)
\end{aligned}$$

ここで κ は (4.58) で定義したものである。 $\ell+\ell_h+\lambda =$ 偶数の場合だけ考えるから $(-1)^{\ell+\ell_h+\lambda} = 1$ である。したがって

$$\begin{aligned}
J_{\text{out}}(h, \ell j, \lambda : x) &= \sqrt{(2\lambda+1)(2j+1)} \langle j\frac{1}{2}\ \lambda 0 | j_h\frac{1}{2} \rangle \\
&\quad \times \left(d^{(+)}(x) f_h(x) v_{\ell j}(x) + d^{(-)}(x) g_h(x) u_{\ell j}(x) \right) \quad (4.89)
\end{aligned}$$

ただし

$$\begin{aligned}
d^{(\pm)}(x) &= -\sum_{\lambda'} i^{\lambda-\lambda'+1} \langle \lambda 0\ 10 | \lambda'0 \rangle \\
&\quad \times \left(\langle \lambda 0\ 10 | \lambda'0 \rangle \pm \sqrt{\frac{2}{\lambda(\lambda+1)}} \langle \lambda-1\ 11 | \lambda'0 \rangle (\kappa_h - \kappa_{\ell j}) \right) j_{\lambda'}(qx)
\end{aligned}$$

$\langle \lambda-m\ 1m | \lambda'0 \rangle$ は

λ'	$m=1$	$m=0$
$\lambda+1$	$\sqrt{\frac{\lambda}{2(2\lambda+1)}}$	$\sqrt{\frac{\lambda+1}{2\lambda+1}}$
$\lambda-1$	$\sqrt{\frac{\lambda+1}{2(2\lambda+1)}}$	$-\sqrt{\frac{\lambda}{2\lambda+1}}$

であるから ($\lambda=0$ のとき $\lambda' = \lambda+1$ だけ)

$$d^{(\pm)}(x) = \frac{1}{2\lambda+1} \left(\lambda j_{\lambda-1}(qx) - (\lambda+1) j_{\lambda+1}(qx) \pm (\kappa_{\ell j} - \kappa_h) (j_{\lambda-1}(qx) + j_{\lambda+1}(qx)) \right)$$

$j_{\lambda}(\rho)$ の性質 ($\lambda \neq 0$)

$$(2\lambda+1)j_{\lambda} = \rho(j_{\lambda-1} + j_{\lambda+1}), \quad j_{\lambda-1} = \left(\frac{d}{d\rho} + \frac{\lambda+1}{\rho} \right) j_{\lambda}, \quad j_{\lambda+1} = \left(-\frac{d}{d\rho} + \frac{\lambda}{\rho} \right) j_{\lambda}$$

より

$$d^{(\pm)}(x) = j'_{\lambda}(qx) \pm (\kappa_{\ell j} - \kappa_h) \frac{j_{\lambda}(qx)}{qx} \quad (4.90)$$

$\lambda = 0$ の場合 $\langle j \frac{1}{2} \lambda 0 | j_h \frac{1}{2} \rangle$ から $j = j_h$ であり $\ell + \ell_h + \lambda = \text{偶数}$ より $\ell = \ell_h$ になるから $\kappa_{\ell j} = \kappa_h$ である。したがって, (4.90) は $\lambda = 0$ のときも成り立つ。(4.74), (4.87), (4.89), (4.90) から

$$K_{\text{out}}(h, \ell j, \lambda : x) = \sqrt{(2\lambda + 1)(2j + 1)} \langle j \frac{1}{2} \lambda 0 | j_h \frac{1}{2} \rangle L_{\text{out}}(h, \ell j, \lambda : x)$$

ただし

$$\begin{aligned} L_{\text{out}}(h, \ell j, \lambda : x) &= F_1 j_\lambda(qx) \left(f_h(x) u_{\ell j}(x) + g_h(x) v_{\ell j}(x) \right) \\ &\quad - q \frac{F_2}{2M} \left[j'_\lambda(qx) \left(f_h v_{\ell j} + g_h u_{\ell j} \right) + \left(\kappa_{\ell j} - \kappa_h \right) \frac{j_\lambda(qx)}{qx} \left(f_h v_{\ell j} - g_h u_{\ell j} \right) \right] \end{aligned} \quad (4.91)$$

同様にして

$$\begin{aligned} K_{\text{in}}(h, \ell j, \lambda : x) &= \sqrt{(2\lambda + 1)(2j + 1)} \langle j \frac{1}{2} \lambda 0 | j_h \frac{1}{2} \rangle L_{\text{in}}(h, \ell j, \lambda : x) \\ L_{\text{in}}(h, \ell j, \lambda : x) &= F_1 j_\lambda(qx) \left(f_h(x) f_{\ell j}(x) + g_h(x) g_{\ell j}(x) \right) \\ &\quad - q \frac{F_2}{2M} \left[j'_\lambda(qx) \left(f_h g_{\ell j} + g_h f_{\ell j} \right) + \left(\kappa_{\ell j} - \kappa_h \right) \frac{j_\lambda(qx)}{qx} \left(f_h g_{\ell j} - g_h f_{\ell j} \right) \right] \end{aligned} \quad (4.92)$$

である。 L_α を用いれば

$$\begin{aligned} G_h(E, \mathbf{q}) &= 2 \sum \frac{P_{\ell+\ell_h+\lambda}}{W_{\ell j}} (2\lambda + 1)(2j + 1) \langle j \frac{1}{2} \lambda 0 | j_h \frac{1}{2} \rangle^2 \\ &\quad \times \int dx dy \theta(x - y) L_{\text{out}}(h, \ell j, \lambda : x) L_{\text{in}}(h, \ell j, \lambda : y) \end{aligned} \quad (4.93)$$

L_α の書き換え

$$\begin{aligned} A_1(x) &= F_1 \left(f_h u_{\ell j} + g_h v_{\ell j} \right) - \frac{F_2}{2M} \frac{\kappa_{\ell j} - \kappa_h}{x} \left(f_h v_{\ell j} - g_h u_{\ell j} \right), & A_2(x) &= \frac{F_2}{2M} \left(f_h v_{\ell j} + g_h u_{\ell j} \right) \\ B_1(x) &= F_1 \left(f_h f_{\ell j} + g_h g_{\ell j} \right) - \frac{F_2}{2M} \frac{\kappa_{\ell j} - \kappa_h}{x} \left(f_h g_{\ell j} - g_h f_{\ell j} \right), & B_2(x) &= \frac{F_2}{2M} \left(f_h g_{\ell j} + g_h f_{\ell j} \right) \end{aligned}$$

とおくと

$$L_{\text{out}} = j_\lambda(qx) A_1(x) - \frac{dj_\lambda(qx)}{dx} A_2(x), \quad L_{\text{in}} = j_\lambda(qx) B_1(x) - \frac{dj_\lambda(qx)}{dx} B_2(x)$$

であるから

$$I = \int dx dy \theta(x - y) L_{\text{out}}(h, \ell j, \lambda : x) L_{\text{in}}(h, \ell j, \lambda : y) = I_1 + I_2 + I_3 + I_4$$

ただし

$$\begin{aligned} I_1 &= \int dx dy \theta(x - y) j_\lambda(qx) A_1(x) j_\lambda(qy) B_1(y) \\ I_2 &= - \int dx dy \theta(x - y) \frac{dj_\lambda(qx)}{dx} A_2(x) j_\lambda(qy) B_1(y) \\ I_3 &= - \int dx dy \theta(x - y) j_\lambda(qx) A_1(x) \frac{dj_\lambda(qy)}{dy} B_2(y) \\ I_4 &= \int dx dy \theta(x - y) \frac{dj_\lambda(qx)}{dx} A_2(x) \frac{dj_\lambda(qy)}{dy} B_2(y) \end{aligned}$$

である。

$$I_2 = - \int dy j_\lambda(qy) B_1(y) \left(\left[\theta(x-y) j_\lambda(qx) A_2(x) \right]_{x=0}^{x=\infty} - \int dx j_\lambda(qx) \frac{d}{dx} \theta(x-y) A_2(x) \right)$$

$\theta(-y) = 0$, $A_2(x) \xrightarrow{x \rightarrow \infty} 0$ であるから

$$\begin{aligned} I_2 &= \int dy j_\lambda(qy) B_1(y) \int dx j_\lambda(qx) \left(\delta(x-y) A_2(x) + \theta(x-y) A_2'(x) \right) \\ &= \int dx j_\lambda^2(qx) A_2(x) B_1(x) + \int dx dy \theta(x-y) j_\lambda(qx) A_2'(x) j_\lambda(qy) B_1(y) \end{aligned}$$

になる。

$$I_3 = - \int dx j_\lambda(qx) A_1(x) \left(\left[\theta(x-y) j_\lambda(qy) B_2(y) \right]_{y=0}^{y=\infty} - \int dy j_\lambda(qy) \frac{d}{dy} \theta(x-y) B_2(y) \right)$$

$\theta(x-\infty) = 0$, $B_2(y) \xrightarrow{y \rightarrow 0} 0$ より

$$I_3 = - \int dx j_\lambda^2(qx) A_1(x) B_2(x) + \int dx dy \theta(x-y) j_\lambda(qx) A_1(x) j_\lambda(qy) B_2'(y)$$

である。同様にして

$$\begin{aligned} I_4 &= - \int dx j_\lambda(qx) \frac{dj_\lambda(qx)}{dx} A_2(x) B_2(x) - \int dx j_\lambda(qx) A_2'(x) \int dy \theta(x-y) \frac{dj_\lambda(qy)}{dy} B_2(y) \\ &= - \int dx j_\lambda(qx) \frac{dj_\lambda(qx)}{dx} A_2(x) B_2(x) - \int dx j_\lambda^2(qx) A_2'(x) B_2(x) \\ &\quad + \int dx dy \theta(x-y) j_\lambda(qx) A_2'(x) j_\lambda(qy) B_2'(y) \\ &= \frac{1}{2} \int dx j_\lambda^2(qx) (A_2 B_2)' - \int dx j_\lambda^2(qx) A_2'(x) B_2(x) + \int dx dy \theta(x-y) j_\lambda(qx) A_2'(x) j_\lambda(qy) B_2'(y) \end{aligned}$$

したがって

$$\begin{aligned} I &= \int dx dy \theta(x-y) j_\lambda(qx) \left(A_1(x) + A_2'(x) \right) j_\lambda(qy) \left(B_1(y) + B_2'(y) \right) \\ &\quad + \int dx j_\lambda^2(qx) \left(A_2 B_1 - A_1 B_2 + \frac{A_2 B_2' - A_2' B_2}{2} \right) \end{aligned}$$

になる。

$$M_\pm(E) = M + V_S(x) \pm \left(V_0(x) - E \right)$$

とすると、ディラック方程式 (4.56), (4.57) より

$$\begin{aligned} \frac{d}{dx} \left(f_h v_{\ell j} + g_h u_{\ell j} \right) &= \left(-\frac{\kappa_h}{x} f_h + M_-(E_h) g_h \right) v_{\ell j} + f_h \left(\frac{\kappa_{\ell j}}{x} v_{\ell j} + M_+(E) u_{\ell j} \right) \\ &\quad + \left(\frac{\kappa_h}{x} g_h + M_+(E_h) f_h \right) u_{\ell j} + g_h \left(-\frac{\kappa_{\ell j}}{x} u_{\ell j} + M_-(E) v_{\ell j} \right) \\ &= \frac{\kappa_{\ell j} - \kappa_h}{x} \left(f_h v_{\ell j} - g_h u_{\ell j} \right) + 2\tilde{M}_+ f_h u_{\ell j} + 2\tilde{M}_- g_h v_{\ell j} \end{aligned}$$

ただし

$$\tilde{M}_\pm = \frac{M_\pm(E_h) + M_\pm(E)}{2} = M + V_S(x) \pm \left(V_0(x) - \frac{E + E_h}{2} \right)$$

これから

$$A_{\text{out}}(h, \ell j : x) \equiv A_1 + A'_2 = \left(F_1 + \frac{\tilde{M}_+}{M} F_2 \right) f_h u_{\ell j} + \left(F_1 + \frac{\tilde{M}_-}{M} F_2 \right) g_h v_{\ell j} \quad (4.94)$$

$$A_{\text{in}}(h, \ell j : x) \equiv B_1 + B'_2 = \left(F_1 + \frac{\tilde{M}_+}{M} F_2 \right) f_h f_{\ell j} + \left(F_1 + \frac{\tilde{M}_-}{M} F_2 \right) g_h g_{\ell j} \quad (4.95)$$

である。また, A, B の定義から

$$A_2 B_1 - A_1 B_2 = \frac{F_2}{2M} (u_{\ell j} g_{\ell j} - v_{\ell j} f_{\ell j}) \left(F_1 (g_h^2 - f_h^2) - \frac{F_2}{M} \frac{\kappa_{\ell j} - \kappa_h}{x} f_h g_h \right)$$

$$\frac{A_2 B'_2 - A'_2 B_2}{2} = \left(\frac{F_2}{2M} \right)^2 (u_{\ell j} g_{\ell j} - v_{\ell j} f_{\ell j}) \left(\frac{\kappa_{\ell j} - \kappa_h}{x} f_h g_h - \tilde{M}_+ f_h^2 + \tilde{M}_- g_h^2 \right)$$

以上から

$$I = \int dx dy \theta(x-y) j_\lambda(qx) A_{\text{out}}(h, \ell j : x) j_\lambda(qy) A_{\text{in}}(h, \ell j : y)$$

$$- W_{\ell j} \frac{F_2}{2M} \int dx j_\lambda^2(qx) \left(F_1 (f_h^2 - g_h^2) + \frac{F_2}{2M} \left(\tilde{M}_+ f_h^2 - \tilde{M}_- g_h^2 + \frac{\kappa_{\ell j} - \kappa_h}{x} f_h g_h \right) \right)$$

になる。したがって

$$G_h(E, \mathbf{q}) = 2 \sum \frac{P_{\ell+\ell_h+\lambda}}{W_{\ell j}} (2\lambda+1)(2j+1) \langle j \frac{1}{2} \lambda 0 | j_h \frac{1}{2} \rangle^2$$

$$\times \int dx dy \theta(x-y) j_\lambda(qx) A_{\text{out}}(h, \ell j : x) j_\lambda(qy) A_{\text{in}}(h, \ell j : y)$$

$$- \frac{F_2}{M} \sum P_{\ell+\ell_h+\lambda} (2\lambda+1)(2j+1) \langle j \frac{1}{2} \lambda 0 | j_h \frac{1}{2} \rangle^2$$

$$\times \int dx j_\lambda^2(qx) \left(F_1 (f_h^2 - g_h^2) + \frac{F_2}{2M} \left(\tilde{M}_+ f_h^2 - \tilde{M}_- g_h^2 + \frac{\kappa_{\ell j} - \kappa_h}{x} f_h g_h \right) \right) \quad (4.96)$$

1重積分の部分は実数であり $\text{Im } G_h$ には寄与しないから, 縦方向応答関数は

$$R(q_0, q) = \frac{1}{\pi} \text{Im} \sum_h \left(\bar{G}_h(E_h + q_0, \mathbf{q}) + \bar{G}_h^*(E_h - q_0, \mathbf{q}) \right)$$

ただし

$$\bar{G}_h(E, \mathbf{q}) = 2 \sum \frac{P_{\ell+\ell_h+\lambda}}{W_{\ell j}} (2\lambda+1)(2j+1) \langle j \frac{1}{2} \lambda 0 | j_h \frac{1}{2} \rangle^2$$

$$\times \int dx dy \theta(x-y) j_\lambda(qx) A_{\text{out}}(h, \ell j : x) j_\lambda(qy) A_{\text{in}}(h, \ell j : y)$$

になる。

束縛状態の波動関数 f_h, g_h 及び原点で正則な解 $f_{\ell j}, g_{\ell j}$ は実関数である。一方, $u_{\ell j}, v_{\ell j}$ は $E^2 > M^2$ の場合複素数になる。 E_h として反核子は無視し核子の占有状態だけを扱う場合 $E_h = M - \varepsilon_h$, ($0 < \varepsilon_h \ll M$) とおけるから

$$q_0 > \varepsilon_h \text{ のとき } \text{Im} \bar{G}_h(E_h + q_0, \mathbf{q}) \neq 0, \quad q_0 > 2M - \varepsilon_h \text{ のとき } \text{Im} \bar{G}_h^*(E_h - q_0, \mathbf{q}) \neq 0$$

である。準弾性散乱では $q_0 \ll 2M$ であるから $\bar{G}_h^*(E_h - q_0, \mathbf{q})$ の寄与は考えなくてよい。

まとめ 縦方向応答関数

$$R(q_0, q) = \frac{1}{\pi} \text{Im} \sum_h \bar{G}_h(E_h + q_0, \mathbf{q}) \quad (4.97)$$

$$\begin{aligned} \bar{G}_h(E, \mathbf{q}) &= 2 \sum_{\ell j \lambda} \frac{P_{\ell+\ell_h+\lambda}}{W_{\ell j}} (2\lambda+1)(2j+1) \langle j \frac{1}{2} \lambda 0 | j_h \frac{1}{2} \rangle^2 \\ &\times \int_0^\infty dx j_\lambda(qx) A_{\text{out}}(h, \ell j : x) \int_0^x dy j_\lambda(qy) A_{\text{in}}(h, \ell j : y) \end{aligned} \quad (4.98)$$

ただし

$$\left. \begin{array}{l} A_{\text{out}}(h, \ell j : x) \\ A_{\text{in}}(h, \ell j : x) \end{array} \right\} = \left(F_1 + \frac{\tilde{M}_+}{M} F_2 \right) f_h(x) \left\{ \begin{array}{l} u_{\ell j}(x) \\ f_{\ell j}(x) \end{array} \right\} + \left(F_1 + \frac{\tilde{M}_-}{M} F_2 \right) g_h(x) \left\{ \begin{array}{l} v_{\ell j}(x) \\ g_{\ell j}(x) \end{array} \right\}$$

$$\tilde{M}_\pm = M + V_S(x) \pm \left(V_0(x) - \frac{E + E_h}{2} \right), \quad W_{\ell j} = u_{\ell j}(x)g_{\ell j}(x) - v_{\ell j}(x)f_{\ell j}(x) = \text{定数}$$

F_1, F_2 は (4.29) ~ (4.31) で与えられる。 $(u, v) = (u_{\ell j}, v_{\ell j}), (f_{\ell j}, g_{\ell j})$ は

$$\frac{du}{dx} = -\frac{\kappa_{\ell j}}{x}u + \left(M + V_S - V_0 + E \right)v, \quad \frac{dv}{dx} = \frac{\kappa_{\ell j}}{x}v + \left(M + V_S + V_0 - E \right)u \quad (4.99)$$

$$\kappa_{\ell j} = (-1)^{j+\ell+1/2} \left(j + \frac{1}{2} \right) = \begin{cases} \ell, & j = \ell - 1/2 \text{ のとき} \\ -\ell - 1, & j = \ell + 1/2 \text{ のとき} \end{cases}$$

の解で境界条件

$$u_{\ell j} \xrightarrow{x \rightarrow \infty} kx h_\ell^{(+)}(kx), \quad v_{\ell j}(x) \xrightarrow{x \rightarrow \infty} \mp \frac{k}{M+E} kx h_{\ell \pm 1}^{(+)}(kx), \quad j = \ell \pm 1/2 \quad (4.100)$$

ただし

$$k = \begin{cases} \sqrt{E^2 - M^2}, & E^2 > M^2 \\ i\sqrt{M^2 - E^2}, & E^2 < M^2 \end{cases}$$

または

$$f_{\ell j} \xrightarrow{x \rightarrow 0} x^{\ell+1}, \quad g_{\ell j} \xrightarrow{x \rightarrow 0} \begin{cases} \frac{2\ell+1}{M + V_S(0) - V_0(0) + E} x^\ell, & j = \ell - 1/2 \\ \frac{M + V_S(0) + V_0(0) - E}{2\ell+3} x^{\ell+2}, & j = \ell + 1/2 \end{cases} \quad (4.101)$$

を満たす。

4.11 数値計算

ディラック方程式 (4.99) は $X_1(x) = u(x), X_2(x) = v(x)$ とすると

$$\frac{dX_1}{dx} = F_1(X_1, X_2, x), \quad \frac{dX_2}{dx} = F_2(X_1, X_2, x)$$

ただし

$$\begin{aligned} F_1(X_1, X_2, x) &= -\frac{\kappa_{\ell j}}{x} X_1 + \frac{M + E + V_S(x) - V_0(x)}{\hbar c} X_2 \\ F_2(X_1, X_2, x) &= \frac{\kappa_{\ell j}}{x} X_2 + \frac{M - E + V_S(x) + V_0(x)}{\hbar c} X_1 \end{aligned}$$

になるから Runge-Kutta 法が適用できる。

束縛状態の波動関数と固有値

固有値 E_h の求め方はシュレディンガー方程式の場合と同様である。 $x_{\min} \leq x \leq x_{\max}$ の範囲で解くとする。 E を与えて、適当な中間点 x_m まで x_{\min} から x を増加させて得られる $f_h(x), g_h(x)$ を $f_<(E, x), g_<(E, x)$ とし、 x_{\max} から x を減少させて x_m まで解いて求まる $f_h(x), g_h(x)$ を $f_>(E, x), g_>(E, x)$ とすると

$$W(E) = g_<(E, x_m) f_>(E, x_m) - f_<(E, x_m) g_>(E, x_m) = 0$$

になる E が求めたい E_h である。

$x = x_{\min}$ での境界条件は (4.101) である。束縛状態の場合 $E_h < M$ であるから $k = \sqrt{M^2 - E_h^2}$ と置きなおすと、(4.100) より

$$\begin{aligned} f_h(x) &\xrightarrow{x \rightarrow \infty} ikx h_\ell^{(+)}(ikx) = e^{-kx - i(\ell+1)\pi/2} (1 + \dots) \\ g_h(x) &\xrightarrow{x \rightarrow \infty} \pm \frac{ik}{M + E_h} ikx h_{\ell \mp 1}^{(+)}(ikx) = -\frac{k}{M + E_h} e^{-kx - i(\ell+1)\pi/2} (1 + \dots) \end{aligned}$$

であるから、 $x = x_{\max}$ では

$$f_h(x) = e^{-kx}, \quad g_h(x) = -\frac{k}{M + E_h} e^{-kx}$$

とする。規格化は

$$\int_0^\infty dx (f_h^2(x) + g_h^2(x)) = 1$$

である。

境界条件 (4.100), (4.101) の解

$x = x_{\max}$ での初期条件を (4.100) とし x を減少させて x_{\min} まで解けばよい。陽子の場合、純粋なクローン波動関数を初期条件に用いるべきである。しかし、その代わりに、 x_{\max} を束縛状態を求める場合の設定とは別の X_{\max} にして ($X_{\max} > x_{\max}$) この点での値を

$$\rho h_\ell^{(+)}(\rho) = \exp\left(i\left(\rho - \frac{\ell+1}{2}\pi\right)\right) \left(1 + i\frac{\ell(\ell+1)}{2} \frac{1}{\rho}\right)$$

で近似して、 $x_{\min} \leq x \leq x_{\max}$ の部分を使うのでもよいだろう。境界条件 (4.101) の解は $x = x_{\min}$ での初期条件を (4.101) とし x を増加させて x_{\max} まで求める。

(4.98) の和

(4.98) は

$$\begin{aligned} \bar{G}_h(E, \mathbf{q}) &= 2 \sum_{\lambda=0}^{\lambda_{\max}} \sum_{\ell_j} \frac{P_{\ell+\ell_h+\lambda}}{W_{\ell_j}} (2\lambda+1)(2j+1) \langle j \frac{1}{2} \lambda 0 | j_h \frac{1}{2} \rangle^2 \\ &\quad \times \int_0^\infty dx j_\lambda(qx) A_{\text{out}}(h, \ell_j : x) \int_0^x dy j_\lambda(qy) A_{\text{in}}(h, \ell_j : y) \end{aligned}$$

である。厳密には $\lambda_{\max} = \infty$ であるが、有限な λ_{\max} で λ についての和は数値的には収束する。

ℓ_h, j_h と λ が与えられたとき ℓ と j は

$$\ell + \ell_h + \lambda = \text{even}, \quad |j_h - \lambda| \leq j \leq j_h + \lambda$$

で制限される。第1式から

$$\ell = \ell_h + \lambda - 2n, \quad n = \text{整数}$$

とおける。

$j = \ell + 1/2$ のとき

$$n_{\min} = \frac{2\ell_h - 2j_h + 1}{4} \leq n \leq n_{\max} = \frac{2\ell_h + 2\lambda - 2|j_h - \lambda| + 1}{4}$$

である。 $\ell \geq 0$ であるためには $n \leq (\ell_h + \lambda)/2$ でなければならないが

$$\frac{\ell_h + \lambda}{2} - \frac{2\ell_h + 2\lambda - 2|j_h - \lambda| + 1}{4} = \frac{2|j_h - \lambda| - 1}{4} \geq 0$$

であるから自動的に満たす。

$$\frac{2\ell_h - 2j_h + 1}{4} = \begin{cases} 0, & j_h = \ell_h + 1/2 \\ 1/2, & j_h = \ell_h - 1/2 \end{cases}, \quad \text{したがって} \quad n_{\min} = \begin{cases} 0, & j_h = \ell_h + 1/2 \\ 1, & j_h = \ell_h - 1/2 \end{cases}$$

数値計算上では 整数/整数 は切り下げになるから

$$n_{\min} = \frac{2\ell_h - 2j_h + 1 + 2}{4}$$

とすればよい。

$j = \ell - 1/2$ のとき

$$n_{\min} = \frac{2\ell_h - 2j_h - 1}{4} \leq n \leq n_{\max} = \frac{2\ell_h + 2\lambda - 2|j_h - \lambda| - 1}{4}$$

である。 $\ell \geq 1$ より $n \leq (\ell_h + \lambda - 2)/2$ である。

$$\frac{\ell_h + \lambda - 2}{2} - \frac{2\ell_h + 2\lambda - 2|j_h - \lambda| - 1}{4} = \frac{2|j_h - \lambda| - 3}{4}$$

したがって

$$n_{\max} = \begin{cases} \frac{\ell_h + \lambda - 2}{2} & |j_h - \lambda| = 1/2 \\ \frac{2\ell_h + 2\lambda - 2|j_h - \lambda| - 1}{4} & |j_h - \lambda| > 1/2 \end{cases}$$

である。一方

$$\frac{2\ell_h - 2j_h - 1}{4} = \begin{cases} -1/2, & j_h = \ell_h + 1/2 \\ 0, & j_h = \ell_h - 1/2 \end{cases}, \quad \text{したがって} \quad n_{\min} = 0$$

になる。

2 重積分

$$I = \int_0^\infty dx f(x) \int_0^x dy g(y) = \int_0^\infty dx f(x) G(x), \quad G(x) = \int_0^x dy g(y)$$

x を Δx の刻みで分割して

$$x_k = x_0 + k\Delta x, \quad 0 \leq k \leq K$$

とし台形則を使うと

$$I = \left(\frac{f_K G_K}{2} + \sum_{k=1}^{K-1} f_k G_k \right) (\Delta x)^2$$

ただし

$$G_k = \frac{g_0 + g_k}{2} + \sum_{j=1}^{k-1} g_j \quad (4.102)$$

である。 k が与えられる毎に j について $k-1$ まで和をとるのは非常に無駄である。

$$\frac{g_{k-1} + g_k}{2} + G_{k-1} = \frac{g_{k-1} + g_k}{2} + \frac{g_0 + g_{k-1}}{2} + \sum_{j=1}^{k-2} g_j = \frac{g_0 + g_k}{2} + \sum_{j=1}^{k-1} g_j = G_k$$

したがって、漸化式

$$G_0 = 0, \quad G_k = \frac{g_{k-1} + g_k}{2} + G_{k-1} \quad (k \geq 1)$$

を用いればよい。(4.102) を用いた場合 I を求めるのに必要な和の回数は K^2 のオーダーであるが、漸化式を用いれば K のオーダーになる。

4.12 クーロン波動関数

クーロンポテンシャル $V_C(x)$ は $1/x$ でゆっくり減少する。したがって、中性子に対しては、自由粒子の解 (4.100) は、例えば $x \approx 3R$ 程度でも非常によい近似になるが、陽子に対しては、 x を極端に大きくとらないと (4.100) はよい近似解にはならない。

純粋なクーロンポテンシャルの解析解を求める。(4.56), (4.57) において

$$V_S(x) = 0, \quad V_0(x) = \frac{Z\alpha}{x}$$

の場合

$$\frac{du}{dx} = -\frac{\kappa_{\ell j}}{x} u(x) + \left(M - \frac{Z\alpha}{x} + E \right) v(x), \quad \frac{dv}{dx} = \frac{\kappa_{\ell j}}{x} v(x) + \left(M + \frac{Z\alpha}{x} - E \right) u(x) \quad (4.103)$$

$x \rightarrow \infty$ のとき

$$\frac{du}{dx} = (E + M)v, \quad \frac{dv}{dx} = -(E - M)u$$

であるから

$$\frac{d^2u}{dx^2} = -k^2 u, \quad \frac{d^2v}{dx^2} = -k^2 v, \quad k = \sqrt{E^2 - M^2}$$

したがって、 u, v ともに $e^{\pm ikr}$ になる。一方、 $x \rightarrow 0$ では

$$\frac{du}{dx} = -\frac{\kappa_{\ell j}}{x} u - \frac{Z\alpha}{x} v, \quad \frac{dv}{dx} = \frac{\kappa_{\ell j}}{x} v + \frac{Z\alpha}{x} u$$

になるから、 $u = C_u x^a, v = C_v x^a$ とすると

$$(a + \kappa_{\ell j}) C_u = -Z\alpha C_v, \quad (a - \kappa_{\ell j}) C_v = Z\alpha C_u$$

これから

$$a = \pm \gamma, \quad \gamma = \sqrt{\kappa_{\ell j}^2 - Z^2 \alpha^2}$$

以上から

$$u = C_u e^{-\rho/2} \rho^\gamma (G_1 + G_2), \quad v = C_v e^{-\rho/2} \rho^\gamma (G_1 - G_2), \quad \rho = -2ikx$$

とおくと, (4.103) の最初の式は

$$\rho \left(\frac{dG_1}{d\rho} + \frac{dG_2}{d\rho} \right) + (\gamma + \kappa_{\ell j}) (G_1 + G_2) - \frac{1}{2} \left(1 - \frac{E+m}{ik} \frac{C_v}{C_u} \right) \rho G_1 - \frac{1}{2} \left(1 + \frac{E+m}{ik} \frac{C_v}{C_u} \right) \rho G_2 + Z\alpha \frac{C_v}{C_u} (G_1 - G_2) = 0$$

したがって

$$C_v = \frac{ik}{E+M} C_u = i \sqrt{\frac{E-M}{E+M}} C_u$$

すると

$$\rho \left(\frac{dG_1}{d\rho} + \frac{dG_2}{d\rho} \right) + (\gamma + \kappa_{\ell j}) (G_1 + G_2) - \rho G_2 + i \frac{Z\alpha k}{E+M} (G_1 - G_2) = 0$$

同様にして, 2番目の式から

$$\rho \left(\frac{dG_1}{d\rho} - \frac{dG_2}{d\rho} \right) + (\gamma - \kappa_{\ell j}) (G_1 - G_2) + \rho G_2 + i \frac{Z\alpha k}{E-M} (G_1 + G_2) = 0$$

これらの和, 差をとれば

$$\rho \frac{dG_1}{d\rho} + (\gamma + i\nu) G_1 + (\kappa_{\ell j} + i\mu) G_2 = 0 \quad (4.104)$$

$$\rho \frac{dG_2}{d\rho} + (\gamma - i\nu - \rho) G_2 + (\kappa_{\ell j} - i\mu) G_1 = 0 \quad (4.105)$$

ただし

$$\nu = \frac{Z\alpha E}{k}, \quad \mu = \frac{Z\alpha M}{k}$$

最初の式を ρ で微分し, $dG_2/d\rho$ に第2式を代入すると

$$\rho \frac{d^2 G_1}{d\rho^2} + (1 + 2\gamma - \rho) \frac{dG_1}{d\rho} - (\gamma + i\nu) G_1 = 0 \quad (4.106)$$

同様にして

$$\rho \frac{d^2 G_2}{d\rho^2} + (1 + 2\gamma - \rho) \frac{dG_2}{d\rho} - (1 + \gamma + i\nu) G_2 = 0 \quad (4.107)$$

これらは合流型超幾何微分方程式

$$\left(z \frac{d^2}{dz^2} + (b-z) \frac{d}{dz} - a \right) w(z) = 0$$

である。原点で正則な解は

$$w = M(a, b, z) = \sum_{n=0}^{\infty} \frac{(a)_n}{(b)_n} \frac{z^n}{n!}, \quad (a)_0 = 1, \quad (a)_n = a(a+1)\cdots(a+n-1)$$

正則でない解は

$$w = z^{1-b} M(1+a-b, 2-b, z)$$

である。あるいは

$$U(a, b, z) = \frac{\pi}{\sin \pi b} \left(\frac{M(a, b, z)}{\Gamma(1+a-b)\Gamma(b)} - z^{1-b} \frac{M(1+a-b, 2-b, z)}{\Gamma(a)\Gamma(2-b)} \right)$$

とすると, 独立な2つの解として

$$U(a, b, z), \quad e^z U(b-a, b, -z)$$

を採用してもよい。

無限遠で外向き球面波 e^{ikx} になる解を求める。(4.106), (4.107) の解として

$$G_1(\rho) = C_1 U(\gamma + i\nu, 1 + 2\gamma, \rho), \quad G_2(\rho) = C_2 U(1 + \gamma + i\nu, 1 + 2\gamma, \rho)$$

を考える。これらを (4.104) に代入し (13.4.23)

$$z \frac{d}{dz} U(a, b, z) = a(1 + a - b)U(a + 1, b, z) - aU(a, b, z)$$

を使うと

$$\begin{aligned} & \rho \frac{dG_1}{d\rho} + (\gamma + i\nu)G_1 + (\kappa_{\ell j} + i\mu)G_2 \\ &= \left(-(\gamma + i\nu)(\gamma - i\nu)C_1 + (\kappa_{\ell j} + i\mu)C_2 \right) U(1 + \gamma + i\nu, 1 + 2\gamma, \rho) = 0 \end{aligned}$$

したがって

$$C_2 = \frac{\gamma^2 + \nu^2}{\kappa_{\ell j} + i\mu} C_1 = (\kappa_{\ell j} - i\mu) C_1$$

これから

$$u = C_u e^{-\rho/2} \rho^\gamma \left(U(\gamma + i\nu, 1 + 2\gamma, \rho) + (\kappa_{\ell j} - i\mu) U(1 + \gamma + i\nu, 1 + 2\gamma, \rho) \right) \quad (4.108)$$

$$v = \frac{ik}{E + M} C_u e^{-\rho/2} \rho^\gamma \left(U(\gamma + i\nu, 1 + 2\gamma, \rho) - (\kappa_{\ell j} - i\mu) U(1 + \gamma + i\nu, 1 + 2\gamma, \rho) \right) \quad (4.109)$$

になる。

Handbook of mathematical functions (13.5.2) から

$$U(a, b, z) = z^{-a} g(a, 1 + a - b, -z), \quad \text{ただし} \quad g(a, b, z) = \sum_{n=0}^{\infty} \frac{(a)_n (b)_n}{n! z^n}$$

である。

$$\rho^{-i\nu} = \exp(-i\nu \log \rho) = \exp\left(-i\nu(\log 2kx - i\pi/2)\right)$$

より

$$\begin{aligned} u &= C_u e^{-\pi\nu/2} e^{i(kx - \nu \log 2kx)} \\ &\times \left(g(\gamma + i\nu, -\gamma + i\nu, 2ikx) - \frac{\kappa_{\ell j} - i\mu}{2ikx} g(1 + \gamma + i\nu, 1 - \gamma + i\nu, 2ikx) \right) \quad (4.110) \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} v &= \frac{ik}{E + M} C_u e^{-\pi\nu/2} e^{i(kx - \nu \log 2kx)} \\ &\times \left(g(\gamma + i\nu, -\gamma + i\nu, 2ikx) + \frac{\kappa_{\ell j} - i\mu}{2ikx} g(1 + \gamma + i\nu, 1 - \gamma + i\nu, 2ikx) \right) \quad (4.111) \end{aligned}$$

$x \rightarrow \infty$ のとき $g \rightarrow 1$ であるから

$$u \rightarrow C_u e^{-\pi\nu/2} e^{i(kx - \nu \log 2kx)}, \quad v \rightarrow \frac{ik}{E + M} C_u e^{-\pi\nu/2} e^{i(kx - \nu \log 2kx)}$$

(4.108), (4.109) は無限遠で外向き球面波になる。

陽子の場合, (4.100) の代わりに (4.108), (4.109), あるいは (4.110), (4.111) を使った方が正確である。

5 軸対称変形核における Dirac–Hartree 方程式

Y. K. Gambhir, P. Ring and A. Thimet, Ann. Phys. **198** (1990) 132

S.-J. Lee et al., Phys. Rev. Lett. **57** (1986) 2916

C. E. Price and G. E. Walker, Phys. Rev. **C36** (1987) 354

R. J. Furnstahl, C. E. Price and G. E. Walker, Phys. Rev. **C36** (1987) 2590

5.1 Dirac–Hartree 方程式

Dirac–Hartree 方程式

ラグランジアン \mathcal{L} として

$$\begin{aligned} \mathcal{L} = & \bar{\psi} (i\gamma\partial - M) \psi + \frac{1}{2} (\partial\sigma)^2 - U(\sigma) - \frac{1}{4} \omega^{\mu\nu} \omega_{\mu\nu} + \frac{1}{2} m_\omega^2 \omega^2 - \frac{1}{4} \vec{\rho}^{\mu\nu} \vec{\rho}_{\mu\nu} + \frac{1}{2} m_\rho^2 \vec{\rho}^2 - \frac{1}{4} A^{\mu\nu} A_{\mu\nu} \\ & - g_\sigma \bar{\psi} \psi \sigma - g_\omega \bar{\psi} \gamma^\mu \psi \omega_\mu - g_\rho \bar{\psi} \gamma^\mu \vec{\tau} \psi \vec{\rho}_\mu - e \bar{\psi} \gamma^\mu \tau_p \psi A_\mu \end{aligned}$$

ただし

$$U(\sigma) = \frac{m_\sigma^2}{2} \sigma^2 + \frac{g_2}{3} \sigma^3 + \frac{g_3}{4} \sigma^4$$

を考える。変分原理から

$$\frac{\partial \mathcal{L}}{\partial \bar{\psi}} = (i\gamma\partial - M) \psi - g_\sigma \psi \sigma - g_\omega \gamma^\mu \psi \omega_\mu - g_\rho \gamma^\mu \vec{\tau} \psi \vec{\rho}_\mu - e \gamma^\mu \tau_p \psi A_\mu = 0$$

$$\frac{\partial \mathcal{L}}{\partial \sigma} \Rightarrow -\partial^2 \sigma - U'(\sigma) - g_\sigma \bar{\psi} \psi = -\partial^2 \sigma - m_\sigma^2 \sigma - g_2 \sigma^2 - g_3 \sigma^3 - g_\sigma \bar{\psi} \psi = 0$$

$$\frac{\partial \mathcal{L}}{\partial \omega_\mu} \Rightarrow \partial^2 \omega^\mu + m_\omega^2 \omega^\mu - g_\omega \bar{\psi} \gamma^\mu \psi = 0$$

$$\frac{\partial \mathcal{L}}{\partial \vec{\rho}_\mu} \Rightarrow \partial^2 \vec{\rho}^\mu + m_\rho^2 \vec{\rho}^\mu - g_\rho \gamma^\mu \vec{\tau} \psi = 0$$

$$\frac{\partial \mathcal{L}}{\partial A_\mu} \Rightarrow \partial^2 A^\mu - e \bar{\psi} \gamma^\mu \tau_p \psi = 0$$

である。 $\gamma\partial = \gamma_0 \partial_t + \gamma \cdot \nabla$ より ψ の満たす方程式は

$$i\partial_t \psi = \gamma_0 \left(-i\gamma \cdot \nabla + M + g_\sigma \sigma + g_\omega \gamma^\mu \omega_\mu + g_\rho \gamma^\mu \vec{\tau} \psi \vec{\rho}_\mu + e \gamma^\mu \tau_p A_\mu \right) \psi$$

になる。static な平均場で近似すると

$$\left[\alpha \cdot (-i\nabla - \mathbf{V}(\mathbf{r})) + \beta (M + U_\sigma(\mathbf{r})) + U(\mathbf{r}) \right] \psi_i(\mathbf{r}) = E_i \psi_i(\mathbf{r})$$

ただし

$$U_\sigma(\mathbf{r}) = U_\sigma^0 + \vec{\tau} \cdot \vec{U}_\rho^0 + \tau_p U_\gamma^0, \quad \mathbf{V}(\mathbf{r}) = \mathbf{U}_\omega + \vec{\tau} \cdot \vec{U}_\rho + \tau_p \mathbf{U}_\gamma$$

ここで U は

$$U_\sigma = g_\sigma \sigma, \quad U_\omega^\mu = g_\omega \omega^\mu, \quad \vec{U}_\rho^\mu = g_\rho \vec{\rho}^\mu, \quad U_\gamma^\mu = e A^\mu$$

であり

$$(-\nabla^2 + m_\sigma^2) U_\sigma = -g_\sigma^2 \rho_s - \frac{g_2}{g_\sigma} U_\sigma^2 - \frac{g_3}{g_\sigma^2} U_\sigma^3$$

$$(-\nabla^2 + m_\omega^2) U_\omega^\mu = g_\omega^2 J^\mu$$

$$(-\nabla^2 + m_\rho^2) \vec{U}_\rho^\mu = g_\rho^2 \vec{J}_\rho^\mu$$

$$-\nabla^2 U_\gamma^\mu = e^2 J_p^\mu$$

を満たす。ただし

$$\rho_s = \sum_i \bar{\psi}_i \psi_i, \quad J^\mu = \sum_i \bar{\psi}_i \gamma^\mu \psi_i, \quad \bar{J}_\rho^\mu = \sum_i \bar{\psi}_i \vec{\tau} \gamma^\mu \psi_i, \quad \bar{J}_p^\mu = \sum_i \bar{\psi}_i \tau_p \gamma^\mu \psi_i$$

である。

4成分スピノールを

$$\psi(\mathbf{r}) = \begin{pmatrix} f(\mathbf{r}) \\ i g(\mathbf{r}) \end{pmatrix}$$

とし

$$P = P = \boldsymbol{\sigma} \cdot \nabla, \quad V = -i \boldsymbol{\sigma} \cdot \mathbf{V}$$

とすると, Dirac 方程式は

$$\begin{pmatrix} M^* + U & -iP - iV \\ -iP - iV & -M^* + U \end{pmatrix} \begin{pmatrix} f \\ ig \end{pmatrix} = E \begin{pmatrix} f \\ ig \end{pmatrix}$$

つまり

$$(P + V)g + (M^* + U)f = Ef, \quad -(P + V)f - (M^* - U)g = Eg$$

になる。適当な基底系 $|\alpha\rangle$ で展開して

$$f(\mathbf{r}) = \sum_\alpha f_\alpha |\alpha\rangle, \quad g(\mathbf{r}) = \sum_\alpha g_\alpha |\alpha\rangle$$

とすると

$$\sum_{\alpha'} \begin{pmatrix} A_{\alpha\alpha'}^{(+)} & P_{\alpha\alpha'} + V_{\alpha\alpha'} \\ -P_{\alpha\alpha'} - V_{\alpha\alpha'} & -A_{\alpha\alpha'}^{(-)} \end{pmatrix} \begin{pmatrix} f_{\alpha'} \\ g_{\alpha'} \end{pmatrix} = E \begin{pmatrix} f_\alpha \\ g_\alpha \end{pmatrix} \quad (5.1)$$

ただし

$$P_{\alpha\alpha'} = \langle \alpha | P | \alpha' \rangle, \quad V_{\alpha\alpha'} = \langle \alpha | V | \alpha' \rangle, \quad A_{\alpha\alpha'}^{(\pm)} = \langle \alpha | M^* \pm U | \alpha' \rangle$$

基底

2次元等方調和振動子の固有関数は

$$\frac{\sqrt{2}}{b} R_{nm}(q) \frac{e^{im\varphi}}{\sqrt{2\pi}}, \quad R_{nm}(q) = N_{nm} q^{|m|/2} e^{-q/2} L_n^{(|m|)}(q) \quad (5.2)$$

である。ここで

$$q = \frac{r^2}{b^2}, \quad b = \sqrt{\frac{\hbar}{M\omega}}, \quad N_{nm} = \sqrt{\frac{n!}{(n+|m|)!}}$$

このとき固有値は $E_{nm} = \hbar\omega(2n + |m| + 1)$ である。 N_{nm} は規格化から

$$\frac{2}{b^2} \int_0^\infty dr r R_{nm}^2(q) = N_{nm}^2 \frac{(n+|m|)!}{n!} = 1, \quad \text{つまり} \quad N_{nm} = \sqrt{\frac{n!}{(n+|m|)!}}$$

z 軸が軸対称な調和振動子の場合, 波動関数は

$$\psi(\mathbf{r}) = \sqrt{\frac{2}{b_0^3}} R_{nm}(q) \phi_{n_3}(\zeta) \frac{e^{im\varphi}}{\sqrt{2\pi}}, \quad \phi_{n_3}(\zeta) = N_{n_3} H_{n_3}(\zeta) e^{-\zeta^2/2}$$

ただし

$$b_0^3 = b^2 b_3, \quad b_3 = \sqrt{\frac{\hbar}{M\omega_3}}, \quad \zeta = \frac{z}{b_3}, \quad N_n = (\sqrt{\pi} 2^n n!)^{-1/2}$$

である。

4成分スピノール

$$\psi(\mathbf{r}) = \begin{pmatrix} f(\mathbf{r}) \\ ig(\mathbf{r}) \end{pmatrix}$$

を2成分スピノール $|\alpha\rangle$ を用いて

$$f(\mathbf{r}) = \sum_{\alpha} f_{\alpha} |\alpha\rangle, \quad g(\mathbf{r}) = \sum_{\alpha} g_{\alpha} |\alpha\rangle$$

と展開する。ただし、 $\alpha = \{n, n_3, m, m_s\}$ として

$$|\alpha\rangle = \sqrt{\frac{2}{b_0^3}} R_{nm}(q) \phi_{n_3}(\zeta) \frac{e^{im\varphi}}{\sqrt{2\pi}} |m_s\rangle$$

規格化から

$$\sum_{\alpha} (f_{\alpha}^2 + g_{\alpha}^2) = 1$$

である。

5.2 行列要素

P の行列要素

円筒座標を r, φ, z とすると

$$\partial_x = \cos \varphi \partial_r - \frac{\sin \varphi}{r} \partial_{\varphi}, \quad \partial_y = \sin \varphi \partial_r + \frac{\cos \varphi}{r} \partial_{\varphi}$$

であるから

$$P = \sigma_z \partial_z + \frac{\sigma_+}{2} e^{-i\varphi} \left(\partial_r - \frac{i\partial_{\varphi}}{r} \right) + \frac{\sigma_-}{2} e^{i\varphi} \left(\partial_r + \frac{i\partial_{\varphi}}{r} \right)$$

の行列要素は

$$\begin{aligned} \langle \alpha | P | \alpha' \rangle &= \delta_{nn'} \delta_{mm'} \delta_{m_s m'_s} 2m_s B_{n_3 n'_3} \\ &+ \delta_{n_3 n'_3} \left(\delta_{m+1 m'} \delta_{m_s m'_s + 1} \delta_{n_3 n'_3} C_{nm n' m'} + \delta_{m m' + 1} \delta_{m_s + 1 m'_s} D_{nm n' m'} \right) \end{aligned}$$

になる。ただし

$$\begin{aligned} B_{n_3 n'_3} &= \frac{1}{b_3} \int_{-\infty}^{\infty} d\zeta \phi_{n_3} \frac{d\phi_{n'_3}}{d\zeta} \\ C_{nm n' m'} &= \int_0^{\infty} dq R_{nm} \left(\partial_r + \frac{m'}{r} \right) R_{n' m'} = \frac{1}{b} \int_0^{\infty} dq q^{-1/2} R_{nm} \left(2q \frac{d}{dq} + m' \right) R_{n' m'} \\ D_{nm n' m'} &= \int_0^{\infty} dq R_{nm} \left(\partial_r - \frac{m'}{r} \right) R_{n' m'} = \frac{1}{b} \int_0^{\infty} dq q^{-1/2} R_{nm} \left(2q \frac{d}{dq} - m' \right) R_{n' m'} \end{aligned}$$

である。1次元調和振動子の固有関数 $\phi_n(\zeta)$ は

$$\frac{d\phi_n}{d\zeta} = \sqrt{\frac{n}{2}} \phi_{n-1} - \sqrt{\frac{n+1}{2}} \phi_{n+1} \quad (5.3)$$

を満たすから

$$B_{n_3 n'_3} = \frac{1}{b_3} \left(\sqrt{n'_3/2} \delta_{n_3 n'_3-1} - \sqrt{n_3/2} \delta_{n_3 n'_3+1} \right)$$

となる。また、 $m' = m + 1$ のとき

$$C_{nm n'm'} = \begin{cases} \frac{1}{b} \left(\sqrt{n} \delta_{n' n-1} + \sqrt{n+m+1} \delta_{n'n} \right), & m \geq 0 \\ -\frac{1}{b} \left(\sqrt{n'} \delta_{n' n+1} + \sqrt{n'-m'+1} \delta_{n'n} \right), & m < 0 \end{cases} \quad (5.4)$$

$m = m' + 1$ のとき

$$D_{nm n'm'} = -C_{n'm' nm} = \begin{cases} -\frac{1}{b} \left(\sqrt{n'} \delta_{n' n+1} + \sqrt{n'+m'+1} \delta_{n'n} \right), & m' \geq 0 \\ \frac{1}{b} \left(\sqrt{n} \delta_{n' n-1} + \sqrt{n-m+1} \delta_{n'n} \right), & m' < 0 \end{cases} \quad (5.5)$$

である。(5.4), (5.5) の導出は付録。

ポテンシャルの行列要素

軸対称を仮定すると $U(\mathbf{r})$ は角度 φ に依存しない。また、 $U(r, z) = U(r, -z)$ である。密度は

$$\left(e^{-q/2} e^{-\zeta^2/2} \right)^2 = e^{-(2q)/2} e^{-(\sqrt{2}\zeta)^2/2}$$

に比例するから

$$U(r, z) = \sum_{nn_3} U_{nn_3} R_{n m=0}(2q) \phi_{n_3}(\sqrt{2}\zeta), \quad n_3 = \text{even}$$

と展開すると ($U = U_\omega + \tau_3 U_\rho^0 + \tau_p U_\gamma^0$)

$$\begin{aligned} \langle \alpha | M^* \pm U | \alpha' \rangle &= \delta_{\alpha\alpha'} M + \delta_{mm'} \delta_{m_s m'_s} \int dq d\zeta R_{nm}(q) \phi_{n_3}(\zeta) (U_\sigma \pm U) R_{n'm'}(q) \phi_{n'_3}(\zeta) \\ &= \delta_{\alpha\alpha'} M + \delta_{mm'} \delta_{m_s m'_s} \mathcal{A}^{(\pm)}(nn_3, n'n'_3; m) \end{aligned} \quad (5.6)$$

ただし

$$\mathcal{A}^{(\pm)}(nn_3, n'n'_3; m) = \sum_{n''n''_3} \left(U^\sigma \pm (U_\omega^0 + \tau_3 U_\rho^0 + \tau_p U_\gamma^0) \right)_{n''n''_3} L_m(n, n'; n'') H(n_3, n'_3; n''_3)$$

$$L_m(n, n'; n'') = N_{nm} N_{n'm} \int_0^\infty dq e^{-2q} q^{|m|} L_n^{(|m|)}(q) L_{n'}^{(|m|)}(q) L_{n''}(2q)$$

$$H(n, n'; n'') = N_n N_{n'} N_{n''} \int_{-\infty}^\infty d\zeta e^{-2\zeta^2} H_n(\zeta) H_{n'}(\zeta) H_{n''}(\sqrt{2}\zeta)$$

$H(n, n'; n'')$ は解析的に求まる。

ベクトルポテンシャルの行列要素

ベクトルを円柱座標の r, φ, z 成分で表すと

$$\boldsymbol{\sigma} \cdot \mathbf{V} = \sigma_z V_z + \sigma_r V_r + \sigma_\varphi V_\varphi$$

ここで

$$\sigma_r = \sigma_x \cos \varphi + \sigma_y \sin \varphi = \frac{1}{2} (\sigma_+ e^{-i\varphi} + \sigma_- e^{i\varphi})$$

$$\sigma_\varphi = -\sigma_x \sin \varphi + \sigma_y \cos \varphi = -\frac{i}{2} (\sigma_+ e^{-i\varphi} - \sigma_- e^{i\varphi})$$

である。これから

$$\begin{aligned} -i \langle \alpha | \sigma_\varphi V_\varphi | \alpha' \rangle &= \frac{1}{2} \langle \alpha | (\sigma_- e^{i\varphi} - \sigma_+ e^{-i\varphi}) V_\varphi | \alpha' \rangle \\ &= \delta_{m_s m'_s - 1} \frac{1}{2\pi} \int dq d\zeta d\varphi R_{nm}(q) R_{n'm'}(q) \phi_{n_3}(\zeta) \phi_{n'_3}(\zeta) e^{i(m'+1-m)\varphi} V_\varphi(\mathbf{r}) \\ &\quad - \delta_{m_s m'_s + 1} \frac{1}{2\pi} \int dq d\zeta d\varphi R_{nm}(q) R_{n'm'}(q) \phi_{n_3}(\zeta) \phi_{n'_3}(\zeta) e^{i(m'-1-m)\varphi} V_\varphi(\mathbf{r}) \end{aligned}$$

$V_\varphi(\mathbf{r})$ が φ に依存しないならば

$$\begin{aligned} -i \langle \alpha | \sigma_\varphi V_\varphi | \alpha' \rangle &= \delta_{m_s m'_s - 1} \delta_{m m' + 1} \int dq d\zeta R_{nm}(q) R_{n'm'}(q) \phi_{n_3}(\zeta) \phi_{n'_3}(\zeta) V_\varphi(r, z) \\ &\quad - \delta_{m_s m'_s + 1} \delta_{m m' - 1} \int dq d\zeta R_{nm}(q) R_{n'm'}(q) \phi_{n_3}(\zeta) \phi_{n'_3}(\zeta) V_\varphi(r, z) \end{aligned}$$

$U(r, z)$ とは異なり

$$V_\varphi = \sum_{nn_3} V_{nn_3}^{(\varphi)} R_{n m=1}(2q) \phi_{n_3}(\sqrt{2}\zeta)$$

と展開すると

$$\begin{aligned} -i \langle \alpha | \sigma_\varphi V_\varphi | \alpha' \rangle &= \delta_{m_s m'_s - 1} \delta_{m m' + 1} \sum_{n''n'_3} V_{n''n'_3}^{(\varphi)} \tilde{L}_{m-1}(n', n; n'') H(n_3, n'_3; n''_3) \\ &\quad - \delta_{m_s m'_s + 1} \delta_{m m' - 1} \sum_{n''n'_3} V_{n''n'_3}^{(\varphi)} \tilde{L}_m(n, n'; n'') H(n_3, n'_3; n''_3) \\ &= \delta_{m_s m'_s - 1} \delta_{m m' + 1} V_{n'n'_3 nn_3}(m-1) - \delta_{m_s m'_s + 1} \delta_{m m' - 1} V_{nn_3 n'n'_3}(m) \end{aligned}$$

ただし

$$\begin{aligned} V_{nn_3 n'n'_3}(m) &= \sum_{n''n'_3} V_{n''n'_3}^{(\varphi)} \tilde{L}_m(n, n'; n'') H(n_3, n'_3; n''_3) \\ \tilde{L}_m(n, n'; n'') &= \int dq R_{nm}(q) R_{n' m+1}(q) R_{n'' -1}(2q) \\ &= \frac{\sqrt{2} N_{nm} N_{n' m+1}}{\sqrt{n''+1}} \int dq e^{-2q} q^{(|m|+1)/2 + |m+1|/2} L_n^{(|m|)}(q) L_{n'}^{(|m+1|)}(q) L_{n''}^{(1)}(2q) \end{aligned}$$

である。 $m > 0$ とすると

$$\begin{aligned} \tilde{L}_m(n, n'; n'') &= \frac{\sqrt{2} N_{nm} N_{n' m+1}}{\sqrt{n''+1}} \int dq e^{-2q} q^{m+1} L_n^{(m)}(q) L_{n'}^{(m+1)}(q) L_{n''}^{(1)}(2q) \\ \tilde{L}_{-m}(n, n'; n'') &= \tilde{L}_{m-1}(n', n; n'') \quad V_{nn_3 n'n'_3}(-m) = V_{n'n'_3 nn_3}(m-1) \end{aligned}$$

固有値方程式

J_z とパリティはよい量子数である。

$$J_z | \alpha \rangle = (m + m_s) | \alpha \rangle, \quad P | \alpha \rangle = (-)^{m+n_3} | \alpha \rangle$$

J_z の固有値を Ω とし $m_0 = \Omega - 1/2$ すると, 4成分スピノールのパリティ演算子は $\gamma_0 P$ であるから

$$\begin{aligned} f(\mathbf{r}) &= \sum_{\substack{nn_3 \\ m_0+n_3}} f_{nn_3 m=m_0}^{(+)} |nn_3 m_0\rangle | \frac{1}{2} \rangle + \sum_{\substack{nn_3 \\ m_0+1+n_3}} f_{nn_3 m=m_0+1}^{(-)} |nn_3 m_0+1\rangle | -\frac{1}{2} \rangle \\ g(\mathbf{r}) &= \sum_{\substack{nn_3 \\ m_0+n_3+1}} g_{nn_3 m=m_0}^{(+)} |nn_3 m_0\rangle | \frac{1}{2} \rangle + \sum_{\substack{nn_3 \\ m_0+n_3}} g_{nn_3 m=m_0+1}^{(-)} |nn_3 m_0+1\rangle | -\frac{1}{2} \rangle \end{aligned}$$

である。和の下の、例えば $m_0 + n_3$ はパリティ $+1$ のとき even, -1 のとき odd になる組合せだけをとる。簡単のため

$$f_{nn_3}^{(+)} = f_{nn_3 m=m_0}^{(+)}, \quad f_{nn_3}^{(-)} = f_{nn_3 m=m_0+1}^{(-)}, \quad g_{nn_3}^{(+)} = g_{nn_3 m=m_0+1}^{(+)}, \quad g_{nn_3}^{(-)} = f_{nn_3 m=m_0}^{(-)}$$

とおくと ($a = \{n, n_3\}$)

$$\sum_{a'} \begin{pmatrix} A_{aa'}^{(+)}(m_0) & 0 & B_{aa'} & C_{aa'} - V_{aa'}(m_0) \\ 0 & A_{aa'}^{(+)}(m_0+1) & D_{aa'} + V_{a'a}(m_0) & -B_{aa'} \\ -B_{aa'} & -C_{aa'} + V_{aa'}(m_0) & -A_{aa'}^{(-)}(m_0) & 0 \\ -D_{aa'} - V_{a'a}(m_0) & B_{aa'} & 0 & -A_{aa'}^{(-)}(m_0+1) \end{pmatrix} \begin{pmatrix} f_{a'}^{(+)} \\ f_{a'}^{(-)} \\ g_{a'}^{(+)} \\ g_{a'}^{(-)} \end{pmatrix} \\ = E \begin{pmatrix} f_a^{(+)} \\ f_a^{(-)} \\ g_a^{(+)} \\ g_a^{(-)} \end{pmatrix} \quad (5.7)$$

ただし

$$A_{aa'}^{(\pm)}(m) = \delta_{aa'} M + \mathcal{A}^{(\pm)}(nn_3, n' n'_3; m)$$

$$B_{aa'} = \frac{\delta_{nn'}}{b_3} \left(\sqrt{n'_3/2} \delta_{n_3 n'_3-1} - \sqrt{n_3/2} \delta_{n_3 n'_3+1} \right) = -B_{a'a}$$

$$C_{aa'} = \delta_{n_3 n'_3} C_{nm_0 n' m_0+1} = \frac{\delta_{n_3 n'_3}}{b} \times \begin{cases} \left(\sqrt{n} \delta_{n' n-1} + \sqrt{n+m_0+1} \delta_{n' n} \right), & m_0 \geq 0 \\ - \left(\sqrt{n'} \delta_{n' n+1} + \sqrt{n'-m_0} \delta_{n' n} \right), & m_0 < 0 \end{cases}$$

$$D_{aa'} = \delta_{n_3 n'_3} D_{nm_0+1 n' m_0} = \frac{\delta_{n_3 n'_3}}{b} \times \begin{cases} - \left(\sqrt{n'} \delta_{n' n+1} + \sqrt{n'+m_0+1} \delta_{n' n} \right), & m_0 \geq 0 \\ \left(\sqrt{n} \delta_{n' n-1} + \sqrt{n-m_0} \delta_{n' n} \right), & m_0 < 0 \end{cases} \\ = -C_{a'a}$$

5.3 Klein-Gordon 方程式

ベクトルポテンシャル U の場合

$$(-\nabla^2 + m_b^2) U = g^2 J$$

を U_φ, U_r で表すと

$$(-\nabla^2 + m_b^2) (U_r \cos \varphi - U_\varphi \sin \varphi) = g^2 J_1, \quad (-\nabla^2 + m_b^2) (U_r \sin \varphi + U_\varphi \cos \varphi) = g^2 J_2$$

である。 U が φ に依存しないとすると

$$\nabla^2 U \cos \varphi = \left(\frac{1}{r} \partial_r r \partial_r + \partial_z^2 + \frac{1}{r^2} \partial_\varphi^2 \right) U \cos \varphi = \cos \varphi \left(\nabla^2 - \frac{1}{r^2} \right) U$$

になるから

$$\cos \varphi (-\nabla^2 + m_b^2) U_r - \sin \varphi (-\nabla^2 + m_b^2) U_\varphi + \frac{\cos \varphi}{r^2} U_r - \frac{\sin \varphi}{r^2} U_\varphi = g^2 J_1 \\ \sin \varphi (-\nabla^2 + m_b^2) U_r + \cos \varphi (-\nabla^2 + m_b^2) U_\varphi + \frac{\sin \varphi}{r^2} U_r + \frac{\cos \varphi}{r^2} U_\varphi = g^2 J_2$$

したがって

$$\left(-\nabla^2 + m_b^2 + \frac{1}{r^2}\right) U_r = g^2 J_r, \quad \left(-\nabla^2 + m_b^2 + \frac{1}{r^2}\right) U_\varphi = g^2 J_\varphi$$

である。

$q' = r^2/b_m^2 = 2q$, $\zeta' = z/b_{m3} = \sqrt{2}\zeta$ とおく。ただし

$$b_m = \frac{b}{\sqrt{2}}, \quad b_{m3} = \frac{b_3}{\sqrt{2}}, \quad b_{m0}^3 = b_m^2 b_{m3} = \frac{b_0^3}{2\sqrt{2}}$$

である。ここで $m > 0$ を固定して

$$|nn_3\rangle = \sqrt{\frac{2}{b_m^2 b_{m3}}} R_{nm}(q') \phi_{n_3}(\zeta'), \quad R_{nm} = N_{nm} e^{-q'/2} q'^{m/2} L_n^{(m)}(q'), \quad \phi_n = N_n e^{-\zeta'^2/2} H_n(\zeta')$$

とすると

$$\begin{aligned} \langle nn_3 | (-\nabla^2 + m_b^2) | n' n'_3 \rangle &= \int_0^\infty dq' \int_{-\infty}^\infty d\zeta' R_{nm}(q') \phi_{n_3}(\zeta') (-\nabla^2 + m^2) R_{n'm'}(q') \phi_{n'_3}(\zeta') \\ &= \left(\frac{2n+m+1}{b_m^2} + \frac{n_3+1/2}{b_{m3}^2} + m_b^2 \right) \delta_{nn'} \delta_{n_3 n'_3} \\ &\quad + \frac{\delta_{n_3 n'_3}}{b_m^2} \left(\sqrt{n(n+m)} \delta_{n, n'+1} + \sqrt{n'(n'+m)} \delta_{n+1, n'} - m^2 c_{nn'} \right) \\ &\quad - \frac{\delta_{nn'}}{b_{m3}^2} \left(\frac{\sqrt{(n_3+1)n'_3}}{2} \delta_{n_3 n'_3-2} + \frac{\sqrt{(n'_3+1)n_3}}{2} \delta_{n_3 n'_3+2} \right) \end{aligned} \quad (5.8)$$

ただし

$$\begin{aligned} c_{nn'} &= N_{nm} N_{n'm} \int_0^\infty dq e^{-q} q^{m-1} L_n^{(m)} L_{n'}^{(m)} \\ &= N_{nm} N_{n'm} \sum_{k=0}^{n_<} \frac{(k+m-1)!}{k!}, \quad n_< = \min(n, n') \end{aligned}$$

また

$$\begin{aligned} \langle nn_3 | \frac{1}{r^2} | n' n'_3 \rangle &= \int_0^\infty dq' \int_{-\infty}^\infty d\zeta' R_{nm}(q') \phi_{n_3}(\zeta') \frac{1}{r^2} R_{n'm'}(q') \phi_{n'_3}(\zeta') \\ &= \frac{\delta_{n_3 n'_3}}{b_m^2} N_{nm} N_{n'm} \int_0^\infty dq e^{-q} q^{m-1} L_n^{(m)} L_{n'}^{(m)} = \frac{\delta_{n_3 n'_3}}{b_m^2} c_{nn'} \end{aligned}$$

である。

これから Klein-Gordon 方程式

$$(-\nabla^2 + m_b^2) U(\mathbf{r}) = g^2 \rho(\mathbf{r}), \quad \text{または} \quad \left(-\nabla^2 + m_b^2 + \frac{1}{r^2}\right) U_\varphi(\mathbf{r}) = g^2 J_\varphi(\mathbf{r})$$

は

$$U(\mathbf{r}) = \sum_{nn_3} U_{nn_3} |nn_3\rangle = \sum_{nn_3} U_{nn_3} R_{nm}(q') \phi_{n_3}(\zeta')$$

とおくと

$$\sum_{n' n'_3} h_{nn_3 n' n'_3} U_{n' n'_3} = g^2 s_{nn_3}$$

になる。 ρ のとき $m = 0$, J_φ のとき $m = 1$ の展開を使うと

$$\begin{aligned} h_{nn_3 n'n'_3} &= \left(\frac{2n+m+1}{b_m^2} + \frac{n_3+1/2}{b_{m_3}^2} + m_b^2 \right) \delta_{nn'} \delta_{n_3 n'_3} \\ &\quad + \frac{\delta_{n_3 n'_3}}{b_m^2} \left(\sqrt{n(n+m)} \delta_{n n'+1} + \sqrt{n'(n'+m)} \delta_{n+1 n'} \right) \\ &\quad - \frac{\delta_{nn'}}{b_{m_3}^2} \left(\frac{\sqrt{(n_3+1)n'_3}}{2} \delta_{n_3 n'_3-2} + \frac{\sqrt{(n'_3+1)n_3}}{2} \delta_{n_3 n'_3+2} \right) \end{aligned}$$

ただし ($n_3 = \text{even}$)

$$s_{nn_3} = \int_0^\infty dq' \int_{-\infty}^\infty d\zeta' R_n(q') \phi_{n_3}(\zeta') s(\mathbf{r}) = \frac{2}{b_m^2 b_{m_3}} \int_0^\infty dr r \int_{-\infty}^\infty dz R_{nm}(q') \phi_{n_3}(\zeta') s(\mathbf{r})$$

である。

$$\rho_{nn_3} = \int_0^\infty dq' \int_{-\infty}^\infty d\zeta' R_n(q') \phi_{n_3}(\zeta') \rho(\mathbf{r}) = \frac{2}{b_m^2 b_{m_3}} \int_0^\infty dr r \int_{-\infty}^\infty dz R_n(q') \phi_{n_3}(\zeta') \rho(\mathbf{r})$$

$\rho(\mathbf{r})$ は波動関数の積であるから

$$\rho(\mathbf{r}) = \frac{2}{b_0^3} \frac{1}{2\pi} \sum_{\alpha\alpha'} \rho_{\alpha\alpha'} \delta_{mm'} \delta_{m_s m'_s} R_{nm}(q) \phi_{n_3}(\zeta) R_{n'm}(q) \phi_{n'_3}(\zeta) \quad (5.9)$$

という形式に展開できるから

$$\rho_{nn_3} = \frac{1}{2\pi} \frac{2}{b_m^2 b_{m_3}} \sum_{\alpha'\alpha''} \rho_{\alpha'\alpha''} \delta_{m'm''} \delta_{m'_s m''_s} L_{m'}(n', n''; n) H(n'_3, n''_3; n_3)$$

$\rho_{\alpha\alpha'}$ を具体的に波動関数の展開係数で表すと

$$\begin{aligned} (\rho_s)_{\alpha\alpha'} &= \sum_i \left(f_\alpha^{(i)} f_{\alpha'}^{(i)} - g_\alpha^{(i)} g_{\alpha'}^{(i)} \right), \quad (\rho_B)_{\alpha\alpha'} = \sum_i \left(f_\alpha^{(i)} f_{\alpha'}^{(i)} + g_\alpha^{(i)} g_{\alpha'}^{(i)} \right) \\ (\rho_3)_{\alpha\alpha'} &= \sum_i \tau_i \left(f_\alpha^{(i)} f_{\alpha'}^{(i)} + g_\alpha^{(i)} g_{\alpha'}^{(i)} \right), \quad (\rho_P)_{\alpha\alpha'} = \sum_i (\tau_P)_i \left(f_\alpha^{(i)} f_{\alpha'}^{(i)} + g_\alpha^{(i)} g_{\alpha'}^{(i)} \right) \end{aligned}$$

ここで i は占有されている状態についての和である。例えば, $(\rho_B)_{nn_3}$ へのある1つの hole 状態の寄与は

$$\begin{aligned} &\frac{1}{2\pi} \frac{2}{b_m^2 b_{m_3}} \sum_{\alpha'\alpha''} \left(f_{\alpha'} f_{\alpha''} + g_{\alpha'} g_{\alpha''} \right) \delta_{m'm''} \delta_{m'_s m''_s} L_m(n', n''; n) H(n'_3, n''_3; n_3) \\ &= \frac{1}{2\pi} \frac{2}{b_m^2 b_{m_3}} \sum_{n'n'_3 n''n''_3} \left[\left(f_{n'n'_3}^{(+)} f_{n''n''_3}^{(+)} + g_{n'n'_3}^{(+)} g_{n''n''_3}^{(+)} \right) L_{m_0}(n', n''; n) H(n'_3, n''_3; n_3) \right. \\ &\quad \left. + \left(f_{n'n'_3}^{(-)} f_{n''n''_3}^{(-)} + g_{n'n'_3}^{(-)} g_{n''n''_3}^{(-)} \right) L_{m_0+1}(n', n''; n) H(n'_3, n''_3; n_3) \right] \end{aligned}$$

になる。

$\rho(\mathbf{r})$ を ρ_{nn_3} で表すと

$$\rho(\mathbf{r}) = \sum_{nn_3} \rho_{nn_3} R_n(q') \phi_{n_3}(\zeta') \quad (5.10)$$

である。 $\rho(\mathbf{r})$ を求める場合, (5.9) よりも (5.10) の方が数値計算的には容易に求まる。

$$\begin{aligned}\nabla^2 \rho(\mathbf{r}) &= \sum_{nn_3} \rho_{nn_3} \left(\frac{1}{r} \partial_r r \partial_r + \partial_z^2 \right) R_n(q') \phi_{n_3}(\zeta') \\ &= \sum_{nn_3} \rho_{nn_3} \left(\frac{q' - 2(2n+1)}{b_m^2} + \frac{\zeta'^2 - (2n_3+1)}{b_{m3}^2} \right) R_n(q') \phi_{n_3}(\zeta') \\ &= e^{-(q'+\zeta'^2)/2} \sum_{nn_3} \rho_{nn_3} N_{n_3} L_n(q') H_{n_3}(\zeta') \left(\frac{q' - 2(2n+1)}{b_m^2} + \frac{\zeta'^2 - (2n_3+1)}{b_{m3}^2} \right) \quad (5.11)\end{aligned}$$

非線形項

U_σ は

$$(-\nabla^2 + m^2) U_\sigma(\mathbf{r}) = -g_\sigma^2 \rho_s(\mathbf{r}) - g_2 g_\sigma \sigma^2 - g_3 g_\sigma \sigma^3 = -g_\sigma^2 \left(\rho_s(\mathbf{r}) + c_2 U_\sigma^2 + c_3 U_\sigma^3 \right)$$

を満たす。ただし

$$c_2 = \frac{g_2}{g_\sigma^3}, \quad c_3 = \frac{g_3}{g_\sigma^4}$$

である。 U_σ は多項式 u を用いて

$$U_\sigma = \exp(-q'/2 - \zeta'^2/2) u(q', \zeta'), \quad u(q', \zeta') = \sum_{nn_3} U_{nn_3} N_{n_3} L_n(q') H_{n_3}(\zeta')$$

と表せる。 $U_\sigma(\mathbf{r})$ の非線形項の展開係数は

$$\begin{aligned}U_{nn_3}^{(k)} &= \frac{2}{b_m^2 b_{m3}^2} \int_0^\infty dr r \int_{-\infty}^\infty dz R_n(q') \phi_{n_3}(\zeta') \left(U_\sigma(\mathbf{r}) \right)^k \\ &= 2N_{n_3} \int_0^\infty dq' \int_0^\infty d\zeta' \exp(-(q' + \zeta'^2)/c_k) L_n(q') H_{n_3}(\zeta') u(q', \zeta')^k\end{aligned}$$

ここで $c_k = 2/(k+1)$ である。 $q = q'/c_k$, $\zeta = \zeta'/\sqrt{c_k}$ とおくと

$$U_{nn_3}^{(k)} = 2N_{n_3} c_k^{3/2} \int_0^\infty dq \int_0^\infty d\zeta \exp(-q - \zeta^2) L_n(q') H_{n_3}(\zeta') u(q', \zeta')^k$$

となる。したがって

$$f_{nn_3}(q', \zeta') = N_{n_3} L_n(q') H_{n_3}(\zeta')$$

とすると

$$\begin{aligned}U_{nn_3}^{(k)} &= 2c_k^{3/2} \int_0^\infty dq \int_0^\infty d\zeta \exp(-q - \zeta^2) f_{nn_3}(q', \zeta') u(q', \zeta')^k \\ u(q', \zeta') &= \sum_{nn_3} U_{nn_3} f_{nn_3}(q', \zeta'), \quad q' = c_k q, \quad \zeta' = \sqrt{c_k} \zeta\end{aligned}$$

である。 U_{nn_3} が満たす非線形方程式は

$$\sum_{n'n'_3} h_{nn_3 n'n'_3} U_{n'n'_3} = -g_\sigma^2 \left((\rho_s)_{nn_3} + c_2 U_{nn_3}^{(2)} + c_3 U_{nn_3}^{(3)} \right)$$

となる。 U_{nn_3} , $U_{nn_3}^{(2)}$, $U_{nn_3}^{(3)}$ の次元は L^{-1} , L^{-2} , L^{-3} , また, h , ρ_{nn_3} , c_2 の次元は L^{-2} , L^{-3} , L^{-1}

ベクトルポテンシャル

カレントの期待値は

$$j_\varphi(\mathbf{r}) = \begin{pmatrix} f^\dagger & -i g^\dagger \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 0 & \sigma_\varphi \\ \sigma_\varphi & 0 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} f \\ i g \end{pmatrix} = i (f^\dagger \sigma_\varphi g - g^\dagger \sigma_\varphi f) = 2 \operatorname{Re} (i f^\dagger \sigma_\varphi g) \\ = \operatorname{Re} (f^\dagger (\sigma_+ e^{-i\varphi} - \sigma_- e^{i\varphi}) g)$$

であるから

$$j_\varphi(\mathbf{r}) = \operatorname{Re} \sum_{\alpha\alpha'} f_\alpha^* g_{\alpha'} \left(\langle \alpha | \sigma_+ e^{-i\varphi} \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}}) | \alpha' \rangle - \langle \alpha | \sigma_- e^{i\varphi} \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}}) | \alpha' \rangle \right) \\ = \operatorname{Re} \sum_{\alpha\alpha'} \left(f_\alpha^* g_{\alpha'} - f_{\alpha'} g_\alpha^* \right) \langle \alpha | \sigma_+ e^{-i\varphi} \delta(\mathbf{r} - \hat{\mathbf{r}}) | \alpha' \rangle \\ = \operatorname{Re} \sum_{\alpha\alpha'} \left(f_\alpha^* g_{\alpha'} - f_{\alpha'} g_\alpha^* \right) \frac{1}{2\pi} \frac{2}{b_0^3} 2\delta_{m_s m'_s+1} R_{nm} R_{n'm'} \phi_{n_3} \phi_{n'_3} e^{i(-m-1+m')\varphi}$$

角運動量の z 成分はよい量子数であるから $-m-1+m'=0$ である。したがって

$$j_\varphi(\mathbf{r}) = \frac{1}{\pi} \frac{2}{b_0^3} \operatorname{Re} \sum_{\alpha\alpha'} \left(f_\alpha^* g_{\alpha'} - f_{\alpha'} g_\alpha^* \right) \delta_{m_s m'_s+1} \delta_{m m'-1} R_{nm} R_{n'm'} \phi_{n_3} \phi_{n'_3}$$

となる。

$$J_{\alpha\alpha'} = \operatorname{Re} \sum_i \left(f_\alpha^{(i)*} g_{\alpha'}^{(i)} - f_{\alpha'}^{(i)} g_\alpha^{(i)*} \right)$$

とすると、全カレント $J_\varphi(\mathbf{r})$ は

$$J_\varphi(\mathbf{r}) = \frac{1}{\pi} \frac{2}{b_0^3} \sum_{\alpha\alpha'} J_{\alpha\alpha'} \delta_{m_s m'_s+1} \delta_{m m'-1} R_{nm}(q) R_{n'm'}(q) \phi_{n_3}(\zeta) \phi_{n'_3}(\zeta)$$

である。パリティもよい量子数であるから $\mathbf{J}(\mathbf{r}) = -\mathbf{J}(-\mathbf{r})$ である。したがって

$$J_\varphi(\mathbf{r}) = \mathbf{e}_\varphi(\mathbf{r}) \cdot \mathbf{J}(\mathbf{r}) = (-\mathbf{e}_\varphi(\mathbf{r})) \cdot \mathbf{J}(-\mathbf{r}) = \mathbf{e}_\varphi(-\mathbf{r}) \cdot \mathbf{J}(-\mathbf{r}) = J_\varphi(-\mathbf{r})$$

になる。上の和は ϕ_{n_3} と $\phi_{n'_3}$ が同じパリティだけの和になっている。

$$J_{nn_3} = \frac{2}{b_m^2 b_{m_3}} \int_0^\infty dr r \int_{-\infty}^\infty dz R_{n1}(q') \phi_{n_3}(\zeta') J_\varphi(\mathbf{r}) \\ = \frac{1}{\pi} \frac{2}{b_m^2 b_{m_3}} \sum_{\alpha'\alpha''} J_{\alpha'\alpha''} \delta_{m'_s m''_s+1} \delta_{m' m''-1} \\ \times \int_0^\infty dq R_{n'm'}(q) R_{n''m''+1} R_{n1}(2q) \int_{-\infty}^\infty d\zeta \phi_{n'_3}(\zeta) \phi_{n''_3}(\zeta) \phi_{n_3}(\sqrt{2}\zeta) \\ = \frac{1}{\pi} \frac{2}{b_m^2 b_{m_3}} \sum_{\alpha'\alpha''} J_{\alpha'\alpha''} \delta_{m'_s m''_s+1} \delta_{m' m''-1} \tilde{L}_{m'}(n', n''; n) H(n'_3, n''_3; n_3)$$

ただし n_3 が odd のとき $J_{nn_3} = 0$ である。

$$V_\varphi = \sum_{nn_3} V_{nn_3}^{(\varphi)} R_{n1}(2q) \phi_{n_3}(\sqrt{2}\zeta)$$

とすると

$$\sum_{n'n'_3} h_{nn_3 n'n'_3} V_{n'n'_3}^{(\varphi)} = g^2 J_{nn_3}$$

により $V_{nn_3}^{(\varphi)}$ が決まる。

j_φ の和を具体的に書き下すと

$$\begin{aligned} j_\varphi(\mathbf{r}) &= \frac{1}{\pi} \frac{2}{b_0^3} \operatorname{Re} \sum_{\alpha\alpha'} \left(f_{\alpha'}^* g_{\alpha'} - f_{\alpha'} g_{\alpha'}^* \right) \delta_{m_s m'_s+1} \delta_{m m'-1} R_{nm} R_{n'm'} \phi_{n_3} \phi_{n'_3} \\ &= \frac{1}{\pi} \frac{2}{b_0^3} \operatorname{Re} \sum_{nn_3 n'n'_3} \left(f_{nn_3}^{(+)} g_{n'n'_3}^{(-)} - g_{nn_3}^{(+)} f_{n'n'_3}^{(-)} \right) R_{nm_0} R_{n'm_0+1} \phi_{n_3} \phi_{n'_3} \end{aligned}$$

である。また、 J_{nn_3} への1つの hole 状態の寄与は

$$\frac{1}{\pi} \frac{2}{b_m^2 b_{m_3}} \sum_{n'n'_3 n''n''_3} \left(f_{n'n'_3}^{(+)} g_{n''n''_3}^{(-)} - g_{n'n'_3}^{(+)} f_{n''n''_3}^{(-)} \right) \tilde{L}_{m_0}(n', n''; n) H(n'_3, n''_3; n_3)$$

である。

クーロンポテンシャル

クーロンポテンシャル

$$V_C(r, z) = e^2 \int d^3 r' \frac{\rho_p(r', z')}{|\mathbf{r} - \mathbf{r}'|}$$

は $\nabla'^2 |\mathbf{r} - \mathbf{r}'| = 2/|\mathbf{r} - \mathbf{r}'|$ を使うと

$$\begin{aligned} V_C(r, z) &= \frac{e^2}{2} \int d^3 r' |\mathbf{r} - \mathbf{r}'| \nabla'^2 \rho_p(r', z') \\ &= \frac{e^2}{2} \int_0^\infty dr' r' \int_{-\infty}^\infty dz' \nabla'^2 \rho_p(r', z') \int_0^{2\pi} d\theta' \sqrt{(r+r')^2 + (z-z')^2 - 4rr' \cos^2 \frac{\theta' - \theta}{2}} \\ &= 2e^2 \int_0^\infty dr' r' \int_{-\infty}^\infty dz' \nabla'^2 \rho_p(r', z') \int_0^{\pi/2} d\varphi \sqrt{(r+r')^2 + (z-z')^2 - 4rr' \sin^2 \varphi} \\ &= 2e^2 \int_0^\infty dr' r' \int_{-\infty}^\infty dz' \sqrt{(r+r')^2 + (z-z')^2} E(x) \nabla'^2 \rho_p(r', z') \end{aligned}$$

ただし

$$x = \sqrt{\frac{4rr'}{(r+r')^2 + (z-z')^2}}$$

また

$$E(k) = \int_0^{\pi/2} d\varphi \sqrt{1 - k^2 \sin^2 \varphi} = \int_0^1 dx \sqrt{\frac{1 - k^2 x^2}{1 - x^2}}$$

は第2種完全楕円積分である。 $\nabla'^2 \rho_p(r, z)$ に (5.11) を用いると

$$\begin{aligned} V_C(r, z) &= 2e^2 \sum_{nn_3} \rho_{nn_3} N_{n_3} \int_0^\infty dr' r' \int_{-\infty}^\infty dz' e^{-(q'+\zeta'^2)/2} L_n(q') H_{n_3}(\zeta') \\ &\quad \left(\frac{q' - 2(2n+1)}{b_m^2} + \frac{\zeta'^2 - (2n_3+1)}{b_{m_3}^2} \right) \sqrt{(r+r')^2 + (z-z')^2} E(x) \\ &= 2e^2 \frac{b_0^3}{2} \sum_{nn_3} \rho_{nn_3} N_{n_3} \int_0^\infty dq \int_{-\infty}^\infty d\zeta \exp(-q - \zeta^2) L_n(2q) H_{n_3}(\sqrt{2}\zeta) \\ &\quad \left(\frac{2q - 2(2n+1)}{b_m^2} + \frac{2\zeta^2 - (2n_3+1)}{b_{m_3}^2} \right) \sqrt{(r+b\sqrt{q})^2 + (z-b_3\zeta)^2} E(x) \end{aligned}$$

したがって

$$\begin{aligned} V_{nn_3}(r, z) &= e^2 b_0^3 N_{n_3} \int_0^\infty dq \int_{-\infty}^\infty d\zeta \exp(-q - \zeta^2) L_n(2q) H_{n_3}(\sqrt{2}\zeta) \\ &\quad \left(\frac{2q - 2(2n+1)}{b_m^2} + \frac{2\zeta^2 - (2n_3+1)}{b_{m_3}^2} \right) \sqrt{(r+b\sqrt{q})^2 + (z-b_3\zeta)^2} E(x) \end{aligned}$$

とすると

$$V_C(r, z) = \sum_{nn_3} \rho_{nn_3} V_{nn_3}(r, z)$$

である。

$A^{(+)}(nn_3, n'n'_3; m)$ への寄与は $n_3 + n'_3 = \text{even}$ のとき

$$\begin{aligned} & \int_0^\infty dq \int_{-\infty}^\infty d\zeta R_{nm}(q) R_{n'm}(q) \phi_{n_3}(\zeta) \phi_{n'_3}(\zeta) V_C(r, z) \\ &= 2N_{nm} N_{n'm} N_{n_3} N_{n'_3} \\ & \times \int_0^\infty dq \int_0^\infty d\zeta \exp(-q - \zeta^2) q^{|m|} L_n^{(|m|)}(q) L_{n'}^{(|m|)}(q) H_{n_3}(\zeta) H_{n'_3}(\zeta) V_C(b\sqrt{q}, b_3\zeta) \end{aligned}$$

また

$$\begin{aligned} \int d^3r \rho(\mathbf{r}) V_C(r, z) &= 2\pi \sum_{nn_3} \rho_{nn_3} N_{n_3} \int_0^\infty dr r \int_{-\infty}^\infty dz e^{-(q'+\zeta'^2)/2} L_n(q') H_{n_3}(\zeta') V_C(r, z) \\ &= 2\pi b_0^3 \sum_{nn_3} \rho_{nn_3} N_{n_3} \int_0^\infty dq \int_0^\infty d\zeta \exp(-q - \zeta^2) L_n(2q) H_{n_3}(\sqrt{2}\zeta) V_C(b\sqrt{q}, b_3\zeta) \end{aligned}$$

である。Laguerre–Gauss の分点 q_i , Hermite–Gauss の分点 ζ_j における $V_C(b\sqrt{q_i}, b_3\zeta_j)$ を求めておけば数値計算できる。

5.4 初期密度

初期密度として楕円体

$$\rho(r, z) = \rho_0 \theta(R_b - \tilde{r}), \quad \rho_0 = \frac{A}{4\pi R^3/3}, \quad R_b = \frac{R}{b_0}, \quad \tilde{r} = \sqrt{\frac{r^2}{b^2} + \frac{z^2}{b_3^2}} = \sqrt{q + \zeta^2}$$

を考える。

$$\begin{aligned} \rho_{nn_3} &= \frac{2}{b_n^2 b_{m3}} \int_0^\infty dr r \int_{-\infty}^\infty dz R_n(q') \phi_{n_3}(\zeta') \rho(\mathbf{r}) \\ &= 4\sqrt{2} \rho_0 N_{n_3} \int_0^\infty dq \int_0^\infty d\zeta \exp(-q - \zeta^2) L_n(2q) H_{n_3}(\sqrt{2}\zeta) \theta(R_b - \sqrt{q + \zeta^2}) \end{aligned}$$

である。

5.5 Magnetic moment

Dirac magnetic moment は

$$\mu_D = g_\ell M (\mathbf{r} \times \boldsymbol{\alpha})_3 = g_\ell M r (\alpha_y \cos \varphi - \alpha_x \sin \varphi) = g_\ell M r \alpha_\varphi$$

であるから、ある 1 粒子状態の期待値は

$$\begin{aligned} \mu &= g_\ell M \int d^3r r j_\varphi(\mathbf{r}) \\ &= g_\ell M \frac{1}{\pi} \frac{2}{b_0^3} \sum_{nn_3 n'n'_3} \left(f_{nn_3}^{(+)} g_{n'n'_3}^{(-)} - g_{nn_3}^{(+)} f_{n'n'_3}^{(-)} \right) \int d^3r r R_{nm_0}(q) R_{n' m_0+1}(q) \phi_{n_3}(\zeta) \phi_{n'_3}(\zeta) \\ &= 2b g_\ell M \sum_{nn_3 n'} \left(f_{nn_3}^{(+)} g_{n'n_3}^{(-)} - g_{nn_3}^{(+)} f_{n'n_3}^{(-)} \right) \int_0^\infty dq \sqrt{q} R_{nm_0}(q) R_{n' m_0+1}(q) \end{aligned}$$

原子核全体では ($n_3 = \text{even}$)

$$\begin{aligned}
\mu &= g_\ell M \int d^3r r J_\varphi(\mathbf{r}) \\
&= g_\ell M \sum_{nn_3} J_{nn_3} \int d^3r r R_{n1}(2q) \phi_{n_3}(\sqrt{2}\zeta) \\
&= 2\pi g_\ell M b_0^3 b \sum_{nn_3} J_{nn_3} \int_0^\infty dq \sqrt{q} R_{n1}(2q) \int_0^\infty d\zeta \phi_{n_3}(\sqrt{2}\zeta) \\
&= 2\pi g_\ell M b_0^3 b \sum_{nn_3} J_{nn_3} N_{n_3} \sqrt{\frac{2}{n+1}} \int_0^\infty dq e^{-q} L_n^{(1)}(2q) \int_0^\infty d\zeta e^{-\zeta^2} H_{n_3}(\sqrt{2}\zeta)
\end{aligned}$$

5.6 付録

(5.2) の導出

2次元等方調和振動子

$$-\frac{\hbar^2}{2M} (\partial_x^2 + \partial_y^2) + \frac{1}{2} M \omega^2 (x^2 + y^2) = -\frac{\hbar^2}{2M} \left(\frac{1}{r} \partial_r r \partial_r + \frac{1}{r^2} \partial_\varphi^2 \right) + \frac{1}{2} M \omega^2 r^2$$

固有関数を $R(r) e^{im\varphi} / \sqrt{2\pi}$ とおくと

$$\left[-\frac{\hbar^2}{2M} \left(\frac{1}{r} \partial_r r \partial_r - \frac{m^2}{r^2} \right) + \frac{1}{2} M \omega^2 r^2 \right] R = E R$$

ここで

$$q = \frac{r^2}{b^2}, \quad b = \sqrt{\frac{\hbar}{M\omega}}$$

とすると

$$\left(4\partial_q q \partial_q - \frac{m^2}{q} - q + \frac{2E}{\hbar\omega} \right) R = 0$$

になる。 $q \rightarrow 0, q \rightarrow \infty$ における漸近形を考慮して

$$R = q^{|m|/2} e^{-q/2} F$$

とすると

$$\begin{aligned}
\partial_q R &= \frac{1}{2} q^{|m|/2} e^{-q/2} \left(\frac{|m|}{q} - 1 + 2\partial_q \right) F \\
4\partial_q q \partial_q R &= q^{|m|/2} e^{-q/2} \left(\frac{|m|}{q} - 1 + 2\partial_q \right) q \left(\frac{|m|}{q} - 1 + 2\partial_q \right) F \\
&= q^{|m|/2} e^{-q/2} \left(4q\partial_q^2 + 4(|m| + 1 - q) \partial_q - 2(|m| + 1) + q + \frac{m^2}{q} \right) F
\end{aligned}$$

したがって

$$\left(q \partial_q^2 + (|m| + 1 - q) \partial_q + \frac{E}{2\hbar\omega} - \frac{|m| + 1}{2} \right) F = 0$$

Laguerre の多項式 $L_n^{(\alpha)}(q)$ は

$$\left(q \partial_q^2 + (\alpha + 1 - q) \partial_q + n \right) L_n^{(\alpha)}(q) = 0 \quad (5.12)$$

満たすから、2次元等方調和振動子の固有関数は

$$\frac{\sqrt{2}}{b} R_{nm}(q) \frac{e^{im\varphi}}{\sqrt{2\pi}}, \quad R_{nm}(q) = N_{nm} q^{|m|/2} e^{-q/2} L_n^{(|m|)}(q)$$

になる。

(5.4), (5.5) の導出

$$C_{nm n'm'} = \int_0^\infty dq R_{nm} \left(\partial_r + \frac{m'}{r} \right) R_{n'm'} = \frac{1}{b} \int_0^\infty dq q^{-1/2} R_{nm} \left(2q \frac{d}{dq} + m' \right) R_{n'm'}$$

$$D_{nm n'm'} = \int_0^\infty dq R_{nm} \left(\partial_r - \frac{m'}{r} \right) R_{n'm'} = \frac{1}{b} \int_0^\infty dq q^{-1/2} R_{nm} \left(2q \frac{d}{dq} - m' \right) R_{n'm'}$$

を求める。数学公式 III 97 ページ

$$q \frac{dL_n^{(m)}}{dq} = nL_n^{(m)} - (n+m)L_{n-1}^{(m)} \quad (5.13)$$

$$qL_n^{(m)} = (2n+1+m)L_n^{(m)} - (n+1)L_{n+1}^{(m)} - (n+m)L_{n-1}^{(m)} \quad (5.14)$$

を使うと ($n=0$ のときは $L_{n-1}^{(m)} = 0$ とすれば成立)

$$\begin{aligned} 2q \frac{dR_{nm}}{dq} &= 2N_{nm} q \frac{d}{dq} q^{|m|/2} e^{-q/2} L_n^{(|m|)}(q) \\ &= N_{nm} q^{|m|/2} e^{-q/2} \left(|m| - q + 2q \frac{d}{dq} \right) L_n^{(|m|)}(q) \\ &= N_{nm} q^{|m|/2} e^{-q/2} \left((n+1)L_{n+1}^{(|m|)} - L_n^{(|m|)} - (n+|m|)L_{n-1}^{(|m|)} \right) \end{aligned} \quad (5.15)$$

であるから

$$\begin{aligned} C_{nm n'm'} &= \frac{N_{nm} N_{n'm'}}{b} \int dq e^{-q} q^{(|m|+|m'|-1)/2} \\ &\quad L_n^{(|m|)} \left((n'+1)L_{n'+1}^{(|m'|)} + (m'-1)L_{n'}^{(|m'|)} - (n'+|m'|)L_{n'-1}^{(|m'|)} \right) \end{aligned}$$

$m \geq 0$ のとき $m' = m+1 > 0$ であるから

$$\begin{aligned} C_{nm n'm'} &= \frac{N_{nm} N_{n'm'}}{b} \int dq e^{-q} q^m L_n^{(m)} \\ &\quad \left((n'+1)L_{n'+1}^{(m+1)} + mL_{n'}^{(m+1)} - (n'+m+1)L_{n'-1}^{(m+1)} \right) \end{aligned} \quad (5.16)$$

ここで

$$L_n^{(\alpha)} = \sum_{k=0}^n \frac{\Gamma(\alpha - \beta + k)}{k! \Gamma(\alpha - \beta)} L_{n-k}^{(\beta)}$$

を使うと

$$L_n^{(m+1)} = \sum_{k=0}^n L_k^{(m)} \quad (5.17)$$

なるから

$$\begin{aligned}
C_{nm n' m'} &= \frac{N_{nm} N_{n' m'}}{b} \int dq e^{-q} q^m L_n^{(m)} \left((n' + 1) \sum_{k=0}^{n'+1} L_k^{(m)} + m \sum_{k=0}^{n'} L_k^{(m)} \right. \\
&\quad \left. - (n' + m + 1) \sum_{k=0}^{n'-1} L_k^{(m)} \right) \\
&= \frac{N_{nm} N_{n' m'}}{b} \frac{(n+m)!}{n!} \left((n' + 1) \sum_{k=0}^{n'+1} \delta_{kn} + m \sum_{k=0}^{n'} \delta_{kn} - (n' + m + 1) \sum_{k=0}^{n'-1} \delta_{kn} \right) \\
&= \frac{1}{b} \frac{N_{n' m'}}{N_{nm}} \left((n' + 1) \delta_{n' n-1} + (n' + 1 + m) \delta_{n' n} \right) \\
&= \frac{1}{b} \left(\sqrt{n} \delta_{n' n-1} + \sqrt{n+m+1} \delta_{n' n} \right)
\end{aligned} \tag{5.18}$$

$m < 0$ のとき $m' = m + 1 \leq 0$ であるから $p = -m' = -m - 1$ とおくと

$$\begin{aligned}
C_{nm n' m'} &= \frac{N_{nm} N_{n' m'}}{b} \int dq e^{-q} q^p L_n^{(p+1)} \left((n' + 1) L_{n'+1}^{(p)} - (p+1) L_{n'}^{(p)} - (n' + p) L_{n'-1}^{(p)} \right) \\
&= \frac{N_{nm} N_{n' m'}}{b} \sum_{k=0}^n \frac{(p+k)!}{k!} \left((n' + 1) \delta_{k n'+1} - (p+1) \delta_{k n'} - (n' + p) \delta_{k n'-1} \right)
\end{aligned}$$

$n < n' - 1$ のとき 0 になる。また, $n \geq n' + 1$

$$\sum_{k=0}^n \dots = \frac{(p+n'+1)!}{(n'+1)!} (n'+1) - \frac{(p+n')!}{n!} (p+1) - \frac{(p+n'-1)!}{(n'-1)!} (n'+p) = 0$$

したがって

$$\begin{aligned}
C_{nm n' m'} &= - \frac{N_{nm} N_{n' m'}}{b} \left(\frac{(p+n'+1)!}{n!} \delta_{n' n} + \frac{(p+n')!}{(n'-1)!} \delta_{n' n+1} \right) \\
&= - \frac{N_{nm} N_{n' m'}}{b} \frac{(n-m)!}{n!} \left(\delta_{n' n+1} + \delta_{n' n} \right) \\
&= - \frac{1}{b} \left(\sqrt{n+1} \delta_{n' n+1} + \sqrt{n-m} \delta_{n' n} \right)
\end{aligned} \tag{5.19}$$

次に

$$\begin{aligned}
D_{nm n' m'} &= \frac{N_{nm} N_{n' m'}}{b} \int dq e^{-q} q^{(|m|+|m'|-1)/2} \\
&\quad L_n^{(|m|)} \left((n' + 1) L_{n'+1}^{(|m'|)} - (m' + 1) L_{n'}^{(|m'|)} - (n' + |m'|) L_{n'-1}^{(|m'|)} \right)
\end{aligned}$$

$m' \geq 0$ のとき $m = m' + 1 > 0$ であるから

$$D_{nm n' m'} = \frac{N_{nm} N_{n' m'}}{b} \int dq e^{-q} q^{m'} L_n^{(m'+1)} \left((n' + 1) L_{n'+1}^{(m')} - (m' + 1) L_{n'}^{(m')} - (n' + m') L_{n'-1}^{(m')} \right)$$

これは (5.19) で $p = m'$ とすればよいから

$$D_{nm n' m'} = - \frac{1}{b} \left(\sqrt{n'} \delta_{n' n+1} + \sqrt{n'+m'+1} \delta_{n' n} \right)$$

$m' < 0$ のとき $p = |m| = -m = -m' - 1$ とおくと

$$D_{nm n' m'} = \frac{N_{nm} N_{n' m'}}{b} \int dq e^{-q} q^p L_n^{(p)} \left((n' + 1) L_{n'+1}^{(p+1)} + p L_{n'}^{(p+1)} - (n' + p + 1) L_{n'-1}^{(p+1)} \right)$$

(5.16) で $m = p$ とおけば

$$\begin{aligned} D_{nmn'm'} &= \frac{N_{nm}N_{n'm'}}{b} \frac{(n+p)!}{n!} \left((n'+1)\delta_{n'n-1} + (n'+1+p)\delta_{n'n} \right) \\ &= \frac{N_{nm}N_{n'm'}}{b} \frac{(n'-m')!}{n'!} \left(\delta_{n'n-1} + \delta_{n'n} \right) \\ &= \frac{1}{b} \left(\sqrt{n} \delta_{n'n-1} + \sqrt{n-m+1} \delta_{n'n} \right) \end{aligned}$$

(5.8) の導出

φ に依存しない関数の場合

$$\nabla^2 = \frac{1}{r} \partial_r r \partial_r + \partial_z^2 = \frac{4}{b_m^2} \partial_{q'} q' \partial_{q'} + \frac{1}{b_{m3}^2} \partial_{\zeta'}^2$$

である。ここである m ($m > 0$) に対して

$$|nn_3\rangle = \sqrt{\frac{2}{b_m^2 b_{m3}}} R_{nm}(q') \phi_{n_3}(\zeta'), \quad R_{nm} = N_{nm} e^{-q'/2} q'^{m/2} L_n^{(m)}(q'), \quad \phi_n = N_n e^{-\zeta'^2/2} H_n(\zeta')$$

とすると

$$-\langle nn_3 | \frac{1}{r} \partial_r r \partial_r | n'n'_3 \rangle = -\delta_{n_3 n'_3} \frac{4}{b_m^2} \int_0^\infty dq R_{nm} \partial_q q \partial_q R_{n'm}$$

(5.14), (5.15) から $m > 0$ のとき

$$\begin{aligned} \partial_q q \partial_q R_{nm} &= N_{nm} q^{m/2} e^{-q/2} \left(q \frac{d^2 L_n^{(m)}}{dq^2} + (m+1-q) \frac{dL_n^{(m)}}{dq} + \frac{1}{4} \left(\frac{m^2}{q} + q - 2(m+1) \right) L_n^{(m)} \right) \\ &= \frac{N_{nm}}{4} q^{m/2} e^{-q/2} \left(\frac{m^2}{q} + q - 2(m+1) - 4n \right) L_n^{(m)} \\ &= \frac{N_{nm}}{4} q^{m/2} e^{-q/2} \left(\frac{m^2}{q} L_n^{(m)} - (2n+m+1)L_n^{(m)} - (n+1)L_{n+1}^{(m)} - (n+m)L_{n-1}^{(m)} \right) \end{aligned}$$

である。したがって

$$\begin{aligned} 4 \int_0^\infty dq R_{nm} \partial_q q \partial_q R_{n'm} &= N_{nm} N_{n'm} \int_0^\infty dq e^{-q} q^m L_n^{(m)} \left(\frac{m^2}{q} L_{n'}^{(m)} - (2n'+m+1)L_{n'}^{(m)} \right. \\ &\quad \left. - (n'+1)L_{n'+1}^{(m)} - (n'+m)L_{n'-1}^{(m)} \right) \\ &= -\frac{N_{n'm}}{N_{nm}} \left((2n+m+1)\delta_{nn'} + (n'+1)\delta_{n n'+1} + (n'+m)\delta_{n n'-1} \right) + m^2 c_{nn'} \\ &= -(2n+m+1)\delta_{nn'} - \sqrt{n(n+m)} \delta_{n n'+1} - \sqrt{n'(n'+m)} \delta_{n n'-1} + m^2 c_{nn'} \end{aligned}$$

ただし

$$c_{nn'} = N_{nm} N_{n'm} \int_0^\infty dq e^{-q} q^{m-1} L_n^{(m)} L_{n'}^{(m)}$$

である。(5.17) より

$$c_{nn'} = N_{nm} N_{n'm} \sum_{k=0}^n \sum_{k'=0}^{n'} \int_0^\infty dq e^{-q} q^{m-1} L_k^{(m-1)} L_{k'}^{(m-1)} = N_{nm} N_{n'm} \sum_{k=0}^{n \wedge n'} \frac{(k+m-1)!}{k!}$$

以上から

$$\begin{aligned} & -\langle nn_3 | \frac{1}{r} \partial_r r \partial_r | n' n'_3 \rangle \\ & = \frac{\delta_{n_3 n'_3}}{b_m^2} \left((2n+m+1) \delta_{nn'} + \sqrt{n(n+m)} \delta_{n n'+1} + \sqrt{n'(n'+m)} \delta_{n n'-1} - m^2 c_{nn'} \right) \end{aligned}$$

になる。

次に (5.3) から

$$\begin{aligned} \partial_z^2 \phi_{n_3}(q_3) & = \frac{1}{b_{m_3}^2} \partial_{q_3}^2 \phi_{n_3}(q_3) \\ & = \frac{1}{b_{m_3}^2} \left(\frac{\sqrt{n_3(n_3-1)}}{2} \phi_{n_3-2} - \frac{2n_3+1}{2} \phi_{n_3} + \frac{\sqrt{(n_3+1)(n_3+2)}}{2} \phi_{n_3+2} \right) \end{aligned}$$

であるから

$$-\langle nn_3 | \partial_{q_3}^2 | n' n'_3 \rangle = \frac{\delta_{nn'}}{b_{m_3}^2} \left(\frac{2n_3+1}{2} \delta_{n_3 n'_3} - \frac{\sqrt{(n_3+1)n'_3}}{2} \delta_{n_3 n'_3-2} - \frac{\sqrt{(n'_3+1)n_3}}{2} \delta_{n_3 n'_3+2} \right)$$

したがって

$$\begin{aligned} \langle nn_3 | (-\nabla^2 + m_b^2) | n' n'_3 \rangle & = \left(\frac{2n+m+1}{b_m^2} + \frac{n_3+1/2}{b_{m_3}^2} + m_b^2 \right) \delta_{nn'} \delta_{n_3 n'_3} \\ & + \frac{\delta_{n_3 n'_3}}{b_m^2} \left(\sqrt{n(n+m)} \delta_{n n'+1} + \sqrt{n'(n'+m)} \delta_{n n'-1} - m^2 c_{nn'} \right) \\ & - \frac{\delta_{nn'}}{b_{m_3}^2} \left(\frac{\sqrt{(n_3+1)n'_3}}{2} \delta_{n_3 n'_3-2} + \frac{\sqrt{(n'_3+1)n_3}}{2} \delta_{n_3 n'_3+2} \right) \end{aligned}$$

$H(n, n'; n'')$ の解析的表現

Bateman Vol.II の 195 ページ (37), (38) から

$$H_n(\sqrt{2}x) = 2^{n/2} n! \sum_{k=0}^{[n/2]} \frac{H_{n-2k}(x)}{2^k k! (n-2k)!}$$

になる。数学大公式集 (丸善)838 ページ 7.375 から $t = (k+m+n)/2$ が整数のとき

$$\int_{-\infty}^{\infty} dx e^{-2x^2} H_k(x) H_m(x) H_n(x) = \frac{2^t}{\sqrt{2}\pi} \Gamma(t-k+\frac{1}{2}) \Gamma(t-m+\frac{1}{2}) \Gamma(t-n+\frac{1}{2})$$

である。したがって

$$\begin{aligned} & H(n, n'; m) \\ & = N_n N_{n'} N_m \int_{-\infty}^{\infty} dx e^{-2x^2} H_n(x) H_{n'}(x) H_m(\sqrt{2}x) \\ & = N_n N_{n'} N_m 2^{m/2} m! \sum_{k=0}^{[m/2]} \frac{1}{2^k k! (m-2k)!} \int_{-\infty}^{\infty} dx e^{-2x^2} H_n(x) H_{n'}(x) H_{m-2k}(x) \\ & = N_n N_{n'} N_m \frac{2^{s+m/2} m!}{2\pi} \sum_{k=0}^{[m/2]} \frac{\Gamma(s-k-n) \Gamma(s-k-n') \Gamma(s+k-m)}{2^{2k} k! (m-2k)!} \\ & = N_n N_{n'} N_m \frac{2^{s+m/2}}{2\pi^{3/2}} \sum_{k=0}^{[m/2]} m C_{2k} \Gamma(k+\frac{1}{2}) \Gamma(s-k-n) \Gamma(s-k-n') \Gamma(s+k-m) \end{aligned}$$

ただし $s = (n+n'+m+1)/2$